

水上(2)遺跡Ⅲ

－ 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

【第4分冊 石棺墓・配石遺構編】

2017年3月

青森県教育委員会

水上(2)遺跡Ⅲ

－ 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

【第4分冊 石棺墓・配石遺構編】

2017年3月

青森県教育委員会

目 次

(第4分冊 石棺墓・配石遺構編)

第3章 検出遺構と出土遺物

第10節	石棺墓	1
第1項	石棺墓・配石遺構の調査と報告の方法	1
第2項	石棺墓の概要	5
第3項	石棺墓A群	10
第4項	石棺墓B群	26
第5項	石棺墓C群	30
第11節	配石遺構	33
第1項	配石遺構の概要	33
第2項	石棺墓A群の配石遺構	36
第3項	その他の地区の配石遺構	62
第4項	第4分冊関連の出土遺物	66
	遺物観察表	173
	遺構別出土遺物一覧表	178

挿図目次

図 1 石棺墓の構造と名称	2	図 26 石棺墓9(5～7号墓③)	99
図 2 石の設置状況	2	図 27 石棺墓10(5～7号墓④)	100
図 3 石棺墓の関連土	2	図 28 石棺墓11(8号墓①)	101
図 4 壁石の設置方法	3	図 29 石棺墓12(8号墓②)	102
図 5 埋葬主体部の調査方法	3	図 30 石棺墓13(9・14号墓①)	103
図 6 石棺墓と配石遺構の新旧関係	4	図 31 石棺墓14(9・14号墓②)	104
図 7 石棺墓群の位置	76	図 32 石棺墓15(9・14号墓③)	105
図 8 石棺墓の諸特徴	77	図 33 石棺墓16(9・14号墓④)	106
図 9 石棺墓壁石使用石材	79	図 34 石棺墓17(9・14号墓⑤)	107
図 10 石棺墓A群石質分布図	80	図 35 石棺墓18(11～13号墓①)	108
図 11 石棺墓A群の配石遺構種別分布図	81	図 36 石棺墓19(11～13号墓②)	109
図 12 石棺墓A群の主な出土遺物の位置	82	図 37 石棺墓20(11～13号墓③)	110
図 13 石棺墓B群の主な出土遺物の位置	83	図 38 石棺墓21(15・16号墓①)	111
図 14 石棺墓構築期の出土土器分布	84	図 39 石棺墓22(15・16号墓②)	112
図 15 石棺墓A群平面図(検出状況)	85	図 40 石棺墓23(15・16号墓③)	113
図 16 石棺墓A群平面図(埋葬主体部完掘状況)	87	図 41 石棺墓24(15・16号墓④)	114
図 17 石棺墓A群の土層堆積状況	89	図 42 石棺墓25(16号墓構築段階(15・16号墓⑤))	115
図 18 石棺墓1(1号墓)	91	図 43 石棺墓26(石棺墓B群検出状況)	116
図 19 石棺墓2(2・4号墓①)	92	図 44 石棺墓27(17号墓)	117
図 20 石棺墓3(2・4号墓②)	93	図 45 石棺墓28(18号墓)	118
図 21 石棺墓4(2・4号墓③)	94	図 46 石棺墓29(19・20号墓)	119
図 22 石棺墓5(3号墓①)	95	図 47 石棺墓30(21・22号墓)	120
図 23 石棺墓6(3号墓②)	96	図 48 石棺墓31(21号墓石材接合状況)	121
図 24 石棺墓7(5～7号墓①)	97	図 49 石棺墓32(石棺墓C群の遺構分布状況)	121
図 25 石棺墓8(5～7号墓②)	98	図 50 石棺墓33(23・24号墓)	122

図 51	石棺墓34(25号墓)	123	図 73	配石遺構20(区割図⑧(51号配石))	147
図 52	石棺墓35(26号墓)	124	図 74	配石遺構21(区割図⑨(22号配石))	147
図 53	石棺墓A群・配石遺構区割図	125	図 75	配石遺構22(石棺墓A群南城配石遺構見通し①)	148
図 54	配石遺構1(27・28・37・62号配石)	128	図 76	配石遺構23(石棺墓A群南城配石遺構見通し②)	149
図 55	配石遺構2(24・25・36・40・59・61・63号配石)	129	図 77	配石遺構24(その他の地区の配石遺構位置図)	150
図 56	配石遺構3(24・25・27・28・36・40・59・61・63号配石)	130	図 78	配石遺構25(1001～1003号配石)	151
図 57	配石遺構4(5・6・39・60号配石)	131	図 79	配石遺構26(1004号配石)	152
図 58	配石遺構5(52・58・60号配石)	132	図 80	配石遺構27(1005～1009号配石)	153
図 59	配石遺構6(52・57・58・60号配石)	133	図 81	配石遺構28(4501号配石)	154
図 60	配石遺構7(60号配石土器出土状況)	134	図 82	土器1(1～6号墓)	155
図 61	配石遺構8(区割図⑥・⑦E-E'～J-J' (4・20・32・52・57・58号配石))	135	図 83	土器2(7～12号墓)	156
図 62	配石遺構9(区割図⑥)	136	図 84	土器3(13～16号墓)	157
図 63	配石遺構10(区割図⑦)	137	図 85	土器4(17～26号墓)	158
図 64	配石遺構11(区割図⑥・⑦K-K'～N-N' (17～19・32・47・53・56・57号配石))	139	図 86	土器5(3～15号配石)	159
図 65	配石遺構12(区割図⑦O-O'～U-U' (3・14・15・21・33・48号配石))	140	図 87	土器6(16～37号配石)	160
図 66	配石遺構13(区割図⑦V-V'～Y-Y' (10・11・13・16・29号配石))	141	図 88	土器7(50～60・1002号配石)	161
図 67	配石遺構14(6・7号墓関連配石(53・54号配石))	142	図 89	土器8(石棺墓A群構築土)・割片土器	162
図 68	配石遺構15(8号墓関連配石 (9・10・16・23・29・38・43・64号配石))	143	図 90	礫石器1(石棺墓)	163
図 69	配石遺構16(9号墓関連配石(上・下面))	144	図 91	礫石器2(3～43号配石)	164
図 70	配石遺構17(区割図⑦関連配石(50号配石))	144	図 92	礫石器3(26～57号配石)	165
図 71	配石遺構18(15号墓関連配石(26・31・35号配石))	145	図 93	礫石器4(57～1001号配石)	166
図 72	配石遺構19(16号墓関連配石(48号配石))	146	図 94	礫石器5(1001～1005号配石)	167
			図 95	礫石器6(1007号配石)	168
			図 96	土製品	169
			図 97	石製品1(石棺墓・配石遺構)	170
			図 98	石製品2(9号墓壁石の線刻礫)	171
			図 99	石製品3(9号墓整地土の線刻礫)	172

表目次

表 1	県内における石棺墓と類似遺構の名称	1	表 7	振替・統合・抹消遺構一覧	75
表 2	石棺墓用語の整理	2	表 8	石棺墓石材一覧表	78
表 3	石棺墓・配石遺構の石材数量	35	表 9	区割図①～⑦関連土層断面図と掲載遺構一覧	127
表 4	石棺墓関連土出土土器の重量と時期	68	表 10	配石遺構関連の写真図版	127
表 5	石棺墓観察表	73			
表 6	配石遺構観察表	74			

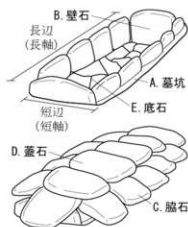


図1 石棺墓の構造と名称

表2 石棺墓用語の整理

文献	刊行年	A	B	C	D	E
第575集水上(2)遺跡Ⅲ	2017	墓坑	壁石	脇石	蓋石	底石
平賀町教委『聯合Ⅰ遺跡』	1981	掘り方	垂直壁石	水平壁石	蓋石	底石
青森市教委『山野峠遺跡』	1983	掘り方	側壁/壁石	—	蓋石	底石
青森県教委『赤松平(4)遺跡』	1986	掘り方	側石	—	蓋石	底石
黒石市教委『花巻遺跡』	1986	—	壁	蓋石が移動したものの	蓋石	—
青森県教委『新ノ武遺跡』	2000	—	壁石	—	蓋石	底石
青森市教委『熊山遺跡Ⅱ』	2002	下部土坑	側壁	—	蓋石	底石
平賀町教委『太郎森遺跡』	2003-2007	—	壁石	—	蓋石	床石
葛西勲『丹葬土器棺墓の研究』	2002	—	側壁	側壁に平石を斜位に貼りつけたもの	蓋石	底石
加藤雅士『関東・中部地方後晩期の石棺墓』	2007	墓坑	側石	—	蓋石	底石

【石の設置状況】(図2)

本分冊で取り扱う石棺墓および配石遺構の石の設置状況については下記のように規定した。

縦置き 長軸を垂直方向に向け設置したもの。

横置き 長軸を水平方向に向けたもののうち、側面を垂直方向に向け設置したもの。

平置き 長軸を水平方向に向けたものうち、側面を水平方向に向け設置したもの。

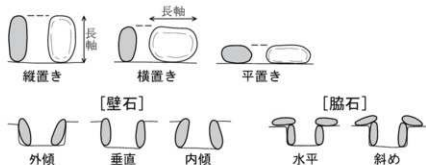


図2 石の設置状況

【石棺墓の関連土】(図3)

石棺墓構築に伴う一連の土層を「構築土」とし、構築方法や機能により以下のように規定した。

整地土 壁石設置以前の構築土。

壁石裏込土／墓坑埋土 壁石設置に伴う構築土。構築方法Aでは墓坑埋土とも呼ぶ。

盛土 壁石設置以後の構築土。壁石裏込土とは連続し区分しづらいものもある。

棺内堆積土 壁石に囲まれた埋葬主体部内の堆積土。



図3 石棺墓の関連土

【壁石の設置方法】(図4)

本遺跡では、壁石の設置方法に以下の二種類の方法が見られた。

構築方法A……墓坑を掘削し内部に壁石を設置する方法。1～3・5・7・15号墓等、より古い石棺墓に見られる。

構築方法B……墓坑を掘削せず土盛りで裏込めしながら壁石を設置する方法。密集度の高い石棺墓A群のうち、比較的新しい石棺墓(6・8・9・14・16号墓)に見られる構築方法で、既存の石棺墓を大きく改変せずに構築する措置と見られる。

	①墓坑の掘削	②壁石の設置	③胎石の設置	④蓋石の設置
構築方法A				
構築方法B				
	①盛土ともに壁石の設置		②胎石の設置	③蓋石の設置

図4 壁石の設置方法

【埋葬主体部の調査方法】(図5)

埋葬主体部内の棺内堆積土出土遺物については、着装品や副葬品等の位置から頭位方向を推測できる可能性があるため、先行して調査した25・26号墓を除く23基の石棺墓において、平面的には長軸方向に三分割、短軸方向に二分割の計6区(①～⑥区)、層別的には上下層(堆積土の厚いものは上中下層)に分け、出土地点を記録した。また棺内堆積土は微細遺物を検出する目的で全量(土嚢袋930袋)回収した上で、中～下層の堆積土(561袋)について土壌の水洗選別を実施した。この結果、各石棺墓で調査時に確認できなかった土器片、剥片・チップ類を検出し、7号墓では石製品1点(図97-1)も検出した。

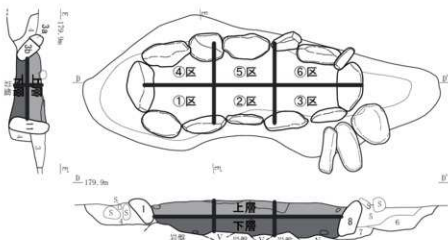


図5 埋葬主体部の調査方法

【配石遺構の認定について】

石棺墓A群では15基の石棺墓が多数の配石遺構を伴い、既存の石棺墓の隣に新規の石棺墓を構築していった結果、景観上、石棺墓群がひとつの構造体のようにになっている。今調査ではこれらの配石遺構群について、最低でも15回の「造墓という相」の存在を認め、①層位、②石の配列や設置状況、③使用石材等を総合的に判断し、最小のまとまりを捉えた(不整合や不連続部で別の遺構と認識した)。また、まとまりどうしの④石の重なり方や裏込め状況、⑤設置面標高等から同時性を否定していくことで新旧関係を捉えた。ただし異なる様相を示す遺構が同時に造られるケースや、逆に同一のまとまりでも調査者が認識できない時間的な不連続の存在も想定され、必ずしも認定した個々の配石遺構が時間的な不連続を意味するわけではない。

【石棺墓と配石遺構の新旧関係の理解】(図6)

石棺墓・配石遺構群の新旧関係を捉える際、遺構どうしの新旧関係や同時性だけでなく、当該石棺墓のどの構築段階に伴うかという異なる範疇の新旧関係や同時性を示す必要があり、以下のように整理した。

新旧関係① 石棺墓の造墓自体に伴うか否かという同時性。

新旧関係② 石棺墓構築段階の同時性。

新旧関係③ 遺構どうしの、もっとも最小単位での同時性、新旧関係。

16号墓を例にとると、北側の33号配石および西側の14・15・21号配石の構築はいずれも16号墓の造墓を契機とするという意味で「16号墓に伴う(石棺墓造墓に伴う同時性=新旧関係①)」。ところが構築段階から見れば、14号配石は壁石裏込めと同時で、33・21号配石はこれ以降脇石設置以前までの時間幅をもつ。一方で15号配石は蓋石の設置後である(構築段階の同時性=新旧関係②)。さらには同じ段階の配石遺構でも、石の重なり方から21号配石は33号配石の設置後という前後関係も見られる(=新旧関係③)

上記を踏まえ、報告文中で「○号墓に伴う」「○号墓と同時」とした場合、新旧関係①を、また「○号墓の□□段階に伴う」「□□段階と同時」とした場合、新旧関係②を意味することとする。調査では新旧関係③の把握を基本としたが、大多数の配石遺構が石棺墓の構築を契機とするという認識に至り、特に「どの石棺墓の構築に伴い(新旧関係①)」「どの構築段階に帰属するか(新旧関係②)」に留意し調査を進めた。

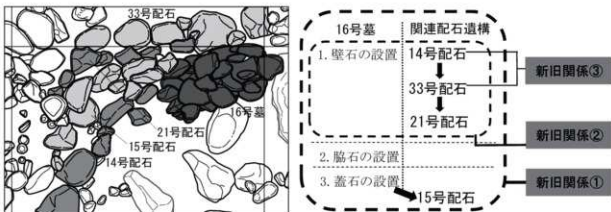


図6 石棺墓と配石遺構の新旧関係

【新旧関係の表記について】

- 号墓(○号墓よりも新しい) <△号配石(△号配石よりも古い)
 =○号墓(○号墓に伴う) =○号墓壁石(○号墓の壁石設置に伴う)

【遺物の取り扱いについて】

石棺墓と配石遺構が一体、あるいは連続して構築された石棺墓A群において、明瞭な境界をもたず遺構への帰属が困難な場合がある。このため「遺構出土遺物」は、単独の遺構への帰属ができたもののみとし、複数の遺構に跨がる可能性のある場合は下記のように遺物を取り上げ、「石棺墓A群構築土(いずれの遺構に帰属するかは不明だが、石棺墓群の構築に確実に伴う縄文時代中期末葉から後期前葉期の造成土)」一括遺物として報告する。

「石棺墓A群構築土」の遺物取り上げの例 1号墓-2号墓 3号墓-4号配石 5号配石-6号配石
 また、ⅧM-N-81～84グリッドの8グリッドに広がる黒褐色土(第Ⅲ層)についても、個々の遺構に帰属させることこそできなかったが、いずれかの石棺墓を構築した際の造成土であることが明らかのため、出土遺物は同様に「石棺墓A群構築土」一括遺物とし、その他の遺構外出土遺物とは区別した。

【遺構名の略記について】

本文や図表中で、特に断りなく以下のように遺構番号を略す場合がある。

1墓-1号墓 3配-3号配石

【石材の番号について】

石棺墓や配石遺構の石材については、遺構単位で個別に礫番号を付し、可能な範囲で重量計測と石質鑑定を実施した。本文や図中では、この石材番号について以下のように表記あるいは略記することがある。なお断面図中の数字は、ゴチック体が礫番号を、明朝体が土層番号を表す。

8号墓S-21 8号墓-21 8墓-21 いずれも8号墓の礫番号21を表す。
 9号配石S-7 9号配石-7 9配-7 いずれも9号配石の礫番号7を表す。

第2項 石棺墓群の概要

位置・分布 石棺墓は遺跡範囲の中央北寄りに、東西方向に広がって25基を検出した。これらは立地や分布状況により、A群、B群、C群の3つのまとまりとして捉えることができる(図7)。もともと西側のA群の地形は、周囲より50～100cm程度高い微高地で、西側や北側では第Ⅳ・Ⅴ層下部の基盤岩(第Ⅵ層)が迫り上がり地表面に露出している。石棺墓は東西16m×南北18mの約300㎡の範囲に、1～16号墓(10号墓は欠番)の15基が集中する。11号墓から8号墓までの7基は南北方向に並列し、8号墓から7号墓までの3基は東西方向に直列する。

B群はA群の東方20mに位置し、南北10m×東西10mの範囲に17～22号墓の6基のまとまりが見られる。C群はB群とは沢1を挟んだ対岸に位置し、遺跡内でももともと標高の高い北側斜面縁辺の4基(23～26号墓)である。25号墓と26号墓の間にはごく浅い東西方向の沢状地形が確認でき、石棺墓群の構築にあたり、集落内のより高い地点が選ばれていることがわかる。

遺存状況と調査以前の状況 遺跡は目屋ダムが着工された1950年以前には旧砂子瀬集落のあった場所で、調査区の各所でこの集落を残した人々の痕跡を確認できる。これは石棺墓群においても例外ではなく、後世の改変により各群の遺存状況は若干異なり、B・C群では蓋石のないものや脇石の一部しか残らないものが多い。特にB群では上部の大幅な削平により壁石が失われたものもある。



写真1 石棺墓A群を囲う近現代の石列

こうした中で石棺墓A群は遺存状況が比較的良く、墓として認識されていたかはわからないが、旧集落の人々により大きな改変を加えないよう意識されていた形跡が二つある。ひとつは表土中で検出した、3・4号墓の北側を東西方向に区画した石列である(写真1)。これを境に南北での遺存状況が異なり、北側に蓋石の残る石棺墓はないが、南側(3・4号墓以南)では多くの石棺墓の蓋石が遺存し、縄文時代の旧状をほぼ留めていると見て良い。縄文時代の配石遺構(36号配石の立石)を取り込んだ石列は、一部の配石遺構が近・現代にも地表に露出していることを示している。なお石列の裏込土からは明治期以降の陶磁器が出土した。

もうひとつの形跡は、石棺墓A群の南側に群集しながら、この手前で分布が途切れる近現代墓群(『砂子瀬絵図』中「上の墓」に相当するものと思われる)である。旧集落以前の墓として認識されたためか、迫り上がった基盤岩の露出した微高地を避けたためかは不明だが、こうした事情もあり石棺墓A群では後世の大きな損壊を免れ、墓域の広がりや、北側を除く三方で捉えることができた。

石棺墓A群の東西方向での墓域範囲は、西側では9号墓の整地層や56号配石、あるいは南西隅の51号配石の位置する81ライン付近を西限とする。一方東限は8号墓の構築土が地山傾斜に沿って東方へ緩やかに下がり、縄文時代後期初頭頃の住居群(SI5501やSI5502など)と隣接した85グリッド付近と見られる。他方、南北方向のうち南側は前述のとおり近現代墓が石棺墓群をかすめるものの大きく損壊させた形跡はなく、VIIIライン付近が南限と見られる。なお北側は11号墓の北壁が完全に失われており、墓域がさらに北へ延びていた可能性が高い。

長軸方向 図8-①には石棺墓25基の長軸方向を示した。長軸は大きく、東西方向と南北方向の二者があり、全体での数量は東西方向が18基、南北方向が7基である。中でも石棺墓A群では15基中14基が東西方向を向き、長軸方向の強い一致がうかがえる。一方B群では6基中4基が南北方向を向き、A群とは様相を異にする。東西方向の石棺墓では、西壁が真北より90°以上振れ、約95°~110°を示すものが多く、南北方向のものでも真北より5°~10°東西に振れる傾向がある。

平面形状 埋葬主体部の平面形状は、A. 台形、B. 長方形、C. 紡錘形の三種を確認した。台形は10基、長方形は7基、紡錘形は2基、その他は6基を数え、使用石材との関係を図8-②に示した。A. 台形は一方が広く他方が狭く造られたもので、長軸が東西方向のものでは西側が広く、東側が狭い傾向があり、1号墓や3号墓では平面での広狭の差が顕著である。壁石の大きさにもこの状況が現れており、3・6・7号墓等の短辺の壁石では、東壁より西壁に大型の石材が用いられている。また長辺の壁石にもこれが表れ、7・15号墓では、東側より西側に大型の石材が用いられ、平面形状と石材の規模により「西広

東狭」を造り上げている。

C. 紡錘形としたものは長軸側が寸詰まりとなる形状で、台形や長方形のものに較べるとやや粗雑な印象を受ける。8・14号墓の2基を確認し、ともに墓坑を掘削せず土盛りとともに壁石を設置する構築方法Bとした石棺墓である。16号配石に派生させるような8号墓の壁石(S-33)や、コの字状の列石の一部(19号配石S-1・2)を壁石に取り込む14号墓などの、列石状の配石遺構と同時に壁石を設置する(石棺墓の一部に配石遺構を取り込む)工法が、比較的平面形が整う構築方法Aとの平面形状の差を生じさせたものと見られる。

長軸規模 25基の石棺墓のうち、掘方から規模推定した8基を含む、24基の壁石内寸での長軸規模分布を図8-③に示した。規模は110～225cmまで見られ、160cm以上が21基とその大半を占める。最小は24号墓の110cmであるが、16号墓も130cmしかなく全体から見れば極端に小さい。

埋葬主体部の深さ 遺体を埋葬したと見られる面(埋葬面)と壁石の平均的な高さを主体部の「深さ」とし、11号墓を除く24基を計測した。深さは25～50cmまで見られ、9・16・22号墓の3基は極端に浅く、長軸規模との相関を見せる。また当然壁石の石材規模とも連動するが、第5章第1節第6項の表3にも明瞭に表れたように石棺墓A群では、より古い石棺墓は深く、新しい石棺墓は浅くなる傾向がある。

構築方法(墓坑の掘削と壁石の設置) 構築方法については、壁石設置に際し墓坑掘削を伴うか否かにより二種の方法に区別される(前項図4)。構築方法Bは石棺墓A群でも比較的新しい6・8・9・14・16号墓の5基で確認され、本遺跡での主体は構築方法Aである。構築方法A→構築方法Bという時期的な変化は、流行の推移という解釈も成り立つが、既存の石棺墓石材を新規の石材に取り込む6・7号墓の状況や、既存の石棺墓を掘削せずに、隣接地に新規の石棺墓を盛り上げた4号墓や8号墓の状況は、既存の石棺墓を損なわないための配慮、心理的な措置と捉えることもできる。構築方法Bの石棺墓では、壁石の設置と同時に列石状の配石遺構(8号墓に対する16号配石、9号墓に対する32号配石、14号墓に対する19号配石等)を伴うこともしばしばで、これらの平面形状に不整のものが多く壁石が乱れるのも、壁石を墓坑内に取れず、盛土のみで固定したためと考えられる。

図8-⑤には、壁石の設置と底面の敷設状況について示した。墓坑内に壁石を設置する構築方法Aの場合、壁石の設置部のみを掘削するもの(A類)と墓坑底面に直接設置するもの(B類)の二者があり、棺内底面を敷設するもの(1類)としないもの(2類)の二者がある。一方、構築方法Bでも底面に壁石を直接設置するC2類と裏込土中に壁石を設置し、底面レベルが壁石下端より高いもの(C1類)とがある。比較的古い石棺墓にA1類(壁石設置部のみ掘削+底面敷設)が多く、新しいものはC1類(構築方法B)を採用する傾向がある。A類については、壁石のすべて(多く)を突き刺すもの(1・3号墓)から一部を突き刺すもの(26号墓)があり、また掘削の程度も、深く突き刺すもの(1・2・3・21号墓)から、直置きにも似たごく浅いもの(23・24号墓)まで見られ、予め掘削が設計されている場合と適宜高さを調節した場合とがあり、程度の浅いものには荷重で設置部が沈下したのもあったと考えられる。

脇石・蓋石の設置 脇石・脇石の残存状況については図8-④に示した。蓋石の遺存する石棺墓には、いずれも壁石直上に扁平な石(=脇石)を水平ないしは斜めに設置しており(前項図2)、壁石上に直接に蓋石を架け渡したものが見られないことから、脇石を介す「壁石-脇石-蓋石」という構造が、本遺跡に通用の構造であったとみられる。また蓋石自体に土盛りがされた事例は無く、閉塞完了時の蓋石は地表に露出し、墓標のような存在であった可能性が高い。極く狭い範囲に、近接させ造墓を繰り返

しながら、既存の石棺墓を大きく損ねる事例がないこと、また最終的な墓域の景観が、東西方向にも南北方向にも整然と並び、上下方向での不自然な重複が見られない状況も、既存の石棺墓が地表に顕れていたことを示している。

一方で蓋石下位の脇石は、地表露出が予想されるもの(6・7号墓)と構築土が被覆したもの(15号墓)、またその中間的な様相をもつもの(2段の脇石の上段は地表に露出し下段は構築土が被覆する3号墓)があり一様ではない。

使用石材 石棺墓使用石材については表8に石質と重量の一覧を示した。また図9には壁石使用石材の分布図を、図10には配石遺構も含めた石棺墓A群で使用された石質分布図を示した。石棺墓A群に見られる石材は、緑色凝灰岩、凝灰岩、安山岩、相馬安山岩、花崗閃緑岩、玄武岩、砂岩等が見られ、配石遺構よりは石棺墓に、また石棺墓でも蓋石や脇石以上に壁石で使用石材の選択性がうかがえる。壁石が単一の石材のみで構成される石棺墓は少ないが、主要石材を相馬安山岩、花崗閃緑岩、緑色凝灰岩のいずれかとするものと、これらのうち二種を組み合わせるものがある(図8-②)。新旧関係の押さえられた石棺墓A群では、選択される石材に時期的傾向があり、1号墓→15号墓→7号墓→6号墓→9号墓→14号墓という新旧関係の中で、相馬安山岩(1号墓)→花崗閃緑岩(15号墓)→花崗閃緑岩+緑色凝灰岩(7・6号墓)→緑色凝灰岩(9・14号墓)という石材使用の変化が見られた。時期的な傾向性は、構築土やその他の構築方法とも連動しており、詳細は第5章総括へ譲る。

石棺墓の石材は総じて、蓋石にもっとも大型の石材を用いている。特殊な事例を除けば、多くの石材が90kg未満に収まり、傾向としては比較的古手の石棺墓に使用された相馬安山岩や花崗閃緑岩には大型(50～70kg程度)のものが多く、緑色凝灰岩は30kg前後の石材が多い。周辺の石材分布状況(第1分冊第2章第2節)から見ても、相馬安山岩は花崗閃緑岩や緑色凝灰岩以上に石材調達のコストがかけられている。なお総重量では3・6・7号墓などで1tを超えており、最大は7号墓(1.5t)である。壁石の総重量は350～500kg程度のものが多い。石材は稀に集落内からも調達されたと見られ、15号墓の脇石(S-11)や5号墓関連石材(S-24)に台石転用品が見られる。また関連配石遺構でも台石や石皿が多数出土している(図12・13)。

構築土 石棺墓A群では、礫や炭化物、遺物をほとんど含まない黄褐色シルト土を主要構成土とする石棺墓(1・3・15号墓等)と、礫や炭化物、土器片を多く含んだ黒褐色土を主要構成土とする石棺墓(6・8・9・14号墓等)があり、大きくは前者から後者へという時期的推移を見せる。次節第4項でも触れるように、遺跡内の土層観察ならびに土壌に含まれる遺物の様相からその供給元(採取地)として、前者は基本層第IV層を、後者は周囲の旧表土(基本層第III層の遺物包含層)が想定される。

棺内堆積土 蓋石の有無に関わらず、いずれの石棺墓も棺内には土が充満している。堆積土は大きく、黄褐色土主体のもの、黒褐色土主体のもの二者が見られるが、いずれも層理構造が発達せず均質という特徴から人為堆積と見られる(第4章第6節参照)。また3・7・9号墓などの蓋石の残る石棺墓に見られる、棺内堆積土の最上部に薄く堆積した、蓋石や脇石の隙間から入り込んだ自然流入土の存在から、棺内は空隙環境にはなく、脇石・蓋石設置以前には埋め戻されていたことがわかる。このほか、15号墓(大木10式併行期)の棺内堆積土が後世(後期初頭期)の26号配石により掘り返されていた痕跡や、蓋石を両脇石に架け渡さず棺内堆積土上に直接置いた16号墓、蓋石と見られる大型石材が底面ではなく棺内堆積土の中位から上位で出土する状況(5・8・14・16号墓等)など、数々の痕跡が棺内の

土層充填状況を示している。

遺体埋葬の痕跡 いずれの石棺墓でも遺体の痕跡は見られなかったが、3・7・13号墓の3基では石棺墓の底面直上で、断面図では表せない程度の薄い層を確認した。このうち7号墓とこの痕跡の見られない4・8号墓の3基でリン酸、カルシウム含量を分析した結果、7・8号墓の棺内堆積土は基本層や周囲の石棺墓構築土よりもリン酸、カルシウム含量が高く、遺体を埋葬した可能性が示唆されている(第4章第6節参照)。

着装品・副葬品・供献品 棺内堆積土中の遺物取り上げの方法は前項で示したとおりで、全石棺墓25基のうち23基の石棺墓で、微細遺物の回収を目的とした棺内堆積土中～下層を中心とする水洗選別を実施した。この結果、7号墓-④区の上層で緑色凝灰岩製の石製品(図97-1)1点を検出したが、出土層位からはこれを着装品とすることは難しい。一方、9号墓では棺内底面より口縁部と胴部下半を欠いた壺形土器が逆位で出土しており、副葬品と呼べる唯一の事例である。これ以外では明確に副葬品と呼べる出土状況の遺物は確認できなかった。なお石棺墓出土遺物の数量については巻末の遺物別出土遺物一覧表に示したので参照されたい。

墓域における主な出土遺物分布については図12・13に示した。石棺墓や配石遺構の石材として台石・石皿が転用された例が多く、意図的な設置を想起させる例も少なくない(3配-21、62配-1等)。9号墓では壁石と整地土から2点の線刻礫が出土しており特筆される。同墓の隣接地では土器の供献と見られる縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期の深鉢が出土している(図88-9、遺物取り上げ層位としては56号配石に帰属)。層位的には9号墓に後続する14号墓の構築後の供献と見られ、9号墓の構築からは時期を経たものと理解される。9号墓の壁石設置に伴う4号配石の丸石もすべてが一度に集められたわけではなく、上部のいくつかは後に追加されたことが層位的にわかっており、埋葬段階から時間を隔てた、墓域における儀礼的な行為を指摘しうるかもしれない。

配石遺構 石棺墓A群およびB群では石棺墓周辺に配石遺構が分布する。詳細は第10節に譲るが、配石遺構の種類には、A. 列状の配石遺構(列石)、B. 立石、C. 丸石(の集積)、D. 集石、E. 置石(大型礫の設置、遺物の設置)のような複数の事例が確認される配石遺構と、このいずれにも該当しない独特の構造をもつF. その他がある(図8-⑥・図11)。B群では石棺墓と配石遺構との関係を明らかにし得なかったが、A群では多くの配石遺構が石棺墓構築のプロセスに伴う(図8-⑦)ことで独特の景観を生み、本石棺墓群の大きな特徴のひとつとなっている。なかでも9・16号墓と8・14号墓では石棺墓に列石が付設し、特に後二者では壁石を列石の一部と共有させて(配石遺構を壁石に取り込んで)いる。

石棺墓に関連するその他の遺構 石棺墓A群では、石棺墓と直接重複する遺構にSK5555がある。同遺構は1号墓の構築に伴い、機能は不明であるが、墓坑掘削に前後して石棺墓の傍らに土坑状に掘り込み、壁石裏込めとともに粘質土を充填している。A群ではこのほかに15号墓とSK5592、3号墓とSK5572など、良くしまった粘質土やシルト土を充填する土坑が石棺墓と重複する事例があり、はっきりとわからないが石棺墓の構築に関連していた可能性が高い。このほか14号墓南西部のSP12002は、掘り込み面は同墓よりも古い9号墓(牛ヶ沢式期)の整地土に覆われているが、柱痕跡だけはこの整地土を突き抜けている(図34E-E')。後続する14号墓関連の18号配石との位置関係も考慮すると、上部構造は不明だが、木柱などの構造物が一定期間立っていた可能性が高い。柱痕の上部に相当する第11層では重灰式の可能性のある土器片も出土している。また同じ石棺墓A群の北東方向では、36号配石の下部より配石遺

構以前の大型の柱枘方を検出している。周囲にこの遺構に対応する柱穴はなく建物を構成していた可能性は低い。墓城の南東と北西に位置した大型の本柱として注意される。

また今報告では遺存状況の都合から石棺墓とは認定しなかったが、この可能性の高い遺構にSK1067とSK1502がある。SK1067は石棺墓C群中の24号墓の西側に隣接した、底面の平坦な浅い土坑状の掘り込みである。規模や長軸方向は同墓と一致し、堆積土外周には19号墓や20号墓と同様の礫抜き取り痕が確認されている。SK1502も同じく、C群の26号墓東側に近接する遺構で、時期比定できる出土遺物はないが、他遺構との重複状況より最花式以降であることが確実である。SK1067同様、堆積土の外周には礫抜き取り痕と思しき黒色土範囲が見られる。

このほか石棺墓群構築と重なる時期のその他の遺構群との関連については第5章総括で述べる。

新旧関係と形成過程 石棺墓の密集するA群では、壁石(埋葬主体部)どうしの重複はないものの、構築土や石材の重複状況の観察により、北側の11・12号墓の2基を除く15基中13基の石棺墓の新旧関係が捉えられた。中央の2号墓と1号墓には重複関係がなく新旧不明だが、2号墓以北(以下「北城」と)1号墓以南(同「南城」という)まとまりの中での新旧関係を捉えることができた。北城は直接的な層位の新旧関係から3号墓⇒2号墓⇒4号墓⇒13号墓となり、おおむね北側へ向かって墓城が広がる様子が捉えられた。一方南城は①1号墓⇒15号墓⇒8号墓⇒16号墓、②7号墓⇒5号墓・6号墓・9号墓⇒14号墓の新旧関係が押さえられ、大きくは1号墓から西・南側に向かって墓城を広げていく様子が捉えられた。

なおB・C群では石棺墓どうしの直接的な重複がなく、新旧関係を捉えることができなかった。

時期 出土遺物ないしは他遺構との重複状況から時期が特定できた石棺墓は25基中18基で、石棺墓A群では遺存状況と層位的関係から多くの石棺墓の時期が特定されたが、上部の削平が著しいB・C群では時期の確定できないものも少なくない。構築時期の内訳は、大木10式併行期が14基、牛ヶ沢式期が3基、蛭沢式期が1基である。このほか時期特定には至らなかったが、縄文時代中期末葉～後期初頭期に収まるものが2基、中期後葉以降が2基、出土遺物がなく時期不明が3基である(表2)。

群別に見ると石棺墓A群は、縄文時代中期末葉期から後期初頭牛ヶ沢式期まで造墓が行われ、配石遺構の構築自体は蛭沢式期まで継続していたようである。また石棺墓B群は大木10式併行期を示す石棺墓を主体とするが、19号墓では少量ながらも後期前葉期の遺物が出土しており、この頃まで造墓が下る可能性は充分にある。図14に示した石棺墓群周辺の出土土器の分布状況でも、石棺墓A群とB群とに大きな出土傾向の差は見せず、またB群周辺では石棺墓群に隣接する後期前葉期の遺構も分布することから、石棺墓A群とは時期的に併行していた可能性が高い。一方、石棺墓C群は堆積土出土土器ならびに同分布図からも中期末葉期までに収まる可能性が高く、本遺跡の石棺墓群では造墓行為がもっとも早く終焉を迎えたものと考えられる。

第3項 石棺墓A群(図15～42)

石棺墓A群は遺跡範囲の中央、ⅧL～ⅧQ-81～84グリッドに位置し、東西16m×南北18mの約300㎡の範囲に15基(1～16号墓、10号墓は欠番)の石棺墓が集中する。9号墓を除く14基が東西方向に整列し、多数の様々な配石遺構を伴うのが特徴である。東側隣接地には造墓期とおおむね併行する時期の住居群が分布し、これを挟んだ東方25mの位置には石棺墓B群が位置する。

1号墓(図18)

【位置・確認】石棺墓A群、ⅧN-0-84グリッドを中心に位置する。調査当初期、重機により遺構の確認できる層まで掘り下げ中、黒色土中(石棺墓構築土と見られる)で東西方向に並ぶ石列を発見し、人力による精査に切り替えた結果、石棺墓の壁石であるとの認識に至った。黒色土中に石棺墓石材と類似した石材が存在していたが、壁石上部の構造ははっきりせず、蓋石や脇石の存在は不明である。

【重複・関連遺構】8号墓、15号墓と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも古い。西側で重複するSK5555は本石棺墓の構築に伴い、層位的には墓坑の掘削よりも新しく、壁石設置と同時に土坑内が充填されており、裏込めの一部であった可能性がある。このほか南側に分布するピット群(SP12080・12088・12089等)を8号墓の下層で検出しており、時期は1号墓以降、8号墓以前である。

【遺存状況】壁石の一部が失われているほか、蓋石も明確に確認できなかった。

【長軸方向】西壁は失われているが、全体形状から推測される長軸方向は、北から103°西へ向いている。

【形状・規模】短辺側の東西両壁は見られないが、墓坑および底石の配置状況等から、東側がやや狭くなる台形と見られる。長軸は190cm、短軸は西側で50cm、東側で35cm、高さは45cmである。

【構造と構築方法】墓坑に壁石を設置するタイプの石棺墓で、底面には相馬安山岩の割石を敷き並べている。墓坑内を裏込めしながら壁石を設置後、底石を敷設する。壁石は北壁4点、南壁3点の計7点を確認したが、短辺は東西両壁がみられない。墓坑内は壁石設置部のみを掘り窪め、壁石を底面より深く埋めている。北壁ではS-12の内側にS-13の一部を重ね、南壁ではS-16の内側にS-15を配置することで東側をより狭いものに作り出している。その重なり方から壁石は西側から東側へ設置したものと見られる。

底石は相馬安山岩の割石約40点程度からなり、壁石より薄い石材を用いている。20～30cm程度の石材を中心に10cm前後の小型の石材を隙間に埋めるように敷き並べている。底石は4箇所(①No.37・36→No.33、②No.32→No.30、③No.25→No.26→No.23→No.24、④No.26→No.27・39)で石の重複が見られ、これによれば東側から西側へ設置したものと見られる。このほか底石では3点の接合資料が得られた、接1はNo.31・36・37の3片、接2はNo.30・34の2片、接3はNo.24・40・42の3片の接合資料で、いずれも大型石材の隙間を埋めた10cm前後の小型石材である。

石棺墓西側で重複するSK5555の堆積土は、壁石設置時の裏込土(第4層)を覆うと同時にS-16を裏込めてもいる。土質は、掘り下げがなかなか進捗しないほど良く締まった緻密なシルト土でほとんど礫を含まない。正確な機能は不明だが、壁石を裏込めた石棺墓構築に伴う遺構と判断される。

【使用石材】壁石と底石に相馬安山岩を主体的に用いている。壁石7点の石質は安山岩6点+花崗閃緑岩1点である。底石はいずれも相馬安山岩で、20～30cmの大きさの石材と、これらの隙間を埋めた10cm前後の小型石材がある。中には表面のすべてが原礫面で覆われた石材も含まれるが、多くは適当な大きさに打ち欠いた割石である。石材の重量は計測できた範囲で、壁石7点が235kg、底石が31kgで、最重量石材はNo.16で63kgである。

【堆積土】第4・5層が壁石裏込土、第2・3層はSK5555の充填土で極めて良くしまった緻密なシルト土である。第1層は棺内堆積土で小礫を含んだ黄褐色の砂質シルトの単層である。

【出土遺物】土器は敷石下部と盛土から円筒上層a～大木10式併行、棺内堆積土から大木10式併行の破片が出土した。

【**小結**】底石をもつ石棺墓で、石棺墓A群の南域ではもっとも古い。壁石は西側(No.10・No.16)から東側(No.13・14)へ、また底石は東側(No.34・35)から西側(No.21)へ設置されたと考えられ、SK5555は本石棺墓の構築に伴う壁石裏込めに関わる遺構と見られる。関連土には縄文時代後期初頭期の土器を含まず、時期は大木10式併行期と考えられる。

2号墓(図19～21)

【**位置・確認**】石棺墓A群、Ⅷ0-84グリッドに位置する。調査当初期、重機により遺構の確認できる層まで掘り下げ中、黒色土中(石棺墓構築土と見られる)で東西方向に並ぶ石列を発見し、人力による精査に切り替えた結果、石棺墓の壁石であるとの認識に至った。黒色土中に石棺墓石材と類似した石材が存在していたが、壁石上部の構造ははっきりせず、蓋石や脇石の存在は不明である。

【**重複・関連遺構**】4号墓、61号配石と重複し、新旧関係は4号墓よりも古い。61号配石との新旧関係は明らかにし得なかったが、配石設置面は本遺構の壁石上端よりも10cm以上低い。

【**遺存状況**】壁石は東側の一部が失われているほか、蓋石も明確に確認できなかった。

【**長軸方向**】西壁は北から98°西へ向いている。

【**形状・規模**】遺存状況が悪く平面形状は不明である。長軸は約225cm、短軸は西側で60cm。底面からの高さは約40cmである。

【**構造と構築方法**】墓坑を掘削し、裏込めしながら壁石を設置する。壁石は、南壁は底面よりも深く埋められているが、北壁はいずれも底面より浮いており、裏込めに貼り付けるように設置している。石どうしにも間隔があき、整然と縦置きされたものが少なく、乱れた印象を受ける。

【**使用石材**】壁石は11点を確認した。東側は相馬安山岩を主体とし(7点)、北壁は花崗閃緑岩2点、緑色凝灰岩2点である。壁石は16～50kgまでの石材が用いられ、11点の総重量は383kg(平均35kg)である。最重量の石材はS-14で50kgである。

【**堆積土**】図19A-A'では第21～26層が本石棺墓の壁石裏込土である。棺内堆積土は単層で小礫を含んだ暗褐色土である。

【**出土遺物**】土器は、掘方と棺内堆積土から榎林・最花式の破片や大木10式併行と思われる破片が出た。

【**小結**】1号墓および4号墓と南北で隣接し、4号墓よりも古い。掘方・棺内堆積土出土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

3号墓(図22・23)

【**位置・確認**】石棺墓A群の中央やや北寄り、Ⅷ0-P-84グリッドに位置する。

【**重複・関連遺構**】東側で4号墓と隣接し、本遺構の方が古い。同墓とは長軸方向が一致する直列の関係で、西側延長線上には60号配石(巨石)がある。このほか北側で重複するSK5572は、B-B'・D-D'断面から壁石設置以前であることは明白で、出土遺物の最新時期も縄文時代前期末葉期ではあるが、底面が本石棺墓の墓坑底面と一致しており、先述の1号墓とSK5555のような、本石棺墓の構築に関連する土坑の可能性もある。

【**遺存状況**】蓋石と見られる大型の石3点(S-1～3)が見られ、遺存状態は良い。

【**長軸方向**】西壁は北から107°西へ向いている。

【**形状・規模**】平面形は東側がやや狭くなる台形で、南北壁ともに長軸は210cm、短軸は西側で45cm、東側で35cmである。なお深さ(埋葬主体部から埋葬面まで)は40cmであるが、検出面から墓坑底面までは70cm、掘り込み面からの墓坑底面まで深さは30cmである。

【**構築と構築方法**】墓坑内に壁石を設置する構築方法Aの石棺墓である。棺内は褐色土や褐色砂を10～20cm程度の厚さで敷設し、埋葬面としている。壁石は東西壁ともに1点、長辺は南北壁ともに6点の計14点の石材からなる。短辺では東壁より西壁が大きく、長辺でも東側より西側の方が大きな石材を選択する。西壁はやや外傾するが、全体的には縦を垂直になるように縦置きしている。閉塞に伴う石材は、蓋石3点のほか、蓋石と壁石の間にある30点前後の脇石が西側を除く三方の壁石上に配されている。脇石は壁石上にやや斜めに置かれ、北側は脇石どうしを二重に積み重ねている。上部ははっきりしないが、下部の脇石は構築土が被覆しており、構築当初から地中であつたものと見られる。

【**使用石材**】壁石は14点を確認した。石質は相馬安山岩と花崗閃緑岩を主体としており、内訳は花崗閃緑岩7点、相馬安山岩7点である。石材の配置には、北壁のS-46と南壁のS-57・58や同S-49とS-55のような位置関係、また西壁S-45の大型の相馬安山岩と東壁S-52の小型の花崗閃緑岩などに見るように、扁平な花崗閃緑岩と板状礫の相馬安山岩を意図的に対向させているようにも見える。蓋石にはS-12のような大型の緑色凝灰岩も含まれるが、脇石には小型の緑色凝灰岩が少量含まれるほかは、大型の花崗閃緑岩と相馬安山岩で占められる。石材の重量は、壁石は10～56kgまでの石材が用いられ、14点の総重量は558kg(平均40kg)と、その他の石棺墓と比べ相対的に大型の石材が用いられている。脇石は約20点で475kg、蓋石は3点で151kg、総重量は1.2tを超える。最大の石材は壁石S-45で長軸60cm、最重量の石材は蓋石S-1・3で62kgである。

【**堆積土**】図23A-A'では、第1層が石棺墓構築後の自然流入土、第3層が棺内堆積土で第11層上面が石棺墓底面(埋葬面)である。第1層は蓋石直下の石棺墓内最上層で、しまりのないふかふかの土が棺内全体を10cm程度の厚さで覆っている。同様の堆積土が周辺の石棺墓外にも連続し、明治期以降の遺物を含むことから後世の棺内流入土と判断される。第3層は良くしまった褐色土で、層理構造が発達せず底面まで厚く堆積した人為的な埋め戻し土と思われる。また図面上では表示されていないが、第3層最下面に土質の異なる薄い層を挟んでいる。第11層以下は壁石設置に伴う構築土で、第2～8層は脇石設置段階の盛土、第9～15層は壁石裏込土である。

【**出土遺物**】土器は、掘方・棺内堆積土・構築時の整地層から円筒下層d2・上層d・榎林・最花・大木10式併行が出土した。

【**時期**】石棺墓A群の北域ではもっとも古い石棺墓で、重複状況から2・4号墓よりも古い。4号墓とは主軸方向を揃えた直列の関係にあり、西側延長線上には60号配石(巨石)が位置する。閉塞に伴う脇石の遺存状況が良好で、整地土や盛土の状況とともに石棺墓構築方法が捉えられた。構築時期を示す掘方・整地土等の最新出土土器から、時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

4号墓(図19～21)

【**位置・確認**】石棺墓A群の中央やや北寄り、Ⅷ0-P-83・84グリッドに位置する。直上には近代以降の土層が堆積しており、上部は削平されている可能性が高い。

【重複・関連遺構】西側で3号墓、南側で2号墓隣接し本遺構の方が新しい。また北側で13号墓と隣接し、本遺構の方が古い。このほか南側に24号配石、北側に36・40号配石が隣接し、棺内に63号配石が位置するが、図19A-A'および図20G-G'より、24号配石は南壁の、また40号配石は北壁の裏込めの一部となっており、壁石の設置と同時と判断される。また棺内の63号配石もF-F'断面より、壁石設置に伴うか、棺内堆積土形成以前と考えられる。

【遺存状況】壁石は西側が抜き取られているほか南壁の東側が存在しない。蓋石、脇石は見られないが、棺内には大型の石材5点(S-4a・7の2点は石棺墓底面、S-1・13は棺内中層)が落ち込んでいる。

【長軸方向】西壁は失われているが、全体形状から推測される長軸方向は北から98°西へ向いている。

【形状・規模】遺存状況は良くないが、残存する石材および墓坑掘方の形状から推せば西側が広く、東側に狭い台形であったと思われる。西壁は失われているが、推定長軸は200cm、短軸はS-10-19間で70cm、S-13-16間で35cm、深さは50cmである。

【構造と構築方法】既存の3号墓に隣接する位置に不整形な墓坑を掘削し、壁石を設置する。石棺墓底面は平坦ではなく凹凸が著しく、底面標高や壁石設置レベルが西側に向かって上昇しているのは、既存の3号墓を大きく損ねることなく構築されたことと無関係ではない。

壁石の設置状況は縦置き、横置き、平置きの三者があり、傾きも内傾や外傾を見せる。また設置レベルも一定せず、全体的に乱れた印象を受ける。

【使用石材】壁石は11点を確認し、緑色凝灰岩6点と花崗閃緑岩5点からなる。石棺墓内に落ち込んだ大型石材も、壁石石材と良く似た緑色凝灰岩や花崗閃緑岩7点である。石材の重量は、壁石は6~62kgの石材が用いられ、計測した11点の総重量で412kg(平均37kg)である。なお最重量石材はS-19で62kgである。

【堆積土】棺内堆積土は3層に分層した。調査当初、第2層下面を石棺墓底面と捉えたが、第3層下面で大型の石材が出土したため、これを石棺墓底面と認識を改めている。堆積土中には石棺墓石材と同様の大型の花崗閃緑岩が落ち込んでおり、第1層に帰属する石材(S-23・13)、第2層に帰属する石材(S-4・7)、第3層に帰属する石材(S-23)が見られ様相が複雑である。

【出土遺物】土器は、棺内堆積土と盛土・整地層から榎林・最花式、大木10式併行の破片が出土した。また周囲に分布するⅢa黒色土とした層からは、蛭沢式まで考えられる破片が出土している。

【小結】24号配石、36号配石のほか、唯一の石棺墓内の立石(63号配石)を伴っている。3号墓と隣接し、これと直列するような位置関係にあるが、同墓に寄せてこれを損なわないように構築した結果、壁石や底面が乱れている。構築土および棺内堆積土出土土器からの時期は大木10式併行期と考えられ、また13号墓(大木10式併行期)以前とする重複状況からも時期は整合するが、周囲の堆積土からは後期前葉の蛭沢式も確認され注意を要する。平面形状や構造、堆積土や出土遺物の様相が極めて特異で、独特の構造をもった石棺墓である可能性のほか、後世に改変された可能性などが考えられる。

5号墓(図24~27)

【位置・確認】石棺墓A群の中央付近、ⅧN-82グリッドに位置する。北側の一部は調査当初期の試掘トレンチ内にあり、脇石・壁石の遺失は明確に確認できなかったことに因る可能性がある。

【重複・関連遺構】南側に20号配石を介して7号墓が隣接するほか、西側に58号配石が隣接する。後述

の7号墓、6号墓とは南北の並列関係にあるほか、1号墓とはやや距離を隔て直列する。7号墓との新旧関係は、本石棺墓に伴う石材(S-24)が7号墓の盛土上に置かれた状況(図25B-B')から本石棺墓の方が新しい。

【遺存状況】閉塞に伴う脇石は南側の一部が残存するが、全体的に遺存状況は良くない。このほか蓋石と思われる大型の花崗閃緑岩が棺内に落ち込む形で検出された。壁石は短辺の東壁および北壁東側が失われている。

【長軸方向】西壁は北から106°西へ向いている。

【形状・規模】壁石は東側の一部が失われているが、掘方形状から東側が狭まる台形と思われる。推定長軸は200cm程度、短軸は西側で35cm程度、東側はかなり狭くS-16-18間で20cmである。また底面までの深さは40cm程度である。

【構造と構築方法】壁石は西・南壁が縦置きで、北壁は横置きである。傾きは西側は垂直に近く、東側は外傾する。底面を敷設した状況はうかがえず、基盤岩ないしは基本層V層の墓坑底面をそのまま底面としている。底面はおおむね平坦で、壁石もそのまま墓坑底面に設置されるため、設置レベルはよく揃っている。

【使用石材】壁石は12点確認した。石質は凝灰岩を含む緑色凝灰岩9点と花崗閃緑岩3点からなる。北壁は花崗閃緑岩のみで占められる。脇石もこれと同様の石材が用いられるが、石棺墓内に落ち込んだと見られる蓋石は、大型の花崗閃緑岩が用いられている。石材の重量は、壁石は6~42kgの石材が用いられ、重量の計測できた11点の総重量が282kg、1点あたりの平均重量は25kgである。壁石の最重重量石はS-15で42kgである。石棺墓内に落ち込んだ石はこれより大きく57~72kgの石材が見られる。

【堆積土】石棺墓内堆積土は黒褐色シルト土の単層である。層界は確認できなかったが、堆積土の中間にS-14・8・9などの複数の大型石が面的に落ち込んだ状況も見られることから、本来的には石の下面に層界があったものと思われる。

【出土遺物】土器は、確認面・掘方・棺内堆積土から榎林・最花・大木10式併行の破片が出土した。

【小結】岩盤を掘り込んだ石棺墓で、1号墓とは東西の直列、6・7号墓とは南北の並列の位置関係にある。他遺構との重複状況並びに、石棺墓構築土出土遺物から縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

6号墓(図24~27)

【位置・確認】石棺墓A群の南城、VIII M-82・83グリッドに位置する。調査当初、西壁に相当するS-40とした大型塊状の石材は、層位的な検討の結果、先行する7号墓構築時にはすでに設置されているものと判断され、7号墓の北側隣接地の大型塊状の石材と対応した配石の一部という理解に至った。

【重複・関連遺構】北側は7号墓、南側は3号配石が隣接する。7号墓との新旧関係は、層位的な状況のほか、脇石の重なり方で判断された。7号墓の脇石(7-13)に本石棺墓の構築土(第2層)と壁石(6-44)や脇石(6-6)が覆う土層堆積状況(図25A-A')、並びに6号墓の脇石(6-6~8)が7号墓の脇石(7-12~14)と重なる状況(図24)等から、新旧関係は7号墓よりも古い。本石棺墓の西壁を構成する大型の塊状礫は、7号墓構築時には設置されていた54号配石の石材(54配-2)を取り込んだものと見られる。3号配石は本石棺墓の壁石裏込土(図25のA-A'第6層)上に位置するものの、南側の脇石(S-10~13)とは

切れ目なく連続する(図24)ことから、設置時期は本石棺墓の脇石と連続するかそれ以降と見られる。このほか本遺構の下位で50号配石とは直接重複し、本石棺墓構築以後同配石は地中に埋没している。

【遺存状況】蓋石、脇石は、東半は残っているが西側は見られない。

【長軸方向】西壁は北から108°西へ向いている。

【形状・規模】形状は東側がやや狭く造られた台形で、長軸は210cm、短軸は最大部で60cm、最小部で40cm。検出面からの深さは35cmである。

【構造と構築方法】7号墓に南隣する位置に、墓坑を掘削せず土盛りで裏込めしながら壁石を設置する。北側は既存の石棺墓に寄せて造られ、西壁は既存の配石遺構を取り込んでいる(54号配石S-2=6号墓S-40)。こうした結果、南壁の壁石は縦置き、横置きを基本とし壁石の設置面標高が比較的揃い整然とした印象を受けるが、北壁はこれが一定せず、S-44のように平置きしたような壁石もあり、乱れた印象を受ける。

【使用石材】本石棺墓を構成する主要な石材は、壁石13点、脇石10点、蓋石3点で、このほか十数点の石材が見られた。全体的に大型の扁平石が多用されるが、西壁は100kgを超える塊状の石が用いられている。壁石と脇石には平均30kg前後の石を用いるが、蓋石にはこれより大きい60kg前後の石を用いている。最重量石材は西壁の525kgで、これ以外では蓋石S-3が70kg、壁石S-52が55kgなどの重量石材がある。使用石材の石質は、壁石、脇石、蓋石のいずれも花崗閃緑岩ないしは緑色凝灰岩を主体とし、その内訳は花崗閃緑岩8点、緑色凝灰岩5点、凝灰岩1点である。

【堆積土】石棺墓内の堆積土の見極めは難渋したが3層と認識した。石棺墓底面は3層下面と思われる。堆積土には20～30cm程度の石を多く含んでいる。

【出土遺物】土器は、整地層・掘方から榎林・最花・大木10式併行の小片が出土したほか、棺内堆積土上層で牛ヶ沢式ないしは蛭沢式の破片が出土している。

【小結】7号墓よりも新しく、3号配石とは同時かそれ以前である。7号墓との間隔は極めて狭く、脇石どうしも重なり合っている。また使用石材や構造等の共通点も見られる。このほか7号墓の構築に関連する54号配石の石材を西壁に取り込む状況等、両石棺墓には強い関連性が見られる。掘方・整地層出土土器から構築時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられるが、棺内上部では牛ヶ沢式または蛭沢式期の土器片が出土している。

7号墓(図24～27)

【位置・確認】石棺墓A群の南城、ⅧN-82グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】北側に20号配石を介して5号墓が、また南側に6号墓が隣接し、南北方向に3基が並列する。また西側に54・58号配石が、また東側では31号配石が隣接する。土層観察の結果、54号配石は本石棺墓の壁石(S-22・23・32)裏込めとともに設置されていることが判明した。また層位的な状況から31号配石は壁石設置以降と考えられる。

【遺存状況】蓋石、脇石は、東半は残っているが西側は見られない。

【長軸方向】西壁は北から103°西へ向いている。

【形状・規模】形状は東側がやや狭い台形で、長軸は215cm、短軸は西側で45cm、東側で30cm。深さは40cmである。

【構造と構築方法】墓坑を掘削し、壁石を設置する。壁石は横置きを基本とするが、北壁の東側ではより小型の石材を縦置きにし、石材規模と設置方法で西広東狭の平面形状を造りだしている。

【使用石材】主要な石材は壁石11点、脇石10点、蓋石3点の総計24点からなる。50kgを超える大型の扁平石が多用され、壁石は29～71kgまでの石材が見られるが、1点あたりの平均的な重量は50kgを超える。前述のとおり壁石は西側で大きな石材、東側でより小さな石材が選択される傾向にある。脇石は55kg超、蓋石は65kgと、壁石よりも大型の石材を用いている。主要石材の総量は24点で約1400kgである。石質は、壁石11点は花崗閃緑岩8点と緑色凝灰岩3点からなる。蓋石、脇石の石質も花崗閃緑岩と緑色凝灰岩が大半を占めるが、相馬安山岩、凝灰岩を少量含んでいる。

【堆積土】棺内堆積土は2層に分層した。石棺墓底面は第2層下面である。蓋石直下の第1層は10cmの厚みで棺内最上部を覆うしまりのない黒褐色土で、3号墓同様、後世の自然流入土と判断される。流入土以下は底面まで小礫を含んだしまりの良い黒褐色土が堆積する。

【出土遺物】土器は、掘方・棺内堆積土から榎林・大木10式併行の土器片が出土した。棺内堆積土上層からは牛ヶ沢式の小片も認められる。

【小結】蓋石、脇石が良好に遺存する。大型の花崗閃緑岩で構成される石棺墓で、使用石材の総重量は、主要なものだけでも1500kg近い。近接した位置関係、長軸方向の一致、54号配石の共有、脇石の設置状況など、6号墓との関連性が極めて強い。6号墓同様棺内堆積土出土遺物に後期初頭期の土器片を含むが、それ以外の構築土出土土器はいずれも大木10式併行で占められている。よって構築時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

8号墓(図28・29)

【位置・確認】石棺墓A群の南東端、ⅧN-84グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】北側に1号墓、西側に15号墓が隣接する。図29D-D'で15号墓と、E-E'で1号墓との層位的状況を確認し、新旧関係は両遺構よりも新しい。特に1号墓の盛土上に造られた本石棺墓は、壁石上端部の標高で同墓よりも40cm以上も高い。

16号配石とは、S-3が壁石裏込土とともに設置された状況(図29D-D'第5層)や、S-1が壁石S-33から派生(連続)する石の設置状況(写真図版287)等から、壁石と同時に設置されたものと判断される。また38号配石とは設置面が壁石と一致し、同一の土層で裏込めされた状況(A-A'第3層やD-D'第2層)から、やはり本石棺墓の壁石設置と同時である。北東部に隣接する43号配石も壁石裏込土中に埋め込まれている。また9号配石は本石棺墓の盛土を掘り込み、23・29・64号配石は本石棺墓の壁石裏込土上かつ蓋石と同一面にあり、時期的には本石棺墓の構築に伴うかそれ以降で、何らかの形で関係するものと思われる。

このほか本石棺墓構築土下でSP12080・12088・12089を検出した。1号墓関連土を掘り込むことから、石棺墓形成期間中のビットと考えられる。

【長軸方向】西壁は北から101°西へ向いている。

【形状・規模】形状は東西両端が窄まる紡錘形である。長軸は190cm、短軸は最大部で50cm、検出面から底面までの深さは30～40cmで比較的低い。

【構造と構築方法】墓坑を掘削せず、盛土とともに壁石を設置する石棺墓で、多数の配石遺構を伴う。

壁石は東西壁で各1点、南北壁各5点の計12点で、北壁では縦置き＋横置き、南壁では横置きを主体とし、統一性が乏しく乱れた印象を受ける。平面配置では、南壁は比較的直線であるが、北壁は弧状となり西壁(S-35)とは直交しない。一方東側でもS-30・33が、東壁(S-32)と直交せず内向きとなる結果、平面形は紡錘形に近い。これらの平面形や礎設置状況が、その他の石棺墓に比べて歪な印象を受ける。

脇石と蓋石の判別が不明瞭であるのも特徴のひとつで、両者を合わせた閉塞に伴う石材は主要なもので13点である。E-E'断面では脇石S-10が斜めに設置され、低い部分は盛土で被覆され、高い部分が露出している。

【使用石材】壁石は扁平礫以外にも塊状礫や角礫を含み、大きさに統一性が見られないのを特徴とする。壁石の石質は、安山岩6点、緑色凝灰岩4点、凝灰岩1点、花崗閃緑岩1点で、特定石材に偏らない。壁石の重量は全点計測できなかったが、6～45kgのものがある。計測できた32点の総重量は811kg、1点あたりの平均は約25kgであるが、ばらつきが大きい。

【堆積土】本石棺墓関連土は、壁石裏込め土、脇石設置以降の盛土、棺内堆積土に大別される。E-E'断面では、第5・6層が壁石裏込め土、第4層が脇石設置以降の盛土である。棺内堆積土は2層に分層した。第1層と第2層の層界には、相馬安山岩の板石が棺内に落ち込み、二つに折れた状況で出土している(B-B'断面)。

【出土遺物】土器は、盛土・整地層・掘方・棺内堆積土から榎林へ牛ヶ沢式までの破片が出土した。

【小結】墓坑を掘削せず、盛土とともに壁石を設置する構築方法Bの石棺墓で、多数の配石遺構を伴うのが特徴である。16・38号配石は壁石の設置に伴い、特に16号配石は壁石と連結するように設置される。西側の9号配石は、出土遺物は本石棺墓よりもやや新しいものの、本石棺墓を明確に意識している。蓋石と思われる石材が棺内に落ち込んだ状況は、14号墓や16号墓と類似する。出土土器の大半は大木10式併行期であるが、盛土及び棺内堆積土出土土器等の構築時期を示す堆積土から、牛ヶ沢式の破片が出土している。本石棺墓に伴う16号配石でも同じ頃の土器が出土しておりこれを裏付ける。よって時期は縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期と考えられる。

9号墓(図30～34)

【位置・確認】石棺墓A群南域の西端、VIII-M-N-81・82グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】9号墓は4・32・52・57・58号配石各段階に伴いながら、後述のように少なくとも5段階以上の工程で構築されたとみられる。その他の石棺墓との新旧関係では、東側に隣接する5～7号墓より新しく、南側に近接する14号墓やこれに伴う17～19号配石より古いと考えられる。

【遺存状況】蓋石・脇石の遺存状況は極めて良好で、棺内は完全に覆われている。

【長軸方向】北壁は北から14°西へ向いている。

【形状・規模】東西の壁石は上部構造物の重みによって内傾しているが、形状は全体として長方形である。規模は長軸180cm、短軸30cm、深さは25cmでその他の石棺墓と比較して空間が狭い。

【構造と構築方法】墓坑を掘削せず、盛土により壁石を設置する石棺墓である。閉塞に伴う脇石、蓋石もおおむね完存しており、構築の各段階に配石遺構を伴っている。

構成礎は、壁石は南北に各1点、東西に各4点の計10点で、脇石が東西に4～5点の計11点、蓋石が8点、

計29点で、壁石（主に緑色凝灰岩）と閉塞に伴う脇石・蓋石（主に相馬安山岩）の石材を明瞭に分ける特徴がある。壁石の設置状況は横置きを基本とし、壁石下端は整地土や裏込土に埋め込まれ、棺内底面はこれより上位にある。

本石棺墓は、整地土や盛土の造成と配石遺構の設置に特徴付けられ、構築方法は図33に示すように5段階（以上）の工程を経ている。

第1段階 5～7号墓の西側、確認できた範囲で東西6m、南北8.5mの広さを、厚さ10～20cmの暗褐色土（図33A-A'第1層）で整地しながら、壁石とその西側に32号配石を設置する。本段階で北壁（S-21）と整地土中に線刻礫が2点設置されている。北壁の線刻部は石棺墓の外側（北面）で、整地土や32号配石の構成礫により外観からは見えない。なお32号配石と判断した石材の一部には、脇石の設置に伴うもの（S-19等）も含まれている。

第2段階 北壁の北側に、土坑状の掘方と板状摂理の相馬安山岩（S-3）を縦置きする52号配石が構築される。

第3段階 東側に大型の扁平礫9点を立て並べた列石（58号配石）を設置する。この際、花崗閃緑岩としては遺跡内で最大級の石材が使用されている。列石の軸線上北方向には60号配石が立地する。

第4段階 58号配石の上部に、多量の土・礫からなる57号配石を設置する。この際、相馬安山岩としては遺跡内で最大級の石材が使用されている。同配石は、9号墓側では壁石の裏込めの一部になっており、6・7号墓側では同墓の盛土を切り込んでいる。石棺墓構築土には拳大の礫を多数含んでおり、類似土が棺内にも堆積する（図31第5層と第7層）。南側では立石と丸石を集積した4号配石を設置する。なお上部の丸石（4配-5・6）は、9号墓より新しい56号配石関連の土層に含まれていることから、一部の丸石は異なる時期に付加されている。

第5段階 棺内の埋め戻しと脇石の設置段階。両者の前後関係は不明であるが、少なくとも副葬品と見られる棺内出土の壺形土器（図83-16）は、本段階までには設置されている。脇石の大半は57号配石の構築土上に設置されているが、S-34のみはこれに覆われている。蓋石下部の棺内堆積土上部には後世の流入土が入り込み、本石棺墓に後続する56号配石の関連土層が脇石を覆う状況から、蓋石と脇石の一部は構築時には地表に露出していることがわかる。

【使用石材】 主要な石材は、壁石10点、脇石と蓋石20点で、大きさや石質に強い選択性が見られる。壁石はいずれも緑色凝灰岩が選択され、塊状の大型礫である北壁（S-21）を除けば、いずれも楕円形の石である。一方、壁石は相馬安山岩の板状礫で統一されている。壁石と蓋石の間の脇石11点は、凝灰岩5点、緑色凝灰岩3点、相馬安山岩3点と両者の中間的な様相を示している。壁石の重量は、9～193kgまで見られるが、北壁（193kg）とS-27（9kg）が大小の両極であるほかは、23～47kgとある程度大きさにまとまりがある。部材別の重量は、壁石10点が489kg、脇石11点が331kg、蓋石は計測できた5点で127kgを計り、本石棺墓の使用石材の総重量は947kgである。

【堆積土】 棺内堆積土は2層に分層したが、ともに黒褐色土によく似ている。A-A'断面では、第1層は自然流入土、第8層は整地と壁石裏込めを兼ねた土層である。

【出土遺物】 棺内底面からは、副葬品の可能性がある口縁部と胴部下半を欠いた木10～牛ヶ沢式の壺形土器が逆位の状態で出土した。このほか整地土や棺内堆積土から牛ヶ沢式期までの土器片が出土している。なお本石棺墓の南西隣接地でも牛ヶ沢式の深鉢が細かく割れた状態で出土し、供献品と見ら

れる。出土レベルが蓋石に近く、本石棺墓を認識した上での土器供献と見られるが、層位的には本石棺墓の構築時期を示すものではなく、後続する14号墓以降の56号配石に伴う段階と見られる。造墓時期とは時間差のある土器供献の事例として重要である。

【小結】石棺墓A群では長軸方向が南北に向く唯一の石棺墓である。第3・4段階とした57・58号配石も南北方向を向いている。壁石、脇石、蓋石が完存し構築時の状況を良く留めている。石材は壁石、脇石、蓋石といった部位別で強い選択性がうかがえる。墓坑は掘削せず、壁石は土盛りと併行して設置され、多数の配石遺構を伴うのが特徴である。壁石と整地土中で2点の線刻痕が出土している。棺内底面からは副葬品と思われる壺形土器が出土したほか、検出面付近では構築時期よりも新しい後世の供献品と見られる深鉢が出土する。4号配石でも丸石の設置に時間幅がうかがえることから、埋葬終了後も引き続き儀礼的行為がなされた可能性が高い。

時期は本石棺墓の関連土並びに構築に伴った配石遺構出土土器等から、縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式と考えられる。

11号墓(図35～37)

【位置・確認】石棺墓A群の北側、ⅧQ-83グリッドに位置する。

【遺存状況】南壁の一部を残すほかは大きく失われている。壁石は5点、脇石は3点が残存する。北壁は完全に削平され、また南壁の西側も構築時の旧状を留めていないものと思われるが、東側は壁石と脇石の状況が良好に捉えられた。

【重複・関連遺構】南側で12号墓・28号配石、西側で27号配石が隣接する。12号墓とは長軸方向を揃えた並列の関係にある。12号墓の構築土(図36B-B'第5・6層)が本石棺墓の壁石と接する部分があるが、新旧関係は明らかにできなかった。底面は明らかでないものの、12号墓よりも全体的に30cm以上低い。

【長軸方向】削平が著しいが、南壁で計測した方位は北から98°西へ向いていたものと思われる。

【形状・規模】南壁を除く三方が失われているため平面形および規模は不明である。

【構造と構築方法】詳細は不明であるが、墓坑は基盤の岩盤層を掘り込んでいる。長辺の壁石が5点以上からなる石棺墓で脇石をもっている。壁石と脇石の間隙には小礫を多く含んだ盛土が見られる(図36H-H'の見通し図)。

【使用石材】使用石材の石質は、脇石に相馬安山岩1点を含むほかは、いずれも緑色凝灰岩(7点)である。壁石は20～31kgのものが見られ、1点あたりの平均重量は約25kg。脇石はこれよりやや大型の石材が用いられている。

【堆積土】堆積土は5層に分層した。第1層は後世の流入土で、第2層以下が石棺墓に関連する土層である。第2層は壁石裏込土、第3層は棺内堆積土と思われるが、第4・5層は第3層に連続する土層か、底面敷設等の構築に伴う土層かは不明である。

【出土遺物】関連土から土器は出土していない。裏込めと思われる礫中に敲磨器が含まれている。

【小結】石棺墓A群では最北に位置し、北半は後世の改変により失われている。出土土器はなく時期は不明である。

12号墓(図35~37)

【位置・確認】石棺墓A群の北側、ⅦQ-83グリッドに位置する。直上には近代以降の土層が堆積しており、上部は削平されている可能性が高い。

【重複・関連遺構】北側で11号墓、南側で13号墓が隣接し、長軸方向を揃えた並列の関係にある。13号墓とは直接重複せず新旧関係は不明である。一方11号墓とは、図36第5・6層を介して重複しているが、明瞭な切り合い関係が観察できず新旧関係は不明である。

このほか北側で28号配石、西側で27号配石、南東部で62号配石と隣接する。28号配石は本石棺墓の北壁裏込め(第5層)とともに設置されている。また南東隅の検出面付近では石皿未製品(62号配石)が出土する。13号墓に隣接した25号配石との位置関係の共通性から、62号配石も本石棺墓に伴う可能性が高い。27号配石とは直接重複せず新旧関係は不明である。

【遺存状況】閉塞に伴う蓋石等は8点確認したが、全体的に乱れており構築時の状況を留めているものは少ないものと思われる。壁石は四壁が完存するが、西半は両壁石が内傾する。

【長軸方向】西壁は北から110°西へ向いている。

【形状・規模】壁石が内傾するため平面形は、壁石が狭まる台形のように見えるが、壁石設置面では東西の広狭はなく、本来的には長方形だったものと思われる。規模は長軸205cm、短軸は壁石設置面で45cm、深さは30cmである。

構造と構築方法 基本層IV層や基盤の岩盤層を掘削して墓坑とした石棺墓である。壁石は、短辺の東西壁は各1点、長辺の南北壁は各5点の計12点の石材からなる。石材は長軸方向を横向きにして設置され、東側は垂直に立っているが、西側は内傾が著しい。

【使用石材】壁石の主要な石質は、花崗閃緑岩と緑色凝灰岩からなり、12点の内訳は花崗閃緑岩5点緑色凝灰岩5点、凝灰岩1点、安山岩1点である。S-17・18・27・28の西側が花崗閃緑岩、東側は緑色凝灰岩という使い分けのようなものもうかがえる。壁石の重量は15~53kgまでが見られ、12点の総重量は372kg、1点あたりの平均は31kgである。短辺の壁石は、東壁(S-23、長軸45cm・45kg)より西壁(S-17、長軸60cm・53kg)に大型の石材が用いられている。

【堆積土】堆積土は図36B-B'・C-C'で6層に分層した。第1層は石棺墓上部に分布する黒褐色土で、西側では蓋石と見られるS-12の下部に入り込み、隣接の13号墓の棺内堆積土最上層とも肉眼的には良く似る。第4・5層は壁石裏込め土で、28号配石は壁石設置に伴う。なお第6層は同配石の下位に潜り込み、11号墓まで分布する土層である。第4層と類似する土質から12号墓の壁石裏込めに伴う可能性のほか、11号墓の盛土の可能性も残されているが、明瞭な重複関係を観察できずいずれの遺構に帰属するかは不明である。

【出土遺物】土器は、掘方・棺内堆積土から榎林~大木10式併行の破片が出土した。このほか南東隅の検出面で石皿の未製品1点が出土し、62号配石としている。使用痕はなく加工した面を裏側にして出土した。

【結】凝灰岩の大型礫(28号配石)を壁石設置段階に伴い、検出面付近で石皿未製品(62号配石)を伴う石棺墓である。62号配石との位置関係は、後述の13号墓と25号配石の位置関係との共通性が見られる。出土遺物は縄文時代中期末葉期のもので占められ、後期初頭期のものは入らない。よって時期は大木10式併行期と考えられる。

13号墓(図35~37)

【位置・確認】石棺墓A群の北側、ⅧP-83グリッドに位置する。直上には近代以降の土層が堆積しており、上部は削平されている可能性が高い。

【重複・関連遺構】北側で12号墓、南側で4号墓と隣接するほか、南東隅に25号配石、東側に59号配石が位置する。12号墓とは直接重複がなく新旧関係は不明である。また盛土どうしの重複状況から、構築時期は4号墓よりも新しいが、4号墓の検出面付近では新しい時期の土器が出土することから、同墓は構築後に改変等を受けている可能性もある。25号配石は層位的に本石棺墓の構築に伴っている。また南側でSK5574と重複し、本石棺墓の方が新しい。

【遺存状況】閉塞に伴う蓋石等は一切見られないが、壁石は完存している。

【長軸方向】西壁は北から106°西へ向いている。

【形状・規模】平面形は幅広の長方形で、長軸は180cm、短軸は50cm、深さは35cmである。

【構造と構築方法】墓坑は東西に長い不整形の土坑状で、基盤である第IV層を掘り込み、底面を敷設することなく、起伏に富んだ岩盤層を直接石棺墓の底面としている。短辺は東西壁ともに1点、長辺は南壁が5点、北壁は6点の計13点の石材からなる。壁石は横置きを基本とするが、北壁S-7は石材間の間隙を埋めるように平置きする。図35A-A'で壁石は、墓坑内を第4層で裏込め、これより上位は平面範囲を押さえられなかったものの、南側に広がる盛土(第2層)で固定されている。

【使用石材】壁石13点の石質は、緑色凝灰岩を主体(10点)とし、花崗閃緑岩と安山岩が各1点含まれている。重量は15~52kgのものが見られ、総重量は379kg。1点あたりの平均は29kgである。短辺の壁石の規模は、西壁と東壁で明瞭な使い分けは見られない。

【堆積土】堆積土は、図36D-D'・E-E'では6層に分層した。第1層は後世の流入土、第3~6層は壁石裏込土で、第2層が棺内堆積土である。同図A-A'では盛土(第2層)が南側に延び、4号墓盛土を覆う。

【出土遺物】掘方、棺内堆積土から榎林~大木10式併行、検出面からは縄文時代後期初頭頃の土器破片が出土した。

【小結】南東隅に自然礫3点を平置きした25号配石を伴い、北側の12号墓とは配石遺構との位置が共通する。検出面では後期初頭頃の土器が出土するものの、構築時期を示す土層からの出土土器は大木10式併行までで占められる。構築時期は縄文時代中期末葉期の可能性もあるが、時期は後期初頭頃頃までと見ておきたい。

14号墓(図30~34)

【位置・確認】石棺墓A群の南西端、ⅧM-81・82グリッドに位置する。蓋石と見られる大型礫の集積(S-1~4)と壁石と見られる石材が組み合うことから石棺墓と捉えた。蓋石除去後に壁石に相当する石材の配列状況を観察したところ、西壁および南壁西側に相当する2石については他の壁石とは並ばず、外側で当該石棺墓をコの字状に囲む18号配石から派生するような配列をもつことから、別個の配石(19号配石のS-1・2)として捉え、壁石はこの配石を取り込む形で配置されたものと考えた。その後8号墓でも配石遺構が壁石から派生する状況が観察され、石棺墓構築におけるひとつのあり方と認識した。また棺内堆積土の調査時に観察し壁石と判断したS-21も、裏込めを精査した結果、配列としては19号配石とした列石の一部をなすもので、石材の一部が壁石として取り込まれた状況であった。

【重複・関連遺構】17～19号配石が本石棺墓の外側をコの字状に囲み、土層堆積状況から構築段階としては壁石設置に伴うもの(=新旧関係②)と判断されたが、設置面標高は19号配石の方が低く、壁石S-18・19の下位に19号配石の石材が潜ること、19号配石S-1・2から壁石が派生するような配列を見せること等から、設置のタイミング(=新旧関係③)としては19号配石が壁石設置に先行する。

また44号配石は壁石と設置面が変わらず同時と見られ、53号配石やSP12002とは上下で重複し、本石棺墓の方が新しい。北側に隣接する56号配石は層位的には本石棺墓の盛土上(図34D-B')、本石棺墓構築以降のものである。

【遺存状況】北東側に蓋石は見られないが、遺存状況はおおむね良好である。

【長軸方向】西壁は北から127°西へ向いている。

【形状・規模】平面形はやや歪な長方形(紡錘形)で、長軸は190cm、短軸は最大で40cm、最小で20cm、深さは25cmである。

【構造と構築方法】墓坑を持たず多数の配石遺構とともに盛土で壁石を固定した石棺墓である。壁石はS-18～27までの10点と、19号配石S-1・2の2点の計12点である。前述の通り壁石は、平面的には19配-1・2の2石を取り込むような形に配置されている。また当初は本石棺墓の壁石として命名したS-21も、裏込め部の観察では19号配石として捉えるべき石材で、壁石S-20とS-22の隙間に、このS-21を組み込む配置状況もうかがえる。壁石の設置状況は横置きを基本とし、石材下端を構築土中に埋めることで、石棺墓底面は壁石下端より上位に造り出すが、S-18・19は構築土上に平置きするだけで、壁石としては極めて特殊な設置状況で、埋葬主体部を深く造る意識に乏しい。平面形状とも相俟って粗雑で乱れた印象を受ける。蓋石はS-1～4、脇石はS-11～17・29・30が相当する。

【使用石材】石棺墓の石材には蓋石として大型で扁平な相馬安山岩など、脇石や壁石には緑色凝灰岩を多用する。壁石の一部をなす19号配石S-1・2にはとりわけ大型の石材が用いられ、S-2は271kgを計る。計測できた範囲での石材総重量は811kgであるが、石棺墓構築を契機とした配石遺構も含めた総重量では2tを超える。

【堆積土】棺内堆積土は黒褐色砂質土の単層で小礫を多数含む。

【出土遺物】配石遺構も含めた石棺墓関連土からの遺物出土量は、その他の石棺墓に比べても多い。掘方・棺内堆積土からの出土土器は、大木10式併行までのもので占められているが、関連遺構の構築土からは牛ヶ沢式も出土している。

【結語】墓坑を掘削せず土盛りとともに壁石を設置した構築方法Bの石棺墓で、8号墓や9号墓同様、多数の配石遺構と組み合わせることを特徴とする。石棺墓を囲うように配置した17～19号配石にはとりわけ大型の礫が用いられており、造成の土量は石棺墓群の中でも最大級である。出土土器の最新時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行までであるが、他遺構との重複関係から9号墓(牛ヶ沢式期)よりも新しく、構築に伴う配石遺構でも同時期の土器片が出土することから、時期は縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式と考えられる。

15号墓(図38～42)

【位置・確認】石棺墓A群の中央付近、ⅧN-83グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】南東部は1号墓、西側は7号墓、東側は9号配石を介して8号墓、南側は33号配石を挟

んで16号墓と隣接する。構築土の直接的な重複関係(図39A-A')から、1号墓よりも新しく、16号墓や33号配石よりも古い。また8号墓とは図29D-B'から本石棺墓の方が古い。このほか26号配石は本石棺墓の西側を壊しており(図39B-B'・図40A-A')、本石棺墓の蓋石や脇石の位置にあるS-29・30やS-28も、26号配石構築時に設置されたものである。よって15号墓の構築当初期の状況は不明だが、既存の石棺墓を改変(破壊後に復旧)した痕跡と考えられる。

【長軸方向】西壁は北から94°西へ向いている。

【形状・規模】平面形は台形で、長軸は185cm、短軸は中央部で45cm、東側で30cm。底面までの深さは40cm、蓋石までの距離は65cmで、墓坑の掘り込みから底面までの深さは40～50cmである。

【構造と構築方法】墓坑内に壁石を設置する石棺墓である。北側は26号配石に壊されるが、壁石は、短辺の東西壁は各1点、長辺の南北壁は各4点の、総数10点の石材からなる石棺墓だったと思われる。壁石、脇石、蓋石のいずれも大型の扁平石で構成され、石質はほぼ花崗閃緑岩で占められる。壁石の設置状況はおおむね直立するが、南壁は土圧でやや内側に傾いている。石材は横置きを基本とするが、東壁と接するS-2128は大きさ、形状、石質の異なる石材を縦置きにしている。石材はいずれも大型であるが、短辺は東壁(S-20, 45kg)より西壁(S-25, 86kg)に大型の石材を選択している。

脇石も壁石同様、大型の扁平石で構成される。東壁側には見られず、長辺側にハの字上に積み上げている。なお南壁上のS-28と西壁上のS-27は26号配石の石材である。脇石上には大型の石材が5点並ぶが、構築時の状況を留めたものは東側の3点で、西側の2点は26号配石の石材である。3点の蓋石は、両側の脇石に架かるように長軸を南北に向けている。S-3・5は脇石上に置かれるが、S-4はS-3・5の上に乗っている。

【使用石材】石材は構築状況を留めるものは、壁石9点、脇石6点、蓋石3点である。石質はS-21(緑色凝灰岩)・28(安山岩)を除けば壁石から蓋石までいずれも花崗閃緑岩で占められる。石材の大きさは、脇石がやや小型であるが、壁石や蓋石は大半のものが60kgを超える石材が用いられる。重量は壁石9点が486kg、蓋石7点が272kg、蓋石1点が83kgで、総重量は841kgである。

【堆積土】図39A-A'・B-B'に本石棺墓関連土を示した。第14～19層が壁石裏込土で、第11層が棺内堆積土、第8～10層は壁石設置後蓋石設置以前の盛土である。第15・16層は壁石裏込めとして墓坑内を充填しつつ、上部については墓坑を覆いこの外側まで広く土層が延びている。本石棺墓における脇石は、第11層との関係から棺内が埋め戻し後に設置され、第9・10層の様相から盛土により被覆され、埋葬後は蓋石のみ露出した状態であったことがわかる。

【出土遺物】土器は、掘方から榎林～最花式、また整地層・棺内堆積土からは大木10式併行までの破片が出土した。構築土からは蛭沢式の破片(図84-26)が1片のみ出土したが、後述の理由により混入と考えられる。

【小結】大型扁平の花崗閃緑岩を石材とする石棺墓で、東半は構築状況を良く留めている。一方で、西側は26号配石により壊され、蓋石や脇石は本来あるべき位置に復旧されており、石棺墓が後世に改変を受けた事例として注意される。構築土から蛭沢式の破片が1片出土したが、後世26号配石(蛭沢式期)に壊されていること、16号墓(大木10式併行期)よりも古い他遺構との重複状況から、混入と考えられる。これ以外の最新出土土器は大木10式併行までで占められ、構築時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられ、後期前葉の蛭沢式期に改変を受けたものと考えられる。

16号墓(図38~42)

【位置・確認】石棺墓A群の南域、ⅧM-83グリッドに位置する。東側には地山から露出した、凝灰岩の巨石がある。

【重複・関連遺構】>15号墓、=33・48号配石、=14・15・21号配石

北側は33号配石を挟んで15号墓と隣接し、新旧関係は堆積土どうしの直接的な重複状況から15号墓よりも新しい。このほか北側で33号配石、南側で48号配石、西側で14・15・21号配石が隣接しており、以下の層位的な状況からいずれも本石棺墓の構築に伴うものと見られる。

北側の33号配石は、本石棺墓の壁石裏込土上にあるが、掘方自体は脇石・蓋石の下部に位置することや、33号配石に脇石・蓋石がまたれかかる状況(S-17・18)などから、壁石設置→33号配石→脇石・蓋石設置という構築順序が想定される。また48号配石とは、断面上での切り合い関係は確認できないが、脇石・蓋石が同配石を覆う状況(図39C-C')から48号配石→蓋石設置という順序も成り立つ。このほか西側に隣接する14・15・21号配石は、図39D-D'から、14号配石は西壁裏込めと同時で、図65P-P'から15号配石は14号配石と21号配石間に付加され、21号配石は33号配石以降に設置される(21号配石>33号配石・15号配石>14号配石)。これを石棺墓構築過程で整理すると以下の通りである。

壁石設置段階	14号配石
壁石設置～脇石設置以前	33号配石→21号配石、48号配石
蓋石設置以後	21号配石

【遺存状況】蓋石はおおむね完存している。また以下の脇石、壁石の遺存状況も良好である。

【長軸方向】西壁は北から110°西へ向いている。

【形状・規模】平面形は小型の長方形で、長軸は130cm、短軸は30cmで、深さは25cmと浅い。石棺墓A群の中ではもっとも小規模である。

【構造と構築方法】墓坑を掘削せず、土盛りしながら壁石を設置する構築方法Bの石棺墓であるが、南側に延びた既存の15号墓の盛土(図39A-A'第15層・同C-C'第8層)をわずかに掘り込むようなわずかな造成の形跡が見られる。壁石は東西壁各1点、南北壁各3点の計8点からなり、石材は小型の細長い礫が選択され、短辺の東西壁は縦置きであるが、長辺の南北壁を横置きにするのが特徴で、主体部を浅く造る意図がうかがえる。

壁石上の脇石は、南北側は各4点、西側は3点の11点を主要のものとし、積み上げた隙間に小型の石材(S-3や36)を充填している。南側と西側は石材長軸を石棺墓中心に向け放射状に置かれるが、北側のみ石棺墓長軸方向に向けて横に並べるのは、既存の33号配石を意識したためと思われる。傾きはハの字に外傾するものもあるが、水平や内傾もありやや乱れている。

蓋石は図38では西側が空白となっているが、本来的には完存しており、この場所のみ棺内に石材S-9・11等が落ち込んでいた(図39D-D')。他例で見られるような大型石材を両側の脇石に架け渡さず、脇石とはほぼ同じ高さで棺内堆積土上に連続し、隙間を埋めるように密集させている。この設置状況や落ち込んだ石材下位の第2・3層の存在からも、埋葬主体部が空洞の状況は想定できず、蓋石設置以前には埋め戻されていたことが明らかである。

【使用石材】主な石材は壁石8点、脇石11点、蓋石11点の総計30点からなり、相馬安山岩、安山岩、花崗閃緑岩をわずかに含むが、全体がほぼ緑色凝灰岩で占められている。重量は、壁石は12~39kgが見

られ、8点で199kg(平均25kg)と棺墓群中でもっとも小さい。脇石10点は2~34kgまで、総重量は183kg(平均18kg)。蓋石9点は5~71kgまで、総重量は234kg(平均26kg)。脇石と蓋石は1点あたりの石材重量のばらつきが著しい。石材の総重量は616kgである。

【堆積土】図39A-A'・C-C'・D-D'が本石棺墓の主な関連土層である。C-C'第2・3層が棺内堆積土、第4~6層が壁石裏込土で、第1層は脇石、蓋石設置時の盛土である。西側では第1層が蓋石とともに石棺墓内部に沈み込んでいる。D-D'で相馬安山岩の板状礫(S-29)が内部に落ち込んで割れた状況は8号墓の状況(図29B-B')と似ている。北壁S-38と密着するC-C'第8層、A-A'第15層は15号墓の壁石裏込土で、16号墓は墓坑こそ持たないものの、壁石は既存の土層を若干造成したところへ設置したものと思われる。西側では14号配石は第4層の壁石裏込めに伴っている。

【出土遺物】掘方・整地土・棺内堆積土から、榎林~大木10式併行までの土器片が出土した。

【小結】石棺墓A群でもっとも小規模な石棺墓で、構築の各段階に多数の配石遺構を伴っている。特に33号配石は、①15号墓との境界に位置する、②本石棺墓を契機に構築されるという二点から、既存の石棺墓と画す意味合いが読み取れる。蓋石や堆積土の状況は、蓋石設置以前に棺内が埋め戻されていたことを示し、棺内に蓋石が落ち込む状況は8号墓のものと共通する。他遺構との重複状況より15号墓よりも新しい。また確実ではないが、本石棺墓に伴う列石(14・21号配石)が西側の3号配石を避け南側へ逸れるような配列状況から、3号配石よりも新しい可能性がある。このような他遺構との重複状況から相対的に新しい遺構であることがわかる。堆積土出土土器は縄文時代中期末葉までのもので占められ、これは本石棺墓に伴う配石遺構でも同様である。造墓の際の土量を踏まえ、縄文時代後期初頭期の土器を含まない状況を考えれば、時期は大木10式併行期の中に収まるものと考えられる。

第4項 石棺墓B群(図43~48)

遺跡範囲の中央、ⅧP~R-90~93グリッドに位置し、東西10m×南北10mの約100㎡の範囲に6基の石棺墓(17号墓~22号墓)が分布する(図43)。石棺墓A群の東方25mに位置し、後述する石棺墓C群とは沢1を挟んで30mの位置関係にある。4基の配石遺構が近接するが、石棺墓A群のように石棺墓と一体あるいは構築の連続を層位的に確認できた事例はなくはっきりしたことは言えないが、本遺跡の配石遺構の多くが石棺墓周辺に分布するあり方は、両者の関係性を示唆するものである。

沢1左岸に位置する石棺墓B群は、地形的にはわずかに東側へ下がっている。周辺における埋没以前の沢の底面標高は178.2~178.4mほどであるが、出土遺物や上面の検出遺構から、榎林期にはある程度埋積が進んでいたことがわかっており(第3分冊第8節第1項参照)、17号墓や18号墓の断面図にもこの状況が表れている(図44・45)。一方で1004号配石の設置面は、配石遺構が造られた頃にも依然沢1が微窪地として残っていたことを示している(図79A-A'断面)。

17号墓(旧SK1103)(図44)

【位置・確認】石棺墓B群、ⅧQ-R-91グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】直接的な重複はないが、1004号配石が東側に隣接する。

【遺存状況】S-1~5は閉塞に関連する石材の可能性があるが判然としない。壁石は南側を中心に失われている。

【長軸方向】北壁は失われているが、これに相当する辺は北から8°東へ向いている。

【**形状・規模**】南半の壁石は失われているが、掘方から推せば北側がやや狭まる台形であったものと思われる。推定される長軸は190cm、短軸は北側で25～30cm、南側は壁石掘方で50～60cmで、深さ40cmである。

【**構造と構築方法**】壁石は横置きを基本とし、墓坑底面に直接設置したものと、設置部をやや掘り下げ、底面より深い位置で据え付けられたものがある。北側では盛土を確認しており、墓坑より上部は盛土で固定する(図44B-B')。出土状況からS-1・2は胎石の可能性もあるが原位置であるかは判然としなない。

【**使用石材**】壁石は5点を確認した。石材は30kg前後の扁平な石で、重量は24～41kgである。石質は緑色凝灰岩3点、花崗閃緑岩とデイスイト各1点である。

【**堆積土**】第1～4層と盛土の5層が本石棺墓関連土である。第2～4層は壁石裏込土で、第1層が棺内堆積土である。北側の盛土は沢1を覆っている。

【**出土遺物**】土器は掘方・盛土から覆林式、棺内堆積土からは大木10式併行を下限とする土器片が出土した。また鏝の抜き取り痕からは蛸沢式と思われる破片が出土した。

【**小結**】鏝抜き取り痕からは縄文時代後期初頭の土器が出土するが、構築時期を示す土層からは大木10式併行までの土器で占められる様相から、時期は大木10式併行期以降としておきたい。

18号墓(旧SK1107)(図45)

【**位置・確認**】石棺墓B群、ⅧP-Q-92グリッドに位置する。

【**重複・関連遺構**】直接重複はしないが、北東側に1005・1006号配石が隣接する。

【**遺存状況**】閉塞に伴う蓋石等はS-1を除いて見られないが、壁石はすべて残っている。

【**長軸方向**】北壁は北から15°西へ向いている。

【**形状・規模**】平面形は南北の短辺がやや狭まる隅丸の長方形で、長軸は170cm、短軸は中央部で50cm、南北両端では35cm、深さは40cmである。

【**構造と構築方法**】墓坑内に壁石を設置する構築方法Aの石棺墓で、墓坑は土盛りすることなく、直接第IV層を底面とする。墓坑底面はおおむね平坦で、壁際の壁石設置部のみやや下がっているが、設置時に埋め込んだというよりは石材の重さで沈んだ状況に近い。壁石は短辺の南北壁が各1点、長辺の東西壁はともに6点の計14点で構成されている。石材は縦置きを基本とし、西壁は直線的に並ぶが東壁はやや弧状となる。特に北壁と接するS-3・18、南壁と接するS-13を、それぞれの短辺壁石に向けて斜めに配することで、全体として隅丸方形のような平面形となっている。西壁は垂直に近いが、他三壁はやや外傾する。南北壁では外傾の程度が著しい。

南側と東側では盛土を確認しており、墓坑掘り込み面から出た壁石の上部を、盛土で裏込めしている。盛土には大量の小礫が含まれている。壁石の石質は、S-8が花崗閃緑岩であるほかはいずれも緑色凝灰岩で揃えられる。重量は18～42kgまでが見られ、総重量は420kg(平均30kg)である。

【**堆積土**】堆積土は分層した4層と盛土の5層からなる。第1層は棺内堆積土、第2～4層は壁石裏込土である。棺内堆積土は単層で層理構造は認められない。

【**出土遺物**】土器は小片のみで図示しなかったが、掘方・盛土・棺内堆積土から最新時期を大木10式併行までとする土器片が出土した。

【**時期**】出土土器から時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

19号墓(旧SK1108)(図46)

【位置・確認】石棺墓B群の中央付近、ⅧP-90・91グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】SP9659・9661と直接重複し、本石棺墓の方が新しい。このほか西側で1008号配石が隣接する。第5・6層を切り込む図46C-C'から同配石は、本石棺墓よりも新しい配石遺構ではあるが、その位置関係は両遺構に何らかの関連性があったと見るのが自然である。

【遺存状況】上部は大きく削平されており、南西部の壁石と墓坑掘方が残るのみである。

【長軸方向】西壁は北から110°西へ向いている。

【形状・規模】壁石のほとんどが失われているが、掘方から推せば平面形は東西方向に長い長方形で、推定長軸は195cm、短軸は40cm程度で、深さは45cmである。

【構造と構築方法】壁石はS-4のように墓坑底面に直接設置されたものと、底面を掘り窪めて据え付けたS-23が見られる。西壁(S-4)を除き、墓坑の壁際には壁石を据え付ける穴が見られることから、多くの壁石は後者の方法で設置されたものと見られる。

【使用石材】壁石は3点確認した。西壁(S-4)は相馬安山岩の板状石(32kg)、南壁(S-23)は緑色凝灰岩(各24kg、22kg)である。S-1は壁石設置面からは動いているが、出土状況或使用石材の類似等から南壁が動いたものと見られる。

【堆積土】堆積土は6層に分層した。第1層は壁石抜き取り穴、第4層は壁石裏込めで、第23層が石棺墓内の堆積土であるが、西半に分布する第3層はいわゆる棺内堆積土か、壁石裏込めや底面敷設等構築に伴う土層かは不明である。第5～7層は石棺墓の西側に分布する土層で、第6・7層は墓坑掘削以前の土層である。第5層は小礫を多量に含んだ土層で、隣接する1008号配石よりも古く、石棺墓構築に伴う可能性がある。

【出土遺物】土器は円筒上層a・b式、榎林・最花式、大木10式併行、牛ヶ沢式が出土したほか、壁石(S-1)掘方と棺内堆積土第3層からは蛭沢式の可能性のある破片が出土している。

【時期】石棺墓の構築時期を示す土層から、蛭沢式の土器片が複数出土した状況、並びにSP9661(登沢式期)との重複状況から、時期は縄文時代後期前葉の蛭沢式期と考えられる。

20号墓(旧SK1109)(図46)

【位置・確認】石棺墓B群、ⅧQ-90グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】直接重複する遺構はないが、南側で22号墓が隣接する。

【遺存状況】上部を大幅に削平されており、墓坑と壁石の一部が破損した形で遺存するのみである。

【長軸方向】西壁は北から130°西へ向いている。

【形状・規模】壁石は失われているが、墓坑掘方から推せば平面形は北東から南西方向に向く長方形と思われる。推定長軸は205cm、短軸は50cm程度で、検出面から底面までの深さは10cmである。

【構造と構築方法】墓坑壁際には比較的深い壁石抜き取り痕が並ぶことから、壁石は設置部を掘り窪めて据えられたものと推測される。

【使用石材】S-1～6は相馬安山岩の割石で、南壁の一部だったものと見られる。

【堆積土】堆積土は5層に分層した。第2～4層は壁石抜き取り痕、第5層は壁石裏込土で第1層が棺内堆積土である。

【出土遺物】堆積土から、榎林・最花式、縄文時代中期末葉～後期初頭の破片が出土した。

【時期】縄文地文のみの土器しか出土しておらず判断としないが、時期は大きく木10式併行期以降とみておきたい。

21号墓（旧SK1110）(図47・48)

【位置・確認】石棺墓B群、ⅧP・Q-91グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】SP9648・9649と重複し、両遺構よりも新しい。

【遺存状況】北東部が擾乱に壊されているほか、上部は削平されている。閉塞に伴う蓋石等は見られず、壁石も南・西側の一部を除き失われている。

【長軸方向】北壁は失われているが、全体形状からこれに相当する壁が北から14°西へ向いている。

【形状・規模】壁石のほとんどが失われているが、掘方や残存する底石から推せば平面形は南北方向に長いやや幅広の長方形と思われる。推定長軸は200cm、短軸は60～70cm、深さ45cmである。

【構造と構築方法】掘削した墓坑内に底石を敷設した石棺墓で、壁石は南西側の一部だけ遺存する。西壁S-12～14は構築時の状況を留めているが、S-41および15・16（同一個体）は石材上部がほとんど欠損した、基礎のみの残片である。壁際を比較的深く掘削し、ここへ壁石を据え付けている。また多数の小礫で裏込めしている。底石は底面に直接設置され、相馬安山岩の板状礫(S-38・40・43)を中心に、これより小さい板状、円礫等の石材をその間隙に充填している。図48で示すように、壁石(S-13)と底石(S-38・39・43)とで接合関係がある。接合された石材1の規模は70×50cm、39kgの大型の相馬安山岩である。これを節理面で剥ぎ取り、生じた大型の石材(S-38・43)、ならびに小型の石材(S-39)を底石に、また小型のS-13の壁石としている。

【使用石材】壁石石材5点の石質は相馬安山岩3点と砂岩1点、緑色凝灰岩1点である。また底石石材7点の石質は、相馬安山岩6点、緑色凝灰岩1点で、総重量は91kgである。最重量の石材はS-40で41kg、また底石・壁石の接合資料(石材1)の重量は39kgである。

【堆積土】底面までの石棺墓内堆積土は6層に分層した。第3～5層は壁石裏込め、第6層は底石設置時の構築土で、第12層が石棺墓内の人為的埋め戻し土である。

【出土遺物】棺内堆積土から大木10式併行を下限とする土器片が出土した。

【小結】底面に石を敷いた石棺墓で、1号墓に類似がある。相馬安山岩を主要石材とする点は1号墓と共通するが、細かく割った石材をモザイク状に貼る1号墓とは異なり、節理方向に剥ぎ取った板状礫を大型のまま底石や壁石の石材とする。底石と壁石には接合関係が見られる。時期は石棺墓関連土から出土する最新時期の出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

22号墓（SK5569）(図47)

【位置・確認】石棺墓B群、ⅧP・Q-90グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】SK5577と重複し本遺構の方が新しい。東側には21号墓、また南北にはそれぞれ19号墓、20号墓が隣接する。

【遺存状況】閉塞に伴う蓋石等は一切見られない。また壁石は南西部の一部が遺存する。

【長軸方向】北壁は失われているが、これに相当する辺が北から6°西へ向いている。

【**形状・規模**】壁石がほとんど失われているが、掘方から推せば平面形は東西方向に長い長方形で、推定長軸は160cm未満、短軸40cm程度だったと見られる。検出面から底面からまでの深さは25cmである。

【**構造と構築方法**】壁石が2点しか遺存せず詳細は不明である。

【**使用石材**】S-12の石質は緑色凝灰岩で重量はそれぞれ8kg、10kgである。

【**堆積土**】棺内堆積土は7層に分層した。第3・7層は壁石裏込土、第4～6層は壁石抜き取り痕である。第1層は壁石設置後の人為的埋め戻し土である。このほか底面中央西側で粘土を確認した。

【**出土遺物**】棺内堆積土から最花式の土器片が出土した。

【**小结**】縄文時代中期後葉の最花式期以降と考えられる。

第5項 石棺墓C群(図49～52)

石棺墓C群は遺跡範囲の北東部、北側斜面際に分布する4基の石棺墓を指す。石棺墓B群とは沢1を挟んで北東30mの位置にあり、周辺は遺跡内でももっとも標高の高い地点である。25号墓と26号墓の間には高低差50cmにも満たない小規模な窪地が東西方向に入り込み、沢1へ向かっている。両石棺墓の位置関係は、この沢を避けて少しでも高い地点に造られたことを示している。周囲には主に縄文時代中期後葉以降の土坑・ピットが見られ、石棺墓とは分布の一致を見せるが、両者の関連は不明である。この東方20mには長軸を南北に向けた23・24号墓が並列している。

本群の石棺墓に関連する遺構のうち、24号墓西側に隣接するSK1067と26号墓東側のSK1502の2基については、壁石を一切確認していないが、堆積土外周に19号墓や20号墓と類似した礫抜き取り痕があることから、石棺墓の可能性が高い遺構である。

23号墓(旧SK1064)(図50)

【**位置・確認**】石棺墓C群の東側、VII-103グリッドに位置する。

【**重複・関連遺構**】重複する遺構はないが、西側に24号墓が隣接する。

【**遺存状況**】S-27・17は閉塞に伴う石材の可能性はあるが、構築時の旧状を保っているかは不明である。南北両側の壁石が失われているが、第15層を抜き取り痕と見れば、石材S-17は動いている可能性が高い。

【**長軸方向**】北壁の壁石は失われているが、これに相当する辺が北から28°西へ向いている。

【**形状・規模**】平面形は南北方向に長い長方形を基調とするが、南北両側の短辺でやや窄まるで隅丸長方形である。壁石が一部失われているが、掘方から推せば長軸は170cm、短軸は50cm程度で、深さは40cmである。

【**構造と構築方法**】壁石は縦置きを基本とする。底面との設置部はやや沈んでいるものの、明瞭に掘削した状況は見られず、墓坑底面に直接設置されたものと思われる。

【**使用石材**】石材は長軸40～50cm程度の比較的大型の扁平礫が用いられている。石質鑑定および重量計測等は実施していないが、確認できた範囲での石質は、壁石S-13が花崗閃緑岩、S-114が緑色凝灰岩で、壁石以外ではS-2・15が花崗閃緑岩、S-17が相馬安山岩である。

【**堆積土**】堆積土は5層に分層した。第1・5層は壁石の抜き取り痕と見られる。第4層上面には石棺墓石材と見られる大型の石が落ち込んでいる。

【**出土遺物**】土器は椀林式と思われる小片が僅かに出土した。

【小結】出土遺物から縄文時代中期後葉以降と考えられる

24号墓（旧SK1065）(図50)

【位置・確認】石棺墓C群の東側、ⅧU-102・103グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】重複する遺構はないが、東側に23号墓が隣接する。

【遺存状況】蓋石や脇石は見られない。また壁石は北側および西側の一部が失われている。S-7は西壁の石材であった可能性が高いが、掘方底面からは浮いており構築時の状況は留めていない

【長軸方向】北壁は失われているが、これに相当する辺は北から2°西へ向いている。

【形状・規模】壁石が一部失われているが、掘方から推せば平面形は南北方向に長い小型の長方形である。推定長軸は110cmで本遺跡では最小の規模である。短軸は45cmで、深さは30cmである。

【構造と構築方法】墓坑底面は壁石設置部分のみやや沈むが、明瞭に掘削して壁石を据え付けた状況はなく、底面に直接設置されたものと思われる。壁石は縦置きを基本とする。

【使用石材】石質は、残存する壁石6点のうち、S-4を除く5点が緑色凝灰岩である。また石棺墓の石材と見られるS-7・8は花崗閃緑岩である。重量は計測していないが大型扁平の石材が用いられる。

【堆積土】堆積土は4層に分層した。第3層は壁石の抜き取り痕である。第4層は壁石裏込土で、第12層は棺内堆積土である。第1層上面には石棺墓石材と見られる大型の石が見られる。

【出土遺物】土器は、時期不明の細片が数点出土したのみである。

【小結】本遺跡の石棺墓群では最小の石棺墓である。時期比定の可能な土器が出土していないため、時期は不明である。

25号墓（旧SK1086）(図51)

【位置・確認】石棺墓C群の西側、ⅧV-97グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】北側でSP9604(最花時期)と重複し、本遺構の方が新しい。

【長軸方向】西壁は北から90°西へ向いている。

【遺存状況】閉塞に伴う蓋石等は確認されていない。壁石はすべて遺存するが、土圧による影響が特に東側での内傾が顕著である。

【形状・規模】埋葬主体部の平面形は、東側が極端に窄まるが、これは構築時の状況を留めていない。現況を留める壁石の基礎部分では東側が幅狭に造られていること、また南壁では壁石どうしを重ねながら狭めている様子から、平面形は西が広く、東側が狭い台形と推測できる。規模は長軸210cm、短軸は西側で50cm、東側で30cmである。壁石の高さはややばらつき、上端の形状も平坦や山形など均一ではないが、壁石上端から底面までは最大で63cm、平均的な深さは50cmで、他の石棺墓と比較しても深い。

【構造・構築方法】壁石は長軸50cm前後の大型板状礫を縦置きに設置する。北壁背後の裏込部分にはS-11・13・17が、また南壁S-4の背後にもS-5が壁石のように縦置きされている。

【使用石材】石質はS-9が緑色凝灰岩であるほかは、いずれも相馬安山岩で統一されている。壁石は長軸50cmを超える石材が多用され、重量は7～56kgまでが見られるが、平均重量は約30kgと大型である。石材には原礫面のない割り取ったと見られるものと全面が風化した原礫面を残すもの(S-18等)の二

者がある。壁石15点の総重量は約440kgである。

【堆積土】堆積土は2層に分層した。第2層は壁石裏込土で、第1層は棺内堆積土である。第1層は小礫を多量に含んだ暗褐色の砂質シルト土でしまりが強い。また明確に分層はできなかつたが、底面に接する堆積土の一部からはやや黒味が強い箇所が認められた。

【出土遺物】棺内堆積土からは榎林式、最花式の土器片が出土した。このほか棺内中央部の底面から5cm程浮いた位置で、珪質頁岩製の無茎石鐙が1点出土している。

【小結】平面形は台形で相馬安山岩の板状礫を縦置きする構造は3号墓と類似する。時期は出土土器並びに重複状況から縄文時代中期後葉の最花式期以降と考えられる。

26号墓 (旧SK1501) (図52)

【位置・確認】石棺墓C群の西側、ⅧY-96・97グリッドに位置するもっとも北側の石棺墓である。

【重複・関連遺構】直接重複する遺構はないが、周囲には榎林式期以降の土坑・ピット群が分布する。このうち西側に隣接するSK1502では礫抜き取り痕が確認され、石棺墓であった可能性がある。

【遺存状況】閉塞に伴う脇石が南側の一部に残っているほか、蓋石と見られる大型の石材(S-14)が棺内に落ち込む形で検出された。壁石は短辺の東壁および北壁東側が失われている。

【長軸方向】遺存状態が悪く西壁は不明瞭だが、これに相当する辺は北から101°西へ向いている。

【形状・規模】壁石が大幅に失われているため形状および規模は不明だが、掘方から推せば、東西方向に長い長方形と見られ、図52A-A'第4層が壁石裏込土と見れば、推定長軸は170cm程度、短軸は中央部で55cm、東側で40cm、深さ40cmである。墓坑の規模は長軸265cmである。

【構造・構築方法】墓坑は東西方向に長い深さの異なる方形の土坑2基を、南北に並列させた形状で、南壁は一段低い南側の掘り込みの北壁に寄せて設置する極めて特殊な構造である。壁石は縦置き、横置きの方が見られる。また配列は、南壁は比較的直線的に並ぶが、北壁は向きが乱れ、設置面も一定しない。二次的に移動している可能性もある。また南壁上のS-5・16は脇石の可能性が高い。

【使用石材】石質鑑定できた壁石8点の石質は、緑色凝灰岩3点、相馬安山岩3点、花崗閃緑岩2点である。重量は11～44kgまで見られ、総重量は260kgである。壁石の平均重量は30kgを超えるが、東壁(S-11)には小振り(11kg)の石材が用いられる。

【堆積土】堆積土は6層に分層した。第3～6層は壁石裏込土であるが、特に第5・6層は南側の墓坑を充填した土層である。棺内堆積土は2層に分層でき、第2層上面には石棺墓石材と思われる大型の石(S-14)が落ち込んでいる。

【出土遺物】棺内堆積土から、榎林式と最花式と思われる土器片が出土した。

【時期】堆積土出土遺物から、時期は縄文時代中期後葉の最花式期以降と考えられる。

第11節 配石遺構

第1項 配石遺構の概要

配石遺構は62基検出した。このうちの大半が石棺墓群に近接し特徴的な分布を見せる。中でもVIII～P-81～84グリッドを中心とする石棺墓A群には52基の配石遺構が隣接し、層位的な状況から大半の配石遺構が石棺墓の構築に伴うことがわかっている。また石棺墓B群周囲の4基の配石遺構(1004～1006・1008号配石)も、石棺墓との層位的な関係は明らかにならなかったが、石棺墓周辺に分布する特徴的なあり方は、両者の関係性を示唆している。

このような関係性をもちながらも配石遺構は、石棺墓のような認識しやすい構造体ではないため、人為的な配置か自然の混入かという基礎的な判断から、どこからどこまでがひとつのまとまりであるかという判断まで、その認定に難渋した。調査当初、景観上一体に形成されたように見えた配石遺構群だったが、石棺墓との重複状況の観察を進めて行く過程で、石棺墓の構築に伴う(一体となる、連続する)ものが多く、石棺墓の数だけこれを構築する時間(相)があるという認識に至る。さらに観察を進める中で、同一の石棺墓に伴う場合でも、壁石設置や脇石設置等の異なる構築段階に伴う配石遺構の事例を見るに当たり、「石棺墓構築に伴う(=新旧関係①前節第1項参照)」という基礎的な判断に留まらず、「石棺墓の構築段階の同時性(=新旧関係②)」や、同じ構築段階における「設置のタイミングの新旧(=新旧関係③)」の特定なしに、これらの構造体を理解することはできないという認識に至った。配石遺構の認定については前節第1項でも触れているが、以下で補足しておきたい。

配石遺構の認定(追記) まず縄文時代の遺物包含層(第III層)や遺構内堆積土の礫包含状況であるが、自然、人為を問わず、また基本層第V層(砂礫層)を掘り込むか否かに関わらず、多かれ少なかれ大小の礫を含んでいる。それまでの調査の傾向から、おおむね長軸10cm未満の小型礫には意図的な配置を示すケースがほとんどないことから、調査時は掘り拳より小さい礫については特殊な状況を示さない限り、混入礫(構築土に含んでいる礫)や裏込め礫(搬入礫ではあるが、意図して配置したものではない)と判断し、配石遺構の主たる構成礫からは除外し、個別の礫番号を付したり、石質鑑定や重量計測等は実施していない。このうえでこれ以外的大型礫の①設置層位、②配列や設置状況、③使用石材等を総合的に判断して最小のまとまりを捉えた(不整合や不連続部で別の遺構と認識した)。またまとまりどうしの⑤石の重なり方や裏込め状況、⑥位置関係や設置面標高等から同時性を否定することで新旧関係を捉えていった。この最小のまとまりが個々の「配石遺構」である(ただし29・35・44号配石のように意図的な配列や設置状況を認めたいものでも、周囲の礫を配石遺構としてグルーピングしていった結果残された「まとまり」を消極的に認定したケースもある)。当然、異なる様相を示す遺構が同時に造られるケースもあれば、逆に同一のまとまりの中でも調査者が感知できない時間的な不連続も想定され、認定した個々の配石遺構の構成礫すべての、時間的な連続性や不連続性を保証するものではない。しかしながら石棺墓との多様なあり方を見せる配石遺構群を捉えるため、調査時はもともと基礎的なまとまりの認定とその前後関係(=新旧関係③)を追究した。

配石遺構の種類 配石遺構には、A. 列石、B. 立石、C. 丸石(の集積)、D. 集石、E. 置石という複数の事例が確認され類型化できる配石遺構と、このいずれにも該当しない独特の構造をもつ他がある。多くの配石遺構が石棺墓に隣接ないしは近接しており、石棺墓の構築に伴うことを層位的に確認できた事例も少なくないが、直接新旧関係の認められない場合であっても、石棺墓群とは出土土器の様相

も類似することから、何らかの形で石棺墓に関連した構造物と見るのが自然である。以下に配石遺構A～Eの種別毎の概要を述べる。

列石 礎を列状に並べた配石遺構で、石棺墓A群で20基、B群で3基、その他の地区で1基の24基を検出した。石棺墓から独立したものはほとんどなく、石棺墓A群では石棺墓と同時に構築されているものが多数ある。石棺墓A群南域の10～12号配石は、この外側で遺構が途切れることから墓域を画す意図が、また新規に石棺墓を構築する際、既存の石棺墓との境界に配置した列石(33号配石や20号配石)には、墓と墓とを画す意図が読み取れる。石棺墓の壁石構築に伴う列石として、9号墓北壁に付設した32号配石、16号墓に西壁に付設した14・21号配石、8号墓東壁から派生した16号配石、14号墓壁石の一部に取り込んだ19号配石等の事例が、比較的新しい石棺墓で観察される。

石棺墓A群南域の東南部では、10・11号配石と12号配石の個々の列石が地山巨石を取り込んで、ひとつの大きな「石列」を形成したものもある。10号配石は層位的にも新しく、平面景観上ひとつの構造体に見える石列でも、部分的に付加されたり、あるいは(確認する手立ては無いが)取り除かれたりといった細かい改変が加えられた可能性もある。またこれらの列石の出土土器が、造墓行為の最終時期である牛ヶ沢式期よりも新しい蛭沢式期であることは、埋葬後も墓域として維持・管理されていたことを明瞭に示す。

立石 立石は石棺墓A群で7基確認した。51・59・60号配石は石棺墓に近接した単体の立石で、4号配石は後述の丸石と組み合う。3号配石の立石は集石の一部を構成し、丸石や石皿と対向する位置関係にある。36・63号配石は4号墓構築に伴う立石で、63号配石は唯一の石棺墓内の配石遺構である。石材は30cm程度の扁平礫(59号配石)から2tを超える巨石(60号配石)まで様々である。59号配石では石棒を、また51号配石では台石を転用している。

石棺墓群の西側に位置する60号配石は立石と呼ぶにはあまりに巨大で、石材は長軸170cm、重量2350kgの安山岩である。詳細は個別報告に譲るが、掘方底面に巨石の頂部が接する不安定な埋まり方で、重心から考えれば石が立った(地面に巨石が突き刺さった)ように見え、遺跡内のその他の巨石には見られない異様さがある。出土土器や重複状況から、時期は縄文時代中期中葉以降、末葉期までに形成されたと見られ、土石流による巨石の運搬作用も考慮されようが、当該時期の水上(2)遺跡の集落にこれを思わせる痕跡はない。60号配石の巨石については慎重な判断が必要で、人為との確証は欠くものの、石棺墓A群を構築するにあたりこの巨石が重要な意味合いを果たしていたことは確実である。

丸石 丸石を集積した配石遺構は石棺墓A群で3基(3～5号配石)を確認した。直径15～25cm程度の加工のない自然の丸石を、少ないもので4個、多いものでは7個集積している。3・4号配石では積み上げられた丸石の標高や層位差から、一定期間集積行為が継続されたことがわかっている。石材としては花崗閃緑岩の丸石が目立ち、明確に加工しているものは見られない。隣接する砂子瀬遺跡でも類似(「第1号配石遺構」第543集)が確認されている。

集石 集石としたものは19基(3・9・17・23～25・31・35・37・38・43・44・50・52・53・56・1002・1005・1007・1009号配石)で、坑状の掘方内に礫を集めた50号配石、同一規模の石材を敷き並べた53号配石、掘方内に異なる石材を段階的に集積した9号配石のような明瞭なものから、礫数個を集石させただけのものまでを含み、配石の中では認定基準がもっとも緩い。

置石 列石でもなく、また丸石や立石や集石でもないが、その配置に意図が読み取れたものを置石として、8基(28・39・40・48・54・61・62・64号配石)を認定した。石棺墓の傍らに大型礫を設置するもの(28・40・48・54・61号配石)と、遺物を設置するもの(62・64号配石)等がある。54号配石は500kgを超える緑色凝灰岩の大型角礫2個の置石で、S-1・2ともに7号墓の壁石設置時には埋められているが、S-2はその後も地表に部分的に露出していたようで、後続する6号墓の西壁にこの配石が取り込まれている。

また上記の5種には含まれず類型化困難なものに26号配石がある。この配石は蜆沢式期に既存の15号墓(大木10式併行期)の蓋石、脇石、壁石の一部を破壊、棺内堆積土の一部を掘り返し、石材を石棺墓としてのあるべき位置へ復旧させた特異な配石である。その他の石棺墓同様15号墓も、蓋石は設置後地表に露出していたと見られることから、不時の発見による旧状復旧というより、意図的な掘り返しと見た方が自然である。

表3 石棺墓・配石遺構の石材数量

使用石材 配石遺構として使用された石材の数量を石棺墓石材とともに出土地点別に表3に示した。数量は石棺墓の使用石材よりも圧倒的に多く、形状、規模、石質もバリエーションに富んでいる。石棺墓石材に板状礫、扁平礫が多用されるのに対し、

	石棺墓				配石遺構	合計
	壁石	脇石	蓋石	底石		
石棺墓A群	157	97	47	23	589	913
石棺墓B群	24	3		18	77	122
石棺墓C群	22	4				26
その他の地区					119	
合計	203	104	47	41	785	1180

配石遺構では厚みのある角礫も多用する。石質は凝灰岩、緑色凝灰岩、安山岩が多く、花崗閃緑岩も少量含む。石棺墓の主要な石材の一つである相馬安山岩はほとんど含まれない(図10)。

報告の方法について 以下では、配石遺構を遺構単位で個別に記載していくが、配石遺構が石棺墓と密接に関係する本遺跡の特徴を踏まえ、石棺墓と同時期に形成されたことが確実視される石棺墓A群域の配石遺構(第2項)とこれ以外(第3項)に区別して報告する。また本文は3号配石から4501号配石までの遺構番号順に記載するが、遺構図版や遺構写真については、遺構番号順では隣接遺構との関係性を示しづらく、同一図を繰り返して掲載する必要も生じるため、区割図を中心に隣接遺構との関係性を示し、石棺墓構築に伴う配石遺構については石棺墓単位で掲載した。

配石遺構に関する図版53～81について若干の解説をしておく。まず図53が石棺墓A群の配石遺構全体図である。北域は後世の削平もあり分布は疎らであるが、南域は配石遺構が石棺墓と密接に絡み合っている。南域での上下に重複した表示できない遺構は「石棺墓A群の配石遺構(下面)」に示した。また同図右下は次頁以降に掲載する配石遺構の平面区割範囲(区割図①～⑨)を示したものである。

区割図①～⑤(図54～60)は主に石棺墓A群北域の配石遺構で、同⑤～⑨(図61～74)は南域の配石遺構である。区割図⑥・⑦では特に石棺墓・配石遺構の密集度が著しく、図61・64～66は区割図⑥・⑦で示した遺構の土層断面図をセクションポイント順(E-E'～Y-Y')に掲載した。図67～72では、区割図⑥・⑦に位置する6・7号墓、8号墓、9号墓、15号墓、16号墓の6基の石棺墓と密接に関連する配石遺構を、石棺墓単位で取り上げた。「第9節 石棺墓」とは説明や遺構図版・写真図版が重複し煩雑なため、表8では図版別に示された遺構名とその新旧関係を明示したので併せて参照願いたい。図75・76では石棺墓A群の配石遺構の見通し図を用意した。図77～81は石棺墓A群以外の、その他の地区の配石遺構である。

第2項 石棺墓A群の配石遺構(図53～76)

石棺墓A群では52基の配石遺構を検出した(図53)。

3号配石(図63・65)

【位置・確認】石棺墓A群南側、ⅧM-82・83グリッドに位置する集石で、立石(S-1)や丸石の集積、石皿を含んでいる。南側を除く三方を石棺墓や配石遺構と接し、北側は6号墓の脇石と平面景観上区分できず連続する。一部は同墓の脇石も含まれているとみられる。なお東側の15・21・14号配石とは石の設置方法や配置状況(長軸を連ねるような列状構成を取り、石は縦置き)により区別し、西側の44号配石とは集石が途切れる箇所と区分した。

【重複・関連遺構】北側は6号墓と連続し、構成礎が脇石上に設置される箇所もある。図650-0'より層位的には壁石設置以後で、全体的に脇石よりも設置面標高が高いことから、6号墓と同時かそれ以降と見られる。また14・21号配石が本遺構を避けるように南へ逸れる状況や21号配石が本遺構で途切れるあり方から、これらの配石遺構よりも古い可能性が考えられる。ただし3配-21の石皿が21号配石にもたれかかる様子もうかがえ、部分的な石材の付加や再配置の可能性のほか、遺構のまとまりを正しく捉えられていない可能性がある。

このほか51号配石は本遺構の下部に位置し、本遺構に完全に覆われている。

【構造】東西2.0×南北1.5mの範囲に約30点の石を集積した配石遺構である。集石内には立石(S-1)や丸石の集積(S-24・25・27～29・31)、石皿(S-21・図91-1)を含み、丸石を中央に立石と石皿を東西に対置させたようにも見える(写真図版327)。立石は角柱状の石材が北西方向に傾きS-6へ倒れかかっている。丸石は直径15～20cm程度の自然石6点を集積したもので、石皿下部にも3点(S-27～29)が見られる。層位や設置面標高から、S-24・25の設置時にはS-31が埋められていたものと見られる(図650-0')。また同様にS-27～29もS-24・25の設置面よりも低く、一時の集積行為でない可能性が高い。S-24・25・21が相対的に新しく、S-31・27・28は古い。

【使用石材】立石は長軸80cm、67kgの緑色凝灰岩の太い柱状礎で本配石ではもっとも大型の石材である。丸石は直径20cm程度のものが集められるが、S-28はやや小振りである。石質は緑色凝灰岩製を主体とし、少量の凝灰岩を含んでいる。後述の4号配石のような石質や大きさの統一性はなく、石材自体も小振りである。

【出土遺物】直下層からは榎林式が、構築土からは大木10式併行にあたる土器片が出土した。出土土器の最新時期は大木10式併行期で、後期初頭期のものは含まれない。

【小結】6号墓脇石と連続することから、同墓と関連が深いものと見られる。時期は、層位的な状況より6号墓(大木10式併行期)の脇石設置以降と見られ、14・15・21号配石との関係から16号墓(大木10式併行期)に先行する可能性もある。出土土器の最新時期も大木10式併行期であることから、時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

4号配石(図61・62・69・75)

【位置・確認】石棺墓A群南東、ⅧM-82グリッドに位置する。9号墓南側の石棺墓や配石遺構の密集範囲に位置するが、立石とそこに集積した丸石を意図的なまとまりと捉え、配石遺構の認定をした。9号墓の構築に伴う配石遺構で、前節図33で示した9号墓構築段階の第4段階に位置づけられる。

【重複・関連遺構】北側で9号墓、南側で17・18号配石、東側で57号配石と隣接する。図61 I-I'より立石S-1と丸石S-7は57号配石と同時に設置されている。

【構造】立石(S-1)と6点の丸石からなる。立石は長軸60cm、40kgの緑色凝灰岩の角礫を斜めに設置している。下部は盛土(57号配石構築土)により固定され、上半は地表に露出していたためか、風化しざらついている。①立石とS-7、②S-5・6、③S-2～4とで層位と設置面標高が異なる。下位の石が上位のもので完全に覆われた部分もあり、おそらくは一次ではなく、期間を変えて数回にわたって集積されたものと見られる。

【使用石材】丸石はいずれも直径20cm前後の花崗閃緑岩の自然石である。3号配石や5号配石に較べ石材が大きく、大きさ・石質を揃えている。

【出土遺物】関連土から縄文時代中期末葉～後期初頭の土器片が僅かに出土した。

【小結】9号墓構築に伴う配石遺構で、立石と丸石の集積からなる。立石S-1と丸石S-7は9号墓の造墓に伴い57号配石と同時に設置されているが、丸石の集積は一次でなく、ある期間数度にわたって継続した可能性が高い。9号墓(牛ヶ沢式期)に伴う層位的な状況から、構築時期は縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期で、上部の配石は、14号墓以降に追加されたものである。

5号配石(図57)

【位置・確認】石棺墓A群西側、ⅧO-81グリッドで丸石4個の集石を確認した。

【重複・関連遺構】南側に60号配石、北側に39・6号配石が隣接する。後二者との切り合い関係はなく、同一の土層に設置されていることから、明確な時期差はないものと見られる。また図57C-C'より60号配石とは、本配石を設置した土層が巨石を直接固定した土層を覆うことから、第60号配石よりも新しい。

【構造】4点の丸石を集積した配石で、南北に広がる構築土を伴っている。

【使用石材】直径10～15cmの丸石で4号配石の石材よりも小振りである。石質は花崗閃緑岩2点と緑色凝灰岩2点である。

【出土遺物】下部の構築土から蛭沢式の土器片が出土している。

【小結】墓域西側の丸石を集積した配石で、層位的には6・39号配石と同一の盛土上に位置し、60号配石よりも新しい。時期は構築土出土土器から蛭沢式期以降と見られ、石棺墓の造墓よりも新しい段階の配石遺構と見られる。

6号配石(図57)

【位置・確認】石棺墓A群の北西部、ⅧP-80・81グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】南側で39号配石や5号配石が隣接する。層位的に新旧関係が見られず同じ時期と思われる。

【構造】長円礫の扁平礫9個を、長軸方向を揃えて「コ」の字状に並べている。下部の土層は本配石設置の際の盛土とみられ、5・39号配石と同時に設置されている。

【使用石材】30cm前後の同規模の石材を用いる。石質は緑色凝灰岩を主体に、花崗閃緑岩、凝灰岩を各1点含む。

【**小結**】6・39号配石と同一の盛土上に位置し、60号配石よりも新しい。時期は構築土出土器から蛭沢式期以降と見られ、石棺墓の造墓よりも新しい段階の配石遺構と見られる。

9号配石(図63・68)

【**位置・確認**】石棺墓A群の東側、ⅧN-84グリッドに位置し、8号墓の蓋石と同一平面上で上面配石を検出した。64号配石とも同一面である。なお平面的には北側に1号墓が位置するが、層的には本配石よりも古く無関係である。

【**重複・関連遺構**】8号墓と15号墓の間に位置し、北側には64号配石が隣接する。8号墓の西側盛土を掘り込むことから、同墓の壁石の設置以降である。蓋石設置との前後関係は明らかでないが、本遺構の上面配石は8号墓の蓋石と石材や配置状況が類似することから同墓に伴う可能性もある。

【**構造**】大きく掘り込まれた土坑の内部に3段階の工程で異なる石材を設置した配石である。土坑は150×90cmの南北に長い楕円形で、底面が平坦にはならない断面V字状の掘り込みである。第1段階の配石は、長軸90cm、短軸60cmの、凝灰岩の大型板状礫を8号墓に寄せるようにして底面へ設置する。次にこの直上に、第1段階と同質の石材を細かく砕き断片を敷詰める(第2段階)。さらにその上部を覆うように、円礫や角礫、板状礫などの多様な石材を土砂とともに雑然と設置する(第3段階)。第2・3段階の配石は土坑内を塞ぐように詰め込まれ、特に第3段階ではS-3・14・15等縦置きなのが目立つ。第1層はぼそぼそとした黒色の粘質土で、木炭などの炭化物粒が多量に含まれていたが、少量の土器片を除いて出土遺物はない。

【**使用石材**】各段階で異なる石材を用いている。第1・2段階は同質の凝灰岩であるが、大型の一枚岩と破片という形状の差異がある。第3段階は20～30cm程度の楕円礫や角礫のほか、板状礫を少量含んでいる。

【**出土遺物**】堆積土中からは、細かな木炭等多量の炭化物片を検出した。出土遺物は多くないが、土坑内底面付近より、牛ヶ沢式に比定される土器片を検出した。

【**小結**】土坑状の掘り込みと内部へ種類の異なる石材を3段階の工程で設置した特殊な集石状の配石遺構である。第1・2段階の配石は、最終景観としては第3段階の配石で完全に覆われる。多層に積み重ねられた配石の機能は不明であるが、掘方が土坑状である点と堆積土に多量の木炭が含まれていた点は注意される。8号墓盛土(壁石設置時の裏込土)を掘り込む層位的な状況から、時期は同墓の壁石設置以降で、検出面を同じくする64号配石も大きな時間差はないものと思われる。底面出土器とも整合的で、時期は8号墓(牛ヶ沢式期)以降である。

10号配石(図63・66・68)

【**位置・確認**】石棺墓A群の東端、ⅧN-84・85グリッドに位置する。

【**重複・関連遺構**】11号配石や13号配石等と連続し、平面景観上はA群南東部のひとつの大きな石列を構成している。本来は区別されない一連の配石である可能性もあるが、11号配石上に本配石の石材が乗り、石の設置状況の明瞭な新旧関係があること、石材の下部に特徴的な明るい土(図70Y-Y'第1層、基本層序第II層に類似)が入り込み、その他の配石とは別段階と捉えられること等から、図62に示した7点の石材を独立させ本配石遺構の構成礫とした。8号墓との位置関係から同墓とは何らかの形で関

連していた可能性は高いが、層的には11号配石や8号墓の壁石裏込土よりも新しい。また前述の明るい土層は、東側で隣接するSI5501（縄文時代後期前葉蛭沢式期）の炉跡を覆う堆積土に類似する。同定はかなわなかったが、最新の石棺墓群よりも一段階新しい可能性がある。

【構造】大型の礎7点からなる列石で、11号配石とは平面上連続する。盛土により固定する箇所と盛土で固定せず既存の配石遺構の石材に載せるだけの箇所がある。

【使用石材】連続する11号配石とは規模の異なる大型の石材が用いられる。

【出土遺物】土器は出土していない。

【小結】出土土器からの時期は不明だが、11号配石との重複状況から蛭沢式期以降と見られ、石棺墓A群ではもっとも新しい遺構のひとつである。

11号配石(図63・66・75-①)

【位置・確認】石棺墓A群の南東、ⅧM・N-84グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】北側で10号配石が連続するほか、西側は地山の巨石と接する地点で途切れる。10号配石とは平面上連続するが、前述の層位的状況より本遺構の方が新しい。

【構造】大型の土坑状の掘方と図62で着色した比較的大型の石材10点以上の列石からなる。列石周囲には裏込めに小礎が多数確認される。東側は10号配石と接して収束し、西側は地山の巨石まで接続させる。巨石を挟んださらに西側もこれに連なるように列石(12号配石)が続くことから、自然の巨石を景観に取り込んだ、10号配石から12号配石まで連続する石列の一部であった可能性もある。列石は掘方北側の中へ上層部に、大型礎を斜めに差し込むように並べている(写真図版333)。石は地中深くに埋めこまれ、地表に露出するのは上方の一部である。

掘方は240×240、深さ90cm程度の楕円形の土坑状である。列石範囲に見合わぬ規模であることから、列石以前の別施設の可能性もある。堆積土中央には、図66V-V'第9～11層を第6層が切り込む、掘り返しの形跡があり、第6層上面には大小の礎を集積させた面がある。

【使用石材】列石部の石材7点は長軸50～70cm程度と、その他のものより大型で縦置きにしたものが多い。石質に明瞭な選択性はうかがえず、緑色凝灰岩、凝灰岩、花崗閃緑岩、安山岩など多種の石材が用いられる。

【出土遺物】掘方から、蛭沢式を中心に最花・大木10式併行の土器片が出土した。切斷壺形土器の破片(図86-14)も含む。

【小結】大型の土坑状掘方をもつ列石で、12号配石とは平面景観上一連の石列に見える。掘方は列石に見合わぬ大きさで、堆積土の掘り返しや中位面での礎集積を伴い、列石以前の別施設の可能性もあるが、掘方と列石部での出土土器による時期差はない。出土土器より時期は縄文時代後期前葉の蛭沢式期以降と考えられる。

12号配石(図63・72・75)

【位置・確認】石棺墓A群の南側、ⅧL・M-84にかけて分布する列状の配石遺構である。

【重複・関連遺構】48号配石と上下で重複する。東側は地山の巨石へ接する地点で収束する。

【構造】大小礎16点からなる列石である。石材は北側が小さく南側が大きい。北側(S-1～5)は明確な

掘方をほとんど持たず、設置部のみ掘り込んで石を固定している。一方南側(S-10～13)は掘り込みをもたず直接地山に置かれている。

【使用石材】凝灰岩、緑色凝灰岩の大小礫が使用され、石質や規模に選択性は見られない。

【出土遺物】掘方から、円筒下層d2・大木10式併行・牛ヶ沢・蛭沢式の土器片が出土した。

【小結】石棺墓A群南域でもっとも南側に位置する列石で、地山巨石を挟んで東側には11号配石、10号配石と列石が連なる。以南で同時期の遺構分布が途切れることから、墓域を画した石列の一部と見られる。時期は出土土器から縄文時代後期前葉の蛭沢式期と考えられる。

13号配石(図63・66・72)

【位置・確認】石棺墓A群の東側、ⅧN-83・84グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】8号墓の南側、16号配石と33号配石からなる一連の石列の南側に添うように並べられた列石である。図66のX-X'断面の層位的な状況、並びにW-W'断面の設置面標高より16号配石(と同時の33号配石)よりも新しい。

【構造】長軸40cm前後の大型の円礫や角礫8個からなる、東西方向に伸びる列石で、設置状況は縦置きと横置きの両方があるが、いずれも石を立て並べている。16・33号配石からなる石列の南側に添わせることで、本配石部のみ石列が二重となる。

【使用石材】大型の円礫や角礫からなる。S-5・6は花崗閃緑岩だが、石材の選択性は乏しい。

【出土遺物】土器は大木10式併行と思われる地文のみの胴部破片が少量出土した。

【小結】16・33号配石からなる東西方向の石列に付加された列石である。時期決定遺物に乏しく、土器からの時期比定は困難である。層位的な状況からは16号配石(牛ヶ沢式期)以降と考えられる。

14号配石(図63・65・72)

【位置・確認】石棺墓A群南側、ⅧM-83グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】図65R-R'より16号墓の西壁設置に伴う配石遺構である。また北側に隣接した15・21号配石とは間隔をほとんど空けず三列が並走し、平面景観上、三列一体の石列のようになっている。土層堆積状況および設置面の観察(図66P-P'・Q-Q')では、15・21号配石よりも設置面が低く、また層位的にも古い。16号墓の蓋石後に設置される15号配石の所見とも整合する。

【構造】11点の大小礫からなる列石で北東から南西方向へ約3.0m延びている。東側の16号墓側では15・21号配石と間隔なく密接するが、西へ向かうにつれ15号配石とともに3号配石を避けるように南側へ逸れる。礫の設置状況は16号墓側では縦置きで、南西部では横置きである。

【使用石材】石材は形状、大きさに統一性がないが、15・21号配石と比べても大型の石材を多用している。石質は凝灰岩が多い。

【出土遺物】関連土から、大木10式併行の土器片が出土した。

【小結】15・21号配石とは平面景観上一体の石列で、いずれも16号墓構築に伴う配石遺構である。設置段階としては16号墓の壁石裏込めに伴い、蓋石設置後の15号配石よりも古い。3号配石を避けるように逸れた平面の状況から、本配石設置時にはすでに3号配石が存在していた可能性もある。時期は出土土器より縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

15号配石(図63・65・72・75)

【位置・確認】石棺墓A群南側、ⅧM-83グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】北側の21号配石、南側の14号配石と東西方向に並走し、平面景観上三列一体の石列となっている。土層堆積状況および石の重なり方などから本配石がもっとも新しく、南北に並列した14・21号配石の合間に本配石を新規に追加しており、東側では一部14号配石に載る箇所もある。層位的には16号墓蓋石上部に若干土盛りをして石を設置する(15号配石>16号墓蓋石)。西側の3号配石を構成する石皿(S-21)が本配石にもたれかかる状況も見られるものの、全体的な配列状況は3号配石を避けるかのように南側へ逸れていくため、決定的な新旧関係はわからない。

【構造】14点の大小礫からなる東西方向の列石で総長4.0mである。既存の14号配石と21号配石の隙間に設置された配石で、東側は縦置き、西側は平置きである。

【使用石材】石材は形状、大きさ、石質ともに統一性がない。

【出土遺物】掘方から榎林式、盛土から大木10式併行の土器片が出土した。

【小結】14・21号配石間の列石で、新旧関係はあるがいずれも16号墓に関連する配石である。出土土器の最新時期は大木10式併行で、層位的には16号墓(大木10式併行期)の蓋石設置以降と考えられる。

16号配石(図63・66・68・75)

【位置・確認】石棺墓A群の南東側、ⅧN-84グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】下記の土層堆積状況や石の配列、設置状況から8号墓の壁石設置に伴う。まず図66-V'の土層堆積状況から本配石S-3が8号墓壁石(S-36)裏込めとともに設置されている。また石の配列や設置状況は、8号墓の壁石S-33は、壁石S-34よりも本配石へと接続するように設置される(写真図版332)。8号墓とは切り合い関係もなく設置面標高も同じことから、8号墓の壁石設置に伴うものと判断される。また西側で隣接する33号配石とは、使用石材の特徴および設置状況の相違により区別したが、層位や設置面での相違はなく、本来は連続する一連の石列だった可能性がある。

【構造】S-1~6まで6個の扁平礫からなる総長4.0mの弧状の列石である。8号墓の壁石設置に伴い、平面景観上は同墓の壁石から派生するように西側へ延びている。①扁平礫、②縦置き、③使用石材の三点において、西側に隣接する33号配石とは区別される。

【使用石材】いずれも長軸40~50cm程度の扁平の礫で、6点中4点が花崗閃緑岩である。

【出土遺物】掘方及び検出面から大木10式併行の土器片が出土した。

【小結】8号墓(牛ヶ沢式期)の壁石設置に伴う列石で、33号配石とは使用石材の形状、石質、設置状況の相違はあるが、層位や設置面標高に違いがなく、一連の石列であった可能性がある。

17号配石(図62・64)

【位置・確認】石棺墓A群の南西端、ⅧM-82グリッドに位置する。18・19号配石とともに14号墓を囲う配石の一部で、コの字の列状構成をなす18号配石の、外側にある礫を一括した。

【重複・関連遺構】18・19号配石とともに、14号墓をコの字状に囲う配石の一部で、図64K-K'より14号墓壁石裏込めと同時期に設置されている。設置面標高は18号配石よりも本配石の方が20cm以上高い(写真図版326)ことから、ともに14号墓壁石設置段階には伴うが、設置のタイミングとしては本配石の

方が新しく、18号配石の外側に本配石を付加した様子がうかがえる。

【構造】18号配石の外側に位置する集石で、大型礫7点で構成される。

【使用石材】石質は緑色凝灰岩と凝灰岩の二種からなるが、形状、規模ともに統一性は見られない。S-1は325kgの大型塊状の石材である。

【出土遺物】掘方等から、円筒下層d2・最花・牛ヶ沢式と思われる破片が出土した。

【小結】18・19号配石とともに14号墓を囲む列石の一部で同墓壁石裏込めに伴う。18号配石とは設置段階が同じだが、設置時期は本配石が新しい。時期は層位的な状況から14号墓(牛ヶ沢式期)以降と考えられる。

18号配石(図62・64・75-①・76-⑨・⑩)

【位置・確認】石棺墓A群の南西端、ⅧM-81・82グリッドに位置する。17・19号配石とともに14号墓を囲う石列の一部で、東側を除く三方をコの字状に囲む。本配石より外側の集石を17号配石、本配石S-2から派生し内側をL字状に囲む列石を19号配石とした。

【重複・関連遺構】17・19号配石とともに14号墓を囲む配石で、14号墓の構築に伴う。図64K-K'から設置段階は、いずれの配石も14号墓壁石裏込めと同時に見られるが、隣接する17号配石よりも設置面標高が20cm以上低く、設置時期は先行するものと見られる。

【構造】17・19号配石とともに14号墓をコの字状に囲む列石で、東側を除く三方を囲んでいる。16点の大小礫で構成される列石で、S-1〜6が南列、S-7〜19が西列、S-10〜16が北列となっており、北列は4号配石や32号配石等の9号墓関連配石に接続する。規模は南列が2.8m、西列1.8mである。

【使用石材】緑色凝灰岩や凝灰岩の大型角礫が多用され、南列や西列には100kgを優に越える大型の石材が用いられる。形状や規模、石質など統一性に乏しいが、S-1・2・8・9などでは石材の平坦面を14号墓側に向ける意識が見られる。最重量の石材はS-1で327kgである。

【出土遺物】掘方及び検出面から、大木10式併行の土器片が出土した。

【小結】17・19号配石とともに14号墓を囲む列石で、外側に17号配石が付属し、内側は本配石S-2から19号配石が派生する。出土土器は大木10式併行期までのものしか出土していないが、層位的な状況から14号墓(牛ヶ沢式期)に伴うと考えられる。

19号配石(図62・64・76-⑨・⑩)

【位置・確認】石棺墓A群の南西端、ⅧM-81・82グリッドに位置する。17・18号配石とともに14号墓を囲う列石の一部で、18号配石を基軸として、同配石S-2から派生するように14号墓の外側をコの字状に囲む。

【重複・関連遺構】17・18号配石とともに14号墓を囲む配石で、構築段階としては14号墓の構築を契機としている。18号配石とは、設置面の標高差はなく大きな時間差は認められないが、本配石S-1が18号配石S-2から派生する配列状況から、設置のタイミングとしては18号配石よりも新しい可能性が高い。また本配石の石材が14号墓壁石の下位に潜り込む状況から、14号墓壁石設置以前に本配石は設置されている。

【構造】18号配石S-2を基点とし、大小礫10点をコの字状に配した列石で、S-1は南列、S-2は西列、

S-3以降が北列であるが、S-1とS-2からは14号墓の壁石が派生し、同墓の壁石として共有される(図34の14号墓参照)。S-1・2はとりわけ大きな石材が選択される。

【使用石材】凝灰岩が多用される。14号墓の壁石として共有されるS-1・2は多孔質の凝灰岩で石質を揃えている。最大の石材はS-2で271kgを計る。

【出土遺物】掘方等から大木10式併行～牛ヶ沢式と思われる土器片が出土した。

【小結】17・18号配石とともに14号墓を囲む配石の一つで、もともと内側に位置する。18号配石から派生するように接続し、その内側をL字状に囲んでいる。S-1、S-2はそれぞれ14号墓の南壁、西壁として共有されている。層位的には14号墓(牛ヶ沢式期)の壁石設置に伴うが、石の配置状況から18号配石→19号配石→14号墓壁石という設置順序が想定される。

20号配石(図61・62)

【位置・確認】石棺墓A群の中央南西寄り、ⅧN-82グリッドに位置する。礎3点を東西方向に並べた配石で、平置き設置状況は人為性に乏しいが、隣り合う石棺墓の境界に列石が配されるケースが多いことから、本配石も列石の配石遺構と捉えた。調査当初は西側の57号配石S-77(図61G-G')を含めて居たが、設置面が上位であること、相馬安山岩を縦置きするあり方は57号配石S-1との関連で捉えた方が理解しやすいことから、本配石遺構からは除外した。

【重複・関連遺構】北側に5号墓、南側に7号墓が隣接する。5号墓S-24との直接的な新旧関係から5号墓よりも、また5号墓以前の7号墓よりも新しい。54号配石上に位置しており、本配石設置後の54号配石は地中に埋没したものと見られる。また層位や石どうしの重なり方から、9号墓の東側壁石設置に伴う57号配石よりも古く、5・7号墓→20号配石→9号墓(57号配石)の新旧関係が成立する。

【構造】礎3点からなる東西方向の短い列石で、S-2→S-3→S-4の順序で重ねて並べている。

【使用石材】3点とも多孔質の凝灰岩で石材を揃えている。

【出土遺物】掘方等から大木10式併行～牛ヶ沢式と思われる破片が出土した。

【小結】5号墓と7号墓の境界にある列石で、新旧関係は両石棺墓よりも新しい。出土遺物の時期は両石棺墓よりもやや新しい牛ヶ沢式期と考えられる。

21号配石(図63・65・75-④)

【位置・確認】石棺墓A群南域、ⅧM-83グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】北側で33号配石、南側で15・14号配石と隣接し、本配石を含め四列の列石が並ぶ。いずれも16号墓構築に伴うが、石の設置状況では、南三列(14・15・21号配石)の縦置きに対し、33号配石は平置きで景観上区別される。また設置段階としては、14号配石は壁石設置に伴い、本配石と33号配石は壁石設置～蓋石設置以前だが、図65P-P'より本配石>33号配石の構築順序、また15号配石は蓋石設置後である。上記を整理すると「16号墓壁石(=14号配石)→33号配石→21号配石→脇石→蓋石→15号配石」の構築順序となる。

【構造】7点の礎から構成される東西方向の列石である。新旧関係の把握から、壁石設置に伴う14号配石と33号配石の二列の列石との空閑地に、16号墓の脇石設置以前に付加された配石である。

【使用石材】14・15号配石に比較し小型の石材で構成される。

【**出土遺物**】土器は大木10式併行期の土器が出土しており、後期初頭の資料は含まれていない。

【**小結**】14・15・33号配石とともに16号墓構築に伴う配石遺構で、14・33号配石は壁石の設置、本配石は以降脇石設置以前、15号配石は蓋石設置後という順序が想定される。出土土器の時期はいずれも大木10式併行期で、これより新しい遺物を含まない。本遺構出土土器は少量で、このみでの時期判断は困難であるが、16号墓とこれに伴う配石遺構のいずれでも出土土器の最新時期が大木10式併行期までに収まり、これ以降の遺物を含まないことは重要である。この出土土器の様相からも、16号墓と関連配石遺構群の時期は、大木10式併行期の可能性が高い。

22号配石(図74)

【**位置・確認**】石棺墓A群の南端、ⅧL-82グリッドに位置する。周囲より大きい角礫がやや散発的に列状に並んでいた。石棺墓群からやや離れ、明瞭な盛土による固定等も見られず、配置状況も人為性に乏しいが、一部の下部に土坑状の掘方をもつことから配石遺構と捉えた。当初列石捉えた中に地山礫も含まれていることから、土坑状の掘り込み上部に礫が自然に堆積したような可能性もあるが、下部の掘方からは石棺墓と同時期の遺物も出土することから、配石遺構として報告する。

【**重複・関連遺構**】石棺墓分布域よりやや離れており重複遺構はない。

【**構造**】礫15点が南北方向に散発的に並んだ列石で、盛土はほとんど伴わない。S-1〜5とS-7〜11の下部には土坑状の掘り込みを伴うが、上部の配石遺構と関係のない別遺構の可能性もある。礫は形状、規模、配置状況ともに統一性はないが、周辺の自然礫より相対的に大型である。

【**使用石材**】1点ごとの計測や石質同定は行っていない。石材は角礫状のもので構成され、扁平なものは見られない。石質は緑色凝灰岩と凝灰岩からなり、相馬安山岩や花園閃緑岩など他の特徴的な石材は含まれていない。

【**出土遺物**】掘方から最花式、大木10式併行、牛ヶ沢式の破片が出土した。

【**小結**】石棺墓A群の最南端にある列状の配石遺構で、石材の選択性、配置状況等明瞭な人為性に乏しいが、下部の掘り込みからは牛ヶ沢式の土器が出土しており、時期はこれ以降である。

23号配石(図63・68)

【**位置・確認**】石棺墓A群東側、ⅧN-84グリッドに位置する。大型礫の列石である10号配石と、8号墓に伴い明瞭な配列をなす16号配石とは区別される小型礫の列状の集石を23号配石とした。8号墓の蓋石と同じ検出面で、意図的な設置状況は確認できない。10号配石の裏込めや、余った石材を集積した可能性が高い。

【**重複・関連遺構**】16号配石と10号配石の二列の列石の間に位置する。出土層位は8号墓蓋石付近で、16号配石よりは新しい。10号配石の裏込め的な様相も見られ、10号配石を契機とした可能性もある。

【**構造**】小型礫6点の集石で、礫を立てる、並べる等の人為的な様相はうかがえない。明瞭な盛土(裏込め)も伴わず、既存の盛土上に雑然と集められた状況に近い。

【**使用石材**】緑色凝灰岩3点、凝灰岩、安山岩、相馬安山岩各1点で、石材の統一性はない。

【**出土遺物**】裏込めをほとんど伴わず、出土遺物はない。

【**小結**】16号配石でも10号配石でもなく、これらとは設置時期が独立する配石遺構で、裏込めを伴わず

明瞭な人為性に乏しい。出土遺物から時期は不明だが、層位的には10号配石(蛭沢式期以降)と同じかこれ以降で、石棺墓A群の中でもっとも新しい配石遺構のひとつである。

24号配石(図55・56)

【位置・確認】石棺墓A群の中央北寄り、Ⅶ0-84グリッドに位置する。やや小型の垂円礫2点を集めた配石で、周囲には礫がなく隣接する4号墓の裏込め礫とも思われにくいこと、浅い皿状の掘り込みを伴い、特徴的な明褐色土で裏込めされている等の状況から配石遺構と捉えた。

【重複・関連遺構】2号墓と4号墓の間の4号墓寄りに位置する。浅い皿状の掘方に特徴的な明褐色土の裏込めを伴い4号墓壁石に接する。また2号墓よりも新しい。配石上面は4号墓壁石S-17より低い位置にあり、同墓がその他の石棺墓と同様に壁石の上部まで裏込められた場合、本配石は土中に埋没し、構築後地表に露出していたその他多くの配石遺構群とは異なるあり方である。同墓との新旧関係は、4号墓がこれ以上の裏込めを伴わなかった場合、または本配石が土中に埋没するのを承知で設置された場合、4号墓の壁石設置と同時にであろうし、4号墓が構築後に改変(現在の面まで削平)されたのであれば4号墓構築以降の新しい時期となる。

【構造】長軸30cm程度のやや小振りな垂円礫2点の集石で、浅い皿状の掘方と明褐色の明瞭な裏込めを伴っている。

【使用石材】長軸30cm程度の緑色凝灰岩2点である。

【出土遺物】縄文時代中期後葉以降の縄文地文のみの土器片しかなく、時期比定は困難である。

【小結】4号墓の壁石に隣接し、2号墓よりも新しい、4号墓との関係は、4号墓の壁石設置に伴う可能性と、4号墓構築後の改変に伴う可能性の両方がある。前者ならば4号墓の構築時期を示す縄文時代中期後葉期、後者ならば改変時期の可能性のある縄文時代後期前葉期である。

25号配石(図55・56)

【位置・確認】石棺墓A群北側、ⅦP-83グリッドに位置し、13号墓の南東隅に隣接する。

【重複・関連遺構】隣接する13号墓を契機に構築された集石で、同墓の掘方および壁石裏込め土との関係から設置時期は壁石設置以降である。

【構造】13号墓壁石上端部の隣接地に、扁平礫3点を平置きした集石である。

【使用石材】長軸30～40cm程度の扁平礫を用いる。石質は花崗閃緑岩、凝灰岩、緑色凝灰岩が各1点である。

【出土遺物】出土土器は見られず、石材はいずれも自然石である。

【小結】13号墓(大木10式併行期)に伴う配石遺構で土器は出土していない。12号墓に伴う62号配石とは、石棺墓との位置関係に共通性がある。

26号配石(図63・71・75-①・76-①)

【位置・確認】石棺墓A群の中央、ⅦN-83グリッドに位置する。15号墓周辺に色調の異なる特徴的な土層と、大型の礫が雑然と分布する箇所があり、トレンチを入れながら精査したところ、土坑状の掘方をもつ配石遺構であるとの認識に至った。隣接する15号墓の石材出土状況や層位的な状況から、15号

墓の脇石と蓋石の一部は改変を受けており、本配石構築の際にあるべき位置へ置かれた(復旧した)ものと判明した。15号墓(大木10式併行期)を後世(後期前葉蛭沢式期)に、何らかの形で改変した事例である。

【重複・関連遺構】南側は15号墓、北側は35号配石、西側は7号墓や31号配石と隣接する。図71A-A'から35号配石よりも古く、7号墓は石材配置の改変は受けていないが、盛土の一部が切り込まれる状況から7号墓よりも新しい。また以下に記す15号墓の検出状況から、同墓よりも新しい。①本配石掘方が15号墓北側壁石の一部まで掘り込む(S-14はこの際倒された壁石石材である可能性が高い)。②本配石関連土が15号墓西側の棺内堆積土上部に堆積する。③15号墓西側の蓋石や脇石下部にまで入り込む。

【構造】不整な楕円形の土坑状掘方と不規則に配置された27個の礫で構成される。構成土と包含礫は南側の15号墓上部まで及んでいる(図71A-A'・B-B')。土層の堆積状況と石の配置状況から、図71に示すように少なくとも2段階以上の工程を経ているものと思われる。土坑内の埋土は、やや明るい第2層と黒みの強い第3層の二層からなり、礫設置面も第3層下面のものと、同層の上～中面に設置されるものがある。第3層下面中の礫は6点で、S-1は立石状に縦置きされ(図76見直し⑩)、その他のものは平置きである。一方、第3層中～上面の礫は22点で、石材を立石(S-1)周辺に集めているようにも見える。意図的な配置もうかがえ、S-29・30は15号墓の蓋石の位置に、またS-27・28は同墓の脇石の位置にあり、それぞれ15号墓の石棺墓構造を踏まえ、蓋石と脇石をあるべき位置に復旧している。このほか第3層下面中のS-14(花崗閃緑岩)は15号墓の壁石が倒れ込んだかのような位置で出土する。

これらの配石石材中に石材1(S-12とS-28)と石材2(S-15とS-29)での接合関係がある。石材1は長軸53cm、58kgの花崗閃緑岩の扁平礫で、同一層中での接合資料である。一方石材2は長軸82cm、96.5kgの相馬安山岩の板状礫で、第3層下面と第3層上～中面の異なる段階での接合資料である。

【使用石材】多様な石材が用いられるが、S-1・12・14・21・28等大型の花崗閃緑岩や相馬安山岩や凝灰岩の比較的大型の石材が多い。前述のように、花崗閃緑岩(石材1)と相馬安山岩(石材2)が分割され、配石の石材として使用されている。

【出土遺物】26号配石の構築土からは比較的多数の土器片が出土している。大木10式併行、牛ヶ沢式のほか、第2層中で後期前葉の蛭沢式も出土している。

【小結】15号墓には伴わないが、同墓と強く関係した配石遺構で、少なくとも15号墓は、壁石、脇石、蓋石の一部と棺内堆積土が後世(26号配石構築と同時にそれ以前)に手を加えられ(壁石は倒され、蓋石や脇石は動かされ、棺内堆積土も上部を削られ、蓋石や脇石は旧状に戻され)ている。新規の石棺墓が既存の石棺墓を認識しこれを傷めないように構築されている中で、明瞭な遺構改変の事例として特筆される。少量であるが構築土中から蛭沢式が出土しており、大木10式併行期の石棺墓を、蛭沢式期に改変した事例と考えられる。

27号配石(図54・56)

【位置・確認】石棺墓A群北端、ⅧQ-82グリッドに位置する。配置状況や石材選択性に明瞭な人為性は読み取れないが、周囲には同様の大型礫が分布せず、基盤層も岩盤層であることから、自然礫とも考えがたく配石遺構と捉えた。

【重複・関連遺構】東側に11・12号墓、28号配石が隣接する。12号墓との切り合い関係は掴めなかったが、

同墓の構築に伴う28号配石とは平面上連続し、かつ周囲の土層も類似することから、大きな時間差はなかったものと思われる。

【構造】大小礫約20点からなる南北方向に延びる列石で、礫設置面にはばらつきがあり、設置状況も平置きが多く、明瞭な人為性に乏しい。北側は地山(岩盤)傾斜に添って下がっている。礫下層の堆積土は12号墓の壁石裏込土と類似する。

【使用石材】石材の形状、規模に統一性はない。石質は緑色凝灰岩と凝灰岩で大半が占められ、花崗閃緑岩、安山岩、玄武岩を少量含む。

【出土遺物】出土土器は見られない。

【小結】土層や礫設置状況の連続性から、12号墓(大木10式併行期)を契機に構築された配石と思われるが、直接的な重複関係はなく、時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行以降としておく。

28号配石(図54・56)

【位置・確認】石棺墓A群北端、ⅦQ-83グリッドに位置する。大型の凝灰岩1点であるが、石棺墓の構築に伴うことが明らかで、周辺は岩盤層で地山に大型凝灰岩は見られないこと、54号配石など石棺墓傍らに大型礫を設置する例が見られること等に人為性を読み、配石遺構と捉えた。

【重複・関連遺構】12号墓の北側に隣接する。図56B-B'より、12号墓の壁石設置に伴う。このほか27号配石とは土層や礫の配置状況が連続しており、大きな時間差は想定し難い。

【構造】大型の凝灰岩礫1点を壁石傍らに設置する。

【使用石材】多孔質の大型凝灰岩である。

【出土遺物】型式不明の小片が数点出土したのみである。

【小結】12号墓壁石設置に伴う配石で、出土土器はないが層位的に時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期である。

29号配石(図63・66・68)

【位置・確認】石棺墓A群東側、ⅦN-84グリッドに位置する。8号墓の蓋石と連続しており、時期は前後するものと思われる。明瞭な人為性に乏しい。直下には8号墓の壁石裏込めに伴う礫が多数存在するが、石材の大きさで区別した。

【重複・関連遺構】8号墓蓋石と連続する。16号配石の上部に位置し、これを覆っている。

【構造】小型の礫4点の集石で、立てる、並べる等の意図的な配置は見られない。明瞭な盛土も伴わず、8号墓蓋石と連続するように雑然と置かれている。

【使用石材】形状、規模、石質の統一性はなく、明瞭な人為性に乏しい。石質は緑色凝灰岩、凝灰岩、安山岩の各1点である。

【出土遺物】盛土をほとんど伴わず、遺物はほとんど出土していない。

【小結】出土土器はないが、層位的な状況から8号墓(牛ヶ沢式期)壁石設置以降であることは確実に、蓋石と同時にこれ以降と見られる。

31号配石(図63・71)

【位置・確認】石棺墓A群の南央部、ⅧN-83グリッドに位置する。6・7号墓の東側に南北に不規則に連なる礎8点のまとまりを配石とした。

【重複・関連遺構】西側は6・7号墓、東側は15号墓と隣接する。6・7号墓の盛土上面に設置されていることから6・7号墓よりも新しい。

【構造】8個の礎を南北に不規則に並べた集石で、平置きが多く明瞭な人為性に乏しい。S-5は長軸50cmを越える大型の棒状礎である。

【使用石材】凝灰岩、緑色凝灰岩、安山岩などで構成され、石質や石材規模のまとまりはない。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】盛土を伴わず、石棺墓の盛土上に置かれた集石である。出土遺物からの時期は不明であるが、6・7号墓との新旧関係から縄文時代中期末葉の大木10式併行以降と考えられる。

32号配石(図61・62・69・75-①・76-①)

【位置・確認】石棺墓A群の南西側、ⅧM-N-81グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】9号墓の西側に隣接し、図61F-F'より同墓の西側壁石設置に伴い。前節図33の9号墓構築段階では、第1段階に位置づけられている。

【構造】9号墓に関連する配石遺構の一つであり、約30個の板状礎や楕円礎を立て並べ、9号墓西側を中心に南北を含む範囲をコの字状となるように囲んだ列石で、9号墓西側は二重に配される。設置状況は横置きか縦置きが多く、平置きはほとんどない。石を立て並べるのは外側の列でより顕著である。設置層位は、図61F-F'から、外側の列(S-7~9)は壁石の設置とともに整地土で固定され、内側の列(S-17~20)は9号墓脇石以降に設置されており、壁石設置・外側の列→脇石の設置→内側の列という構築順序となる。

【使用石材】S-8・9は相馬安山岩の板状礎で、その他は安山岩、凝灰岩の円礎・楕円礎で構成される。

【出土遺物】土器は構築土からから覆林式、大木10式併行のほか、配石と配石の間より、牛ヶ沢式とそれに併行する異系統土器の破片(図87-28)が出土した。

【小結】9号墓の西側を画す列石で、14号墓を圍繞する18・19号配石との配列状況の連続性から、ともに墓域内外の区画が意図されていた可能性が高い。時期は9号墓(牛ヶ沢式期)の壁石設置に伴い、出土土器の所見とも整合する。

33号配石(図63・65・72)

【位置・確認】石棺墓A群南央部、ⅧN-83グリッドに位置する。A群南城を東西に走行する石列の一部を構成する。8号墓に伴う16号配石と連続するが、石材の選定や石の設置状況から、まず別個の遺構として調査を進めた。その後の精査の結果、本配石は16号墓の構築に伴うことが確認された。

【重複・関連遺構】北側は15号墓、南側は16号墓、西側は6号墓・14・15号配石、東側は16号配石と隣接する。16号墓の壁石裏込土上面に設置され(図65S-S')、かつ同墓の脇石や蓋石が本配石にもたれかかる様子も観察されることから、設置時期は16号墓壁石設置以降、脇石設置以前である。15号墓の南側盛土を切り込むことから、15号墓よりも新しい。東側は16号配石に連続し、西側は6号墓や3号配石、

31号配石と隣接する地点で途切れている。

【構造】16号墓の構築過程で設置された配石の一つで、2個の大型の塊状礫(S-1・2)と3個の扁平な花崗閃緑岩で構成された東西方向の列石である。東側は縦置き主体の16号配石と連続するが、本配石は平置き主体である。

【使用石材】S-1・2大型の塊状の凝灰岩で、S-5は扁平な凝灰岩である。またS-3・4は扁平な花崗閃緑岩である。S-2は251kgを計り、S-1も100kg以上ある。とくにS-2は配石遺構の中では最重量級である。

【出土遺物】掘方・盛土内から最花式と大木10式併行と思われる破片が出土した。

【小結】16号墓に伴う列状の配石遺構で、構築段階的には壁石設置以降、脇石や蓋石設置以前に位置づけられる。16号墓の造墓に伴い15号墓との境界にあること、また16号配石に接続し6号墓で収束する配列からは、16号墓を既存の石棺墓群から画すような機能が推測される。出土土器から、時期は大木10式併行期に収まるものと考えられる。

35号配石(図63・71)

【位置・確認】石棺墓A群、ⅧN-83グリッドに位置する。26号配石の北側に隣接し、北側は後世の攪乱によって失われている。26号配石と同様に配列は不規則であるが、26号配石を切り込むような掘方をもつことから、別個の配石遺構と認定した。

【重複・関連遺構】南側は26号配石と隣接する。図71A'で26号配石の堆積土の一部を壊しており、26号配石よりも新しい。

【構造】土坑状の掘方をもち、4点の礫からなる。S-1・4は比較的小型の礫を平置きするが、S-2・3は斜方向に突き刺すように、掘方底面に設置する。

【使用石材】S-1・2は花崗閃緑岩である。

【出土遺物】出土遺物は少量であるが、掘方より大木10式併行～蛭沢式の破片が出土した。

【小結】北側が滅失していることもあるが、26号配石と同様に構造の不明確な配石である。時期は層位的な状況より、26号配石(蛭沢式期)以降で、出土土器の様相とも整合的である。

36号配石(図55・56)

【位置・確認】石棺墓A群北側、ⅧP-84グリッドに位置する緑色凝灰岩の立石である。調査当初は40号配石も含めた2石を本配石としていたが、精査の結果、礎設置面が異なること、立石の下部に別個の掘方をもつこと等から、異なる配石遺構として報告する。

立石は上部20cm程度が近代以降の旧地表面に露出しており、その頃の石列(前節第2項の写真1参照)の一部として利用されていた。調査当初は図56D-D'第5層までの掘り込みと考えていたが、後日の精査で下層より第6・7層を確認した。第5層下層では土層の変化が見られたこと、また第6・7層を柱痕と柱掘方と見たとき、上位の立石との共存を考えにくいこと等から、上下に重複した別遺構の可能性が高い。また直接的な証拠とはならないが、石棺墓A群では既存の石棺墓と長軸方向を揃える傾向がある中で、4号墓が既存の遺構を避けるかのような配列を見せる(写真図版279)。後述のように40号配石が4号墓に伴い、本配石はそれよりも新しいとなると、既存の遺構として本配石遺構下部の柱痕を想定することができる。

【重複・関連遺構】4号墓と40号配石の北側に隣接する。本配石掘方が40号配石をかすめて切り込むようにも見え(図56D-D')、本配石の裏込めの第3層が40号配石を覆うことから、40号配石よりも新しい可能性が考えられる。

【構造】巨大な掘方を伴う立石である。長軸80cm、重量100kg超の長大な柱状礎で、礎を多く含む土層で裏込められている。やや東側に傾くが立った状態で出土している。D-D'第2層上面が構築当時の旧地表面と見られ、推定で40～50cm程度露出していたと思われるが、沈下し旧状を留めていない可能性もある。掘方は上部(～第5層)と下部(第6・7層)を別個に確認し、土層はこれを境に異なる。下部では直径30cmの柱痕を確認した。上部と下部では土層が異なり、立石の規模に掘方の深さが見合わない。下部の柱が上部の立石と併存することは考えにくい等から別遺構の重複の可能性が高い。

【使用石材】長軸80cm、100kgを超える緑色凝灰岩の柱状礎である。

【出土遺物】掘方から大木10式併行～牛ヶ沢式の範囲内と思われる破片が出土した。第5層までと第6・7層の出土遺物を区別しておらず、上部と下部の出土土器の差はわからない。

【小結】4号墓に隣接する大型柱状の立石である。立石は近代以降まで地表に露出しており、その頃の石列の一部として利用されていた。巨大な掘方を伴うが、下部は柱痕をもつ別遺構の可能性が高い。周囲にはこれと対応する同規模のピットが無く、おそらくは単体の木柱と想定される。出土土器の様相から、少なくとも上部の立石の時期は縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期と考えられるが、重複した下部の古い柱痕がこの時期まで下るかはわからない。下部の柱痕の時期を推測させる形跡として、4号墓(構築は大木10式併行期)がこれを避けるかのような配列を見せる状況がある。

37号配石(図54)

【位置・確認】石棺墓A群の北東、ⅧQ-85・86に位置し、石棺墓の密集域とはやや離れている。明瞭な掘方、裏込土を伴い、かつ意図的な礎の配置状況もうかがえることから配石遺構とした。

【重複・関連遺構】石棺墓や配石遺構との重複はないが、多数のピットと重複する。SP5981よりも新しく、SP12075・12119よりも古い。

【構造】浅い皿状の掘方に土性の異なる二種の掘方埋土を充填し、大小礎約20点を集積させた配石遺構である。多様な石材が見られ、S-5～7は扁平礎や板状礎の長軸を揃え、直線上に横置きし、S-2～4もこれに添わせ、S-4はS-3とS-6の隙間に充填している。掘方埋土は、掘方全面に分布する初期の構築土(第3・4層)と中央に分布し直接構成礎の裏込めとなった第1・2層に大きく分けられる。

【使用石材】形状や規模に傾向性は見られないが、30cm前後の扁平礎を主体とし、大型の円礎(S-10)や板状礎(S-4・6)などが含まれる。全点の石質鑑定はしていないが、緑色凝灰岩を主体とし、少量の相馬安山岩(S-4・6)、凝灰岩(S-10)が含まれている。中央に横置きされたS-6は台石を転用している(図91-4)。

【出土遺物】掘方から円筒上層c式、最花式、大木10式併行の土器片のほか、検出面から蛭沢式の破片が出土した。このほか図91-4は台石である。

【小結】石棺墓A群北東端の配石遺構で、石棺墓集中域からはやや離れている。時期は堆積土から大木10式併行の土器が出土するほか、検出面では蛭沢式が出土しており、構築時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期以降と考えられる。

38号配石(図68、写真図版331)

【位置・確認】石棺墓A群の南西、ⅧN-84グリッドに位置する。9号配石の第1段階に設置された下面配石を取り外し、8号墓壁石裏込土を調査する過程で本配石を確認した。

【重複・関連遺構】8号墓の西側壁石の外側に位置する、同墓の壁石裏込土によって盛土内に埋められている。壁石(8墓-26)と同一層に設置される図68B-B'状況から、壁石設置とほぼ同時と見られる。

【構造】8号墓の構築を契機とする配石遺構で、壁石設置に伴い裏込めにより土中に埋没する。5点(S-1～5)の大型角礫とこれより小規模な礫からなる集石で、S-2～5は礫長軸方向を南北に揃え平置きし、下部には小型の礫が集積する層が見られる(写真図版331)。

【使用石材】凝灰岩と緑色凝灰岩が用いられているが全点の石質鑑定を実施していない。5点の石材は30～50cm程度の石材で、下部の小型礫は長軸10～15cm程度である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】出土遺物はないが、8号墓の壁石設置に伴うことから、時期は縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期と考えられる。

39号配石(図57)

【位置・確認】石棺墓A群の西側、ⅧP-81グリッドに位置する。5号配石と6号配石の中間付近に扁平礫が斜めに突き出ていた。単体の礫で明瞭な人為性に乏しいが、周囲には同様の石材が無く、設置状況からも混入礫とは思われないこと、5・6号配石と同一の盛土(牛ヶ沢式期)に埋められていることから配石遺構と認定した。

【重複・関連遺構】下部に5・6号配石と同一の盛土が分布することから、これらと同時期の配石遺構と考えられる。

【構造】扁平礫を斜めに突き刺した、5・6号配石とは独立した礫単体の配石遺構で、明瞭な掘方はもたず、盛土とともに設置されたものと考えられる。

【使用石材】凝灰岩の扁平礫である。

【出土遺物】掘方より蛭沢期の土器片が出土した。

【小結】掘方出土土器から縄文時代後期前葉の蛭沢式期以降と推測される。

40号配石(図55・56)

【位置・確認】石棺墓A群北側、ⅧP-84グリッドに位置する。当初北側に隣接する36号配石と一体として理解していたが、設置面標高や層位が異なり、両者の構築時期が異なる可能性があったことから、別個の配石遺構として報告する。

【重複・関連遺構】4号墓の北側に隣接し、壁石裏込土(図56B-B'第8層)により埋められていることから、4号墓壁石と同時に設置とも、すでに配石が存在し4号墓壁石設置時には埋められたとも考えられる。36号配石掘方は本配石遺構をかすめるように掘り込んでおり、立石(S-1)を固定した第3層が40号配石を覆うことから、36号配石以前と考えられる。

【構造】石棺墓傍らに大型礫を設置する配石である。下位に掘り込み(図56F-F'第9層)を伴うが、本配石に伴うものかは不明である。

【使用石材】長軸50cm超の多孔質の凝灰岩円礫である。

【出土遺物】出土遺物は少なく、時期比定できる資料はない。

【小結】時期は4号墓壁石設置(大木10式併行期)に伴う、単体の大型凝灰岩を置いた配石遺構で、12号墓に伴う28号配石に類例が見られる。

43号配石(図63・68)

【位置・確認】石棺墓A群の南東側、ⅧN-84グリッドに位置する。8号墓の検出時、大型のS-3のみが盛土より確認されていたが、調査の進展に伴い、同礫の設置面付近で小型の棒状礫(S-2)と柱状の自然礫(S-1)を伴うことを確認した。S-3(磨面をもつ大型の凝灰岩製の台石)に、12号墓と隣接する62号配石(石皿未製品)との類似性を認め、このまとまりを配石遺構と認定した。

【重複・関連遺構】8号墓北側の盛土中より検出され、設置面標高は同墓壁石に近く、おそらくは8号墓壁石裏込めとともに意図的に込められた配石遺構と考えられる。

【構造】大型塊状礫(S-3)と小型の棒状礫(S-1)、柱状の自然礫(S-2)の3点からなる集石で、明確な掘方をもたず、8号墓壁石裏込めとともに設置されたと見られる。8号墓の対向する位置に64号配石(石棒)が位置する。S-3の台石は磨面を東に向けている。

【使用石材】S-1は凝灰岩、S-2は流紋岩、S-3は緑色凝灰岩である。

【出土遺物】出土土器はないが、配石石材のうちS-1が台石、S-2が小型の石棒である。

【小結】8号墓(牛ヶ沢式期)の壁石設置に伴う配石である。

44号配石(図63)

【位置・確認】石棺墓A群の南西側、ⅧM-82グリッドに位置する集石で、東側に隣接する3号配石とは分布が途切れることで区別され、西側の18号配石とは、石材規模や設置状況、配列等から分離された、消極的に認定した配石遺構である。

【重複・関連遺構】西側で14号墓や18・53号配石、東側で3号配石と隣接する。53号配石とは直接重複関係があり、本配石が新しい。記録は取れなかったが、14号墓の構築土中に位置し、18号配石とは設置面が同じことから、同墓の壁石設置段階に位置づけられる配石と考えられる。

【構造】9個の円礫、楕円礫からなる不規則な集石で、明確な掘方はなく14号墓の構築土に含まれている。S-44やS-9などは比較的規模の大きな石材で、18号配石と同様に、石棺墓の区画の一部の可能性もある。

【使用石材】安山岩と緑色凝灰岩からなる。

【出土遺物】出土遺物はない。

【小結】直接伴う遺物はないが14号墓の構築に伴うことから、時期は縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期と考えられる。

47号配石(図62・64)

【位置・確認】石棺墓A群の南西側、ⅧM-N-82グリッドに位置する。調査当初期より、9号墓付近から6号墓にかけて列状の配石があることが認識されていた。後に認定した57号配石とは設置面が同じこと

から一連の構造物とも考えられるが、南北方向の57号配石から直交するように派生すること、石棺墓どうしを区画する列石がその他の箇所でも見られることから、本配石も同様の可能性を考え、別個の配石遺構と捉えた。

【重複・関連遺構】西側で57号配石と接し、東側は6号墓(=54号配石S-2)上に重複している。図64M-M'第1層を6号墓の裏込土と捉えるか、本配石の掘方と捉えるかで若干の異同はあるものの、6号墓の壁石(54号配石)設置以降である。また57号配石から本配石が派生する状況から微視的には57号配石に後続する可能性もあるが、設置面や層位差はなく大局的には同時(設置の新旧関係があったとしても両者は共存する)と言える。

【構造】6号墓と57号配石を接続するように、11個の大小礫を並べた列石である。図64M-M'第1層の上位に、雑然と礫が込められている。この土層が6号墓盛土であるか本配石の掘方であるか(あるいはその両方か)は明らかにできなかった。

【使用石材】緑色凝灰岩と凝灰岩が主体を占め、一部安山岩を用いている。

【出土遺物】出土遺物はない。

【小結】遺構に伴う出土遺物はなく、ここからの時期は不明である。他遺構との重複状況から、6号墓壁石(54配-2)の設置以降であることは確実だが、図64M-M'第1層を6号墓(大木10式併行期)の壁石裏込土と捉えるか、本配石掘方(牛ヶ沢式期の57号配石に近い時期)と捉えるかで構築時期の認識は若干変わるが、時期は大きく6号墓(大木10式併行期)の壁石設置以降で57号配石(牛ヶ沢式期)と共存するという理解に留めておく。

48号配石(図63・65・72)

【位置・確認】石棺墓A群南側、VM-83グリッドに位置する。基本層第IV層に類似したシルト土に周囲を覆われていたため当初は地山礫と思われたが、少量ながら土層に縄文時代中期後葉期までの土器片を含むことから第IV層とは異なる土層であるとの認識に至り、このシルト土層の分布範囲をSK5572(の堆積土)、上位の大型礫3点を配石遺構と捉えた。大型礫は明確な掘方を伴わず下位のシルト土に圧着しながらも、両者を別遺構と捉えたのは、①シルト土の分布範囲が大型礫に見合わず広範囲にわたること、②SK5572は層位的には15号墓構築に伴うかこれ以前のものであるが、調査当初、石棺墓関連配石は必ず石棺墓の隣接地に造るという思い込みがあり、本配石は15号墓ではなく16号墓に伴うものという先入観で調査を進めたことによるが、配石遺構の多様なあり方を認める現在は、両者を分かち明確な理由はないと考えている。これを踏まえた上で調査の経緯を尊重し、大型礫3点の配石と下位のSK5572堆積土として以下記述する。

【重複・関連遺構】SK5572堆積土直上に位置する。SK5572が本配石の掘方であれば両者は同時、別であればSK5572よりも新しい。SK5572は15号墓と同時かこれ以前である。従って16号墓よりも古い。16号墓は脇石を本配石S-1に被せるように設置している。このほか12号配石とは直接重複し本配石の方が古い。

【構造】大型礫3点からなる配石遺構でSK5572堆積土直上に設置されている。

【使用石材】100kgを超える大型石材3点を用いる。石質鑑定を実施した2点では凝灰岩と緑色凝灰岩角1点である。

【**出土遺物**】出土土器の最新時期は縄文時代中期後葉期である。

【**小結**】SK5572堆積土に圧着した3点の大型礫からなる配石遺構で、時期はSK5572との関係性次第で異なるが、16号墓の脇石設置以前には確実に存在している。よって時期は16号墓(大木10式併行期)以前としておきたい。

50号配石(図70)

【**位置・確認**】石棺墓A群南側、ⅧM-83グリッドに位置し、調査終了後の6号墓の下面で検出した。当初は地山礫と思われたが、礫の密集の程度が著しいこと、集積した礫の周囲にのみシルト土が分布することから配石遺構として調査した。

【**重複・関連遺構**】6号墓、3・14・15・21・33号配石と重複し、すべての遺構よりも古い最終的な景観としては地中に埋没し、地表には露出していなかったと考えられる。

【**構造**】約20個の大小礫を220×130cmの楕円形範囲に集積する配石遺構である。不整形の断面皿状の掘方内に、S-1〜4等の大型礫を外側へ配し、内側はこれより小型礫を敷き詰めている。

【**使用石材**】長軸50cm以上の大型礫と30cm未満の小型礫が用いられる。石質は鑑定していない。

【**出土遺物**】榎林〜大木10式併行の土器片が出土した。

【**小結**】約20個の大小礫を集積する配石遺構で、重複するすべての遺構よりも古く、石棺墓A群の最終的な景観上は地中に埋没している。他遺構との重複状況から、時期は縄文時代中期末葉以前としておきたい。

51号配石(図73)

【**位置・確認**】石棺墓A群の南西端、ⅧM-80に位置する。9号墓の整地土下、第IV層上面でビット状の掘方を伴う立石を検出し、51号配石とした。北側の円形に巡るビット群(弧状の小溝とこれに接続する柱穴群)とは重複し、本配石と関連する可能性がある。

【**重複・関連遺構**】9号墓(牛ヶ沢式期)の整地土下より検出されたことからこれ以前である。またSK5590(縄文時代中期末葉期)にも壊されていることからこれよりも古い。

【**構造**】ビット状の掘方に長軸約50cmの扁平な柱状礫(台石)を立てている。

【**使用石材**】凝灰岩のやや扁平な柱状礫で、加工痕はないが表面の一部に顕著な磨痕が形成された台石である。

【**出土遺物**】立石に台石を転用するほかは、出土遺物は無い。

【**小結**】石棺墓A群南西端の小型の立石で台石を転用している。SK5590(縄文時代中期末葉期)に壊されることから、時期はこれ以前と思われる。

52号配石(図58・59・61・62)

【**位置・確認**】石棺墓A群の西側、ⅧN-81グリッドに位置する。9号墓調査時に北壁の北側で大型の板状礫(S-3)が突き出ており、当初は32号配石を構成する礫の一つと理解していたが、同配石を掘り込む掘方をもつ(図61E-E')ことから、別個の配石遺構と認識した。

【**重複・関連遺構**】9号墓の構築に伴う配石遺構のひとつで、9号墓構築段階の(図33)の第2段階(壁石

設置後)に位置づけられる。

【構造】土坑状の掘方と3点の礫で構成される。S-3は長軸65cmの相馬安山岩の板状礫を縦置きした立石であり、S-1は第3層底面に貼り付くように設置される。掘方埋土は土質や色調の異なる3層の堆積土からなる。底面にはぼそぼそとしたしまりのない黒褐色土(第5層)が堆積し、土器片などの遺物を多く含んでいる。黄色味の強い第3層は、配石およびこれ以前の堆積土を覆い、この時点での52号配石は、立石(S-3)の上部が地表に露出するのみである。

【使用石材】S-3は相馬安山岩の板状礫で、S-1は凝灰岩、S-2は緑色凝灰岩である。S-3は32号配石S-1と接合する。同配石とは構築段階も連続し、同一母岩である大型の板状礫を分割したのち、一方は32号配石に、他方は次の工程である52号配石の石材として用いている。

【出土遺物】第5層からは比較的多数の土器片が出土した。また第2層から縄文時代後期初頭牛ヶ沢式の土器片が出土している。

【小結】9号墓に伴う配石遺構のひとつで、壁石設置後、北壁に隣接した位置に造られている。大型の土坑状の掘方をもち、内部は土質や色調の異なる土で充填することに大きな特徴がある。第4層形成後はS-3の一部を除き配石はほぼ地中に埋没したものと見られる。時期は出土遺物、層位的な所見の両面から縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期と考えられる。

53号配石(図63・64・67、写真図版334)

【位置・確認】石棺墓A群の南西部、ⅧM-82グリッドに位置する。14号墓の直下、6号墓の南西部盛土下で確認された3点の石(S-1~3)と、その西側で直径約2.0mの範囲に面的に広がる、100個以上にもなる20cm前後の礫の集合を53号配石とした。調査当初は地山礫の可能性を考えていたため、配石状況の平面図を作成しておらず、集石範囲を測量と写真のみで記録した。

【重複・関連遺構】14号墓の直下に位置するが、これよりも古い6号墓の盛土に一部覆われていることから、14号墓との時間的な連続性はないと思われる。図64L-L'では不明瞭だが、9号墓の整地土(同図第6層)も本配石の上部を覆っており、ここからも14号墓との時間的な連続性はない。

【構造】比較的大型の礫3点(S-1~3)と、その西側に面的に広がる20cm前後の礫の集石からなる(写真図版334)。大型礫は6号墓の西側壁石に近接し、一部盛土に覆われている。また集石は暗褐色土の盛土で固定されている。

【使用石材】石質鑑定は実施しなかった。

【出土遺物】出土遺物はない。

【小結】出土遺物はなく時期は明らかでないが、6号墓(縄文時代中期末葉期)の盛土に一部覆われた状況から、これ以前である。

54号配石(図67・76-③)

【位置・確認】石棺墓A群の南西、ⅧM-N-82グリッドに位置する。当初配石遺構としての認識はなく、またS-1は掘方をもたず基本層第V層上に直接置かれた状態であり、これだけで人為性を読み取ることではできないが、S-2も含め、規模や形状の類似した石材が7号墓西壁を挟み対置されていること、同墓の壁石設置時には埋められていること等、S-2は掘方をもち、ともに石棺墓A群における最重量

級の石材であること等、ふたつの石材が意識された状況を読み取ることができた。S-1が地山礫である可能性は残されているものの、基本層中に埋まった状況も確認されず、また仮に地山礫であってもS-2がS-1を強く意識しているという点において、両者を含めて54号配石として報告する。

【重複・関連遺構】7号墓の西壁両側に對置する位置にあり、7号墓の壁石裏込め時には埋められている。同墓の蓋石、脇石も本配石の上部に置かれており、蓋石設置時には本配石S-1はほとんど地中に埋没したものと見られる。また20号配石は本配石の上部に乗っており本配石よりも新しい。S-2は7号墓壁石設置時にはすでに置かれているが、7号墓の盛土に完全に覆われることなく、6号墓の造墓の際に西壁として共有されている。

【構造】巨大な塊状の礫2点からなる。S-2は、範囲は明確ではなかったが掘方もち、褐色土(図67A-A'第4層)で固定されている。7号墓壁石設置段階では一部しか埋まらず露出しており、その後の6号墓構築時に西壁として取り込んでいる。なお6号墓は掘方をもたず、北壁を7号墓の裏込土に貼り付けるように設置しているため、北壁が特に乱れる(図27壁石見通し図)。

【使用石材】巨大な塊状の緑色凝灰岩2点で、重量はS-1が313kg、S-2は525kgである。

【出土遺物】土器は型式不明の小片が出土したのみである。

【小結】7号墓西壁の両側に位置する、巨大な塊状礫2点からなる配石で、巨石(60号配石)を除けば最大級の石材で、ふたつの石材が意識されていた可能性が高い。両石材ともに7号墓壁石設置時に裏込土に埋められるが、このときS-2は一部しか埋まらず、その後6号墓の西壁として取り込まれている。時期は層位的な状況から7号墓(大木10式併行期)の壁石設置以前である。

56号配石(図62・64)

【位置・確認】石棺墓A群の南西側、VIII・VIII-N-81グリッドに位置する。9号墓の西側検出面付近では多数の礫を含む黒色土(以下「上部盛土」)が広範囲に堆積していたが、これを取り除いていくと20~30cm程度の礫が多数密集する範囲を検出し、この集石と集石を包含する土層(図64N-N'第1層=以下「下部盛土」)を56号配石と認定した。なお土層断面の観察では、同一平面上の集石というより、礫を多量に含む30cm程度の厚みをもつ土層と捉えられた。よって特定の設置面のない、構築土とともに多量の礫を雑然とためた集石だったと考えられる。また集石を挟み上部盛土と下部盛土に土層の違いは無いため、礫を定める段階は認めるものの、上部盛土も一連の構造物だったと理解した。なお当初遺構としての認定が遅れ、上部盛土と集石の一部は記録ができず、図化した範囲は集石の上面の一部を取り除いた状態のものである。また平面範囲も、図61N-N'以西は先行して掘り下げているため、西側も一部失われている可能性がある。

このほか立石と丸石を集積した4号配石のうち、上部の丸石4点(4配-2~5)は本配石構築段階に伴う後世に追加されたものである。層位を重視しこれらを本配石遺構に振り替える方法もあるが、4号配石を意識した継続的な集積行為を重視し、4号配石のまま報告する。

【重複・関連遺構】9号墓の整地土上に位置することから、新旧関係としては9号墓よりも新しい。また14号墓関連配石(18・19号配石)の一部を覆う層位的な状況から、少なくとも集石と下部盛土は14号墓以降である。

【構造】9号墓の西側整地土上に、黒褐色土を盛りながら10~20cm程度の円礫や楕円礫を南北2.5m、

東西1.5mの範囲に集積した配石遺構で、配石設置面の上位にも下部盛土と同様の土層(上部盛土)が堆積する。盛土からは土偶や多数の土器片のほか、集石範囲に木炭や炭化種実などを多量に含む。また砂利や微細な礫を多量に含み、風化し細片となった個体土器(図88-9)も出土しており、その他の石棺墓や配石遺構の構築土とは様相が異なる。明瞭な層界は認識できなかったが、おそらくは一定期間表土のような状況にあったものと思われる。

【使用石材】20~30cm程度の円礫が多数用いられており、礫石器も含まれている(図92-3・4等)。石質鑑定は実施していないが、緑色凝灰岩や凝灰岩が中心である。

【出土遺物】上部盛土、下部盛土からは、多量の土器片、石器類などが出土した。図88-9は9号墓蓋石検出面付近で出土した縄文時代後期初頭期の牛ヶ沢式の深鉢で、出土位置から9号墓を意識していた可能性が高いが、層的には同墓に後続する14号墓構築以降である。個体の状況を留めながら風化し細かく砕けて出土した状況から、長らく旧地表面上にあったことも想定される。また配石周囲からは多量の木炭や炭化種実を検出し、第4章第1節では放射性炭素年代測定を、また第3節では種子同定分析を実施した。この結果、炭化種実にはトチノキ子葉(280.53g)、トチノキ種子(14.74g)、オニグルミ核(10.14g)が含まれており、完形個体に換算してトチノキ子葉154個分、オニグルミ核6個分であった(第6章第3節)。これらの年代は、トチノキ炭化子葉(PLD-32012)が、14C年代は3810±2014C BP、2 σ 暦年代範囲は2333-2326 cal BC (0.8%)、2300-2196 cal BC (89.5%)、2171-2147 cal BC (5.1%)であった。現地性の焼土や被熱礫は見られない。

【小結】石棺墓A群南西側において、重層的に構築された石棺墓A群の最終段階の配石遺構である。土層中に含まれている炭化したトチノキは、完形個体で154個体という出土量と食用とされる子葉を多量に含む点において、偶然に混入したものでも、かつての土中に含まれていたものでもないことは明らかで、後期初頭期を示す年代測定結果もこれを示している。現地性の焼土や被熱礫等はなく、具体的な焼成の方法は不明だが、墓域における儀礼的な行為の一端を示している。このほか牛ヶ沢式の深鉢(図88-9)は、9号墓を意識したものであろうが、同墓の構築時からは時期を経た供献土器として重要である。

57号配石(図61・63・64・69)

【位置・確認】石棺墓A群の南西、VIII~0-82グリッドに位置する。9号墓と6号墓の間に、多数の礫が溝状の掘方を伴って、南北方向に雑然と連なっていた。調査の進展とともにこれが9号墓に伴う列石状の配石であることが確認された。

【重複・関連遺構】9号墓構築に伴う配石遺構の一つで、前節図33では同墓の構築段階の第4段階に位置づけられており、壁石の設置以降で脇石や蓋石の設置以前である。また関連配石遺構との新旧関係は32・52・58号配石よりも新しく、図30A-A'の重複状況より14号墓構築に伴う19号配石よりも古い。

【構造】9号墓の構築過程に伴う配石の一つで、6・7号墓と9号墓の間を、南北に縦断する溝状の掘方と列状に込められた100点以上の円礫・角礫とで構成される列石である。石材は20~30cm前後の比較的小振りの円礫・角礫を平置きする。設置面レベルが安定せず、雑然と込められた印象が強い。58号配石とはほとんど同一の範囲で上下に重複し、本配石が58号配石を覆う。本配石設置後の58号配石は石材の上端一部のみが地表に露出した状況であったと考えられる。このうち58号配石S-3(長軸100cmの

花崗閃緑岩の扁平礫)は、57号配石の設置面から30cm近く突き出しており、傍らで出土した丸石(S-44)は、4号配石の立石と丸石の集石を想起させる。

掘方は6・7号墓側では溝状に掘り込むが、9号墓側は掘り込まず、配石掘方が壁石裏込土となっている。なお本配石の掘方埋土は9号墓の棺内堆積土と良く似た土質であったが、こうした事情は棺内埋め戻しの構築段階が、本配石設置前後に位置づけられる事情と関連するのかもしれない。

【使用石材】石材は規模や形状、石質に統一性はほとんど見られず、多様な石材が用いられている。前述のようにS-1は本遺跡で出土した相馬安山岩の中で最大級の石材である。

【出土遺物】出土遺物は多数の土器が検出され、大木10式併行のほか、後期初頭の牛ヶ沢式が目立つ。

【小結】9号墓の構築に伴う配石の一つで、壁石の裏込めとしての機能を備えながら列石としての構造も有することが特徴である。58号配石S-3の傍らに置かれた丸石は、4号配石の立石と丸石の集積に似る。石材に大型のものは少ないが、S-1は水上(2)遺跡内でも最大級の相馬安山岩である。時期は層位的な状況から9号墓(牛ヶ沢式期)に伴う。

58号配石(図58～61・69・75-①・図76-⑭)

【位置・確認】石棺墓A群の南西、ⅧN-82グリッドに位置する。上面の57号配石調査時から土中に突き出したS-3を確認していたが、57号配石の下面を調査する過程でS-3に連なる配石が発見され、57号配石以前の下部の列石であることを確認した。

【重複・関連遺構】9号墓の構築過程で設置されたものとみられ、図33の構築段階では壁石設置後の第3段階に位置づけている。4・32・52・57号配石と関連し、32・52号配石よりも新しく、57号配石よりも古い。北側には60号配石(巨石)が位置し、掘方どうしの重複状況から本配石が新しい。

【構造】大型扁平礫9点と南北に延びる溝状の掘方からなる列石状の配石で、S-9を除けばいずれも石材を縦置きして並べている。

【使用石材】9点の大型扁平礫で構成され、石質は緑色凝灰岩7点、凝灰岩2点、花崗閃緑岩1点である。S-8は長軸100cm、重量180kgにもなる大型の石材で、花崗閃緑岩としては本遺跡の使用石材では最大級である。

【出土遺物】土器は、1～3・5・7層から大木10式併行～牛ヶ沢式の破片が出土した。

【小結】9号墓に伴う配石遺構で、壁石設置後に位置づけられる。重複状況から時期は縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期と考えられ、出土遺物の様相とも整合する。

59号配石(旧SP5822)(図55・56)

【位置・確認】石棺墓A群北側、ⅧP-84グリッドに位置する。第V層上面で検出した。掘り込み面の上部には図56F-F'第1・2層に相当する黒褐色土や暗褐色土が堆積しており、立石自体は縄文時代の比較的早い段階で埋没していたものと見られる。

【重複・関連遺構】重複する遺構はないが、西側に13号墓、南側に36号配石が隣接する。

【構造】長軸約30cmの長円礫の立石(S-1)と下部の掘方からなる。掘方は長軸60cm、深さ35cmのビット状で、立石はこの掘方上部に埋められている。S-2は掘り込み面上で出土した磨面石(非掲載)である。

【使用石材】S-1は凝灰岩製の石棒である。

【出土遺物】土器は型式不明の小片が数点出土したのみである。立石に石棒が利用されているほか、検出面では立石の傍らで磨回石が出土している。

【結】掘方をもつ小型の立石である。出土遺物から時期を推定することは困難だが、13号墓・25号配石（ともに大木10式併行期）関連土の下位で検出した層位的状況から、時期は大木10式併行期以前と考えられる。

60号配石(図57～60)

【位置・確認】石棺墓A群中央部西側、Ⅷ0-81・82グリッドに位置する。調査当初より地表から1m近く突き出していたことから一際目立つ状況であった。配石の石材としては極めて大きく、自然礫か否か注意しながら調査を進めたところ下記の所見が得られた。確定的なことは言えないが、人為性を否定できないこと、また石棺墓やその他の配石遺構を構築する際にも強く意識された形跡があることから、配石遺構として報告する。

①その他の巨石との比較 遺跡内では同規模の巨石を40ほど確認している（第1章第2節図5参照）が、本配石のような、石材の周囲に地山とは異なる掘方状の土層範囲が観察できる例がない。

②土中での埋まり方 土中での埋まり方や形状を確認したところ、巨石は平たい三角錐状の石材で、これを横にし底面を北側、頂点を南側に向けた、重心が極めて不安定な状態で埋まっていた（第1章第2節写真4-1参照）。遺跡内のその他の巨石はいずれも重心の安定した平置きで、縦置きに見えるものはなく、他例と比較して異質である。

③巨石周りの土層と形成時期 巨石周囲の基盤層は、西側は第Ⅴ層（砂礫層）で、東側は第Ⅳ層（黄褐色シルト層）と地表に迫り出して風化した第Ⅵ層の基盤岩である。前述のように、巨石周りには周囲の基本層とは異なった褐色土（図59第5層）と黄褐色土（第6層）が分布し、第5層は巨石の周囲を取り囲むように分布する（図58）。全体的な土層の厚さは20～30cm程度だが、北東側のように巨石下端まで入り込む地点もある。一方第6層は、第5層より一回り大きく巨石周囲を取り囲む、直接巨石を支えている土層である。層厚は40cm前後で、検出面から80cmの深さまで分布し、南側は地表面に向かって上がっていく。

図60には60号配石の出土土器を時期／出土層別別に平面図と断面図に落とし込んだ。出土土器はいずれも小片で細かな年代的検討は困難であるが、最新の出土遺物から各土層の形成時期を見ると、第5層は縄文時代中期末葉頃の遺物が一定量認められ、第6層は縄文時代中期中葉以降とする土器が出土している。よって出土土器からは第6層は縄文時代中期中葉以降、第5層は縄文時代中期末葉以降に形成されたものと判断される。両土層は土質並びに出土遺物の量や時期が異なっており、形成時期が必ずしも同時ではない可能性もある。

④巨石の形成要因と遺跡内の土石流の痕跡 本遺跡は地形的に度々の土石流を経験した土地で、遺跡内では基本層第Ⅳ・Ⅴ層に湯ノ沢川方面からの土石流の痕跡を見ることができ（第1章第3節）、巨石の形成要因として土石流を完全に否定することは難しいが、巨石を直接支えた第6層には、その他の地点の土石流堆積物で観察される大型礫をほとんど含まない。また仮に第6層（縄文時代中期中葉以降）が土石流堆積物であった時、集落内に土石流の痕跡が確認されても良いものであるが、第6層に類似する土層はほとんど確認できない。特徴的な土層のため見落としも考えにくく、仮に土石流が本地点

のみの局所的な形成だったとしても、巨石を運搬するほどの規模とする理解に沿わない。

【60号配石の評価】 まず①・②から、60号配石が遺跡内では極めて特異な存在であることが理解される。次に②の所見からは人為の可能性と、自然の場合であっても2tを優に超える巨石を動かすだけの規模をもった要因(土石流)を想定する必要がある。また③から、直接巨石を支えた第6層は縄文時代中期中葉以降の形成と見られるが、その他の土石流堆積物とは違いがあること、また仮に縄文時代中期中葉期以降の土石流だった時、遺跡内にこの痕跡が見られない不自然さが残る。以上から必ずしも人為によるものと断定することはできないが、60号配石がその他の巨石に較べて異質で、石棺墓や配石遺構の構築時に強く意識される対象であったことは推測される。そこで以下では第6層下面を配石遺構の掘方、第5・6層を掘方埋土と仮定し記載する。

【重複・関連遺構】北側は5・6・39号配石、南側は57・58号配石と隣接しているが、いずれの配石掘方も60号配石の手前で途切れ、かつ巨石の掘方よりも層位的に上位にあることから、重複する遺構の中ではもっとも古い。

【構造】巨石と周囲の土質の異なる2層の堆積土(掘方埋土)からなる。巨石の規模は高さ1.5m、幅1.7m、重量2350kgで、水上(2)遺跡の中のある石材の中でもっとも大きなものである。石材全体の半分ほどが地中に埋まっており、地表に露出した部分の形状は山形であるが、石材全体の形状は平たい三角錐状で、これを横に倒し、底面を北側、頂点を南側に向けたような格好で埋まっている。掘方の規模は、長軸390cm、短軸180～250cmの不整形で、検出面から底面までの深さは80cmである。底面は比較的平坦で、立ち上がりは、基盤岩の分布する北側は急で、南側は比較的緩やかである。巨石はこの底面に一辺が接するように埋まっている(図59B-B'・C-C')。

掘方埋土は褐色土の第5層と黄褐色土の第6層に分層される。上位の第5層は巨石の全周囲に分布し、北側では底面まで本土層のみ堆積する箇所もあり、基盤岩の碎片が多量に含まれている。第5層では遺物が比較的多く出土し、出土物の最新時期は縄文時代中期末葉である。一方下位の第6層は巨石を直接支持した土層で、緻密な黄褐色土をしており、第5層とは明瞭に区別される。遺物は極端に少なく、土器の小片が少量含むのみである。縄文時代中期中葉以降と見られる土器が出土土器の最新時期である。

【使用石材】水上(2)遺跡の中でもっとも巨大な石材で、重量2350kgの安山岩である。石質については第4章第11節で岩石学的分析を実施しており、本遺跡の第VI層の基盤岩と同質の石材であった。遺跡内の地表には約40点の巨石が分布していたが、肉眼観察ではこのうち30点は本配石石材と同じ石質と判断され、遺跡内にありふれた石材と言える。地表に露出していた箇所は風化し変色しており、明瞭な加工痕は認められなかった。なお重量計測にはクレーン用の吊り秤を用いた。

【出土遺物】第5層からは縄文時代中期末葉期までの比較的多くの土器片が出土した。また第6層からは中期中葉以降とみられる土器片が少量出土した。このほか、第6層中より採取した炭化物3点について放射性炭素年代測定をしたところ、C-12(PLD-28812)は、14C年代が8320±35 14C BP、2σ 暦年代範囲が7506-7304 cal BC (95.4%)、C-21(PLD-28813)は、14C年代が9280±35 14C BP、2σ 暦年代範囲が8627-8423 cal BC (90.3%)、8405-8392 cal BC (1.4%)、8377-8350 cal BC (3.8%)、C-22(PLD-28814)は、14C年代が9275±35 14C BP、2σ 暦年代範囲が8622-8422 cal BC (87.7%)、8407-8389 cal BC (2.3%)、8381-8349 cal BC (5.4%)であるとの所見を得た(第4章第2節)。縄文時代早

期に相当するこの値は、出土土器から推測される年代とは大きく異なり、この地に持ちこまれる以前の第6層由来土の年代を示したものであろう。

【小結】配石遺構としては縄文時代でも最大級と思われ、考古学的、地質学的検討を踏まえ、慎重に調査を進めた。自然によるものか人為によるものか決定的なことは言えないが、自然とは考えにくい状況も観察された。石材は遺跡内の地山(基本層第V層)中にも多数確認され、自然(土石流)や、運搬を伴う人為の可能性以外に、既存の礫を掘り起こして立ち上げる等、大きな運搬を伴わない人為の可能性も考えられる。60号配石の形成年代は、巨石を直接支持する第6層と、これを覆った第5層の年代より縄文時代中期中葉から末葉頃と考えられる。

61号配石(図55・56)

【位置・確認】石棺墓A群中央、Ⅷ0-83グリッドに位置する。2号墓に隣接する位置で大型の相馬安山岩の板状礫を検出した。当初配石遺構としての認識はなく、2号墓関連石材と考え、記録し取り上げたが、下部より礫範囲と一致する浅い皿状の掘り込みを検出したことから、この大型礫に伴う掘方と捉え、配石遺構として報告する。

【重複・関連遺構】2号墓、SK5555・5557と直接重複し、SK5555・SK5557よりも新しい。SK5555は1号墓の壁石裏込めに伴う掘り込みであるから、1号墓よりも新しい。北東に隣接する2号墓との新旧関係は明らかにし得なかったが、重複部で掘方が2号墓壁石を壊さないこと、配石設置面が壁石上部より10cm以上低く、仮に2号墓に蓋石や外側に広がる盛土があった場合、本配石はこれに覆われたものと思われ、状況的には2号墓以前の可能性がある。

【構造】浅い皿状の掘方を伴う大型相馬安山岩の板状礫の配石遺構である。掘方は石材よりも一回り大きいもので長軸約150cm、深さは5cm前後とごく浅い。

【使用石材】長軸100cm、厚さ10cm程度の相馬安山岩で、水上(2)遺跡出土の相馬安山岩では、57号配石S-3と並び最大級のものである。

【出土遺物】出土遺物が少なく、時期比定できる資料はない。

【小結】出土遺物はなく時期は不明だが、遺構の重複状況から1号墓壁石設置以降である。2号墓との重複関係は明らかにできなかったが、状況的には2号墓(大木10式併行期)以前の可能性もある。

62号配石(図54・56)

【位置・確認】石棺墓A群北側、ⅧQ-83グリッドに位置し、12号墓の南東隅で検出した。脇石と見られるS-8・9(図35)と同一面にあることから、閉塞に伴う石材の一部の可能性もあるが、南側に位置する13号墓と25号配石の位置関係との類似性から意図的な配石遺構と捉えた。

【重複・関連遺構】12号墓の南東に隣接する。12号墓の壁石裏込土(F-F'第1層)に乗り、蓋石や脇石と同一面で検出されていることから、壁石設置後の配石と考えられる。

【構造】壁石裏込土上に石皿未製品を伏せた配石である。石皿は12号墓側に傾く。

【使用石材】緑色凝灰岩製の石皿未製品(図93-2)である。

【小結】12号墓関連の配石遺構で、段階的には壁石設置以降のものである。石皿以外の出土遺物はないが、12号墓出土土器より時期は大木10式併行期と思われる。

63号配石(図55・56)

【位置・確認】石棺墓A群中央北寄り、Ⅶ0-83グリッドの4号墓の埋葬主体部内で確認した。

【重複・関連遺構】4号墓の棺内、南西隅に位置する単独の立石で、石棺墓棺内における唯一の配石遺構である。図56 I-I'断面より、4号墓の壁石の設置に伴い、棺内堆積土形成以前のものである。

【構造】緑色凝灰岩の単独の立石で、4号墓壁石(S-19)とともに設置している。

【使用石材】長軸45cm、重量17.8kgの緑色凝灰岩の長円礫で、加工等のない自然礫である。

【出土遺物】本配石に直接伴う遺物はないが、4号墓の棺内堆積土の最新出土遺物は大木10式併行である。

【小結】4号墓の壁石設置に伴う立石で、石棺墓棺内における唯一の配石遺構である。出土土器はないが、層位的な状況より時期は大木10式併行期と考えられる。

64号配石(図63)

【位置・確認】石棺墓A群東側、ⅦN-84グリッドに位置し、8号墓蓋石や9号配石の上面配石と同じレベルで確認した。構成礫は単独の石棒1点のみであるが、石棺墓傍らに遺物を置く事例がその他にも見られたことから、配石遺構(遺物の意図的な設置)として報告する。

【重複・関連遺構】設置面は8号墓盛土上で、新旧関係としては8号墓壁石設置以降である。

【構造】約45cmの長円礫(石棒)1点を8号墓と9号配石の傍らに置いた配石遺構である。

【使用石材】長軸約45cmの砂岩製の石棒である。

【小結】8号墓の北西部に隣接した石棒1点を置いた配石で、北東部には43号配石が対置する。時期は出土層位から8号墓(牛ヶ沢式期)の壁石設置以降である。

第3項 その他の地区の配石遺構

1001号配石(図78)

【位置・確認】遺跡範囲の中央、ⅦL-M-91グリッドに位置する。礫配置状況が散漫であるが、大型石材を長軸方向に運べた状況、少ない構成礫の中に3点の台石・石皿を転用することなどから、意図的な石の配置と考え配石遺構として調査した。

【重複・関連遺構】平面上多数のビットと重複するが、いずれの遺構よりも新しい。重複遺構の最新はSP1624・1658(縄文時代中期後葉)である。

【構造】大型の礫10個を並べた列石で、S-7・6やS-1・3・4等、礫の長軸方向を揃えて配置する状況が見られる。明確な掘方はなく基本層第Ⅲ層ないしは第Ⅳ層に置かれたものと思われる。

【使用石材】石材は長軸30~40cmの規模を主体とするが、S-6・7など長軸60cmを超えるものもある。緑色凝灰岩と凝灰岩を主体としており、明瞭な石材の選択性は見られない。

【出土遺物】土器は出土していないが、構成礫のうち3点に台石・石皿が含まれている(図93-3・4、図94-1)。

【小結】時期比定可能な遺物はないが、SP1624・1658(縄文時代中期後葉)との重複状況から、時期はこれ以降と判断される。

1002号配石(図78)

【位置・確認】遺跡範囲の中央、ⅧI-90・91グリッドに位置する。

【重複・関連遺構】SI1105(円筒上層d式期)の上位で検出しており、これより新しい。

【構造】大小約10個を小型の楕円形に並べた集石で、礫配置状況に明瞭な人為性は見られない。規模は外寸で70×60cmである。

【使用石材】長軸10～40cm程度の礫で石材規模、形状ともにばらつきがある。また使用石材は緑色凝灰岩と凝灰岩を主体としており、明瞭な選択性は見られない。

【出土遺物】土器は検出面から榎林式の破片が出土した。

【小結】時期は検出面付近出土土器から、縄文時代中期後葉以降と考えられる。

1003号配石(図78)

【位置・確認】石棺墓B群の東側約10m、ⅧP-94グリッドに位置する。自然礫12点が直線上に並んだ石列で、榎林期までに埋没した沢1の堆積土上に形成されているが、現代の耕作層直下での検出のため、時間的に新しい可能性もある。

【重複・関連遺構】榎林期までに埋没した沢の堆積土上に形成されており、時期はこれ以降である。またSP1796(時期不明)と重複し、本配石が新しい。

【構造】20cm前後の礫12点を東西方向に並べた石列で、S-3とS-4間には礫抜き取り痕が見られる。明瞭な掘方は確認できず、旧地表面に直接設置されたものと見られる。

【使用石材】20cm前後の礫でその他の配石遺構の使用石材に比べ小規模である。形状や石質に明瞭な選択性は見られない。

【出土遺物】時期比定できる出土土器はない。

【小結】沢1との層位関係から時期は榎林期以降であるが、検出状況から現代まで下る可能性もある。

1004号配石(図79)

【位置・確認】石棺墓B群、ⅧR～U-91グリッドに位置する、南北方向の石列で、ⅧR-91グリッドに位置する配石を1004号配石-1、ⅧS-91グリッド以北に位置する配石を1004号配石-2として調査した。

【重複・関連遺構】榎林式期には埋まりきった沢1の堆積土上に位置し、北側でSP1824(最花式期以降)と重複し、本遺構の方が新しい。また西側に隣接する17号墓(大木10式併行期)の脇石と見られる石材と設置面の標高差はなく、層位と他遺構との重複状況は整合的である。

【構造】約40個の大小礫を南北方向に平置きした石列で、明瞭な盛土は見られず既存の地表面に直接設置されている。配置状況には粗密があるが、ⅧS-T-91グリッドでは礫長軸を南北方向へ揃える状況(S-1・5・7・8・11等)もある。

【使用石材】石質鑑定はしていないが、40cm未満の凝灰岩、緑色凝灰岩の角礫、円礫を主体とする。石材の選択性はうかがえない。

【出土遺物】出土土器はないが、構成礫に台石1点が含まれている。図94-2は緑色凝灰岩製の台石で、厚みのある大型礫(23.5kg)の曲面部に敲打痕が縦方向に形成される。

【小結】出土遺物から時期は明らかにできないが、他遺構との重複状況から最花式期以降と見られる。

位置関係から17号墓と関連する可能性がある。

1005号配石(図80)

【位置・確認】石棺墓B群、ⅧQ-92グリッドに位置する。南側に隣接する1006号配石とは使用石材の相違から別個のものと捉えたが、設置面標高や層位に大きな違いはない。

【重複・関連遺構】SK1111、SP1930(ともに遺物なし)と重複し、両遺構よりも新しい。また縄文時代中期後葉期には埋まりきった沢1堆積土上に位置する。

【構造】20～40cm前後の礫約30点を並べた集石で、明確な掘方はなく旧表土に直接設置されたものと見られる。配置状況に明瞭な規則性はないが、S-10～27までを北に開くコの字状に配し、この開口部にS-1～8を集積する。設置状況はいずれも平置きで、縦置き、横置きはなく、長円礫を短軸方向に連ねた箇所(S-5・7・8、S-24～26)も見られる。

【使用石材】40cm未満の礫で構成されるが、石材形状や規模の統一性はない。また石質もS-25が花崗閃緑岩であることを除けば、緑色凝灰岩と凝灰岩で占められ、特徴的な選択性は見られない。

【出土遺物】時期比定できる出土土器はない。構成礫1点(S-19)に台石が含まれている。図94-3は厚みのある石材の平坦面に顕著な磨痕を形成している。

【小結】出土遺物や他遺構との重複関係から時期は明らかにできないが、沢堆積土上に形成される層位的事実から、縄文時代中期後葉以降と考えられる。

1006号配石(図80)

【位置・確認】石棺墓B群、ⅧQ-92グリッドに位置する。掘方が無く、人為的なものであるかの確認を欠くものの、17号墓周囲に一際大形の礫が配された状況から配石として調査を行った。北側に隣接した1005号配石とは石材規模の相違から別個のものと捉えたが、設置面標高や層位には大きな違いはない。

【重複・関連遺構】SK1111、SP9537(ともに時期不明)と重複し、両遺構よりも新しい。縄文時代中期後葉期には埋まりきっている沢堆積土上に形成される。

【構造】大型礫5点を不規則に並べた列石で、明確な掘方はなく旧表土に直接設置されたものと見られる。明確な人為性はないが、石材規模は周囲の包含層中のものよりも大きい。

【使用石材】長軸40～60cmの大型角礫という石材規模に選択性が見られ、この点において隣接する1005号配石とは明瞭に異なる。石質に特徴的な選択性はなく緑色凝灰岩と凝灰岩が占める。

【出土遺物】時期比定できる出土土器はない。

【小結】隣接する1005号配石とは石材規模の相違から区別したが、設置面や層位に違いはなく、本来一体の可能性もある。出土遺物から時期比定は困難であるが、重複状況等から縄文時代中期後葉以降で見られる。

1007号配石(図80)

【位置・確認】遺跡範囲の西側、ⅧQ-R-96・97グリッドで、本遺跡では唯一沢1の東側に位置する配石である。礫の配置に規則性はないが、掘方をもつ、横置きに設置する、4点の石材で台石・石皿の転用

がある等の状況から、配石遺構として調査した。

【重複・関連遺構】重複遺構はない。また沢1の堆積土との関係も不明である。

【構造】礫約30点を2.5×2.5mの範囲に並べた集石である。配置状況はS-17～26までの北東方向に開口するコの字状の配置と、これから外れる南側の集石(S-1～6、11・12)がある。設置状況は、地山直上に置くもの、礫より一回り大きな掘方を掘るものがある。石は平置きが多いが、S-7・10・26などの板状礫、扁平礫は横置きである。

【使用石材】40cm未満の円礫・角礫を主体とするが、S-21・26など相馬安山岩の板状礫も見られる。構成礫約30中に4点の台石が含まれている。

【出土遺物】時期比定できる土器はない。構成礫中に4点の台石を含む。図95-4は小型の角柱状の石材でこのうち3面に短軸方向の擦痕が無数に形成される。

【小結】時期比定できる出土遺物はなく、また重複状況もなく時期は不明である。

1008号配石(図80)

【位置・確認】石棺墓B群、ⅧP-90グリッドに位置し、19号墓精査中に確認した。

【重複・関連遺構】東側に19号墓が隣接する。19号墓関連土層(図80A-A'第3・4層)を掘り込む状況から、同墓(縄文時代後期初頭期)よりも新しいとも言えるが、19号墓との位置関係、石棺墓で多用される石材を使用する点、石棺墓との間の裏込礫が配石遺構までで途切れる状況(写真図版336)等から、同墓とは何らかの形で関連していた可能性が高い。

【構造】花崗閃緑岩の大型扁平礫2点を横置きした列石で、19号墓の隣接地に掘方を掘って設置する。

【使用石材】2点ともに大型扁平の花崗閃緑岩である。

【出土遺物】時期比定できる出土土器はない。

【小結】19号墓(縄文時代後期初頭)関連土を掘り込むことから、時期はこれ以降であるが、位置関係、使用石材、設置状況から石棺墓に伴う可能性が高い。

1009号配石(図80)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅧU-70グリッドに位置し、本遺跡では唯一の北側斜面部縁辺の配石遺構で、S138の精査中に堆積土中で確認した。

【重複・関連遺構】S138(最花時期)の堆積土中の配石遺構で、同住居新段階の石囲炉(図80Aミ部)直上にあり層位差は明瞭であるが、本配石下端が石囲炉に接する箇所もあり、配石設置段階に石囲炉は意識されていたものと思われる。S138堆積土形成後というよりは、床面および石囲炉が完全に埋まりきらない時点で、この直上に設置されたものと思われる。

【構造】礫7点からなる配石遺構で、板状ないしは長円礫4点をH型に並べ(S-1～4)、傍らに礫3点(S-5～7)を配置する。S-1・4は板状礫を横置きし、S-7は棒状礫を縦置きする。

【使用石材】S-1・4は板状礫、S-2・3に長円礫、S-7に棒状礫という、配石遺構内で強い石材の選択性が見られる。

【出土遺物】配石掘方とS138(新)堆積土の区別ができず、遺物は後者で取り上げたため本遺構に直接伴う遺物は不明である。

【**小結**】S138堆積土中の配石で、出土遺物はないが重複状況から時期は最花式期以降と思われる。配石はS138石罫炉と接しており、設置の際に既存の炉が意識されていた可能性もある。

4501号配石(図81)

【**位置・確認**】遺跡範囲の中央北寄り、ⅧS・T-86グリッドを中心に分布する。南北列、東西列からなるT字の列石を確認した。大型礫を多数含み周囲の景観から独立している。第V層(砂礫層)が南北方向の帯状となって地表面に露出した地点にあり、礫番号を振った中には地山礫(S-23~34等)や、遺構と重複しながらも掘り残された地山礫(S-44~46等)を含む。一方で北東部(S-1~19等)では最花式以降の遺物包含層上にも設置され、多様なあり方を見せる。周囲の景観から独立した石列で、他遺構との重複状況から大木10式併行期以降の可能性も考えられたため、石棺墓群との関係も考慮し、配石遺構として調査した。石棺墓A群とは、北東約15mの位置にある。

【**重複・関連遺構**】縄文時代中期後葉から末葉期のピットと多数重複する。重複遺構の最新時期は大木10式併行期(SP4648・4661・4662)であることから、時期はこれ以降である。

【**構造**】T字の列石で、東西列(S-1~30)は約30点、南北列(S-31~50)は約20点の総数50点程度の大礫からなる。S-23~34付近は砂礫層中の地山礫であるが、東西列の西側(S-1~19等)では最花式期以降の包含層上に形成される、大木10式併行期の遺構と重複する等の状況が見られることから、既存の地山礫に人為的な配石を付加した列石と見られる。S-9とS-13間に礫設置以前の現地性の焼土が確認されている。

【**使用石材**】長軸25~40cm程度の礫を主体とするが60cm近いものも多数見られ、周囲の景観からは独立している。凝灰岩、緑色凝灰岩の角礫、円礫からなり、石質や形状に明瞭な石材選択性はうかがえない。

【**出土遺物**】検出面付近からは多数の最花式期の土器が出土している。

【**小結**】石棺墓A群の北東15mに位置するT字の石列である。出土遺物、層位の状況、他遺構との重複状況から、地表面に露出した基本層第V層中の自然礫に、石を付加した列石と見られる。最花式期の出土遺物が目立つが、他遺構との重複状況から大木10式併行期以降と見られる。

第4項 第4分冊関連の出土遺物

本項では、本遺跡における石棺墓と配石遺構との密接な関わりから、本文冊に掲載した第9節と第10節にかかる出土遺物をまとめて記述する。図12・13には出土位置の明らかな主な出土遺物の分布図を示し、本分冊に関連する遺構別出土遺物一覧表は巻末(178・179頁)に示した。なお石棺墓という遺構の特性上、棺内堆積土出土遺物が問題となるが、次頁でも列記したように、この数量はごくわずかであるため、一覧表ではこの区別はしていない。

遺物の取り上げと「石棺墓A群構築土」 前節第1項でも既述だが、石棺墓と配石遺構が著しい重複を見せる石棺墓A群では、直接重複する両遺構の構築土が識別明瞭なことは稀で、出土遺物の帰属を確定できないことが多々生じた。このようにひとつの遺構に帰属できない場合、遺物の取り上げは「●号墓-▲号墓」「▲号墓-□号配石」「□号配石-○号配石」のように、可能性のある複数の遺構を並記する方法を採っている。こうして取り上げたいずれかの遺構に伴う遺物は、個別の遺構の時期推定に

は向かないが、広く石棺墓群の構築には確実に伴うことから、墓域の形成時期を示す「石棺墓A群構築土」遺物として規定、掲載する。また同様に、石棺墓A群を中心とするVM-N-81～84グリッドの第III層出土遺物についても、いずれの遺構に帰属するかは明確にできないが、確実に墓域形成に伴うことから、「石棺墓A群構築土」遺物に含めた。なお石棺墓群域出土遺物でも第I・II層については、石棺墓の構築に確実に伴う土層とは言い切れないため、第3分冊第3節の遺構外出土遺物で取り扱うが、同層出土土器の様相並びに石鍾II類の出土数量、特異な分布状況は、第4分冊関連出土遺物の様相と大きく異なることから、石棺墓群構築には何らかの形で関連していたものと考えられる。

埋葬主体部出土遺物と副葬品 23・24号墓を除く23基の石棺墓では微細遺物を検出する目的で棺内堆積土を全量(土嚢袋930袋)回収し、下～中層の561袋については水洗選別を実施した結果の数量である。11号墓を除けば、いずれの堆積土中にも遺物は含まれるが、土器、定型石器や製品類が底面～下層で出土した石棺墓は、1号墓(二次加工剥片1)、2号墓(二次加工剥片1)、7号墓(石核1、土器片加工製品1)、9号墓(壺型土器1)、15号墓(石鍾1)、16号墓(二次加工剥片1)、18号墓(石鍾1、二次加工剥片2)、20号墓(二次加工剥片1)、21号墓(スクレイパー1)、25号墓(石鍾1)の10基である。このうち出土状況から明確に副葬品と呼べるものは、9号墓の棺内底面にて逆位で出土した、口縁部と胴部下半を欠く壺型土器(図83-16)以外にはない。副葬品ではないが同墓の検出面付近では、供献品と見られる深鉢も出土している(図88-9)。

出土土器からみる石棺墓の構築土 石棺墓の構築土は、礫や炭化物、遺物をほとんど含まない黄褐色シルト土と、礫や炭化物、土器小片を多く混入する黒褐色土の二種と、この中間的な様相を示す褐色土の三者があり、黄褐色シルト土は比較的古く、黒褐色土は新しい石棺墓の主要構成土となっている。表4は各石棺墓の構築土中に含まれた土器の時期と数量を示したもので、比較的古い1・3号墓と新しい時期の8・9・14号墓の構築土出土土器量には大きな開きがあり、調査時に古い石棺墓では時期判定をするのに難渋したほどである。この差は供給元(採取地)の土壌を反映した可能性のほか、構築時に土壌を選別した行為の差と見る

こともできるが、その違いが土色、土性、混入物のすべてにおよぶことから採取地が異なっていた可能性が高い。また構築土に含まれた土器の様相は、各石棺墓で若干の異同はあるものの、縄文時代中期後葉以降の土器は大半の石棺墓で出土するが、黒褐色土では円筒上層以前の土器を含み、黄褐色土ではこれを含まない傾向がある。以上から構築土の採取地として、石棺墓構築期以前の土器を含む黒褐色土は比較的周囲の旧表土(遺物包含層)を、また古い土器をほとんど

表4 石棺墓関連出土土器の重量と時期

遺構名	時期	構築土	重量(g)	円筒上層 出土数	円筒中層 出土数	円筒下層 出土数	中層 出土数	最上 出土数	大木 10式	中一 式	遺 状
1号墓	大木10式併行	黄褐色土	710				●	●			
2号墓	大木10式併行	黄褐色土	510				●	●			
3号墓	大木10式併行	黄褐色土	2270	○	○		●	●			
4号墓	大木10式併行	黄褐色土	1480				●	●			○
5号墓	大木10式併行	褐色土	800				●	●			
6号墓	大木10式併行	黒褐色土	1750				●	●			
7号墓	大木10式併行	黄褐色土	1450				●	●			
8号墓	牛ヶ沢式	黒褐色土	3800	○	○	○	●	●			○
9号墓	牛ヶ沢式	黒褐色土	10340	○	○	○	●	●			○
11号墓	不明	褐色土	0								
12号墓	大木10式併行	褐色土	370				●	●			
13号墓	縄文時代中期末葉 ～後期初期	褐色土	280				●	●			
14号墓	牛ヶ沢式	黒褐色土	2980	○	○	○	●	●			○
15号墓	大木10式併行	黄褐色土	3220	○	○		●	●			○
16号墓	大木10式併行	褐色土	800				●	●			
17号墓	大木10式併行以降	-	470	○	○		●	●			
18号墓	大木10式併行	-	1120	○	○		●	●			
19号墓	蟹沢式	-	540				●	●			○
20号墓	大木10式併行以降	-	310	○	○		●	●			
21号墓	大木10式併行	-	630				●	●			
22号墓	最花式以降	-	455				●	●			○
23号墓	縄文時代中期後葉以降	-	20								
24号墓	不明	-	10								
25号墓	最花式以降	-	240				●	●			
26号墓	最花式以降	-	370				●	●			

●→は特定の形式に比定できないが、中期後葉から後期初頭頃までに収まるもの

含まず、石棺墓構築期に近い遺物のみを含む黄褐色土は基本層第IV層が想定される。

以下では遺物の種別毎に、石棺墓と配石遺構、石棺墓A群構築土の出土遺物を記載するが、個別の観察の詳細については巻末の遺物観察表に譲り、記載は出土遺物の概要と特記事項のみに留めている。

土器(図82~89)

石棺墓の出土土器は図82~89に示した。出土量は総じて少なく、大部分が接合率の低い小片である。土器型式では円筒下層d2~蛭沢式まで認められるが、中でも大木10式併行~牛ヶ沢式が多い。6・7号墓の棺内堆積土上層では、構築時期より新しい型式が出土している。掲載にあたっては小片であっても型式が判別可能であれば極力図版に提示したため、他遺構種別に比べ土器の掲載率が高い。

2号墓出土の図82-7は口端に面取り状の平坦面が作出されており、大木10式併行よりも新しく位置付けられる可能性がある。

4号墓出土の図82-16・18は、幅約6mmと太めの横位沈線が施される。沈線は半円状の断面形を呈し、蛭沢式の特徴が認められる。19号墓出土図85-4・6も同様である。

図82-20は、幅広の沈線によって折返し状口縁の接合線を消している。先端が尖る2個1対の口端突起等、蛭沢式に含めるべきものと考えられる。

6号墓出土の図82-28・29は、同一個体の可能性がある壺形土器の胴部破片である。胴部下位に最大径をとる下ぶくれ器形で、細く鋭い沈線文様が施される。大木10式併行としたが、牛ヶ沢又は蛭沢式に伴う壺である可能性も考えられる。

8号墓出土の図83-12は、沈線区画内の縄文がミガキきれずに残存しており、[縄文全面施文一区画内(外)ミガキ潰し]の行程がわかる資料である。

9号墓出土の図83-16は胴部最大径が下部にある壺形土器で、胴部~頸部にかけては直線的に絞られる器形である。遺構の時期から、牛ヶ沢式に伴う壺である可能性がある。

図83-18の刺突文は、平面形が長方形となる斜向刺突列が施される。沈線区画文の痕跡も認められないため、牛ヶ沢式の胴部と判断した。

9号墓の直上層から出土した図83-23と24は、同一個体と思われたが接合しなかった。蛭沢式と考えられるが、胴部文様は大柄の渦巻つなぎ文となり、異質である。

13号墓出土の図84-2は、22号墓出土の図85-13と同様に幅の狭い逆U字垂下文が横位展開する文様構成と思われ、大木9式の影響下にある土器と考えられる。

14号墓出土の図84-14は、斜向刺突による隆起を押しつぶした、所謂花弁状刺突が施される破片である。川原平(6)遺跡(青森県教委 2015)出土資料では牛ヶ沢式と個体内共存しており、これらと同様の位置付けが考えられる。

15号墓出土の図84-27は、1段の縄を折り曲げて原体とした縄端刺突列が施された破片である。焼成・胎土は牛ヶ沢式に似る。

19号墓の図85-8は、縄の側面圧痕によって口縁部無文帯が区画される破片である。側面圧痕には胴部と同種(同一?)の原体が用いられている。牛ヶ沢式又は蛭沢式に伴うものと考えられる

21号墓の図85-12は、地文部と無文部の境界が隆起しており、ヒレ状貼付の一部と考えられ、短沈線が平行することからも、大木10式併行の深鉢胴部片と思われる。

配石遺構の出土土器は図86～88に示した。石棺墓同様全体的に出土量が少なく、かつ小片が主体である。10・17・23・25・27・29・31・38・40～47・51・53・58号配石等、出土土器の無い遺構も多数ある。型式範囲は円筒下層d2～蛭沢式まで見られ、円筒上層各式と蛭沢式がより多い特徴がある。

図86-1は内外面に赤色顔料が残存する口縁部破片である。他に特徴的な文様は認められないが、断面形状と胎土・焼成は大木10式併行に似る。

図86-14は壺形土器の胴部で、切断壺と考えられる個体である。切断面には、焼成前に刻まれた細かい加工痕が認められる。径約3mmの串状工具を用いて頸部にミシン目を入れ、口頸部を折り取る行程が想定される。

図86-11は、繊維が太く0段での燃りが緩い縄文原体が用いられた口縁部破片である。口縁の断面形状からも牛ヶ沢式又は蛭沢式に伴うものと考えられる。

図86-15は、外削ぎ状の口端と縦位の燃糸圧痕が認められる口縁部破片である。牛ヶ沢式と見なせるが、器形は壺形となる可能性がある。

図87-14は牛ヶ沢の胴部片で、横位区画隆帯の上下にそれぞれ別種の刺突列が施されている。下段の刺突列は、硬質の工具によるとすれば輪郭が曖昧なため指頭押圧の類である可能性がある。

図87-23は花卉状刺突が施された胴部破片で、牛ヶ沢式に併行すると考えられる。

図87-27は沈線文を持つ壺形土器の胴部破片で、蛭沢式と考えられる。

図87-28は内外面にS字状に連続する鰭状貼付を持つ棒状口端突起で、門前式の影響と考えられる。

図88-9は、層的には56号配石の直上層から出土した深鉢であるが、位置は9号墓隣接地の検出面付近で、既述のとおり供献品の可能性が高い。大小交互の8単位で波状口縁となり、小突起は胴部区画帯までの1条、大突起は底部付近までの2条の隆帯が垂下する。口頸部と胴部で区画単位数、文様モチーフが異なった、牛ヶ沢式の一類型と思われる。

図88-11は底部側面に貫通孔、直下の底面に穿孔途中の痕跡が認められる例である。補修孔による底部と胴部の結縛補修が意図されたが、何らかの理由により中断されたものと考えられる。

石棺墓A群構築土出土土器は図89に示した。石棺墓や配石遺構出土土器同様、出土量は少量で小片である。土器型式では円筒下層d2式から蛭沢式まで出土が認められる。

図89-1の沈線文は、逆U字垂下文または横位の連結沈線を伴うJ字区画文と思われる。沈線内には赤色顔料が残存する。

図89-7・8は牛ヶ沢式の頸部破片である。区画隆帯の刺突は、図89-7では竹管状工具によって、図89-8ではヘラ状工具によって施されている。

図89-9は所謂花卉状刺突をもつ胴部破片である。牛ヶ沢式に伴うものと考えられる。

図89-10・11は縦位回転の地文をもつ口縁部破片である。口端上面に面取り様の平坦面が作出されており、牛ヶ沢式若しくは蛭沢式に伴う地文土器と思われる。

図89-16は底面に網代痕が残る底部破片である。胴部に広い無文部が認められ、牛ヶ沢式に伴う壺形土器となる可能性がある。

剥片石器(図89)

本分冊で報告対象となる遺構から出土した剥片石器の内、7点を図示した。図89-20～24は石鏃であ

る。4を除いて黒色付着物がある。図89-25は石筥、図89-26はスクレイパーである。

礫石器(図90~95)

図90~95に、石棺墓、石棺墓A群構築土、配石遺構出土の礫石器を示した。掲載にあたっては石棺墓や配石遺構の石材として出土位置が確実に押さえられているものを中心に選定した。中でも構築土中の混在(意図しない包含)とは思われないものについては可能な限り掲載した。

石棺墓の石材としては、15号墓の脇石(15墓-11)および5号墓関連石材(5墓-24)の台石2点を掲載した。図90-2は大型で扁平の花崗閃緑岩、図90-1は板状に剥がれた安山岩で、ともに広範囲ではないが顕著な磨面が形成される。総量からすればわずかだが、石棺墓の石材がかならずしも新規に獲得されたわけではなく、集落内でも調達されたことを示している。

配石遺構の石材として台石・石皿が利用された事例は石棺墓よりも多く、構築土中に含まれたものも含むが、台石17点、石皿7点が出土している。このうち構築土中の混在とは思われない、意図的な配置と見なされたものを掲載した。特筆される出土状況として、12号墓と62号配石(石皿未製品)、8号墓と43号配石(台石)等、石棺墓の傍らに石器が設置される事例が複数見られる。8号墓の北東部に隣接する43号配石では、台石とともに小型の石棒(図97-5)が出土し、北西部にはこれと対向する位置に64号配石とした石棒(図97-7)が出土しており、意図的に配置された可能性が高い。また6号墓南側に隣接する3号配石では、集積された丸石(S-21・24・25・27~29・31)を挟み、立石(S-1)と石皿(S-21、図91-1)を東西に対置させたようにも見える。

このほか立石と見なされた配石遺構のうち、51号配石、59号配石の2基で石器や石棒が出土した。図92-2は51号配石の立石(台石)で、使用痕の範囲は狭いものの一部に磨面が形成される。また59号配石の立石には石棒が利用されており、両遺構ともに樹立状態で発見されている。

37号配石では敷き並べた扁平礫(S-6)の両面に、広範囲に磨面が形成されている(図91-4)。

石棺墓B群に伴う配石遺構群の配列状況は、A群で見られたほどの強い意図や人為性が読み取れず、また石棺墓と強く結びついた土層堆積状況も確認できないが、台石・石皿を多数含むという石材選択の特色がある。特に1001号配石や1007号配石は、少ない配石構成礫中に台石・石皿を含んでおり、意図的に集積された可能性を感じさせる。

台石・石皿以外では、石錘Ⅱ類とした分銅型の石錘は、全出土数188点のうちの半数以上(52%・99点)が石棺墓A群周囲で出土する。一方石棺墓B・C群ではこの出土量が少ない。湯ノ沢川対岸の砂子瀬遺跡(縄文時代後期前葉から後葉を中心とする集落)でも250点を越える石錘が出土している。第543集に拠れば縄文時代後期前葉期の包含層(特に沢)で多数出土することからも、石棺墓A群での出土量の多さは、墓域との結びつきではなく、時期的な出土傾向が表れたものと言える。

磨製石斧は1点出土し、図91-2は16号墓の蓋石上の15号配石構築土中から出土した。

土製品(図96)

石棺墓・配石遺構からは18点の土製品が出土し、その内12点を図示した。石棺墓・配石遺構から出土した18点の土製品のうち15点が土器片を再利用した土製品である。このことは一見偏った出土状況を示しているようだが、詳細に出土遺物の特徴や出土状況を確認するとそうではないことがわかる。

これらの土器片加工品は、おおむね縄文時代中期後葉～末葉の土器片を利用したと考えられるが、図96-2のように縄文時代前期末葉の土器片を利用したものや、図96-11のように縄文時代中期中葉の土器片を利用したものもある。これらの時期幅を見るだけでも様々な時期の遺物が混入していることがわかる。

出土状況の面では、石棺墓の埋葬主体部からは、2号墓の棺内堆積土上層で図96-1、また7号墓の棺内堆積土下層（埋葬面以下の盛土の可能性もある）で図96-3が出土しているものの、整地土及び掘方などから出土したものが大半である。従って、これらの土器片加工品は、石棺墓や配石遺構と積極的な関連性を持つ可能性は低いと考えられる。このほか埋葬主体部からは、非掲載ではあるが1号墓の棺内堆積土下層で焼成粘土塊が出土している。

その他には石棺墓A群の構築土から図96-5の鐔形土製品とみられる土製品が出土している。鈕の部分の破片とみられ、表裏面を貫通する孔が焼成前に穿たれている。

石製品(図97～99)

石棺墓・配石遺構からは14点の石製品が出土し、その内10点を図示した。土製品と同様に石棺墓から出土した石製品は掘方や堆積土上層からの出土が大半であり、古い時期のものを含む可能性が高い。特に図97-3の線刻のある石冠は中期中葉頃の所産である可能性が高い。ただし、配石遺構については、図示した石棒を含め出土遺物そのものが配石として利用されている場合も多い。

図98と図99には9号墓と9号墓の整地土から出土した線刻鏝を掲載した。

図98は石棺墓壁石に用いられた線刻鏝である。線刻は先端の尖った篋状もしくは棒状の工具を用いており、一気に線が引かれる場合と、線を重ね描きしながら引かれる場合とがある。基本的に直線のみで構成され、三角形の図形と十字形の図形とが重なっている。

図99の線刻鏝には4箇所に線刻が描かれている。①～③は図98と同様直線の組み合わせによる図形であるが、④は曲線と直線とを組み合わせているように見える。

表5 石棺墓観察表

遺構名	位置 群	長軸 方向	平面 形	規模 (cm)		壘石						蓋石	箱内埴積土			構築土	時期	備考										
				長軸	短軸	数		石質数量					設置	西 人 土	黄 色 土				大 木 片									
						北	南	西	東	総数	粗									細	緑	花						
1号墓 A	900-0-01	西103°	A	(190)	50	35	45	(0)	(0)	(7)	5	1	1	A	無	-	●	●	●	上層	-	大木10式併行	底石有					
2号墓 A	900-84	西98°	D	(225)	90	-	40	(6)	1	(11)	6	1	2	A	無	-	●	●	●	無	-	大木10式併行						
3号墓 A	900-7-01	西107°	A	210	45	35	40	6	6	1	14	4	3	-	7	A	●	●	●	無	●	-	大木10式併行					
4号墓 A	900-7-03 83-04	西98°	A	(200)	70	35	50	5	(6)	(1)	(11)	-	-	-	6	A	無	●	●	●	●	●	-	大木10式併行 (前式式期に由来)	後世に改変か、箱内に立石			
5号墓 A	900-N-82	西106°	A	(200)	35	(30)	40	4	7	1	(10)	-	-	3	2	4	3	A	無	●	●	●	●	-	大木10式併行	岩盤掘り抜く、石材に台石転用		
6号墓 A	900-0-01	西108°	A	210	50	40	35	5	6	1	13	-	-	7	5	B	A	-	●	●	●	●	●	-	大木10式併行	7号墓隣接		
7号墓 A	900-N-82	西103°	A	215	45	30	40	5	4	1	11	-	-	3	8	A	A	●	●	●	●	●	●	-	大木10式併行	6号墓隣接		
8号墓 A	900-N-84	西101°	C	185	45	-	35	5	5	1	12	-	6	1	3	1	B	B	●	●	●	●	●	●	-	牛ヶ沢式	16号配石と構築同時	
9号墓 A	900-N-81 81-82	西14°	B	180	30	-	25	1	1	4	4	10	-	1	9	-	B	A	●	●	●	●	●	●	-	牛ヶ沢式	蓋石完存、土器副葬 +供献 多数の列石伴う	
11号墓 A	900-Q-83	(西96°)	D	-	-	-	-	-	-	(0)	(3)	-	-	5	-	A	無	-	●	●	●	●	●	○	-	不明	遺存状況不良	
12号墓 A	900-Q-83	西110°	B	205	45	-	30	5	5	1	12	-	1	1	5	5	A	無	-	●	●	●	○	-	大木10式併行			
13号墓 A	900-P-83	西106°	B	180	50	-	35	6	5	1	13	-	3	-	8	1	A	無	-	●	●	○	-	-	縄文時代中期末葉 ～後期初頭			
14号墓 A	900-0-00	西127°	C	190	(80)	-	25	5	5	1	11	-	-	4	6	1	B	B	●	●	●	●	●	●	-	牛ヶ沢式	多数の列石伴う	
15号墓 A	900-N-83	西94°	A	185	45	30	40	(0)	4	1	9	-	1	-	7	A	A	-	●	●	●	●	●	-	大木10式併行 (前式式期に由来)	後世、26号配石に譲 された後復旧。石材 に台石転用		
16号墓 A	900-M-83	西110°	B	130	30	-	25	3	3	1	8	-	-	8	-	B	B	-	●	●	●	●	●	●	-	大木10式併行	多数の列石伴う	
17号墓 B	900-Q-91	東8°	A	(190)	50	30	40	0	0	(0)	(5)	1	-	3	1	A	無	-	-	●	●	●	-	-	下層	-	大木10式併行以降	
18号墓 B	900-Q-91	西15°	A	170	50	35	40	1	1	6	6	14	-	-	13	1	A	無	-	●	●	●	●	●	-	大木10式併行		
19号墓 B	900-0-11	西110°	D	(195)	(90)	-	45	-	(0)	1	(3)	1	1	-	1	A	無	-	●	●	●	●	●	●	-	壱沢式		
20号墓 B	900-Q-90	西130°	D	(205)	(80)	-	10	-	-	-	-	1	-	-	-	A	無	-	●	●	●	●	●	●	-	大木10式併行以降		
21号墓 B	900-Q-91	西14°	B	(185)	(90)	-	45	-	1	(0)	(5)	3	1	-	1	A	無	-	●	●	●	●	●	●	-	大木10式併行	底石有	
22号墓 B	900-Q-90	西6°	D	(160)	(90)	-	25	-	(0)	(0)	(2)	-	-	2	-	A	無	-	●	●	●	●	●	●	-	無	最花式以降	
23号墓 C	900-103	西28°	B	(170)	50	-	40	-	(0)	5	(10)	-	-	-	-	A	無	-	●	●	●	●	●	●	-	無	縄文時代中期後葉以降	
24号墓 C	900-101	西2°	B	110	45	-	30	-	1	(0)	4	(6)	-	-	-	A	無	-	●	●	●	●	●	●	-	不明		
25号墓 C	900-V-97	西90°	A	(210)	50	30	50	5	6	1	13	12	-	1	-	A	無	-	●	●	●	●	●	●	-	無	最花式以降	北壁は二重に
26号墓 C	900-0-07	西101°	D	(160)	55	40	40	(0)	(0)	(0)	(9)	3	-	3	2	A	無	-	●	●	●	●	●	●	-	中層	-	最花式以降

【凡例】

長軸方向 長軸が東西方向のものは西壁の、また南北方向のものは北壁の真北からの東西の振れ角を示した。

平面形



A. 台形

B. 長方形

C. 紡錘形

D. その他

壘石(長軸) 短辺側の両壘石の下端部の距離を計測した。抜き取り痕や傾方下端からの推定値は(括弧)で記した。

壘石(短軸) 平面形A(台形)は幅広部と幅狭部の二点を、その他については平均値を計測した。

壘石(深さ) 平均的な壘石の高さから、埋面までの距離を計測した。蓋石で閉塞された時の深さとは一致しない。

石材 粗-粗野安山岩 安/玄-安山岩/玄武岩 凝-凝灰岩 緑-緑色凝灰岩 花-花崗閃緑岩

蓋石 A-両側の壘石に大型の石材を架け渡すもの。 B-右構築上に小型の石材を並べたもの。

整地土 壘石設置以前の造成土。黒褐色土と黄褐色土が見られる。

盛土 壘石設置後の造成土。黒褐色土と黄褐色土が見られる。

埴積土 流入土-しまりのないボソボソした、後世の自然流入土と考えられるもの

黒色土-黒褐色シルト土で人為堆積の可能性が高い。

黄褐色土-黄褐色砂質シルト土で人為堆積土。

箱内埴積土中の大型塊 箱内に落ち込んだ、蓋石の可能性のある大型塊の出土層位を示した。

表6 配石遺構観察表

遺構名	位置 群 グリッド	配石種別	構成礎					関連遺構	時期	備考			
			相	幅	縦	花	数量						
3号配石	A VM-82-83	集石(立石+丸石、石座)	5	3	8	1	約30	6号墓(蓋石)	大木10式併行	立石+丸石+石座を含む集石。6号墓南側隣接。丸石と石座にレベル差。			
4号配石	A VM-82	立石+丸石					1	5	9号墓-8号配石	牛ヶ沢式以降	立石+丸石の集石。上部は後世に追加。		
5号配石	A VM-80-81	丸石					2	2	6-39号配石	蓋沢式以降	丸石4の集石。6-39号配石と同一の盛土上。		
6号配石	A VM-80-81	列石	3	1	4	1		9	5-39号配石	蓋沢式以降	コの字状の列石。		
9号配石	A VM-84	集石	○	○	○				8号墓	牛ヶ沢式以降	8号墓壁石設置後、下面-大型板状礎、中面-板状礎砂面の集石、上面-川原石。		
10号配石	A VM-84-85	列石	4				○	7	11-12号配石	蓋沢式以降	石棺墓A群南東端の一番外側の配石。11-12号配石とは一連の石列か。		
11号配石	A VM-N-84	列石	4	3	2	○	10以上		10-12号配石	蓋沢式	大型の土坑状掘方。掘り返しあり。中位に集石。礎は深く斜位に設置。10-12号配石とは一連の石列か。		
12号配石	A VM-L-83	列石	9	3	1	○	16		11-10号配石	蓋沢式	地山露含む。地山巨石を挟み11号配石と景観上連続。石棺墓A群の一番外側の石列。		
13号配石	A VM-83-84	列石	4	1	2	○	8		16-33号配石	牛ヶ沢式	花園岡緑道を立て並べた列石。16-33号配石の石列の南側に付加。		
14号配石	A VM-83	列石	2	6	2	○	11		16号墓	大木10式併行	16号墓壁石と同時。3号配石を繋げる弧状の列石。		
15号配石	A VM-83	列石	7	5	1	○	14		16号墓	大木10式併行以降	14-21号配石とは景観上一列一体。16号墓の蓋石設置以降で、21号配石→木配石の順で設置。		
16号配石	A VM-N-84	列石					4	○	6	8号墓	牛ヶ沢式	8号墓壁石と同時。壁石と連結する列石。33号配石へ接続。	
17号配石	A VM-82	集石	1	3	2	○	7		14号墓	牛ヶ沢式以降	18-19号配石とともに14号墓を囲む外側の集石。		
18号配石	A VM-81-82	列石	5	3	7	1	○	17		14号墓	牛ヶ沢式	17-19号配石とともに14号墓を囲むコの字状の列石。	
19号配石	A VM-81-82	列石	2	5	1	○	10		14号墓(壁石)	牛ヶ沢式	17-18号配石とともに14号墓を囲む内側の丁字状の列石。S-1・2は14号墓壁石と共有。		
20号配石	A VM-82	列石					3		3	5-7号墓	牛ヶ沢式	5-7号墓間の東西方向の列石。	
21号配石	A VM-83	列石					5	1	○	7	16号墓	大木10式併行	14-15号配石とは景観上一列一体。16号墓の蓋石設置以降に木配石→15号配石の順で設置。
22号配石	A VM-L-82	列石	8	6	1				15		-	牛ヶ沢式以降	石棺墓A群南端の列石。土坑状の掘方あり。一部地山露含む。
23号配石	A VM-N-84	集石	2	1	3		○	2		10号配石	蓋沢式以降	人為性乏しい。10号配石の裏込めか。	
24号配石	A VM-84	集石					2		○	4号墓	中野末重-8号墓以降	4号墓隣接の石2個の集石。	
25号配石	A VM-P-83	集石					1	1	1	3	13号墓	大木10式併行	13号墓に伴う石3個を並べた集石。
26号配石	A VM-N-83	その他	2	5	2	7	○	27		15号墓	蓋沢式	15号墓(壁石、墓石、蓋石の一部と堆積土上部)を破壊。墓石と墓石は復旧。復旧部を含む配石石材2個の接合関係。	
27号配石	A VM-Q-82	列石	1	3	5	8	1	○	20	11・12号墓	大木10式併行以降	11-12号墓西側の南北の列石。	
28号配石	A VM-Q-83	置石 (大型礎)					1	1		2	12号墓(壁石) 27号配石	大木10式併行	12号墓壁石に伴う大型の凝灰岩。27号配石とは堆積土類似。
29号配石	A VM-N-84	集石	2	1	1	○	4		○	8号墓(蓋石)	牛ヶ沢式以降	8号墓蓋石と連続する。人為性の不明瞭な列石。	
31号配石	A VM-N-83	集石					6		○	8	7号墓	大木10式併行以降	7号墓蓋石と連続する集石。
32号配石	A VM-N-81	列石	2	3	12	2	○	約30		9号墓	牛ヶ沢式	9号墓壁石に伴う列石。一部は脇石後に付加。	
33号配石	A VM-N-83	列石	1	1	1	2		5		16号墓(壁石以降蓋石) 16号配石	大木10式併行	15号墓と16号墓を隔す大型礎7個の列石。配列は16号配石と接続し、景観上連続。掘方は15号墓間掘土(を切り込む。16号墓の壁石設置以降、蓋石設置以前)。	
35号配石	A VM-N-83	その他					2	1	○	4	26号配石	蓋沢式以降	26号配石に連続し、新しい。
36号配石	A VM-P-84	立石					1			1	4号墓 40号配石	牛ヶ沢式	大型の掘方をもつ立石。掘方下部で柱痕確認。重直遺構か変位の可能性も。
37号配石	A VM-85-86	集石	○	○	○					約20	-	大木10式併行以降	石棺墓A群東側の集石。掘方伴い意図的配置あり。石材に台石転用。
38号配石	A VM-N-84	置石	○	○				5		8号墓	牛ヶ沢式	8号墓壁石裏込めに伴う石5個の集石。	
39号配石	A VM-P-81	集石					1			1	5-6号配石	蓋沢式以降	下部の盛土は5-6号配石と共有。
40号配石	A VM-P-84	置石					1			1	4号墓-36号配石	大木10式併行	4号墓壁石に隣接した大型の凝灰岩
43号配石	A VM-N-84	集石(遺物)					1	1	○	3	8号墓	牛ヶ沢式	8号墓壁石に伴う。台石+石棒+自然礎。
44号配石	A VM-82	集石	5	2	3	○		9		14号墓	牛ヶ沢式	14号墓東側に隣接。設置も同じ。	
47号配石	A VM-N-82	列石	2	3	4	○		11		6号墓-57号配石	大木10式併行 →牛ヶ沢式	57号配石から6号墓方向へ派生。	
48号配石	A VM-83	置石 (大型礎)	2				1	○	3	16号墓	大木10式併行以前	SK5572直上の300kg超の巨大礎。16号墓蓋石以前の設置。	
50号配石	A VM-83	集石								約20	-	縄文時代中期末葉以前	重複するすべての遺構より古い。最終景観では地中に埋没。30個前後の大小礎の集石で、外側に大型礎。内部に小型礎の意図的な配置。
51号配石	A VM-L-80	立石					1			1	-	縄文時代中期末葉以前	石棺墓A群南西部の小型の立石。掘方あり。周辺ビット群と関連か。
52号配石	A VM-N-81	集石	1	1	1			3		9号墓	牛ヶ沢式	9号墓に伴う土坑状の掘方をもつ配石。	
53号配石	A VM-82	集石						3		-	縄文時代中期末葉以前	14号墓直下の集石。同墓とは時間的に不連続。	
54号配石	A VM-N-82	置石 (大型礎)					2		2	7・6号墓	大木10式併行	大型塊状の礎2個の配石。S-2の一部は設置後露出。後に6号墓の壁石として利用。	

遺構名	位置 群/グリッド	配石種別	構成線					関連遺構	時期	備考	
			相	縦	横	花	他				
56号配石	A VM-8-81	集石			○	○	100以上	4号配石(上部丸石)	牛ヶ沢式	大小竪100以上の集石。9号墓に隣接するが時間的に不連続。配石面にトチノキを多量に含む炭化物混入。放射線炭素年代測定、種子同定分析実施。	
57号配石	A VM-9-82	列石	○	○	○	○	100以上	9号墓	牛ヶ沢式	9号墓壁石以降陥石以前の、多数の中～小型竪を南北に集積する配石で、58号配石を覆う。	
58号配石	A VM-N-82	列石	1	2	2	1	○	9	9号墓	牛ヶ沢式	9号墓壁石設置後。大型竪の縦置き。上部は57号配石に覆われる。
59号配石	A VM-P-84	立石			1			1	-	大木10式併行以前	厩方(HP5822)をもつ小型の立石(石棟)。
60号配石	A VM-91-82	立石	次)					1	-	縄文時代中期中葉～末葉	重量2350kgの超大型の立石。掘方から中期後葉以降の土器出土。炭化物の放射性炭素年代測定実施。
61号配石	A VM-0-83	置石(大型竪)	1					1	2号墓	大木10式併行以前	2号墓隣接の浅い皿状の掘方をもつ大型相馬安山岩。
62号配石	A VM-Q-83	置石(遺物)			1			1	12号墓	大木10式併行	12号墓隣接の石皿未製品。
63号配石	A VM-0-83	立石			1			1	4号墓	大木10式併行	4号墓竪内の立石。
64号配石	A VM-N-84	置石(遺物)	※)					1	8号墓・9号配石	牛ヶ沢式以降	9号配石北側に置かれた石棟。43号配石とは8号墓を挟み東西に対置。
1001号配石	他 VM-9-91	列石		○	○			10	-	縄文時代中期後葉以降	周囲SPより新しい。台石石皿3個を含む。
1002号配石	他 VM-1-90-91	集石		○	○			約10	-	縄文時代中期後葉以降	小型の集石。
1003号配石	他 VM-P-94	列石						12	-	覆林式以降	現代耕作土直下。昭和の苗代関連の溝跡とも併行。新しい遺構の可能性も。
1004号配石	B VM-9-91	列石		○	○			約40	-	最花式以降	17号墓東側に隣接する南北の列石。台石1個含む。
1005号配石	B VM-Q-92	集石		○	○	○		約30	1006号配石	縄文時代中期後葉以降	小型竪の集石。S-10～27は十字状配置あり。
1006号配石	B VM-Q-92	列石		○	○			5	1005号配石	縄文時代中期後葉以降	1005号配石隣接。石材は大型。掘方なし。
1007号配石	他 VM-9-91-92	集石		○				約30	-	不明	一部掘方を伴い、横置きもあり。台石石皿を4個含む。
1008号配石	B VM-P-90	列石			2			2	19号墓	後期初頭以降	19号墓西側隣接。関連土を掘り込む。
1009号配石	他 VM-U-70	集石						7	S138(新)	最花式以降	北側斜面縁辺の配石。S138堆積土中(伊石直上)に設置。
4501号配石	他 VM-S-T-86	列石		○	○			約50	-	大木10式併行以降	石棺墓A群北東のT字状の列石。一部地山竪を含む。設置面に埴土あり。

表7 振替・統合・抹消遺構一覧

【石棺墓・配石遺構からの変更】		【他遺構から配石遺構への変更】	
変更前	変更後	変更前	変更後
10号墓	配石遺構の一部と判断	15号墓上層・II層・赤土	26号配石 第1層
1号配石	近代以降の石垣	26号配石 赤土(II層)	26号配石 第1層
2号配石	石棺墓A群南東部の列石の集合。10・13・14号配石に解体。	26号配石 黒土3層	26号配石 第2層
7号配石	抹消	SK5582	37号配石掘方
8号配石	SNS501	SD5501 第4～6層	52号配石
30号配石	抹消	南3層	56号配石
34号配石	26号配石に統合	SD5501 第1～3層、掘方、堆積土、南3層	57号配石
41号配石	SNS502に變更	列石第7層	58号配石
42号配石	SNS503に變更	SP5822	59号配石
45号配石	抹消	巨石	60号配石
46号配石	S155029/2	巨石掘方 褐色土	60号配石 第5層
49号配石	抹消	巨石掘方 黄色土	60号配石 第6層
55号配石	抹消	SK5556	61号配石掘方
101号配石	S121	SK5589	15号墓掘方整地土
4001号配石(SQ4001)	抹消	【他遺構から石棺墓への変更】	
4001号配石(SQ4002)	抹消	SK5501～SK5516	1号墓～16号墓
4502号配石(SQ4502)	4501号配石に統合	SK1103	17号墓
【複数遺構名義で取り上げたが、石棺墓に帰属させたもの】		SK1107	18号墓
8号墓～16号配石	8号墓	SK1108	19号墓
14号墓～17・18・19号配石	14号墓	SK1109	20号墓
【石棺墓関連層位へ変更したもの】		SK1110	21号墓
南4層	9号墓整地土	SK5569	22号墓
南2層	石棺墓A群横墓土	SK1064	23号墓
【石棺墓関連層位から他遺構へ変更したもの】		SK1065	24号墓
SD5501 第7層	沢3	SK1086	25号墓
SD5502	沢3	SK1501	26号墓
南1層	遺構外		

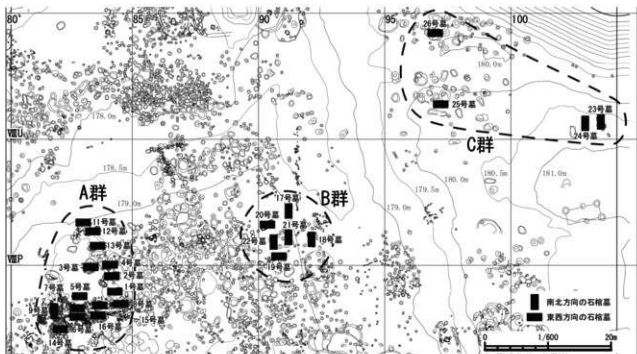
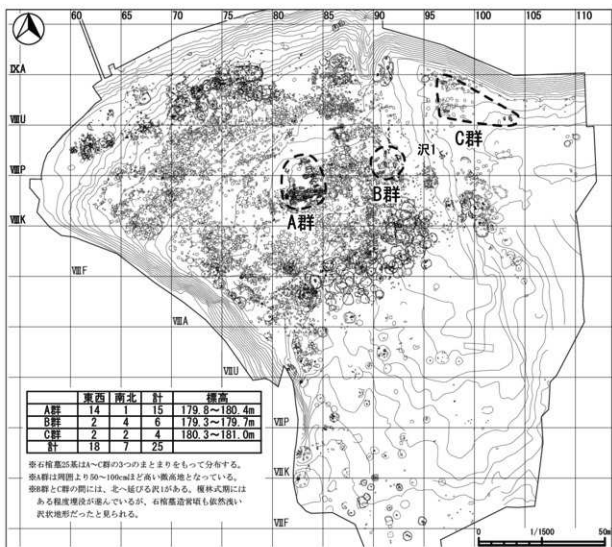
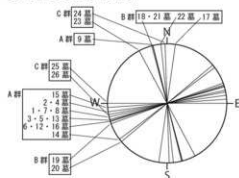


図7 石棺墓群の位置

① 石棺墓の長軸方向



③ 長軸規模の数量分布



④ 壁石・脇石・蓋石の残存状況

位置	A 群			B 群			C 群																		
石棺	1	2	3	4	5	6	7	8	9	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
壁石	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
脇石	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
蓋石	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	

● 残存、○ 半分以上残存、△ 一部が残存

② 埋葬主体部の平面形と壁石使用石材

	A 台形	B 長方形	C 丸形	D その他	
粗馬鞍山岩主体	1墓・25墓	21墓			3
粗馬鞍山岩+花崗閃緑岩	3墓			2墓	2
花崗閃緑岩主体	7墓・15墓				2
花崗閃緑岩+緑色輝火岩	4墓・5墓	6墓	12墓		4
緑色輝火岩主体	17墓・18墓	9墓・13墓	16墓	14墓	7
その他		23墓・24墓	8墓	19墓・20墓	7
	10	7	2	6	

⑤ 壁石の設置と底面の敷設状況

	構築方法A			構築方法B		
	A 壁石設置部掘削あり	B 壁石設置部掘削なし	C 盛土とともに設置			
1 あり				1墓・3墓・21墓	17墓・11墓	8墓・9墓・14墓
2 なし				3墓・17墓・18墓・20墓・24墓	4墓・6墓・12墓・13墓	20墓
不明	30墓	29墓	11墓			

⑥ 石棺墓と配石遺構(配石遺構種別)

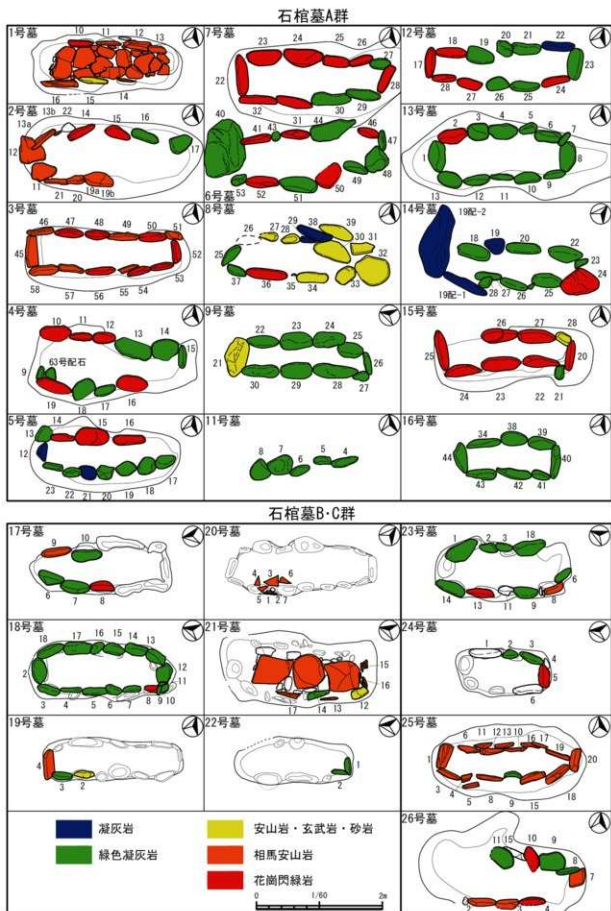
時期	配石遺構の種別					
	A. 列石	B. 立石	C. 丸石	D. 集石	E. 置石	その他
1号墓	1					
2号墓	1				61号配石	
3号墓	1					
4号墓	1		36・63配	24号配石	40号配石	
5号墓	1	20号配石				
6号墓	1	47号配石	3号配石	3号配石	3号配石	54号配石
7号墓	1	20号配石			31号配石	54号配石
8号墓	2	16号配石			9・29・30・6配	64号配石
9号墓	2	32・57・58配	4号配石	4号配石	52号配石	
11号墓	1	27号配石				
12号墓	1	27号配石			28・62配	
13号墓	1				25号配石	
14号墓	2	18・19号配石			17・44配	
15号墓	1					26号配石
16号墓	1	14・15・21・20配				48号配石
17号墓	1	1004号配石				
18号墓	1	1005・1006配				
19号墓	2	1008号配石				
20号墓	1					
21号墓	1					
22号墓	3					
23号墓	1					
24号墓	3					
25号墓	1?					
26号墓	1?					

⑦ 石棺墓と関連遺構(構築段階別)

時期	石棺墓構築段階			
	壁石設置	脇石設置	蓋石設置	不明
1号墓	1	SK5555		
2号墓	1			61号配石
3号墓	1			SK5572
4号墓	1	24・40・63配		36号配石
5号墓	1			20号配石
6号墓	1	54号配石		
7号墓	1	54号配石		
8号墓	2	16・38・43配		9・29・64配
9号墓	2	4・32・52・57・58配		
11号墓	1			
12号墓	1	27・28号配石		62号配石
13号墓	1			25号配石
14号墓	2	17・19・44配		
15号墓	1			26配・SK5592
16号墓	1	14・15・33配		21号配石
17号墓	1			1004号配石
18号墓	1			1005・1006配
19号墓	2			1108号配石
20号墓	1			
21号墓	1			
22号墓	3			
23号墓	1			
24号墓	3			
25号墓	1?			
26号墓	1?			

時期の凡例 1...縄文時代中期末葉 2...縄文時代後期初葉 3...不明

図8 石棺墓の諸特徴



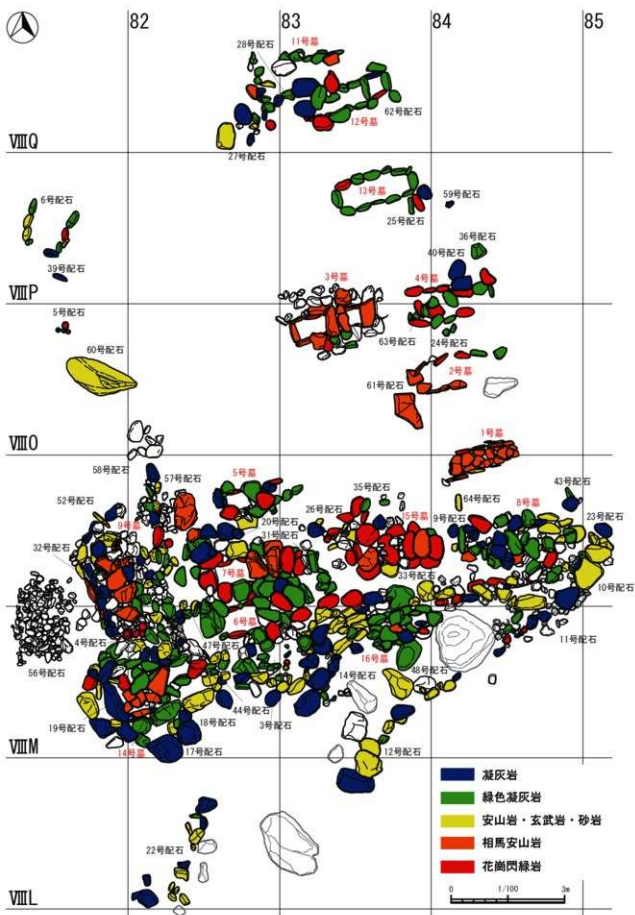


図10 石棺墓A群石質分布図

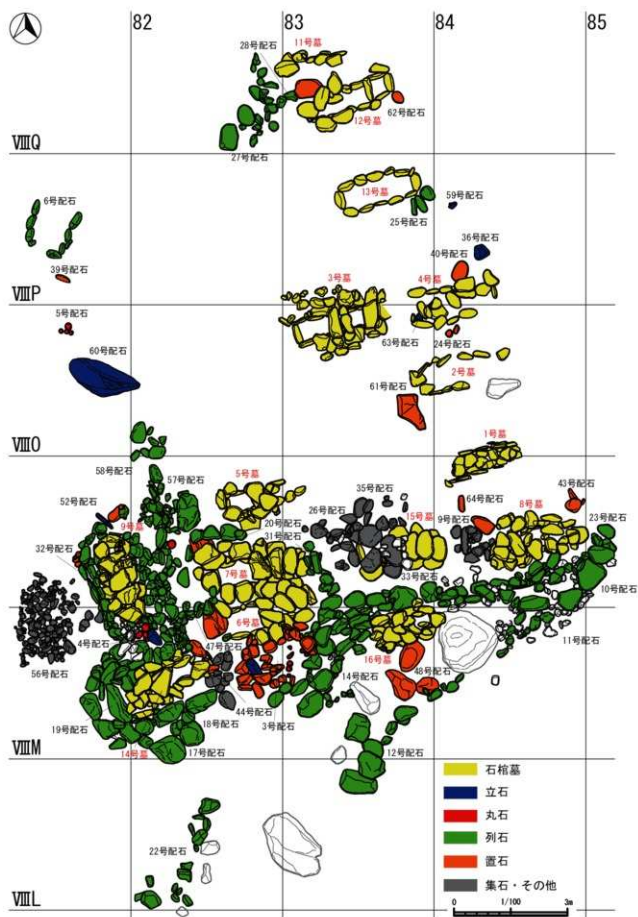
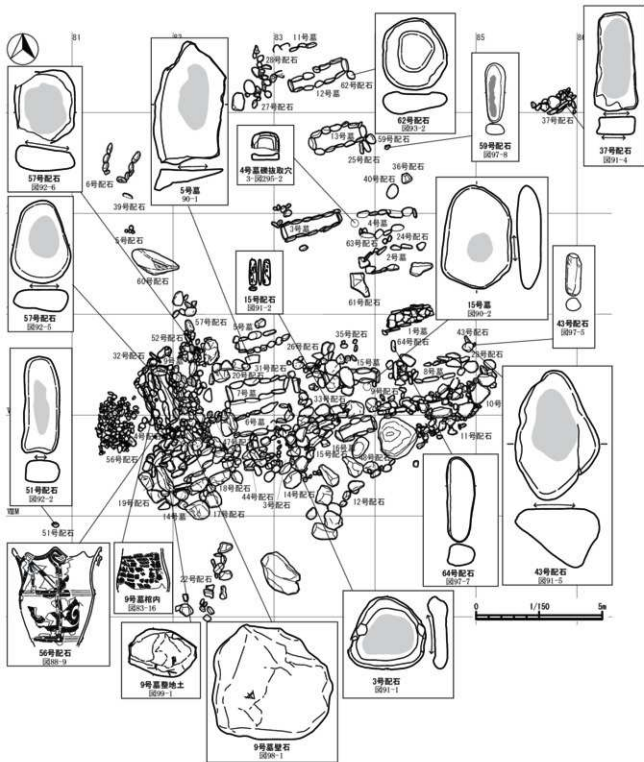
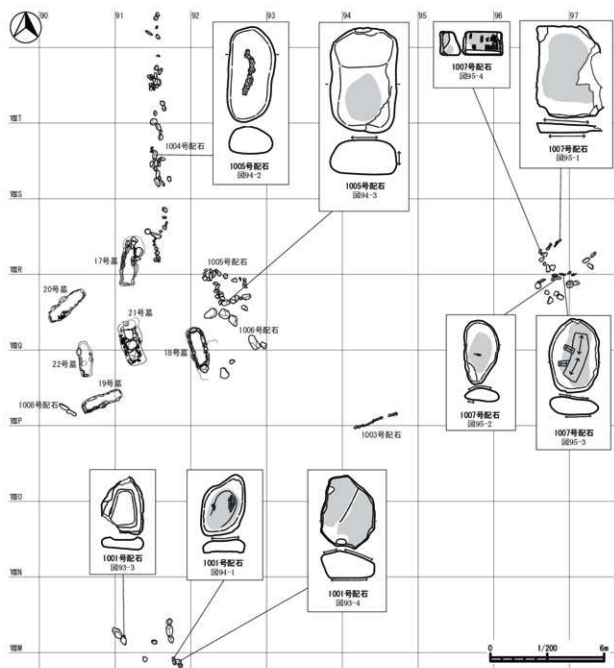


図11 石棺墓A群の陪石遺構種別分布図



遺構名	出土位置・層位	遺物種別	遺物番号	関連図版	遺構名	出土位置・層位	遺物種別	遺物番号	関連図版
1号墓	塚石抜き取り穴	台石	3-図295-2	図20 C-C'	51号配石	立石(S-1)	台石	図92-2	図74 A-A' B-B'
5号墓	石棺墓部材(S-24)	台石	図90-1	図24・25 B-B'	56号配石	9号墓検出面	土器	図88-9	図61
9号墓	石棺墓棺内底面	土器	図83-16	図31 C-C'	57号配石	墓石内の遺物	石皿	図93-1	図58 D-D'
9号墓	壁石(S-21)	線刻織	図98-1	図31・98	57号配石	墓石内の遺物	石皿	図92-6	図58 D-D'
9号墓	整地土	線刻織	図99-1	図31・99	57号配石	墓石内の遺物	石皿	図92-5	図61
15号墓	石棺墓壁石(S-11)	台石	図90-2	図40・52	59号配石	立石(S-1)	石棒	図97-8	図55 E-E'・56 E-E'
3号配石	墓石の一部(S-21)	石皿	図91-1	図62	62号配石	12号墓隣接(S-1)	石棒	図93-2	図54 C-C'・56 C-C'
37号配石	墓石の一部(S-6)	台石	図91-4	図54 A-A'・B-B'	64号配石	8号墓墓土上	石棒	図97-7	図62・68
43号配石	配石遺構(S-3)	台石	図91-5	図62	15号配石	掘方(16号墓墓石上)	磨製石斧	図91-2	図72
43号配石	配石遺構(S-2)	石棒	図97-5	図62・68					

図12 石棺墓A群の主な出土遺物の位置



遺構名	位置・性格	遺物種別	図番号	関連遺構図版	遺構名	位置・性格	遺物種別	図番号	関連遺構図版
1001号配石-1	配石遺構部材 (S-1)	石皿	図94-1	図78	1007号配石-4	配石遺構部材 (S-10)	台石	図95-3	図80 A-A'
1001号配石	配石遺構部材 (S-2)	石皿	図93-3	図78	1007号配石-1	配石遺構部材 (S-9)	台石	図95-2	図80
1001号配石-1	配石遺構部材 (S-2)	台石	図93-4	図78	1007号配石-2	配石遺構部材 (S-22)	台石	図95-4	図80
1004号配石-2	配石遺構部材 (S-11)	台石	図94-2	図79	1007号配石-2	配石遺構部材 (S-26)	台石	図95-1	図80
1005号配石	配石遺構部材 (S-19)	台石	図94-3	図80					

図13 石棺墓B群の主な出土遺物の位置

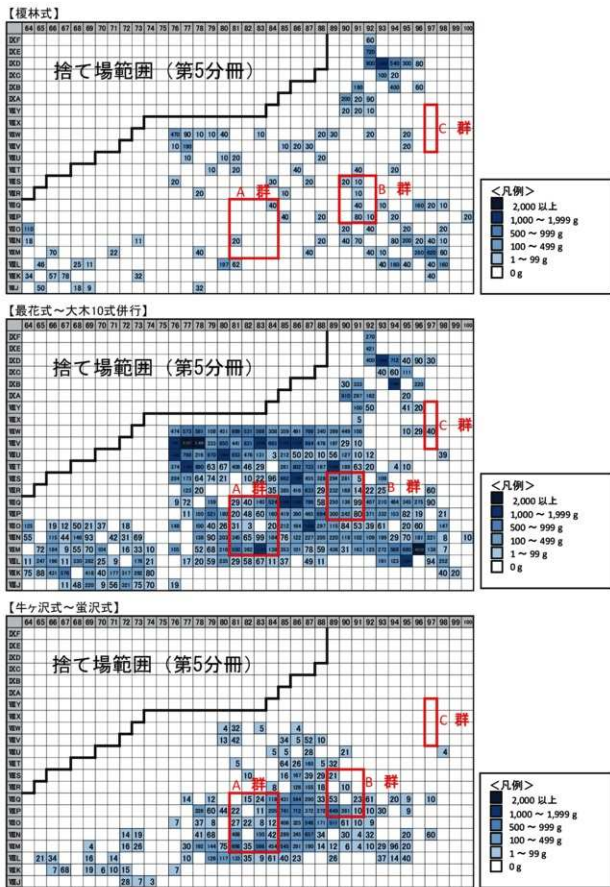


図14 石棺墓構築期の出土土器分布

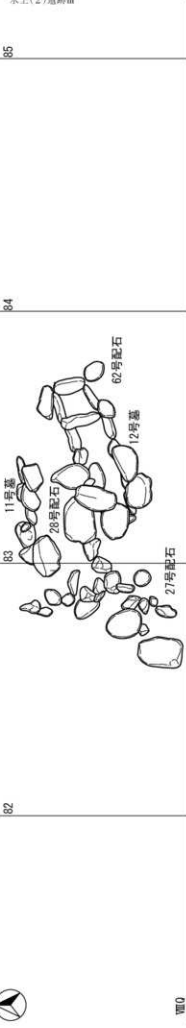


82

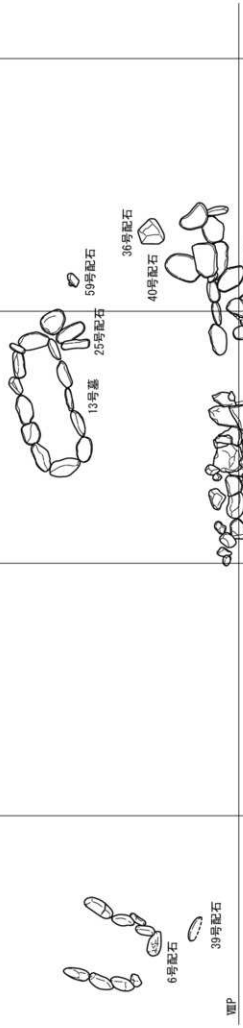
83

84

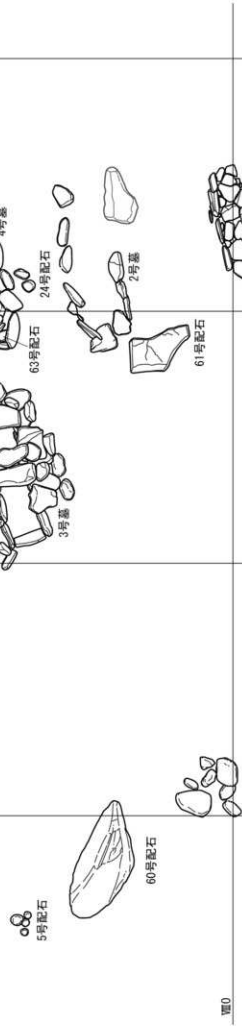
85



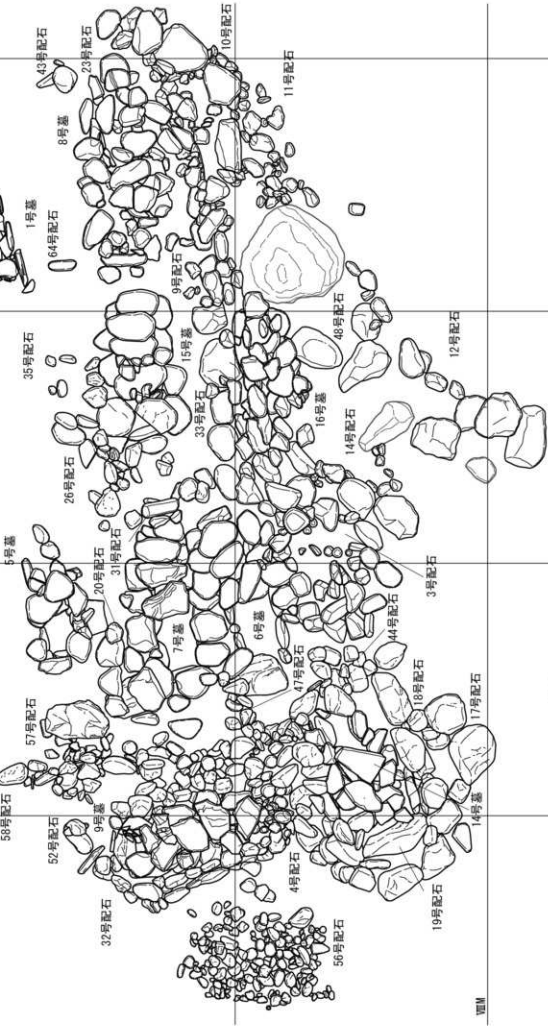
Ⅷ0



ⅧP



Ⅷ0



ⅧM





82

83

84

85

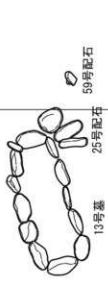


11号墓

28号配石

12号墓

W0 27号配石



13号墓

25号配石

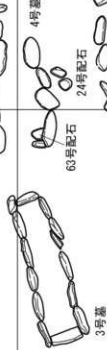
59号配石



6号配石

39号配石

W1P



4号墓

63号配石

24号配石

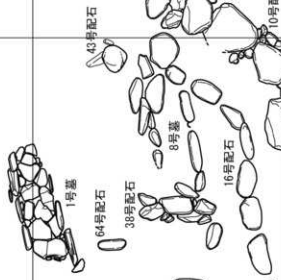
2号墓

3号墓



61号配石

W0



1号墓

43号配石

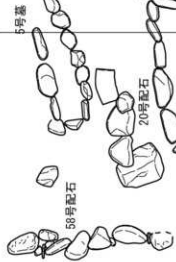
64号配石

38号配石

8号墓

16号配石

10号配石



5号墓

58号配石

20号配石

7号墓

33号配石

15号墓

11号墓

9号墓

52号配石

9号墓

32号配石

54号配石

4号配石

53号配石

44号配石

14号墓

50号配石

15号配石

16号墓

48号配石

14号配石

19号配石

17号配石



56号配石

W1M



22号配石



图例

图16 石棺墓群平面图(埋葬主体部完掘状况)

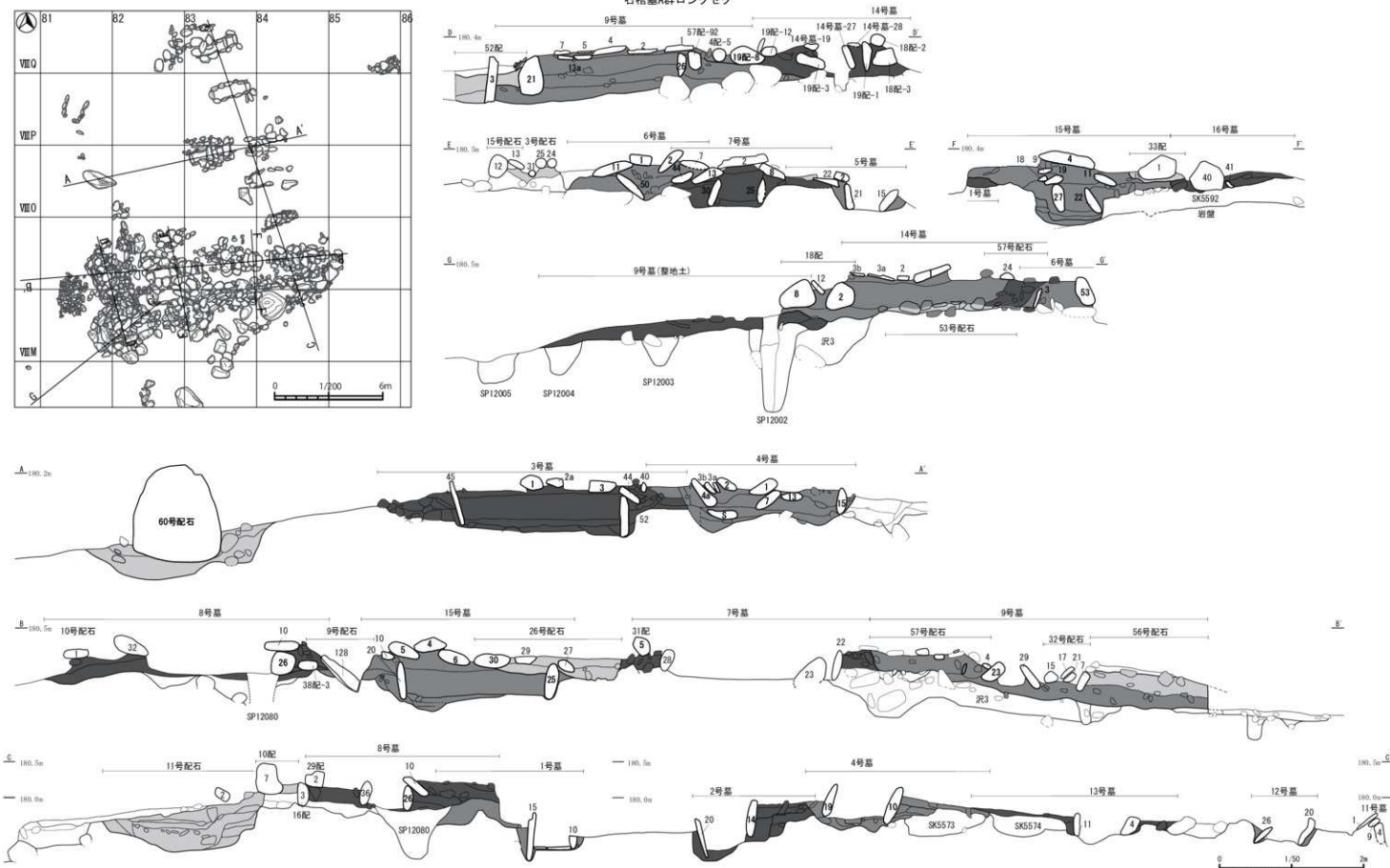


図17 石棺墓A群の土層堆積状況

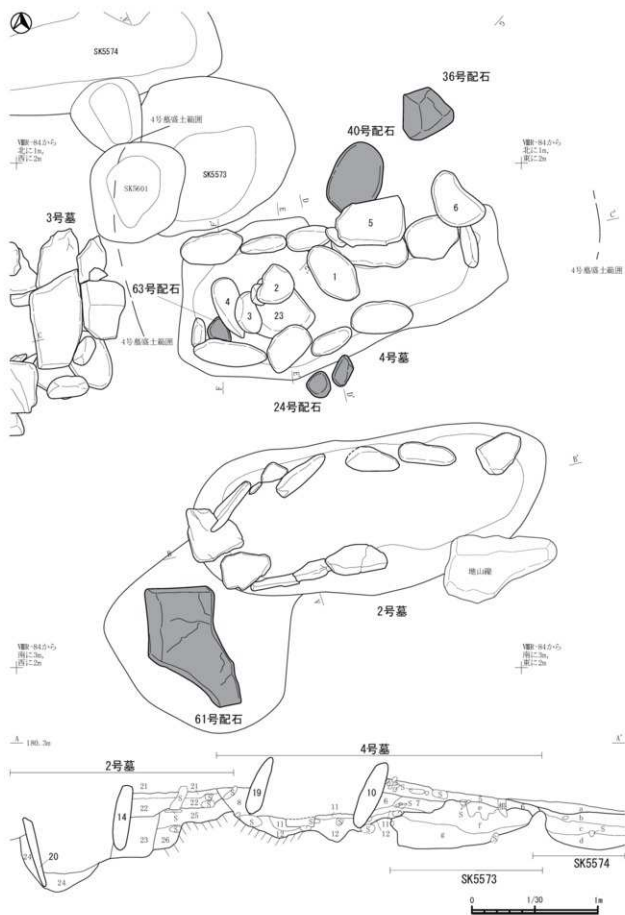
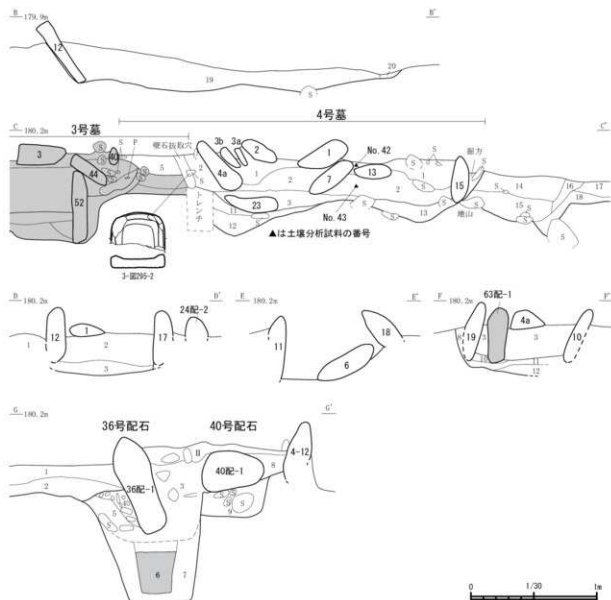


图19 石棺墓2(2·4号墓①)



2・4号墓 (A-A') (B-B') (C-C') (D-D') (E-E')

4号墓内堆積土

- 第1層 黒色土 10YR2/1 礫(φ3~60mm)1%
 第2層 褐色土 10YR4/4 礫(φ5~80mm)10%
 第3層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ1~70mm)3%

4号墓壁石裏込土

- 第4層 黒褐色土 7.5YR3/1 礫(φ1~70mm)1%, 小礫(φ5~10mm)多く含む
 第5層 黄褐色土 10YR5/6
 第6層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~50mm)2%
 第7層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1~10mm)1%
 第8層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~30mm)1%
 第9層 褐色土 10YR4/6 礫(φ1~30mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%
 第10層 黄褐色土 10YR2/2
 第11層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~7mm)1%
 第12層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~70mm)30%
 第13層 黄褐色砂 10YR5/6 礫(φ1~10mm)10%

墓坑底層以の土

- 第14層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~50mm)3%, 炭化物(φ1mm)1%
 第15層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~30mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%
 第16層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ1mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%
 第17層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~30mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%
 第18層 褐色土 10YR4/6 礫(φ1~30mm)3%, 炭化物(φ1mm)1%

2号墓内堆積土

- 第19層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20~25mm)2%

2号墓壁石裏込土

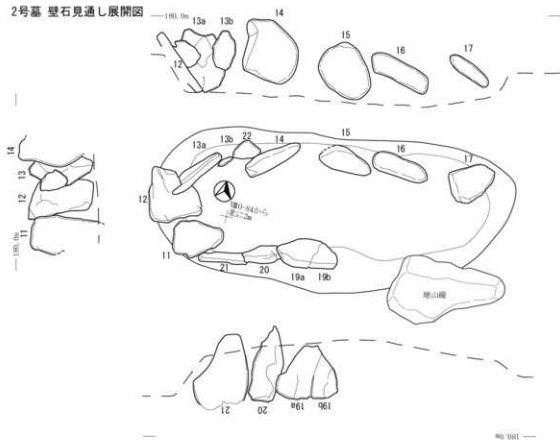
- 第20層 褐色土 10YR4/4 礫(φ5~30mm)10%
 第21層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~25mm)3%
 第22層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~210mm)10%
 第23層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~90mm)10%
 第24層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~70mm)
 第25層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~140mm)3%
 第26層 子子-7褐色土 5YR4/6 礫(φ1~120mm)10%
 SK5572
 a層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~90mm)3%
 b層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~60mm)3%
 c層 子子-7褐色土 5YR4/6 礫(φ1~30mm)2%
 暗褐色土 5YR4/6 礫(φ1~75mm)2%
 SK5573
 a層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~35mm)1%
 b層 子子-7褐色土 5YR4/6 礫(φ1~120mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 c層 子子-7褐色土 5YR4/6 礫(φ1~75mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%

2・4号墓, 36号配石(6-C')

- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ1~100mm)5%, 炭化物(φ1~12mm)1%
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~170mm)5%
 第3層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~230mm)10%
 第4層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~160mm)20%
 第5層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~230mm)10%
 第6層 柱根跡
 第7層 柱根跡
 第8層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1~10mm)1%
 第9層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~200mm)20%, 炭化物(φ1~13mm)1%

図20 石棺墓3(2・4号墓②)

2号墓 壁石見通し展開図



4号墓 壁石見通し展開図

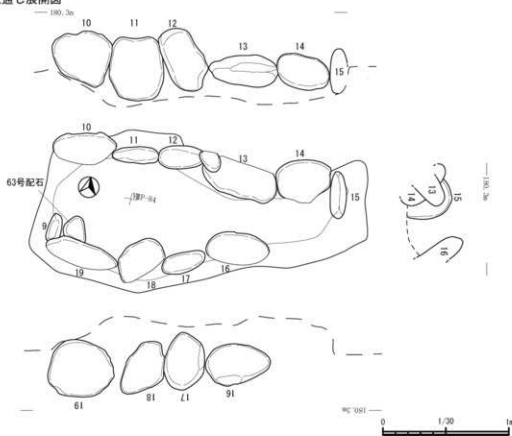
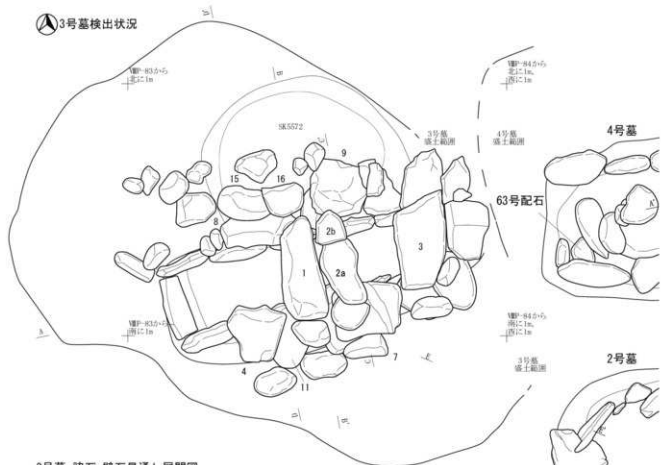


図21 石棺墓4(2・4号墓③)

3号墓核出状況



3号墓 陪石・壁石見通し展開図

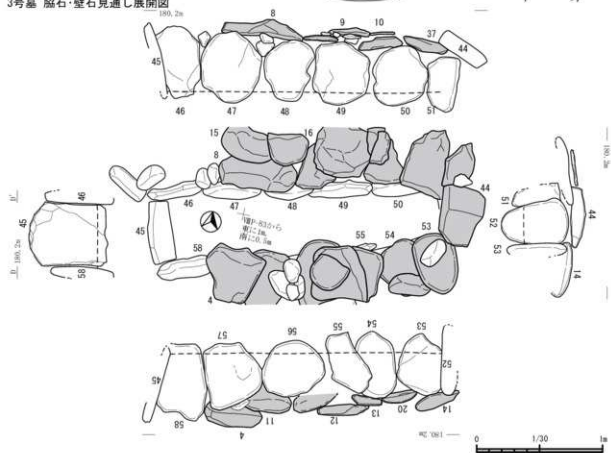
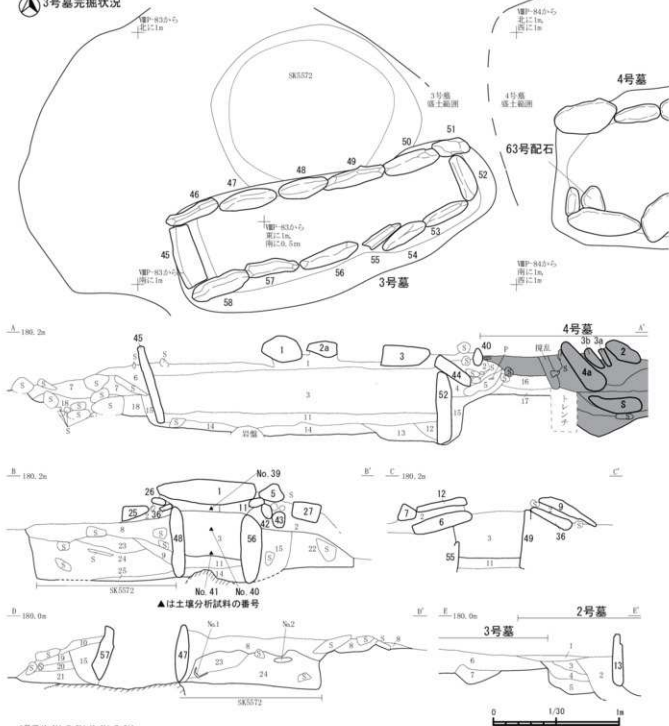


図22 石棺墓5(3号墓①)

㊦ 3号墓完掘状況



3号墓(A-A') (B-B') (C-C') (D-D')

第1層	埋褐色土	10YR3/4	縦(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%(炭入土)
第2層	褐色土	10YR4/6	縦(φ20mm)1%(粗石層土)
第3層	褐色土	10YR4/6	縦(φ20mm)1%(粗石層土)
壁石裏込土			
第1層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ10mm)1%
第2層	埋褐色土	10YR5/6	縦(φ10mm)1%
第3層	埋褐色土	10YR3/4	縦(φ1mm)1%
第4層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ2~10mm)1%
第5層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~50mm)1%
第6層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ2~10mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%
第7層	埋褐色土	10YR5/4	縦(φ1~200mm)20%
第8層	二片埋褐色土	10YR5/4	縦(φ1~160mm)20%
第9層	埋褐色土	10YR4/4	炭化物(φ1~2mm)5%
第10層	埋褐色土	10YR3/4	縦(φ60mm)5%
墓坑			
第11層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~50mm)1%
第12層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ2~10mm)1%
第13層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~10mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%
第14層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~50mm)1%
第15層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~110mm)1%, 炭化物(φ1mm以下)1%と凍
墓坑周縁砂の土			
第16層	埋褐色土	10YR3/3	炭化物(φ1mm)1%
第17層	埋褐色土	10YR5/5	縦(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%

第18層	埋褐色土	10YR5/6	縦(φ1~300mm)30%
第19層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~30mm)30%
第20層	埋褐色土	10YR5/8	縦(φ1~50mm)40%, 炭化物(φ1mm以下)2%
第21層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~30mm)7%, 炭化物(φ1mm以下)2%
第22層	埋褐色土	10YR4/4	縦(φ1~140mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)5%
SK5572			
第23層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~50mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%
第24層	埋褐色土	10YR5/6	縦(φ1~100mm)7%, 炭化物(φ1~20mm)5%
第25層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~5mm)20%
2号墓(左)			
2号墓周縁土			
第1層	埋褐色土	10YR5/6	縦(φ1~70mm)10%
第2層	埋褐色土	10YR4/4	縦(φ1~100mm)3%
第3層	埋褐色土	10YR2/4	縦(φ1~70mm)20%
第4層	埋褐色土	10YR3/3	縦(φ1~50mm)1%
第5層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~50mm)5%
3号墓周縁土			
第6層	埋褐色土	10YR4/6	縦(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1~5mm)1%
第7層	埋褐色土	10YR5/6	縦(φ1~15mm)5%

図23 石棺墓6(3号墓2)

▲5~7号墓検出状況

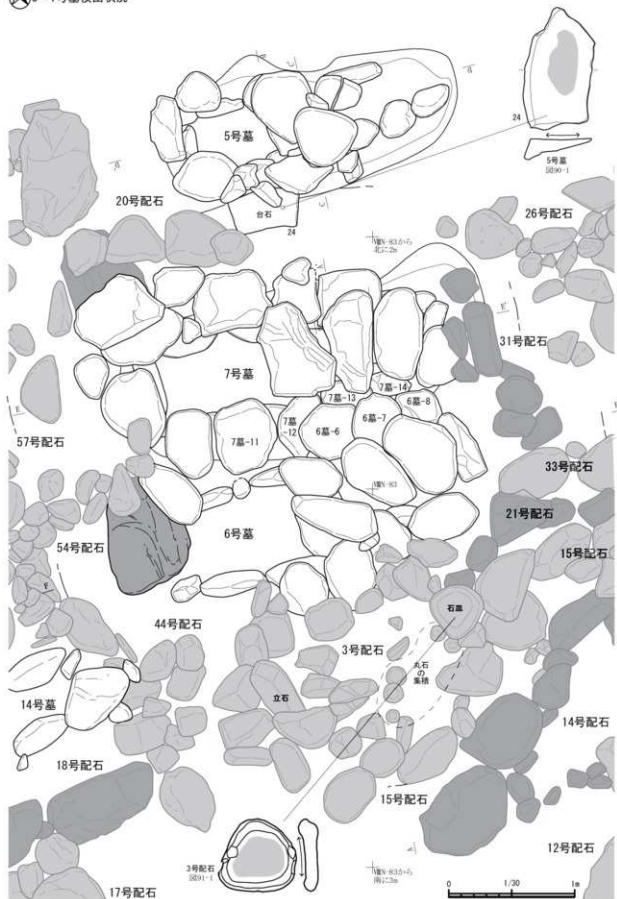
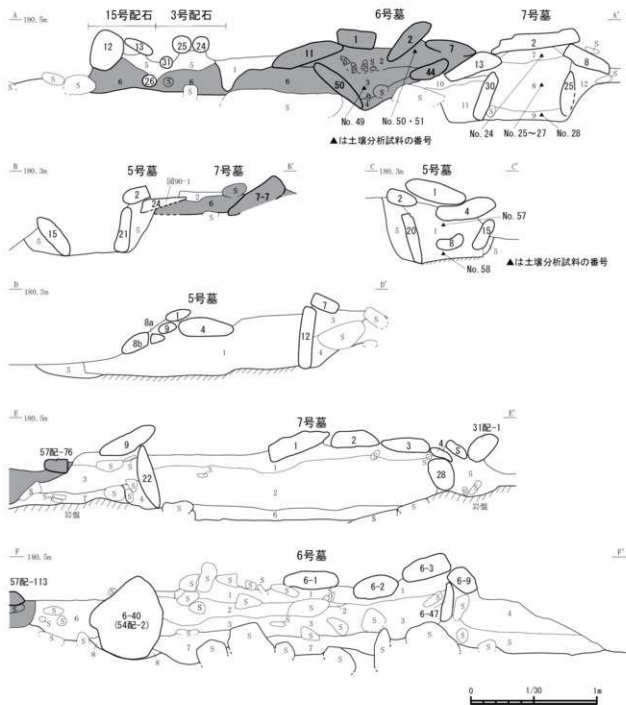


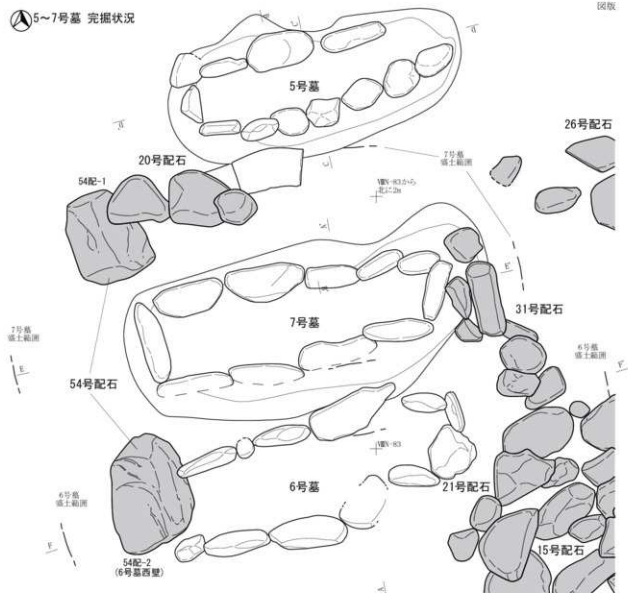
图24 石棺墓7(5~7号墓①)



- 5・7号墓(A-A)**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ1~30mm)1%, 炭化物(φ1~7mm)1%
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ10~30mm)1%
- 第3層 黒褐色土 10YR2/3 腐植土(10YR2/3)1%, 礫(φ5~40mm)2%, 炭化物(φ5~10mm)2%
- 第4層 6号墓遺土 10YR3/2 礫(φ1~90mm)1%, 炭化物(φ1~12mm)1%
- 第5層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ1~140mm)5%, 炭化物(φ1~12mm)1%
- 第6層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ10~40mm)3%, 炭化物(φ1mm以下)1%
- 第7層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ10~80mm)5%, 炭化物(φ1~10mm)2%
- 第8層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ1~20mm)5%
- 第9層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ1~20mm)10%
- 第10層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ1~20mm)10%
- 第11層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ1~20mm)10%
- 第12層
- 5・7号墓(B-B)(C-C)(D-D)**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ3~60mm)2%
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土(10YR2/3)10%, 礫(φ3~30mm)3%, 炭化物(φ1~3mm)1%未満
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~50mm)9%
- 第4層 暗褐色土 10YR4/4 礫(φ10~30mm)5%
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20mm)3%
- 第6層 暗褐色土 10YR3/4 (-7号墓遺土)

- 7号墓(E-E)**
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土(10YR2/3)5%, 褐色土(10YR4/6)1%, 黒褐色土(10YR2/3)5%, 褐色土(10YR4/6)1%, 礫(φ2~20mm)2%
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 暗褐色土(10YR3/3)2%, 礫(φ2~40mm)3%
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~210mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)1%
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~130mm)5%
- 第5層 赤土 10YR4/3 礫(φ10~140mm)5%
- 第6層 暗褐色土 10YR3/3
- 第7層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~150mm)50%
- 6号墓(F-F)**
- 第1層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ2~40mm)2%
- 第2層 暗褐色土 10YR2/3 黒褐色土(10YR2/3)1%, 礫(φ3~30mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1%未満
- 第3層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ10~160mm)5%, 炭化物(φ1mm以下)1%
- 第4層 赤土 10YR4/3 礫(φ20~30mm)2%
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~50mm)5%
- 第6層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ10~160mm)7%, 炭化物(φ1~6mm)1%
- 第8層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~80mm)50%

図25 石棺墓8(5~7号墓②)



5号墓 壁石見通し展開図

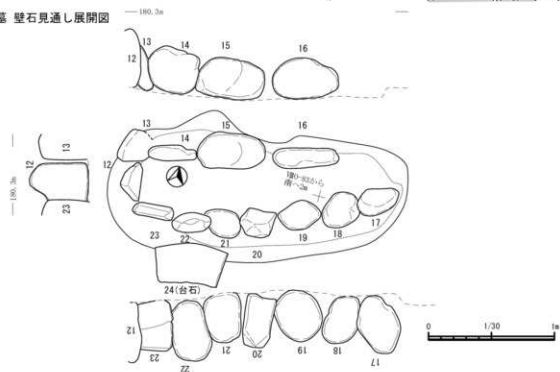
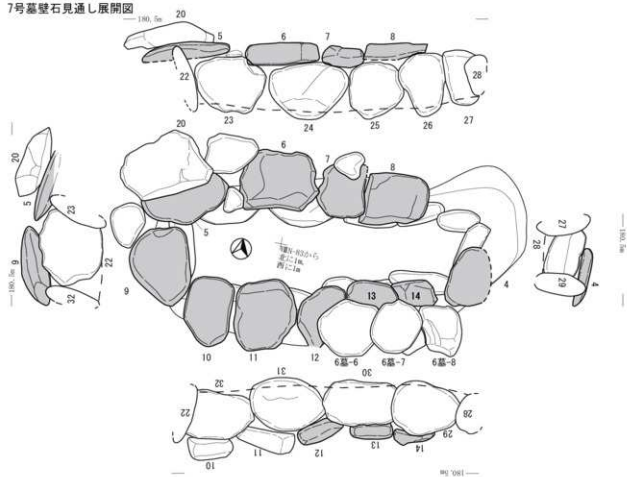


図26 石棺墓9(5~7号墓③)

7号墓壁石見通し展開図



6号墓壁石見通し展開図

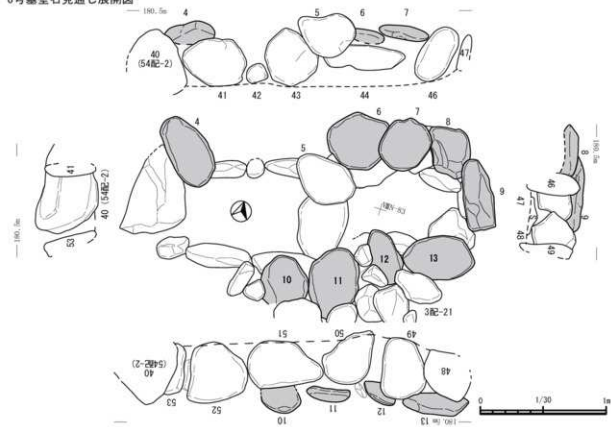
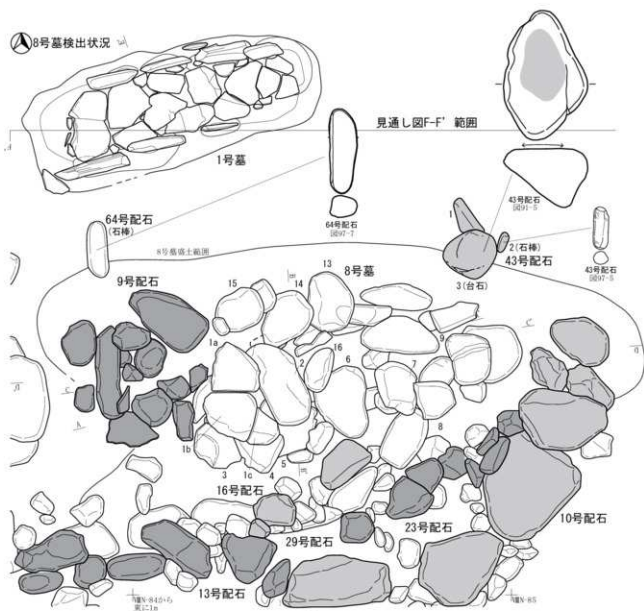


図27 石棺墓10(5~7号墓④)



8号墓 壁石見通し展開図

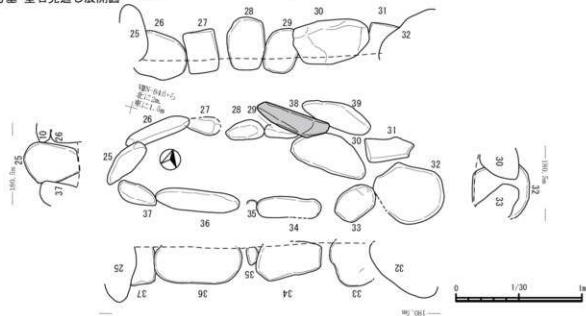
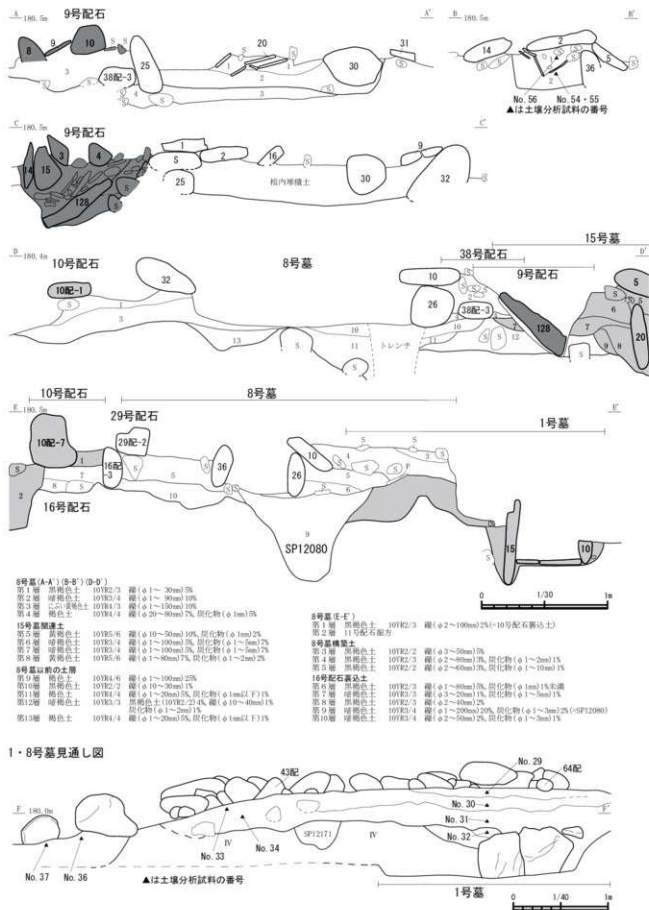


図28 石棺墓11 (8号墓①)



- 8号墓(A-A')(B-B')(D-D')**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ1~30mm) 5%
 - 第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~90mm) 10%
 - 第3層 赤土黄褐色土 10YR4/3 礫(φ1~150mm) 20%
 - 第4層 褐色土 10YR4/4 礫(φ20~80mm) 7%, 炭化物(φ1mm) 5%
- 15号墓埋填土**
- 第5層 黄褐色土 10YR5/6 礫(φ10~50mm) 10%, 炭化物(φ1mm) 2%
 - 第6層 暗褐色土 10YR2/4 礫(φ1~100mm) 3%, 炭化物(φ1~5mm) 7%
 - 第7層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~100mm) 3%, 炭化物(φ1~5mm) 7%
 - 第8層 黄褐色土 10YR5/6 礫(φ1~80mm) 7%, 炭化物(φ1~2mm) 2%
- 8号墓以前の土層**
- 第9層 褐色土 10YR4/6 礫(φ1~100mm) 25%
 - 第10層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ10~30mm) 1%
 - 第11層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~20mm) 5%, 炭化物(φ1mm以下) 1%
 - 第12層 暗褐色土 10YR3/4 赤褐色土(10YR2/2) 4%, 礫(φ10~40mm) 1%, 炭化物(φ1~2mm) 1%
 - 第13層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~20mm) 5%, 炭化物(φ1mm以下) 1%

- 8号墓(E-E')**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ2~100mm) 2%(=10号配石裏込土)
 - 第2層 11号配石配石
- 8号墓埋填土**
- 第3層 暗褐色土 10YR2/2 礫(φ3~50mm) 3%
 - 第4層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ2~80mm) 3%, 炭化物(φ1~2mm) 1%
 - 第5層 暗褐色土 10YR2/2 礫(φ2~60mm) 3%, 炭化物(φ1~10mm) 1%
- 16号配石裏込土**
- 第6層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ1~80mm) 3%, 炭化物(φ1mm) 1%, 灰濁
 - 第7層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ3~20mm) 1%, 炭化物(φ1~5mm) 1%
 - 第8層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ2~80mm) 2%
 - 第9層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~200mm) 20%, 炭化物(φ1~3mm) 2%(=SP12080)
 - 第10層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ2~50mm) 2%, 炭化物(φ1~3mm) 1%

図29 石棺墓12(8号墓②)

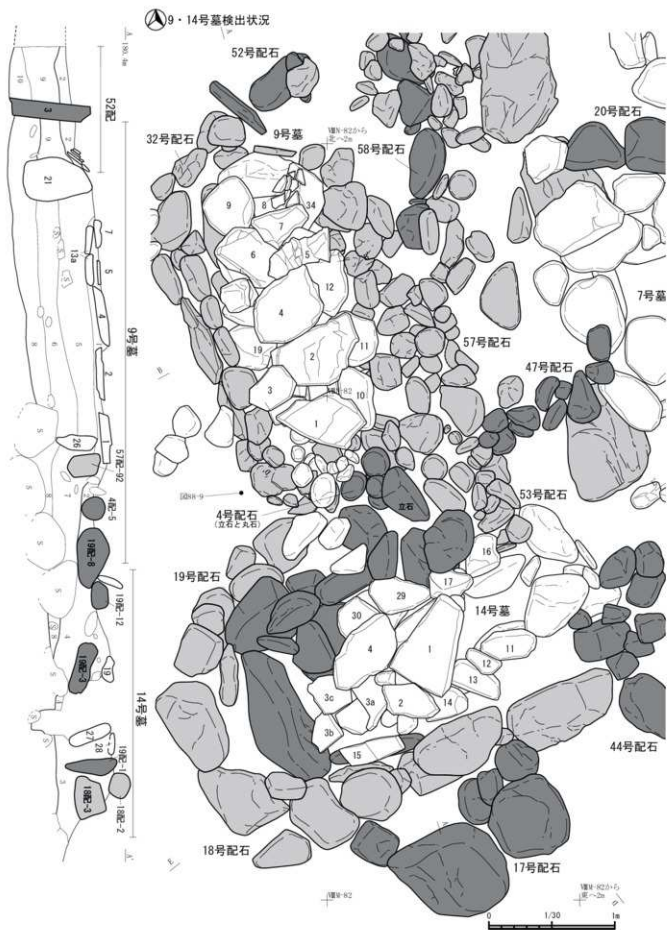
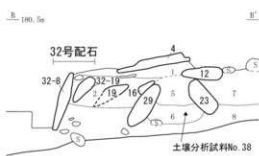
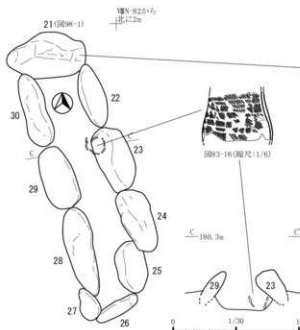


图30 石棺墓13(9·14号墓①)

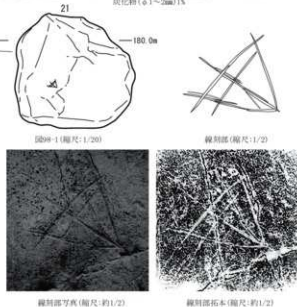


9・14号墓(A-A') (参考)
 第1層 灰褐色土 10YR2/2 礫(φ10~30mm)1%
 第2層 黑褐色土 10YR2/3 礫(φ1~520mm)3%,炭化物(φ1~2mm)1%
 (<56号陪石上蓋土層)

14号墓
 第3層 黑褐色土 10YR2/3 礫(φ2~10mm)3%
 第4層 黑褐色土 10YR2/3 礫(φ10~180mm)20%,炭化物(φ1~2mm)1%
 9号墓(棺内埋積土)
 第5層 黑褐色土 10YR2/3 礫(φ10~70mm)7%
 第6層 黑褐色土 10YR2/3 礫(φ10~150mm)1%
 57号陪石
 第7層 黑褐色土 10YR2/3 礫(φ10~30mm)1%
 9号墓(整地土)
 第8層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~100mm)5%,炭化物(φ1~5mm)2%
 52号陪石
 第9層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~30mm)10%,炭化物(φ1~2mm)1%
 第10層 暗褐色土 10YR2/2 礫(φ5~250mm)21%,炭化物(φ1~2mm)1%



9号墓遺物出土状況①(埋葬主体部)



9号墓遺物出土状況②(整地土)

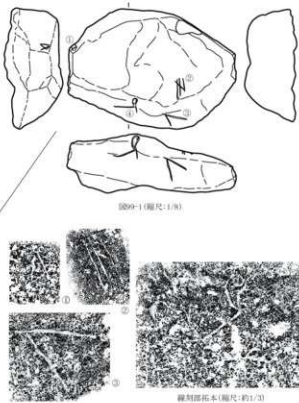
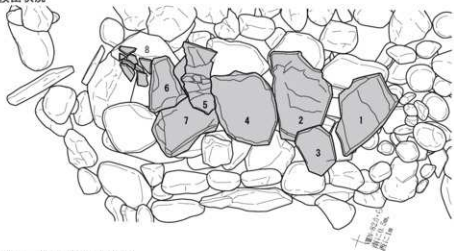
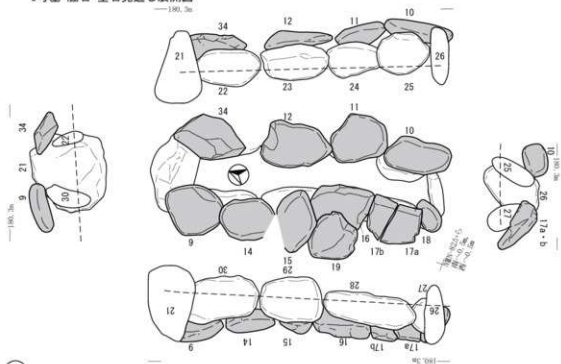


图31 石棺墓14(9・14号墓②)

9号墓核出状況



9号墓 脇石・壁石見通し展開図



9号墓完掘状況

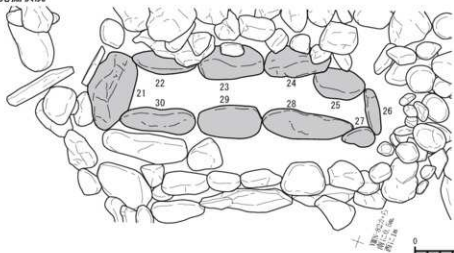


図32 石棺墓15(9・14号墓③)

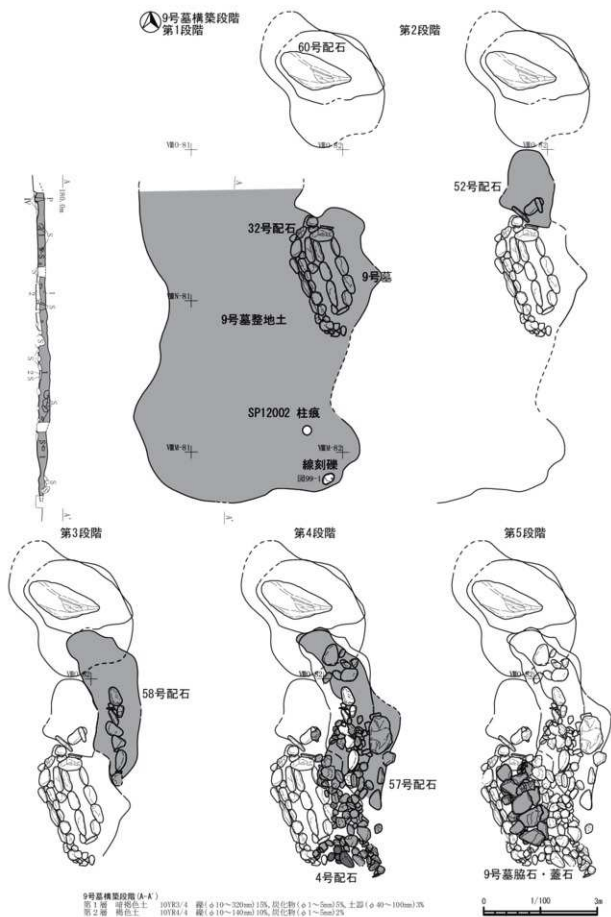


図33 石棺墓16(9・14号墓④)



14号墓壁石見通し展開図

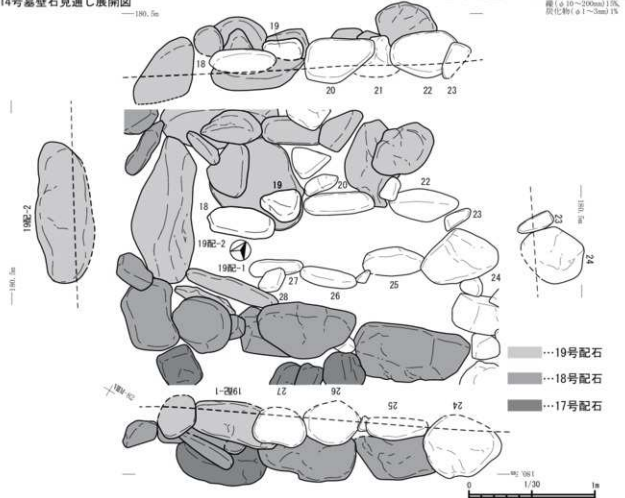


図34 石棺墓17(9・14号墓⑤)

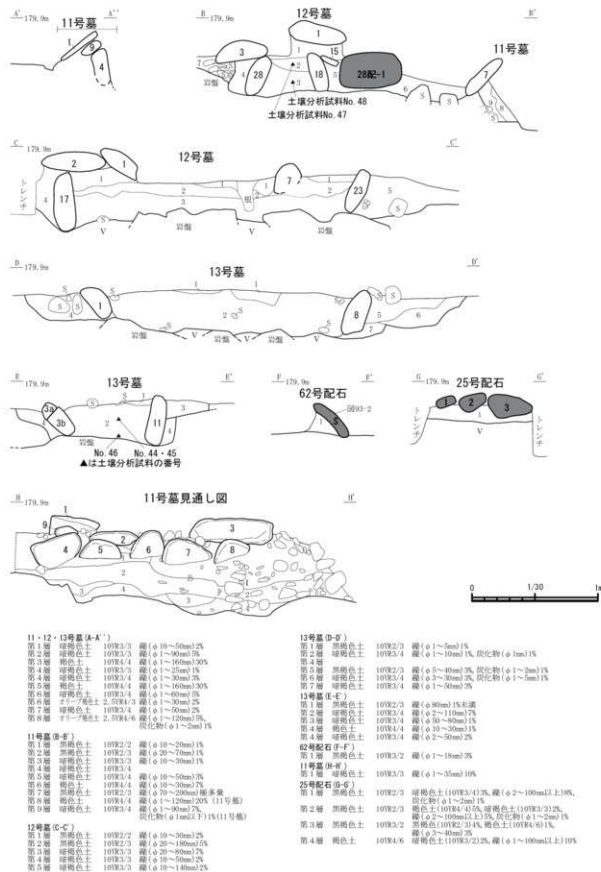
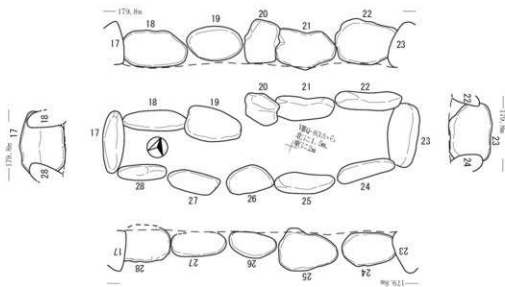


図36 石棺墓19(11~13号墓②)

12号墓 壁石見通し展開図



13号墓 壁石見通し展開図

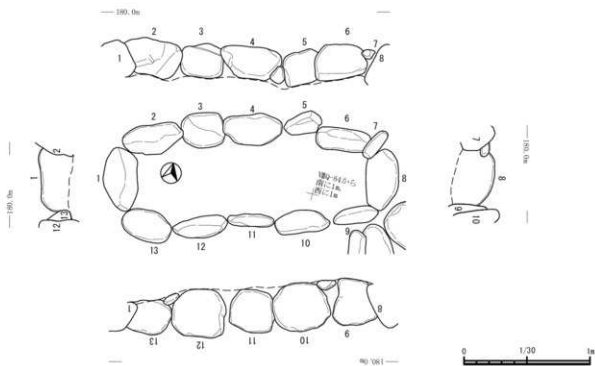
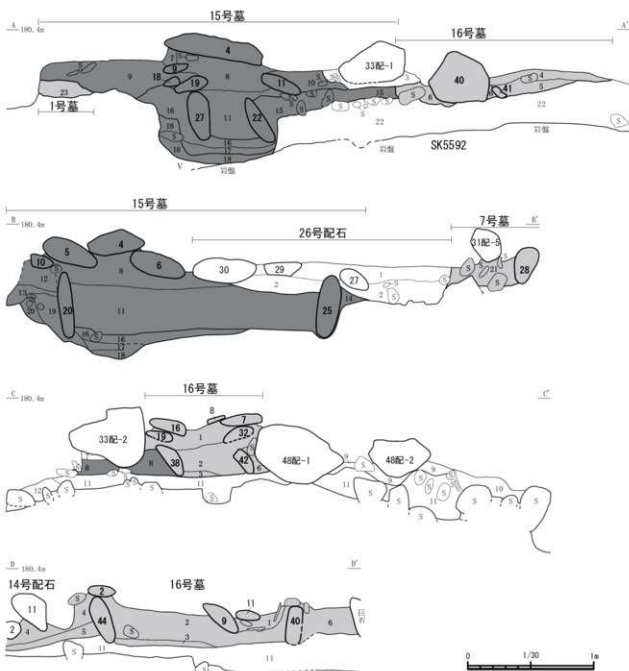


図37 石棺墓20(11~13号墓③)



15・16号墓(A・A') (B-B')

16号墓
第1層 黑褐色土 10YR2/3 埴輪色土(10YR3/3)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%, 雜(φ10~100mm)3%

第2層 黑褐色土 10YR2/2 雜(φ3~50mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)1%

第3層 黑褐色土 10YR2/2 雜(φ5~30mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)1%

26号配石
第4層 黑褐色土 10YR2/3 雜(φ2~30mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%

第5層 褐色土 10YR4/4 雜(φ10~200mm)15%

第6層 褐色土 10YR4/6 雜(φ1~100mm)5%

33号配石
第7層 埴輪色土 10YR3/4 上・中・黄褐色(10YR4/3)5%, 雜(φ10~50mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)1%

第8層 埴輪色土 10YR2/3 雜(φ3~10mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%

第9層 褐色土 10YR4/6 雜(φ10~40mm)10%, 炭化物(φ1~4mm)5%

第10層 褐色土 10YR4/6 雜(φ1~40mm)7%, 炭化物(φ1~3mm)3%

第11層 埴輪色土 10YR3/3 黑褐色土(10YR2/3)2%, 雜(φ3~30mm)1%

第12層 15号墓蓋土

第13層 褐色土 10YR4/6 雜(φ10~40mm)10%, 炭化物(φ1~4mm)5%

第14層 黄褐色土 10YR5/6 雜(φ10~40mm)15%, 炭化物(φ1mm以下)1%未満

第15層 褐色土 10YR4/4 雜(φ10~120mm)7%, 炭化物(φ1~3mm)5%

第16層 褐色土 10YR4/6 雜(φ10~100mm)10%, 炭化物(φ1~2mm)1%未満

第17層 黄褐色土 10YR5/6 雜(φ10~150mm)30%, 炭化物(φ2mm)2%

第18層 褐色土 10YR4/6 雜(φ10~50mm)10%, 炭化物(φ1~3mm)3%

第19層 黄褐色土 10YR5/6 雜(φ10~50mm)7%, 炭化物(φ1~3mm)2%

第20層 黄褐色土 10YR5/6 雜(φ10~100mm)20%, 炭化物(φ1~2mm)2%

7号墓

第1層 埴輪色土 10YR3/3 雜(φ10~100mm)20%, 炭化物(φ1~2mm)3%

SK5592 埴輪色土 10YR5/6 雜(φ30~70mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)3%

1号墓
第21層 黄褐色土 10YR5/8 雜(φ10~90mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%

15・16号墓(C-C') (D-D')

第1層 黑褐色土 10YR2/3 雜(φ2~30mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%

第2層 褐色土 10YR4/4 雜(φ10~130mm)15%, 炭化物(φ1~2mm)2%

第3層 埴輪色土 10YR3/3 雜(φ1~30mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%

第4層 埴輪色土 10YR2/3 雜(φ1~40mm)15%, 炭化物(φ1~3mm)2%

第5層 褐色土 10YR4/4 雜(φ1~20mm)7%, 炭化物(φ1~2mm)2%

第6層 黄褐色土 10YR5/6 雜(φ1~30mm)5%, 炭化物(φ1mm以下)1%未満

33号配石
第7層 黑褐色土 10YR2/3 雜(φ10~540mm)23%, 炭化物(φ1~10mm)5%

15号墓蓋土

第8層 褐色土 10YR4/4 雜(φ10~120mm)7%, 炭化物(φ1~3mm)5%

48号配石
第9層 硬方埴土

SK5592

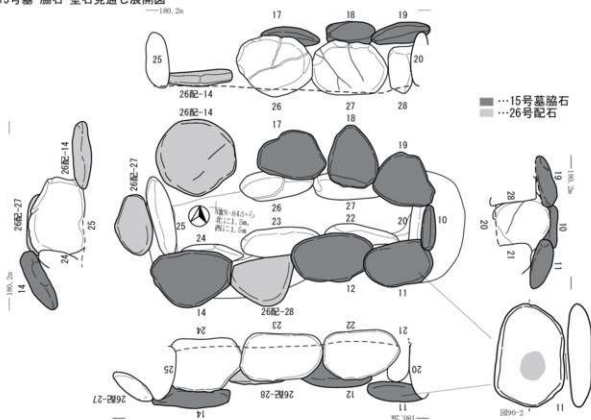
第10層 埴輪色土 10YR3/3 雜(φ10~120mm)5%

第11層 黄褐色土 10YR5/6 雜(φ1~30mm)5%, 炭化物(φ1mm以下)1%未満

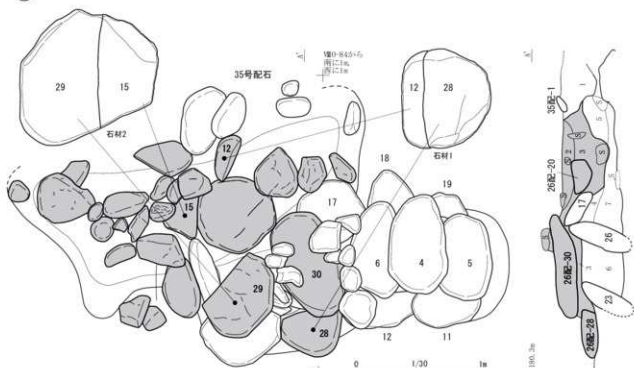
第12層 褐色土 10YR4/6 雜(φ10~110mm)15%

图39 石棺墓22(15・16号墓②)

15号墓 脇石・壁石見通し展開図



15号墓・26号配石石材接合状況



15号墓・26-35号配石(A-A')

35号配石

第1層 暗褐色土

26号配石

第2層 暗褐色土

第3層 暗褐色土

15号墓

第4層 暗褐色土

暗褐色土(10TR3/4)2% 礫(φ3~150mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1%

暗褐色土(10TR3/20)1% 礫(φ10~100mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1%

礫(φ2~30mm)20%炭化物(φ1~3mm)1%

礫(φ2~3cm)1%, 炭化物(φ1~2cm)1%

第5層 暗褐色土

10TR3/4 黒褐色土(10TR2/3)1%, 礫(φ5~150mm)3%,

炭化物(φ1~2mm)1%

第6層 暗褐色土

10TR2/3 暗褐色土(10TR2/3)2%, 礫(φ3~30mm)1%

第7層 褐色土

10TR4/4 礫(φ10~60mm)1%, 炭化物(φ1~10mm)1%

図40 石棺墓23(15・16号墓③)

16号墓基石・壁石見通し展開図

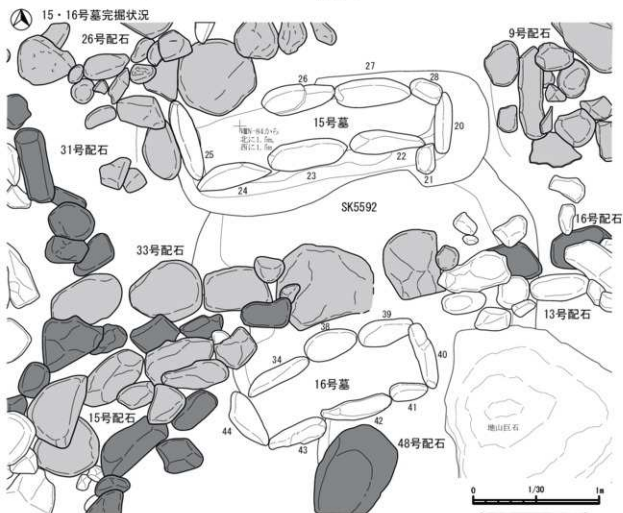
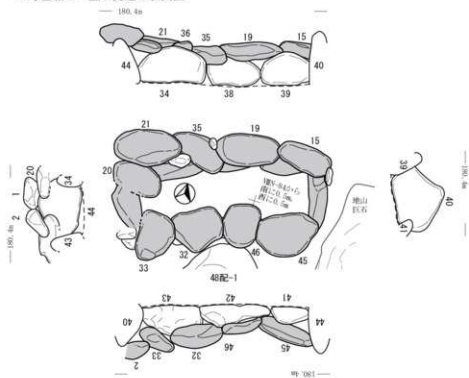
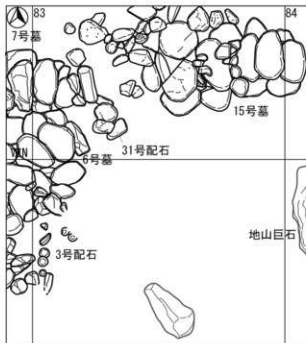


図41 石棺墓24(15・16号墓④)

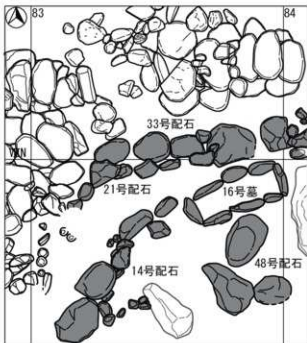
16号墓構築以前

16号墓構築以前、既存の石棺墓として北側に15号墓、西側に7号墓と6号墓が存在している。3号配石は6号墓に伴うかこれ以降の構築であるが、構築段階①の14号配石や21号配石の配列から同段階以前には存在していたものと思われる。



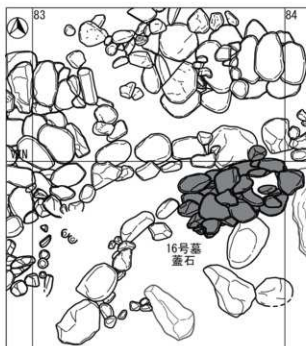
16号墓構築段階①(壁石の設置+14配・33配→21配の設置)

15号墓と6・7号墓および地山巨石に囲まれた空間地に16号墓が造られる。西側は壁石裏込めとともに14号配石を、また北側は33号配石を設置後、21号配石を並列させている。なお詳細は不明だが、南側の48号配石も本段階までには設置されている。



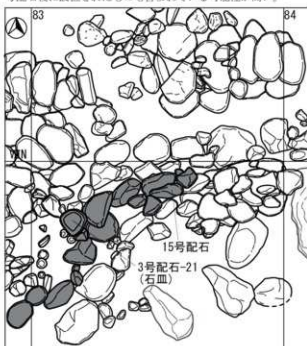
16号墓構築段階②(陥石・蓋石の設置)

16号墓陥石および蓋石を設置。蓋石の一部は33号配石にもたれかかるとように配置される。



16号墓構築段階③(15配の設置)

蓋石設置後、既存の14号配石と21号配石の隙間を埋める位置に15号配石を設置する。16号墓との接続部では、同墓蓋石上に土盛りをして配石石材を削えている。なお、3号配石-21(石皿)は15号配石上に置かれていることから、同配石には15号配石後に設置されたものも含まれている可能性が高い。



0 1/60 2m

図42 石棺墓25(16号墓構築段階(15・16号墓⑤))

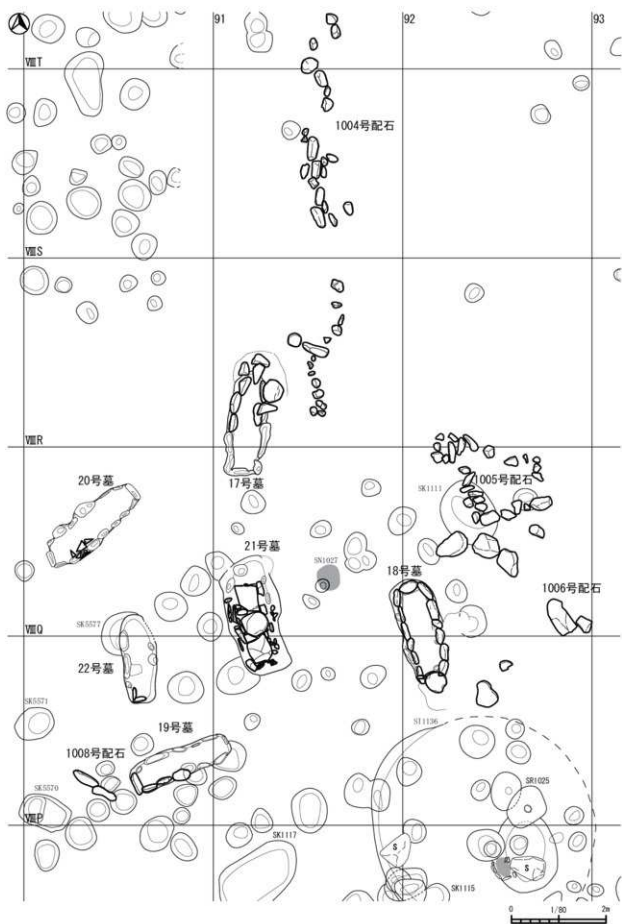


图43 石棺墓26(石棺墓B群検出状況)

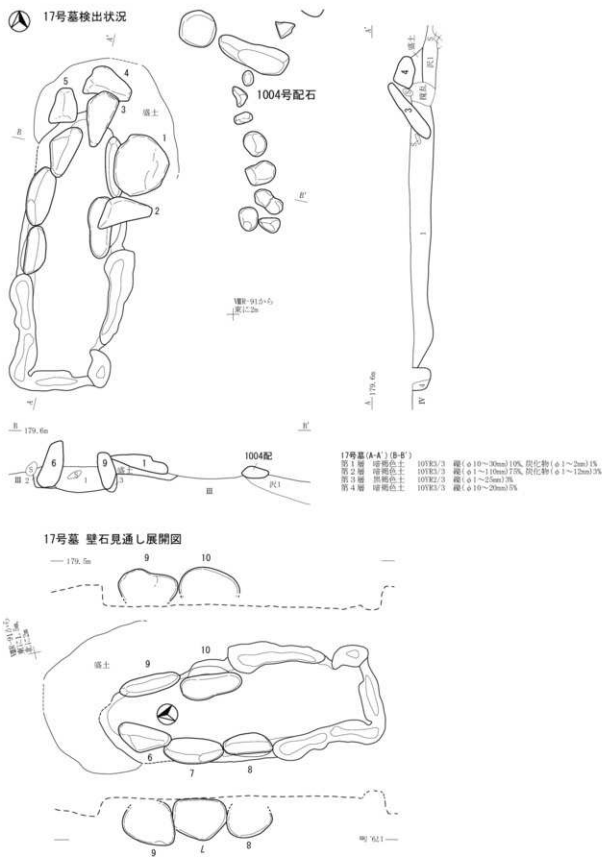
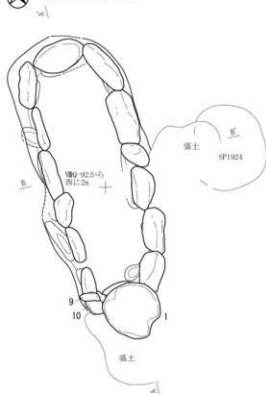
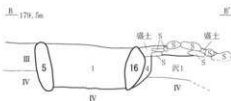
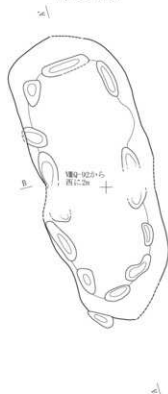


図44 石棺墓27(17号墓)

18号墓 検出状況



18号墓 掘方



18号墓(A-A)(B-B)

- | | | | |
|-----|-----|--------|----------------------------|
| 第1層 | 埋藏土 | IVR2/2 | 縦φ1~70mm)瓦, 灰化跡(φ1~10mm)1% |
| 第2層 | 埋藏土 | IVR3/4 | 縦φ1~20mm)瓦, 灰化跡(φ1~2mm)1% |
| 第3層 | 埋藏土 | IVR4/4 | 縦φ1~10mm)瓦, 灰化跡(φ1mm)1% |
| 第4層 | 埋藏土 | IVR5/3 | 縦φ10~30mm)瓦, 灰化跡(φ1~2mm)1% |

18号墓 壁石見直し展開図

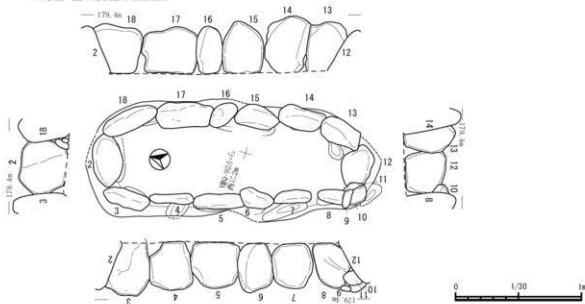
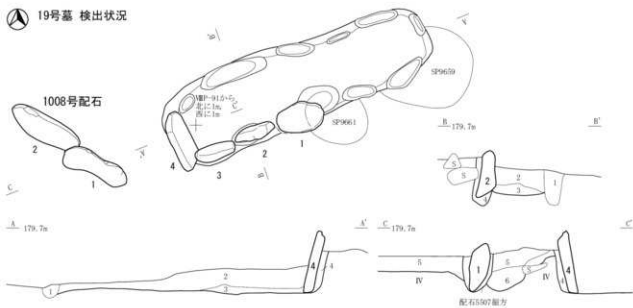


図45 石棺墓28(18号墓)

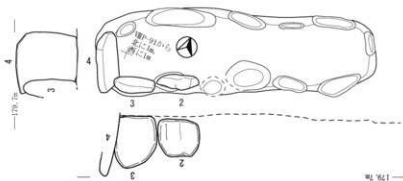
▲ 19号墓 検出状況



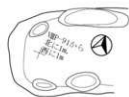
19号墓(A-A') (B-B') (C-C')

- 第1層 埴輪色土 10YR3/4 縦(φ10~60mm)3%, 灰化物(φ1~2mm)1%
 第2層 埴輪色土 10YR3/3 縦(φ10~70mm)1%, 灰化物(φ1~3mm)1%
 第3層 埴輪色土 10YR3/2 縦(φ30~80mm)1%, 灰化物(φ1~5mm)1%
 第4層 埴輪色土 10YR3/4 縦(φ10~80mm)10%
 第5層 埴輪色土 10YR2/3 縦(φ15~60mm)3%, 灰化物(φ1~3mm)1%
 第6層 埴輪色土 10YR2/3 縦(φ30~210mm)25%, 灰化物(φ1~2mm)1%

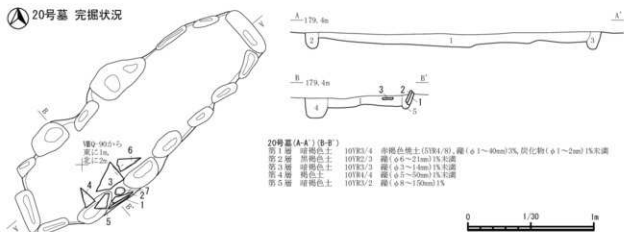
19号墓 壁石見通し展開図



19号墓 掘方



▲ 20号墓 完掘状況



20号墓(A-A') (B-B')

- 第1層 埴輪色土 10YR3/4 赤褐色土(S104/78) 縦(φ1~80mm)3%, 灰化物(φ1~2mm)1%未満
 第2層 埴輪色土 10YR3/3 縦(φ6~21mm)1%未満
 第3層 埴輪色土 10YR3/2 縦(φ3~14mm)1%未満
 第4層 褐色土 10YR4/4 縦(φ5~50mm)1%未満
 第5層 埴輪色土 10YR3/2 縦(φ6~150mm)1%

図46 石棺墓29(19・20号墓)

21・22号墓 完掘状況

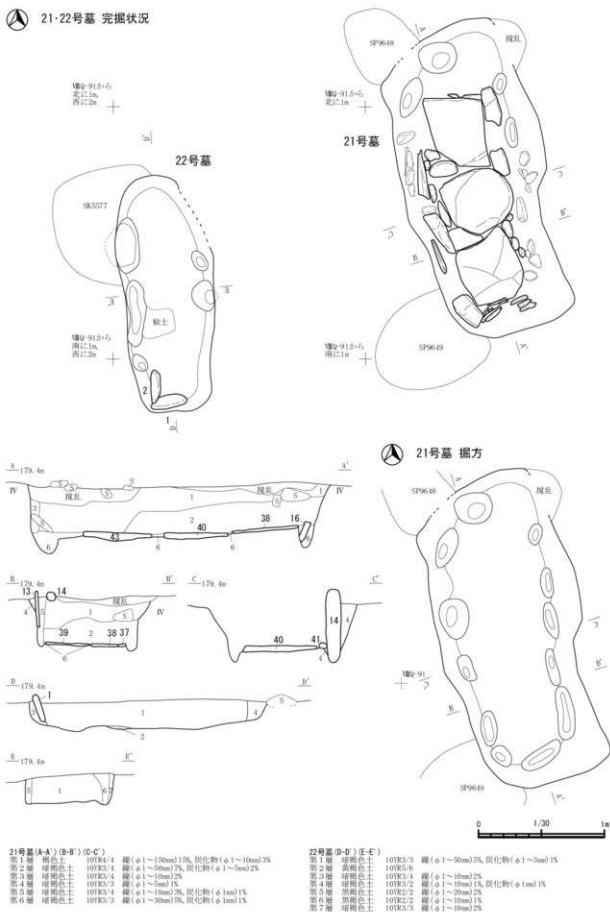


図47 石棺墓30 (21・22号墓)

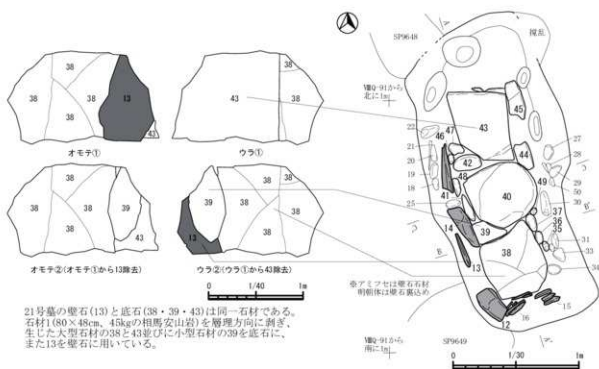


図48 石棺墓31(21号墓石材接合状況)

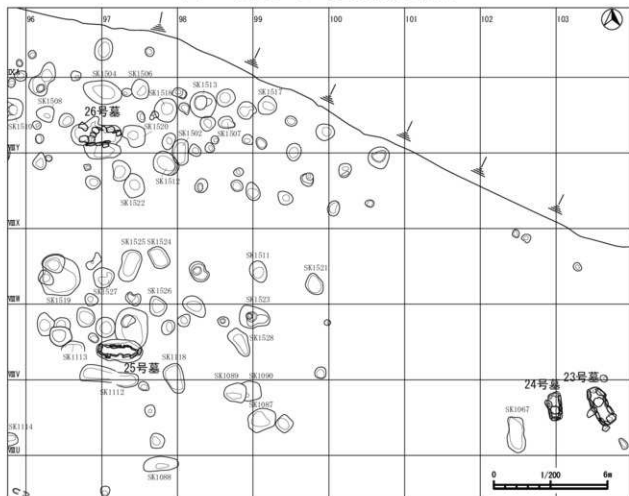
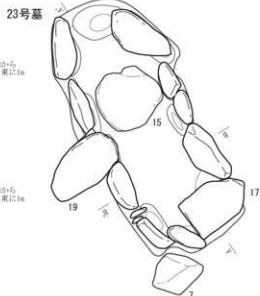
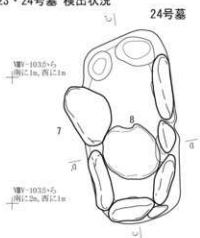
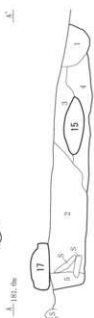
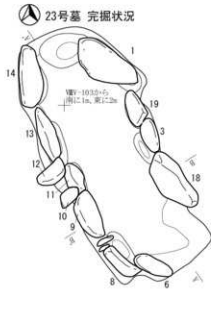


図49 石棺墓32(石棺墓群の遺構分布状況)

23・24号墓 検出状況



23号墓 完掘状況



- 23号墓(A-A') (B-B')
- 第1層 暗褐色土、10層3/3
礫(φ1~2cm)2%
炭化物(φ1~2cm)1%
(礫の抜き取りあり)
 - 第2層 暗褐色土、10層3/4
礫(φ5~40mm)2%
炭化物(φ1~2cm)2%
 - 第3層 暗褐色土、10層4/4
礫(φ10~40mm)3%
炭化物(φ1~2cm)1%
 - 第4層 暗褐色土、10層4/4
礫(φ5~20mm)2%
炭化物(φ1~2cm)1%
 - 第5層 暗褐色土、10層1/3
礫(φ10~60mm)1%
炭化物(φ1~2cm)1%以下

23号墓 掘方



24号墓 完掘状況



- 24号墓(C-C') (D-D')
- 第1層 暗褐色土、10層3/3
礫(φ10~45mm)25%
 - 第2層 暗褐色土、10層3/3
褐色土、10層4/4
 - 第3層 暗褐色土、10層4/3
高褐色土、10層2/3
礫(φ10~140mm)3%
(礫の抜き取りあり)

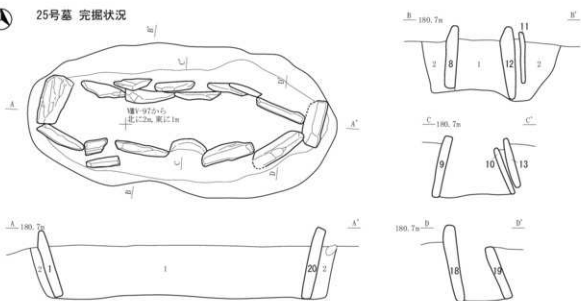
24号墓 掘方



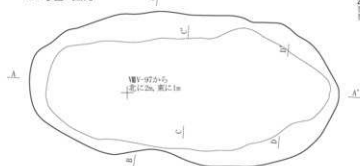
図50 石棺墓33(23・24号墓)



25号墓 完掘状況



25号墓 掘方



25号墓 (A-A') (B-B')
 第1層 埴埴色土 10R3/3 礫 (φ10~100mm) 5%
 第2層 埴埴色土 7.0R3/4 礫 (φ5~15mm) 15%, 砂粒 (φ1~2mm)

25号墓 壁石見通し展開図

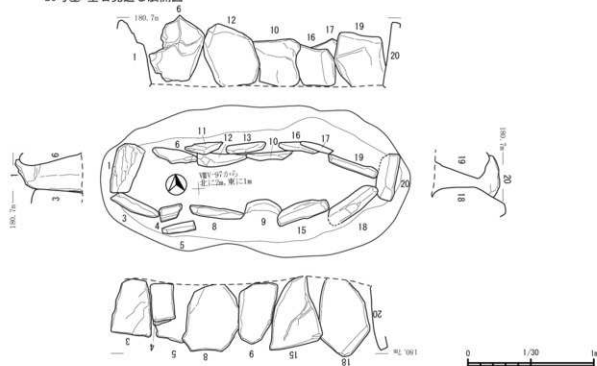
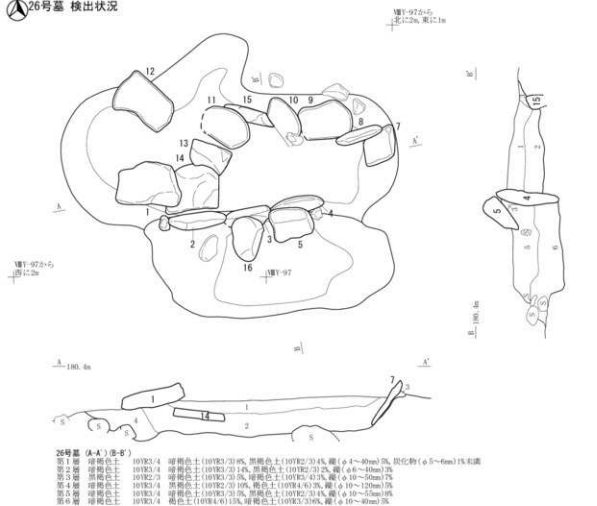


図51 石棺墓34 (25号墓)

▲26号墓 検出状況



26号墓 壁石見通し展開図

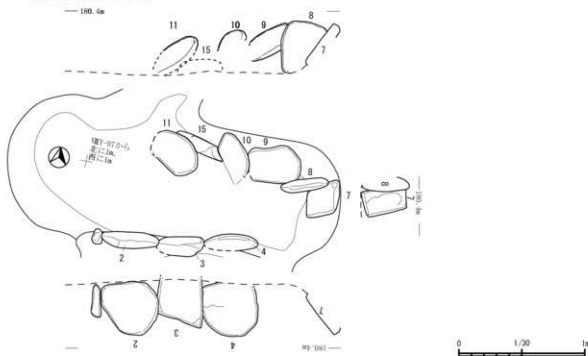
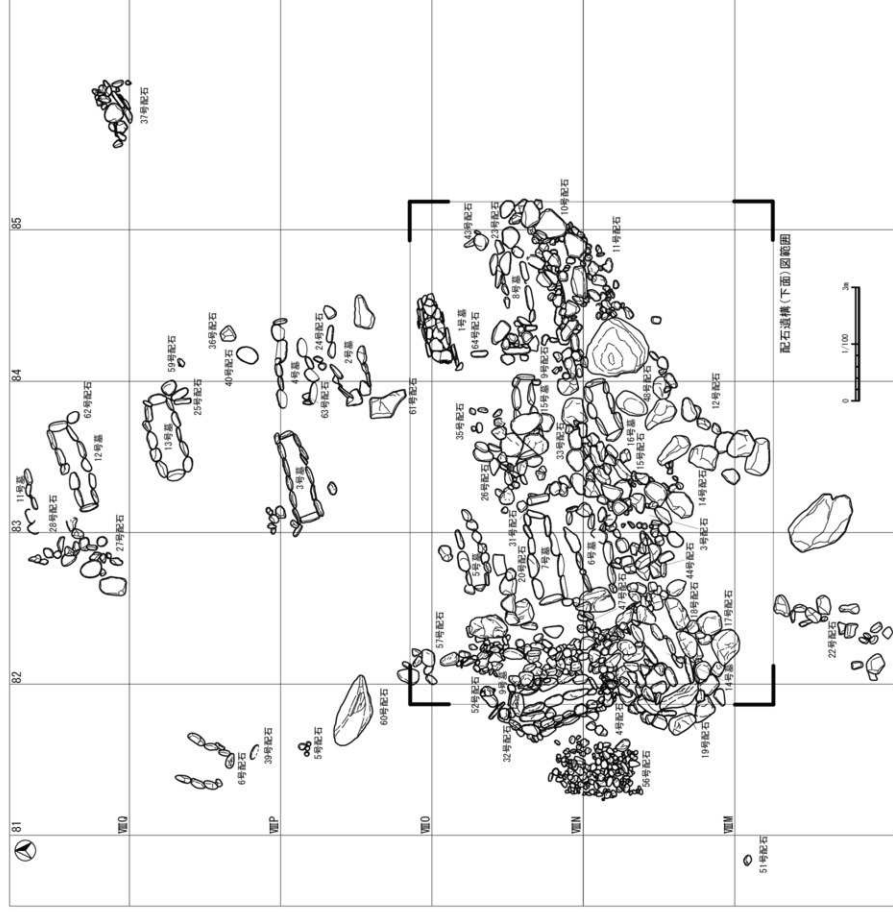


図52 石棺墓35(26号墓)



石箱墓A群・配石遺構(上面)

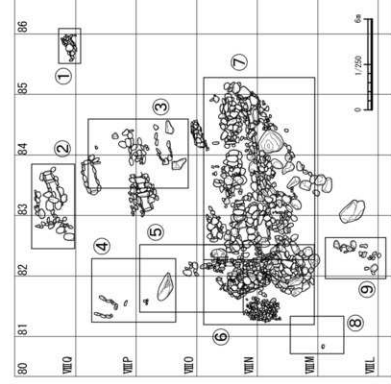
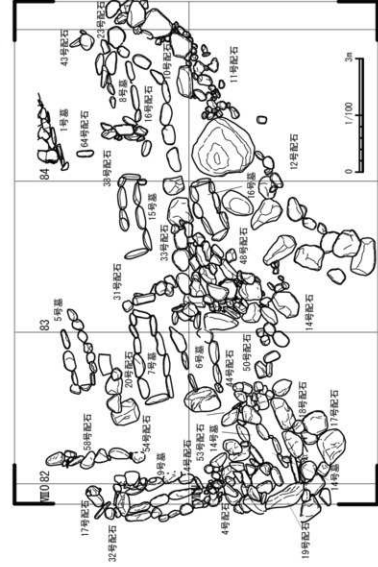


図53 石箱墓A群・配石遺構区劃図

表9 区割図①～⑦関連土層断面図と掃軌道構一覽

図番号	区割図	断面図	地盤条件と断面図概
図54	区割図①	A-A'	27号配石
図55	区割図①	A-A'	37号配石
図56	区割図②	B-B'	12号集塵石=28号配石 11号集塵
図56	区割図②	C-C'	62号配石
図56	区割図③	D-D'	25号配石
図56	区割図③	E-E'	59号配石
図56	区割図③	F-F'	40号配石>4号集塵石、36号配石
図56	区割図③	G-G'	4号集塵石=24号配石>2号集塵石
図56	区割図③	H-H'	61号配石>SK6555(1号集塵石裏込)>SK6557
図56	区割図③	I-I'	14号集塵石=63号配石
図57	区割図④	A-A'	6号配石
図57	区割図④	B-B'	39号配石
図57	区割図④	C-C'	5号配石=5号配石>60号配石
図59	区割図⑤	A-A'	60号配石
図59	区割図⑤	B-B'	60号配石
図59	区割図⑤	C-C'	60号配石
図59	区割図⑤	D-D'	67号配石>57号配石>58号配石
図63	区割図⑥	E-E'	52号配石>9号集塵石=32号配石
図63	区割図⑥	F-F'	9号集塵石>9号集塵石=32号配石
図63	区割図⑥	G-G'	57号配石>20号配石>58号配石・54号配石>取3
図63	区割図⑥	H-H'	57号配石>58号配石>取3
図63	区割図⑥	I-I'	4号配石S・2・4・5・4号配石S・1・7=57号配石 >6号集塵・32号配石
図63	区割図⑥	J-J'	4号配石S・2・3・6>57号配石=4号配石
図64	区割図⑥	K-K'	17号配石・18号配石=14号集塵石
図64	区割図⑥	L-L'	18号配石・19号配石=14号集塵石 32号配石
図64	区割図⑥	M-M'	53号配石・SP12002>取3
図64	区割図⑥	N-N'	47号配石・57号配石>6号集塵石
図64	区割図⑥	O-O'	6号集塵・3号配石・15号配石・3号配石
図65	区割図⑦	P-P'	14号配石・33号配石>21号配石>15号配石
図65	区割図⑦	Q-Q'	15号配石>21号配石>14号配石 6号集塵
図65	区割図⑦	R-R'	16号集塵石=14号配石
図65	区割図⑦	S-S'	33号配石>16号集塵>15号集塵 15号集塵>SK5592
図65	区割図⑦	T-T'	33号配石>6号集塵・15号集塵
図65	区割図⑦	U-U'	16号集塵石・重石>48号配石>SK5592 16号集塵石・重石=33号配石
図66	区割図⑦	V-V'	10号配石>11号配石>8号集塵石=16号配石>SP12680
図66	区割図⑦	W-W'	29号配石>8号集塵=16号配石
図66	区割図⑦	X-X'	13号配石>16号配石(設置面のレベル差)
図66	区割図⑦	Y-Y'	10号配石>16号配石
図73	区割図⑧	A-A'	SK5590>51号配石
図73	区割図⑧	B-B'	51号配石 SP12193 SP12553
図74	区割図⑨	A-A'	22号配石

*重石の瓦割：重い>軽い・2号集塵石=取3

表10 配石遺構関連の写真図版

遺構名	照準写真図版	遺構名	照準写真図版
3号配石	282・330・313・316・327	37号配石	315・319
4号配石	289・313・322・323・325・327・330	38号配石	287・331
5号配石	313・320	40号配石	320
6号配石	313・320	43号配石	279・318
9号配石	285・287・315・331	44号配石	325
10号配石	285・314・332	47号配石	322・323
11号配石	285・314・333・334	48号配石	300・315・329
12号配石	314・333	50号配石	315・334
13号配石	332	51号配石	313・326
14号配石	300・301・314・330	52号配石	289・290・322・324
15号配石	300・330	53号配石	315・334
16号配石	287・314・332	54号配石	284・316・327
17号配石	289・294・314・325・326	56号配石	289・315・326
18号配石	289・294・314・325・326	57号配石	322・323・324
19号配石	289・294・314・325	58号配石	322・323・324
20号配石	314・327	59号配石	313・319
21号配石	301・330	60号配石	313・320・321
22号配石	334	61号配石	273・274・316・319
23号配石	285・331	62号配石	292・316・317
24号配石	279・318	63号配石	279・313・318
25号配石	293・315・317	64号配石	285・287
26号配石	295・298・316・328	1001号配石	302・303・335
27号配石	317	1002号配石	335
28号配石	292・316・317	1003号配石	335
29号配石	285・331	1004号配石	336
31号配石	328	1005号配石	300・336
32号配石	289・290・314・322・324	1006号配石	335
33号配石	295・297・300・301・314・329・330	1007号配石	337
35号配石	328	1008号配石	304・336
36号配石	279・313・318・319	1009号配石	337
		1010号配石	337

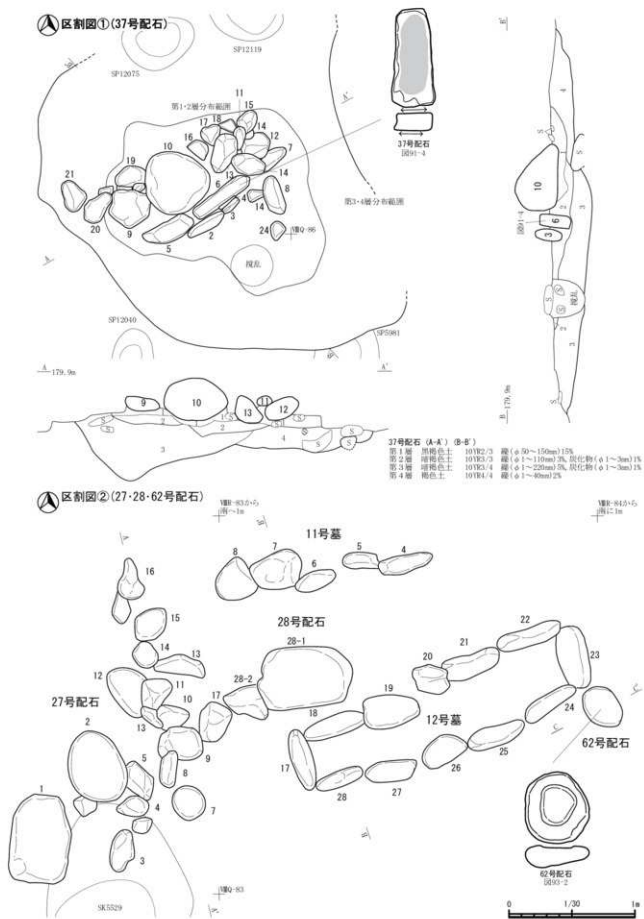


図54 配石遺構1(27・28・37・62号配石)

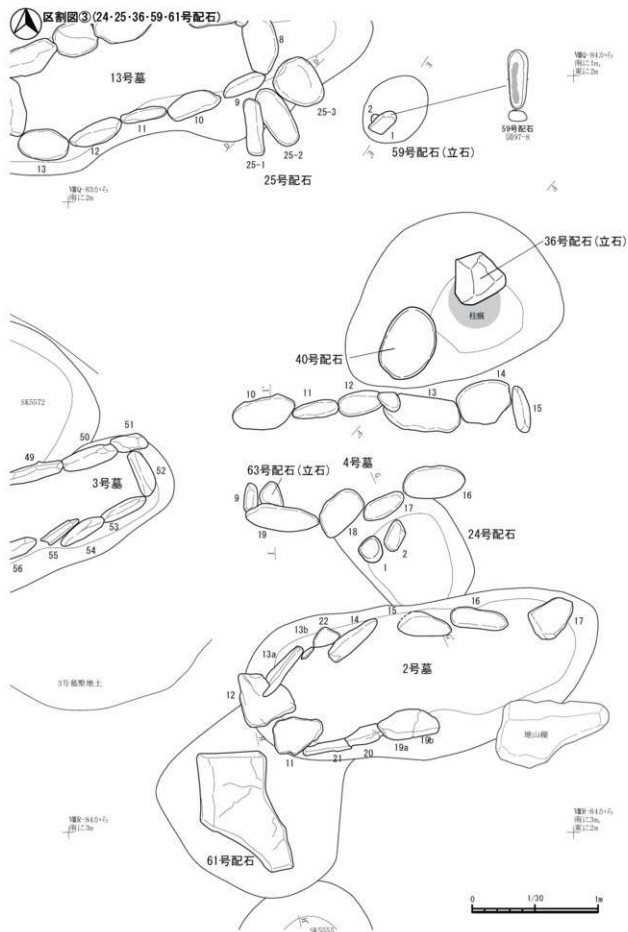
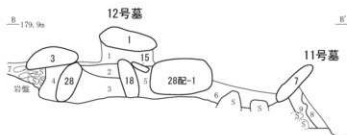
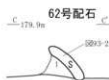
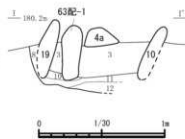
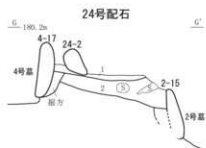
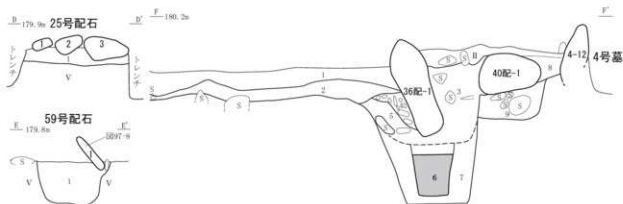


図55 配石遺構2(24・25・36・40・59・61・63号配石)

区割図②関連断面図



区割図③関連断面図



27号配石 (A-A')

第1層	黑褐色土	10YR2/3	縦(φ1~120mm)5%,炭化物(φ1~10mm)1%
第2層	黑褐色土	10YR2/3	縦(φ20~70mm)1%
第3層	暗褐色土	10YR3/4	縦(φ10~30mm)1%
第4層	暗褐色土	10YR3/4	縦(φ10~50mm)2%
第5層	暗褐色土	10YR4/4	縦(φ10~30mm)2%
第6層	暗褐色土	10YR2/4	縦(φ70~200mm)雑多層
第7層	暗褐色土	10YR4/4	縦(φ1~120mm)20%(+11号墓)
第8層	暗褐色土	10YR3/4	縦(φ1~90mm)2%,炭化物(φ10mm以下)1%(+11号墓)

62号配石 (C-C')

第1層	暗褐色土	10YR3/2	縦(φ1~18mm)2%
第2層	暗褐色土	10YR3/3	縦(φ1~35mm)10%

59号配石 (E-E')

第1層	暗褐色土	10YR3/3	縦(φ1~80mm)10%
-----	------	---------	---------------

36号配石 (F-F')

第1層	暗褐色土	10YR2/3	縦(φ1~190mm)5%,炭化物(φ1~12mm)1%
第2層	暗褐色土	10YR3/3	縦(φ1~175mm)5%
第3層	暗褐色土	10YR4/4	縦(φ1~230mm)10%
第4層	暗褐色土	10YR3/4	縦(φ1~190mm)25%
第5層	暗褐色土	10YR4/4	縦(φ1~230mm)10%
第6層	注記なし		立石下部の柱脚
第7層	注記なし		立石下部の柱脚
第8層	注記なし		4号墓石室込土
第9層	暗褐色土	10YR4/4	縦(φ1~200mm)20%,炭化物(φ1~13mm)1%

24号配石 (G-G')

第1層	暗褐色土	10YR3/3	黒褐色土(10YR2/3)2%,縦(φ3~80mm)2%,炭化物(φ1~2mm)1%
第2層	暗褐色土	10YR2/3	暗褐色土(10YR3/4)2%,縦(φ2~200mm)5%,炭化物(φ1~2mm)1%

61号配石 (H-H')

第1層	暗褐色土	10YR3/3	縦(φ1~90mm)10%
-----	------	---------	---------------

土層注記は図29参照

図56 配石遺構3(24・25・27・28・36・40・59・61~63号配石)

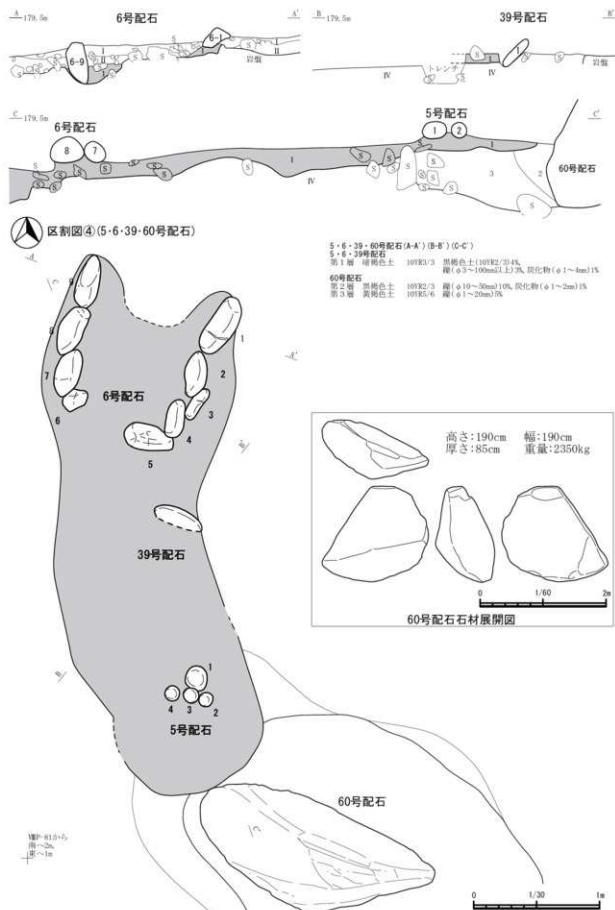


図57 配石遺構4(5・6・39・60号配石)

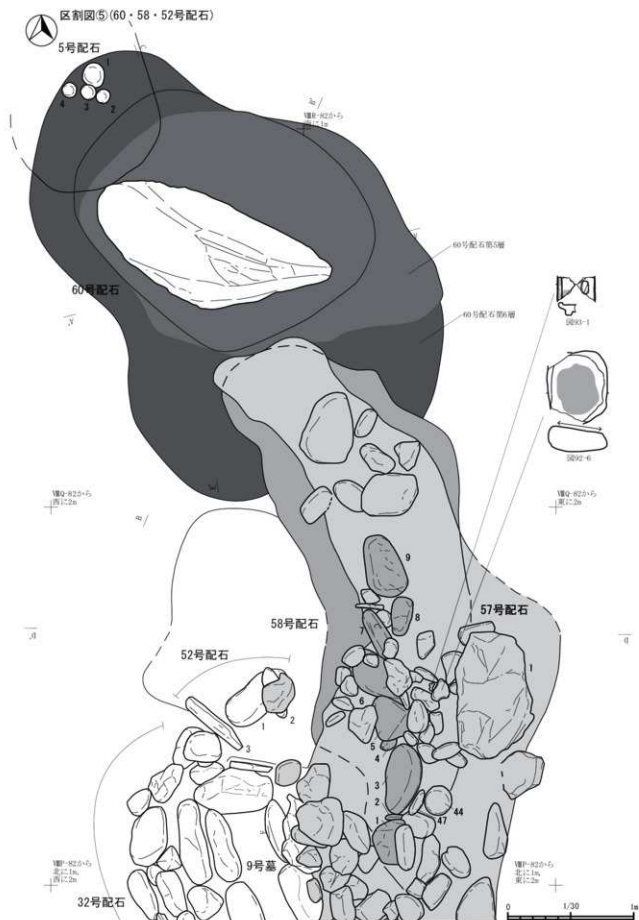


図58 陪石遺構5(52・58・60号陪石)

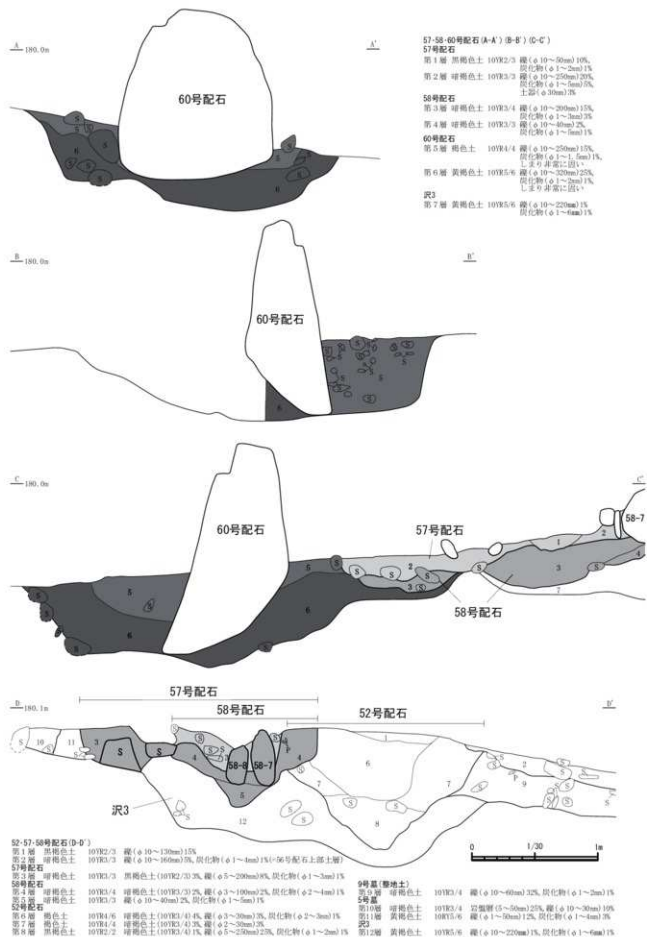


図59 配石遺構6(52・57・58・60号配石)

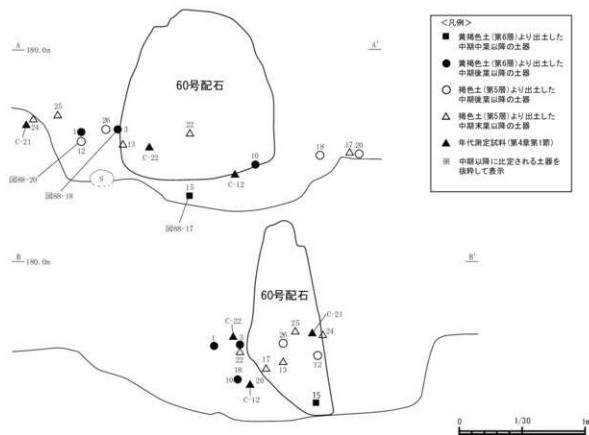
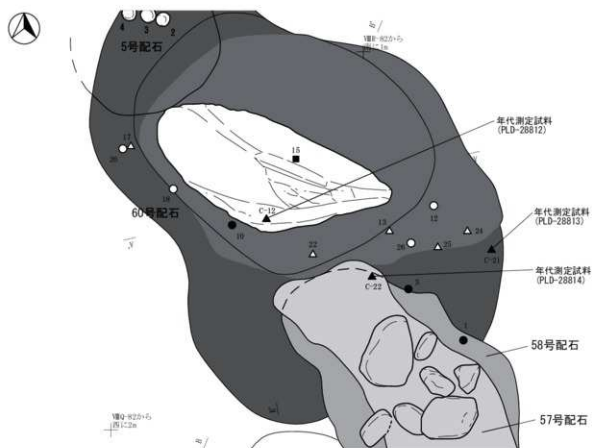


図60 配石遺構7(60号配石土器出土状況)

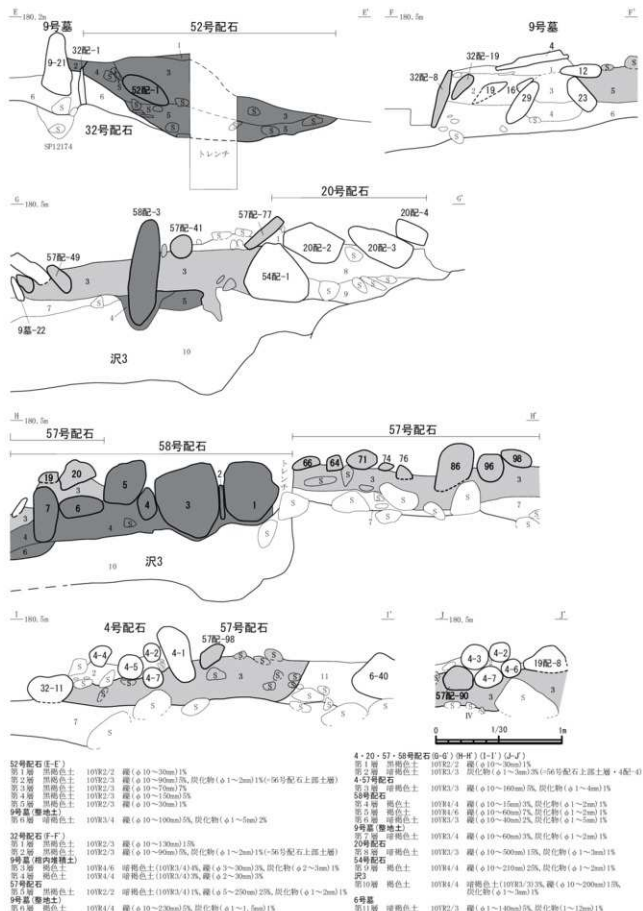


図61 配石遺構8(区割図⑥・⑦E-E~J-J)(4・20・32・52・57・58号配石)

区割図⑥

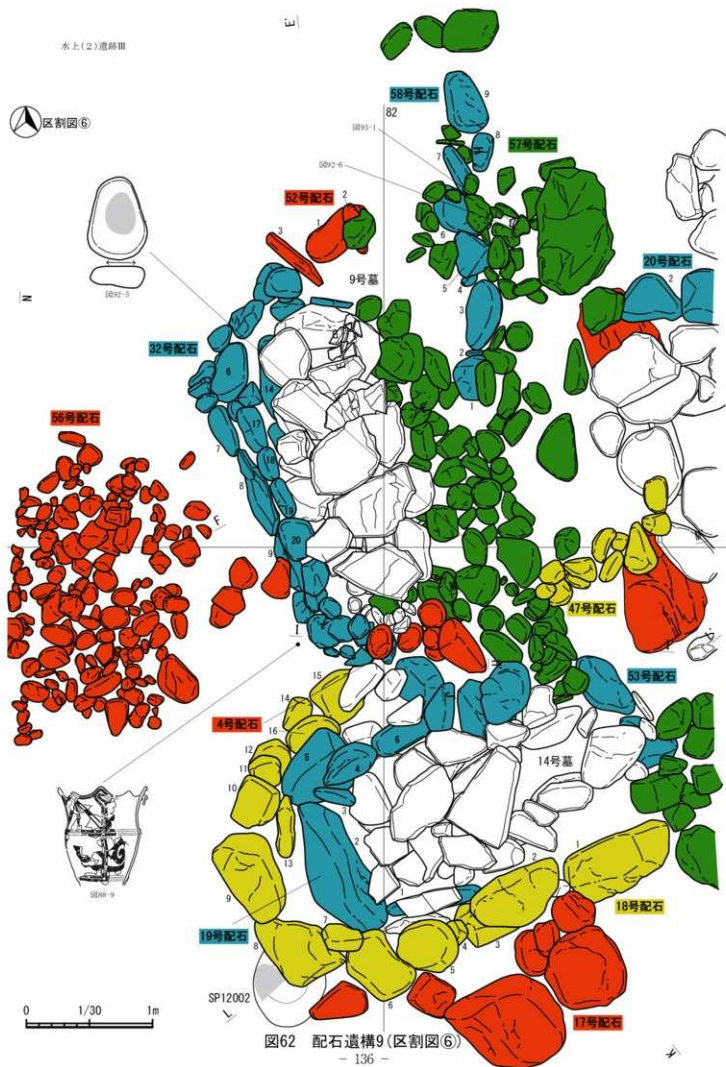


图62 配石遺構9(区割图⑥)

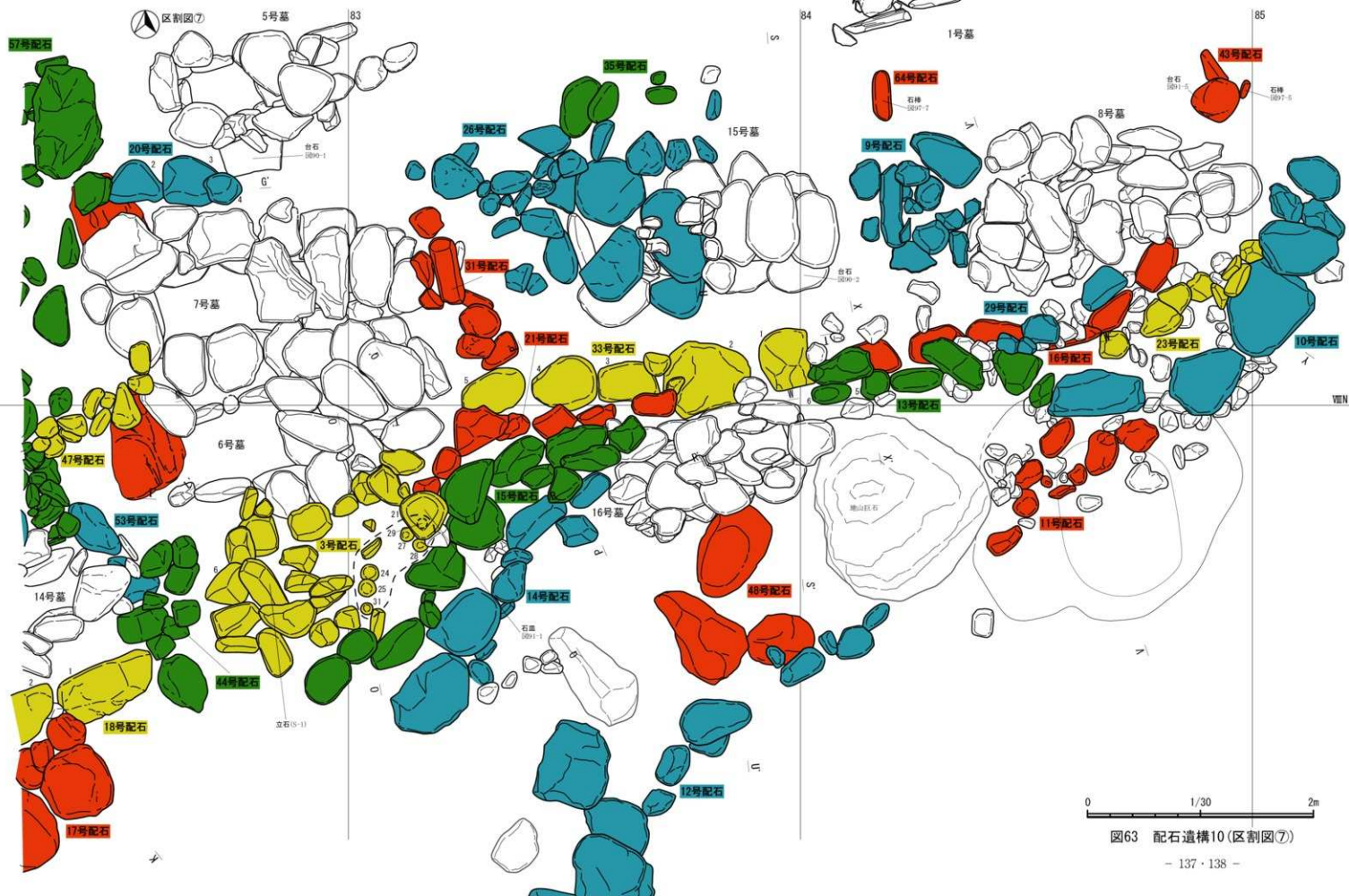
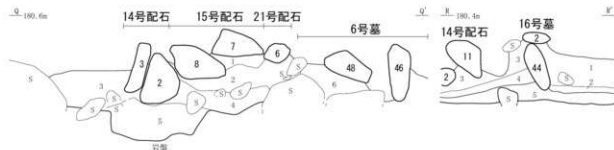
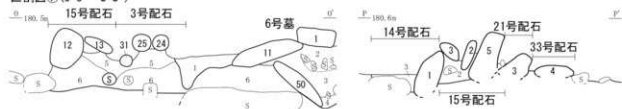


図63 陪石遺構10(区割図⑦)



図64 配石遺構11(区割図⑥・⑦K-K'~N-N')(17~19・32・47・53・56・57号配石)

区割図⑦(0-0'~U-U')



3号配石(0-0')

- 第1層 黒褐色土 10VR2/2 礫(φ1~35mm)1%,炭化物(φ1~7mm)1%
- 第2層 黒褐色土 10VR2/3 礫(φ10~30mm)1%
- 第3層 黒褐色土 10VR2/3 埴粉土(10VR3/3)1%,礫(φ5~40mm)2%,炭化物(φ5~10mm)2%
- 第4層 注砂なし 6号墓周縁土
- 第5層 埴粉色土 10VR3/3 礫(φ1~90mm)1%,炭化物(φ1~12mm)1%
- 第6層 黒褐色土 10VR2/3 礫(φ1~140mm)3%,炭化物(φ1~12mm)1%

14・15・21・33号配石(0-0')

- 第1層 埴粉色土 10VR3/3 礫(φ1~10mm)1%,炭化物(φ1~10mm)4%
- 第2層 埴粉色土 10VR3/4 礫(φ1~150mm)12%,炭化物(φ1mm以下)17.2%
- 第3層 黒褐色土 10VR2/3 礫(φ1~70mm)7%,炭化物(φ1mm以下)1%未満

- 第4層 埴粉色土 10VR4/4 礫(φ1~40mm)12%,炭化物(φ1~2mm)2%
- 第5層 埴粉色土 10VR4/4 礫(φ1~200mm)17%,炭化物(φ1~2mm)2%
- 第6層 黒褐色土 10VR2/3 礫(φ1~140mm)1%,炭化物(φ1~12mm)1%
- 14号配石・16号墓(床) 第1層 埴粉色土 10VR4/4 礫(φ10~190mm)1%,炭化物(φ1~2mm)2%
- 第2層 埴粉色土 10VR3/4 黒褐色土(10VR3/3)2%,礫(φ3~50mm)3%,炭化物(φ1~3mm)1%
- 第3層 埴粉色土 10VR3/4 礫(φ1~40mm)15%,炭化物(φ1~3mm)2%
- 第4層 埴粉色土 10VR4/4 礫(φ1~20mm)7%,炭化物(φ1~2mm)2%
- 第5層 褐色土 10VR4/4 礫(φ1~50mm)4%,炭化物(φ1~2mm)1%未満

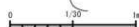
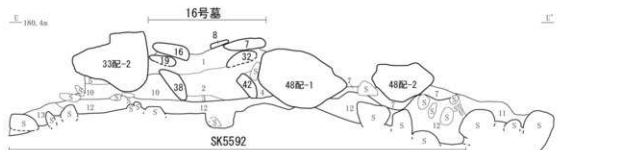
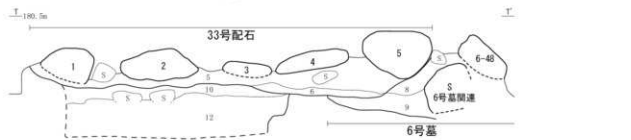
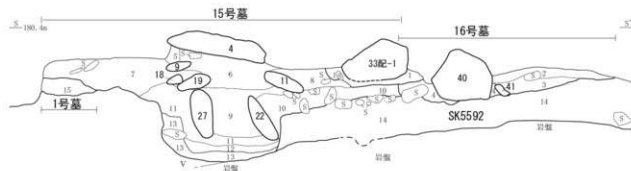


図65 配石遺構12(区割図⑦(0-0'~U-U')(3・14・15・21・33・48号配石))

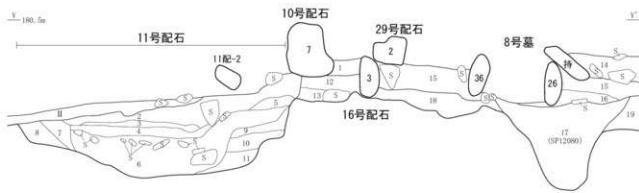
33号配石・1・15・16号墓・SK5502(5-5')

第1層	黒褐色土	10192/2	礫(φ2~30mm)2%,炭化物(φ1~2mm)1%
第2層	褐色土	10194/4	礫(φ10~150mm)13%,炭化物(φ1~2mm)2%
第3層	暗褐色土	10193/4	黒褐色土(10192/3)2%,礫(φ3~50mm)3%,炭化物(φ1~2mm)1%
第4層	暗褐色土	10192/3	礫(φ1~40mm)10%,炭化物(φ1~2mm)2%
第5層	褐色土	10194/4	礫(φ1~20mm)7%,炭化物(φ1~2mm)2%
第6層	黄褐色土	10193/5	礫(φ1~30mm)3%,炭化物(φ1mm以下)1%未満
第7層	暗褐色土	10192/3	礫(φ10~50mm)25%,炭化物(φ1~10mm)1%
第8層	褐色土	10194/4	礫(φ10~80mm)9%,炭化物(φ1~2mm)2%,土器(φ20mm)4%
第9層	暗褐色土	10193/3	黒褐色土(10192/3)2%,礫(φ3~20mm)1%
第10層	褐色土	10194/4	礫(φ1~50mm)4%,炭化物(φ1~2mm)1%未満
第11層	黄褐色土	10193/5	礫(φ10~150mm)3%,炭化物(φ1~2mm)2%
第12層	褐色土	10194/4	礫(φ10~120mm)7%,炭化物(φ1~2mm)2%
第13層	暗褐色土	10192/3	礫(φ10~120mm)7%
第14層	黄褐色土	10193/5	炭化物(φ1~3mm)2%
第15層	黄褐色土	10193/5	礫(φ1~20mm)5%,炭化物(φ1mm以下)1%未満

33・48号配石・16号墓(T-T')(0-0')

第1層	暗褐色土	10192/3	礫(φ5~30mm)1%,炭化物(φ1~2mm)1%
第2層	暗褐色土	10192/2	礫(φ2~30mm)2%,炭化物(φ1~2mm)1%
第3層	褐色土	10194/4	礫(φ10~200mm)11%
第4層	暗褐色土	10192/3	礫(φ2~10mm)2%,炭化物(φ1~2mm)1%
第5層	褐色土	10194/4	礫(φ10~40mm)10%,炭化物(φ1~4mm)7%
第6層	褐色土	10194/4	礫(φ1~60mm)7%,炭化物(φ1~3mm)3%
第7層	暗褐色土	10193/3	黒褐色土(10192/3)2%,礫(φ3~20mm)1%
SK5502	褐色土	10194/4	礫(φ10~120mm)7%,炭化物(φ1~3mm)7%
第9層	暗褐色土	10194/4	礫(φ10~100mm)10%,炭化物(φ1~2mm)1%未満
第10層	黄褐色土	10193/5	礫(φ10~150mm)25%,炭化物(φ2mm)2%
第11層	暗褐色土	10193/4	礫(φ10~50mm)10%,炭化物(φ1~2mm)2%
第12層	黄褐色土	10193/5	礫(φ20~70mm)3%,炭化物(φ1~2mm)2%
第13層	黄褐色土	10193/5	礫(φ10~90mm)2%,炭化物(φ1~2mm)1%

区割⑦(V-V'~Y-Y')

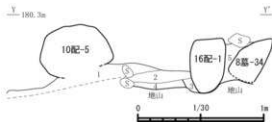
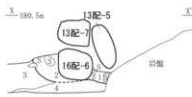
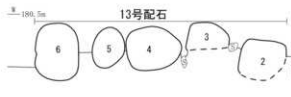


10・11・16・29号配石・8号墓(V-V')

10号配石	第1層	黒褐色土	10192/3	礫(φ2~100mm)2%
11号配石	第1層	暗褐色土	10193/3	礫(φ5~50mm)3%
第3層	暗褐色土	10193/3	礫(φ2~20mm)2%,炭化物(φ1~5mm)1%	
第4層	暗褐色土	10192/3	礫(φ10~30mm)2%,炭化物(φ1~2mm)1%	
第5層	暗褐色土	10193/3	礫(φ3~60mm)3%,炭化物(φ1~2mm)1%	
第6層	暗褐色土	10192/3	礫(φ2~130mm)7%,炭化物(φ1~10mm)1%	
第7層	暗褐色土	10193/4	礫(φ2~30mm)1%,炭化物(φ2~10mm)1%	
第8層	暗褐色土	10193/4	礫(φ2~10mm)1%	
第9層	褐色土	10194/4	礫(φ1~40mm)3%	
第10層	褐色土	10194/4	礫(φ1~20mm)2%	
第11層	暗褐色土	10193/4	礫(φ2~30mm)2%,炭化物(φ1~20mm)1%	

16号配石

第12層	暗褐色土	10192/3	礫(φ3~20mm)1%,炭化物(φ1~5mm)1%	
第13層	黄褐色土	10192/3	礫(φ2~40mm)2%	
8号墓	第11層	暗褐色土	10192/2	礫(φ2~80mm)3%,炭化物(φ1~2mm)1%
第12層	暗褐色土	10192/2	礫(φ2~60mm)3%,炭化物(φ1~10mm)1%	
第13層	暗褐色土	10192/3	礫(φ1~80mm)3%,炭化物(φ1mm)1%未満	
SP12080	第11層	暗褐色土	10193/3	礫(φ1~200mm)20%,炭化物(φ1~3mm)2%
第12層	暗褐色土	10193/4	礫(φ2~50mm)2%,炭化物(φ1~3mm)1%	
第13層	暗褐色土	10193/4	礫(φ5~80mm)3%,炭化物(φ1~2mm)1%	



13号配石(Y-Y')

第1層	暗褐色土	10192/3	礫(φ1~70mm)20%
第2層	暗褐色土	10193/3	炭化物(φ1~2mm)1%,礫(φ1~80mm)3%
第3層	暗褐色土	10193/4	炭化物(φ1~2mm)1%,礫(φ1~90mm)1%
第4層	褐色土	10194/4	炭化物(φ1~8mm)3%,礫(φ1~25mm)1%

10・16号配石(Y-Y')

第1層	暗褐色土	7, 33配/3	礫(φ50~200mm)極多量含む,色調は第11層に類似
第2層	暗褐色土	10192/3	礫(φ50mm)少量含む
第3層	暗褐色土	10192/3	
第4層	暗褐色土	10194/4	礫多量含む,色調は4号配石に類似
第5層	暗褐色土	10194/4	礫(φ80mm)少量,2・3層に類似する5号配石に類似

図66 配石遺構13(区割⑦V-V'~Y-Y'(10・11・13・16・29号配石))

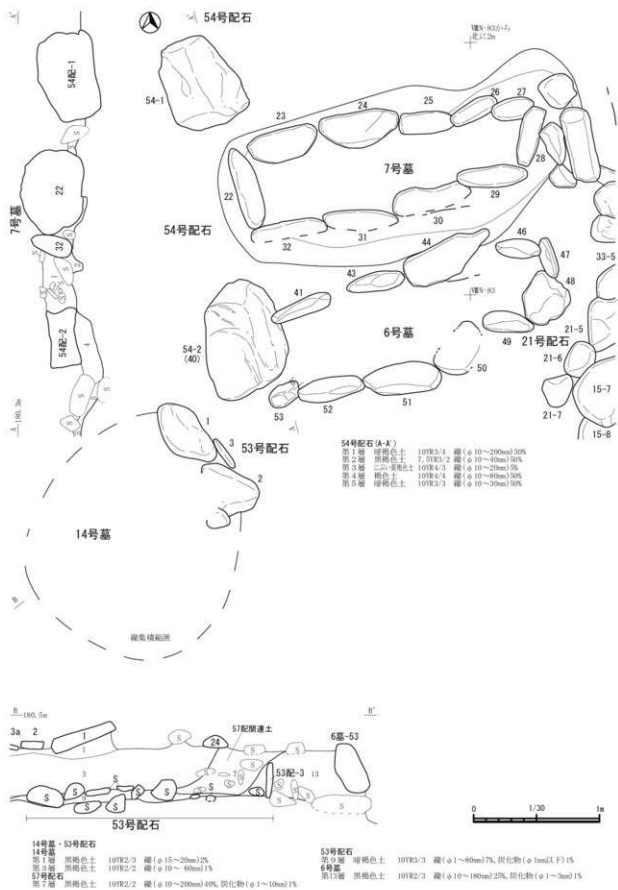
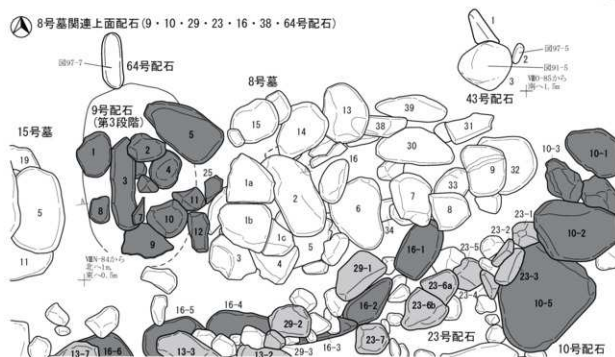
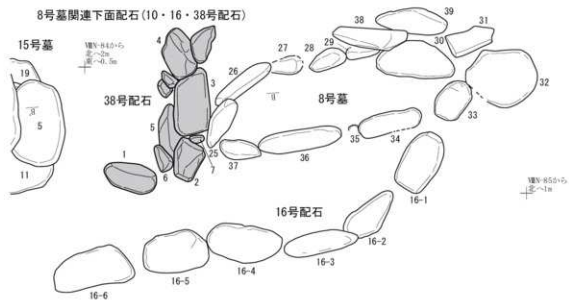


図67 配石遺構14(6・7号墓関連配石(53・54号配石))

▲ 8号墓関連上面配石 (9・10・29・23・16・38・64号配石)



8号墓関連下面配石 (10・16・38号配石)



9号配石 (第2段階)



9号配石 (第1段階)

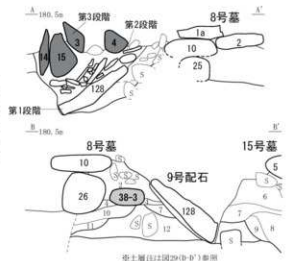
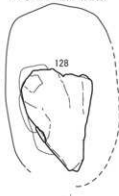


図68 配石遺構15 (8号墓関連配石 (9・10・16・23・29・38・43・64号配石))

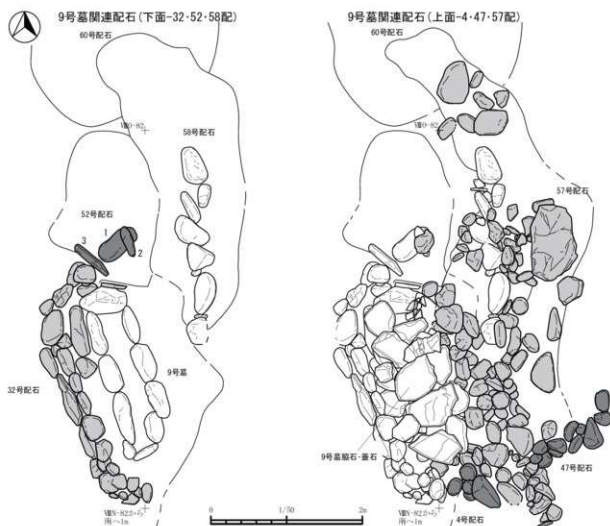


図69 配石遺構16(9号墓関連配石(上・下面))



図70 配石遺構17(区割図⑦関連配石(50号配石))

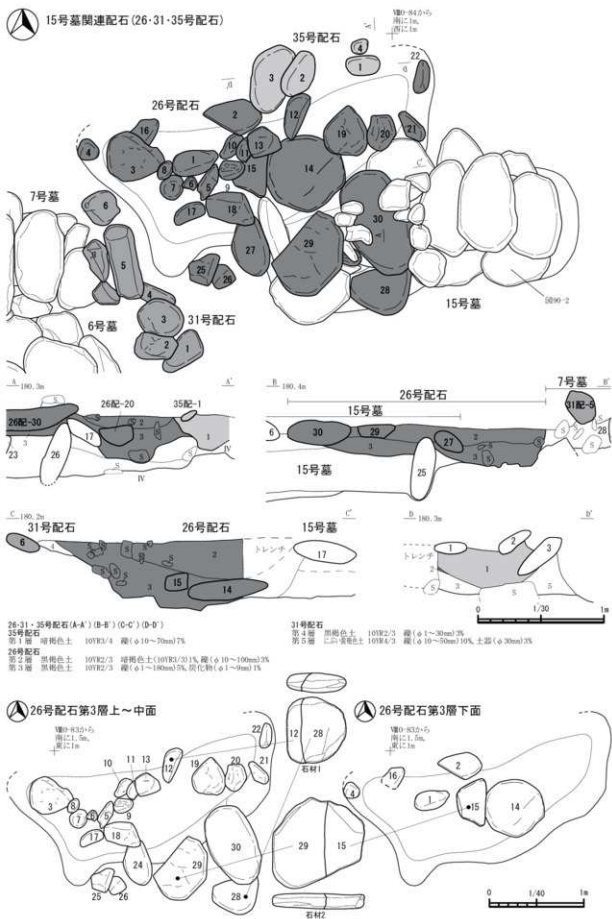


図71 配石遺構18(15号墓関連配石(26・31・35号配石))

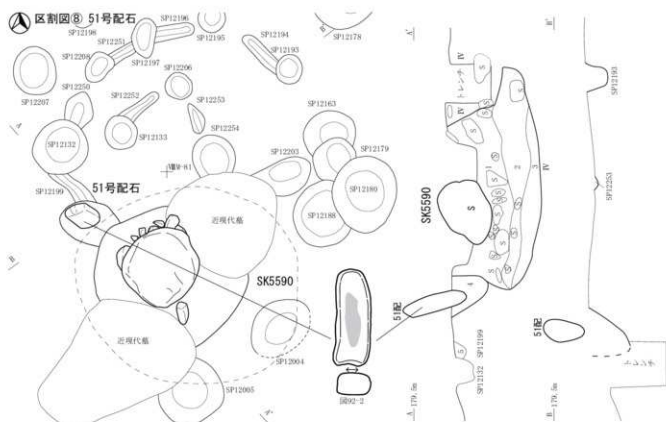


図73 配石遺構20(区割図⑧(51号配石))

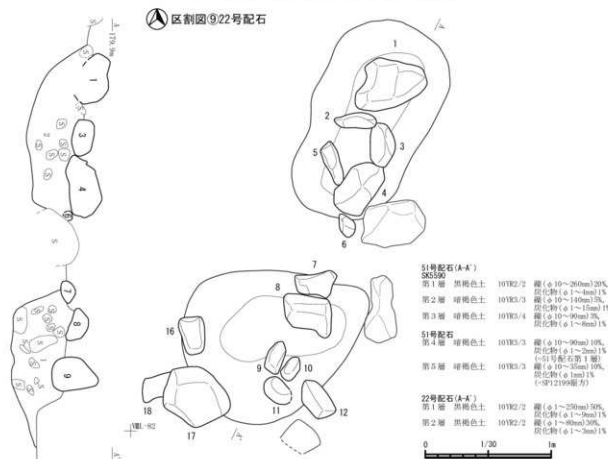
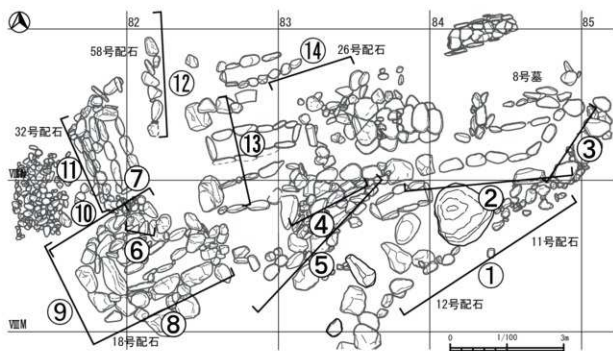


図74 配石遺構21(区割図⑨(22号配石))

- 引揚配石(A-A')**
SK5590
第1層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ10~20mm)20%
第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~4mm)1%
第3層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1~15mm)1%
第4層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~2mm)1%
第5層 暗褐色土 10YR2/2 礫(φ10~30mm)10%
炭化物(φ1~8mm)1%
(=SP12199層方)
- 22号配石(A-A')**
第1層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ1~20mm)50%
炭化物(φ1~5mm)1%
第2層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ1~8mm)20%
炭化物(φ1~3mm)1%

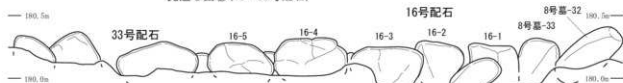
0 1/30 m



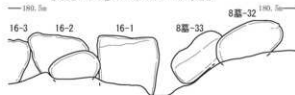
見通し図①(11・12号配石)



見通し図②(16・33号配石)



見通し図③(16号配石・8号墓)



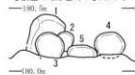
見通し図④(4号配石)



見通し図④(21号配石)



見通し図⑦(4号配石)



見通し図⑤(15号配石)

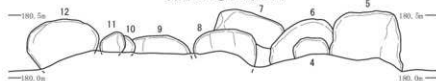


図75 配石遺構22(石棺墓A群南域配石遺構見通し①)

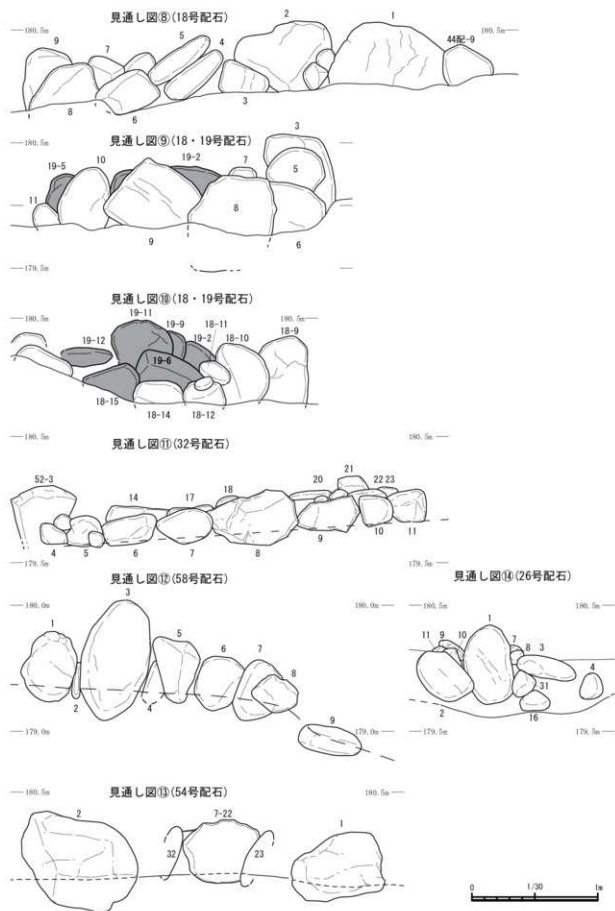


図76 配石遺構23(石棺墓A群南域配石遺構見通し②)

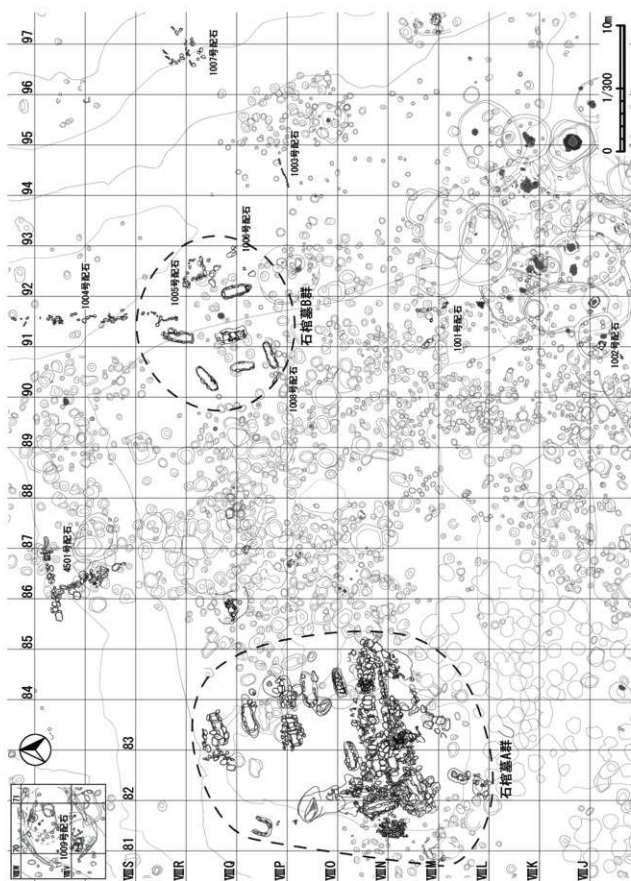


図77 配石遺構24(その他の地区の配石遺構位置図)



1004号配石

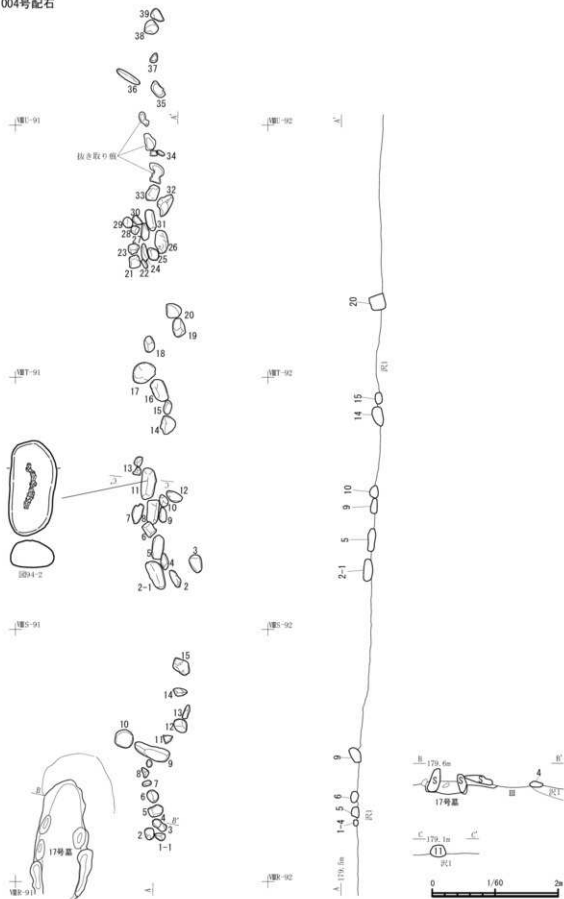


図79 配石遺構26(1004号配石)

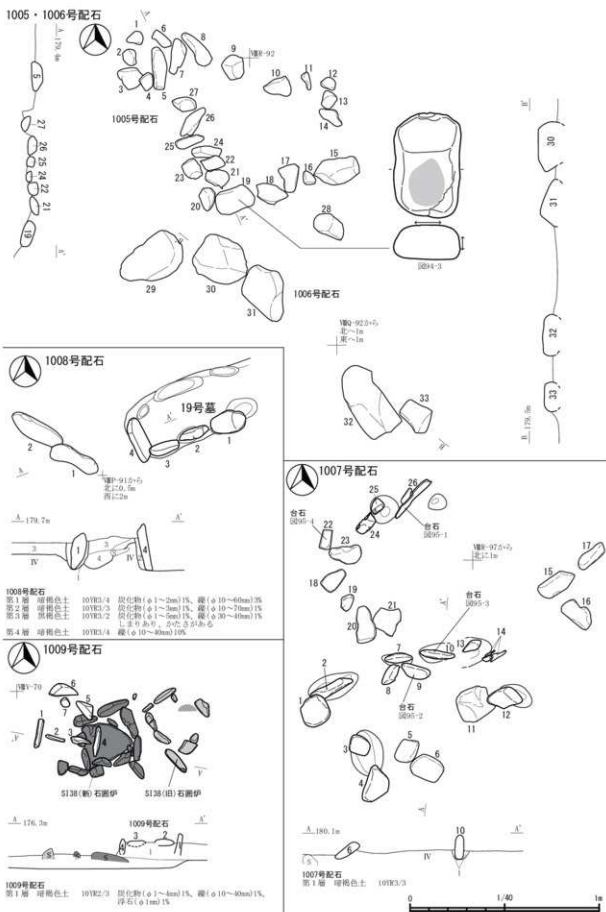


図80 配石遺構27(1005~1009号配石)

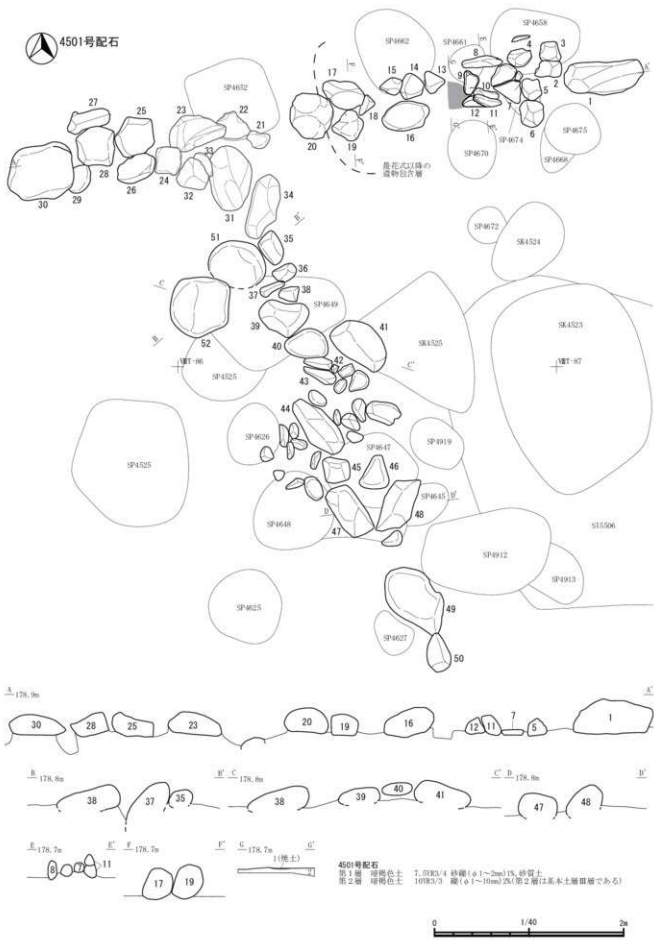


図81 配石遺構28 (4501号配石)

1号墓

底石下部



埴土



棺内埴精土



2号墓

壁石裏込土



棺内埴精土



3号墓

埴地層



棺内埴精土上層



棺内埴精土



棺内埴精土上層



4号墓

棺内埴精土下層



棺内埴精土



埴土



Ⅱa黑色土



5号墓

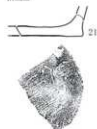
棺内埴精土上層



Ⅱa層



精埴土



6号墓

底面



横架土



棺内埴精土上層

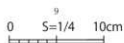
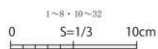


图82 土器1(1~6号墓)

7号墓

棺内埴積土



8号墓

埴土



棺内埴積土



9号墓

埴地層



棺内底面



1層



棺内埴積土上層



棺内埴積土



埴積土



種出面



12号墓

埴石裏込土



棺内埴積土下層



棺内埴積土上層

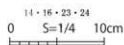
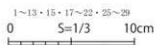


图83 土器2(7~12号墓)

13号墓

棺内堆精土上层



棺内堆精土



堆精土

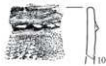


14号墓

横架土



棺内堆精土上层



15号墓

整地層



棺内底面



棺内堆精土下層



横架土



横架土



堆精土



16号墓

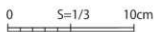
棺内堆精土下層



堆精土



1~5·7~23·25~29



6·24

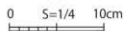
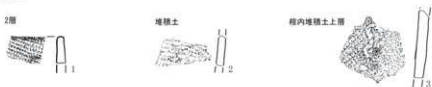


图84 土器3(13~16号墓)

17号墓



19号墓



20号墓



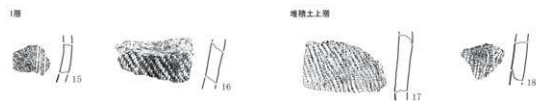
21号墓



22号墓



25号墓



26号墓



図85 土器4(17~26号墓)

3号配石

精整土



堆積土



9号配石

堆積土下層



堆積土

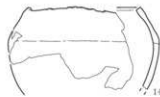


11号配石

上方



上方2層



12号配石

上方



一様



14号配石

上方



堆土

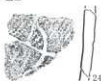


堆積土



15号配石

堆土



堆積土下層



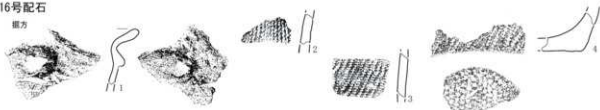
1·3·6~12·15~22·24·25
0 S=1/3 10cm

2·4·13·14·23
0 S=1/4 10cm

图86 土器5(3~15号配石)

16号配石

磁方



18号配石

埴土



19号配石

磁方



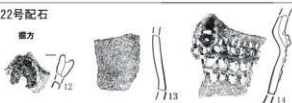
20号配石

磁方



22号配石

磁方



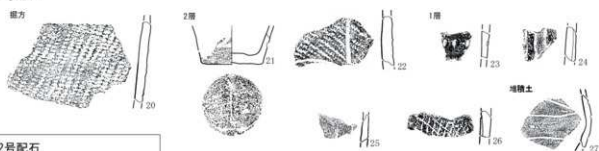
24号配石

磁方



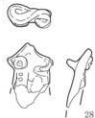
26号配石

磁方



32号配石

磁方



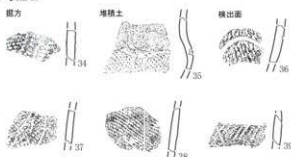
35号配石

磁方



37号配石

磁方



39号配石

磁方



1~20・22~40 0 S=1/3 10cm

0 S=1/4 10cm

21

図87 土器6(16~37号配石)

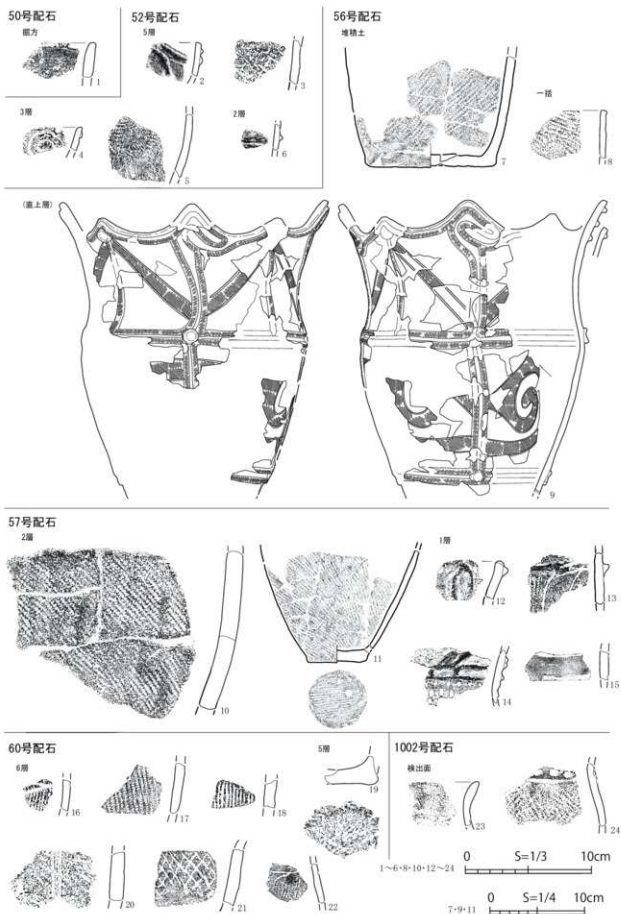
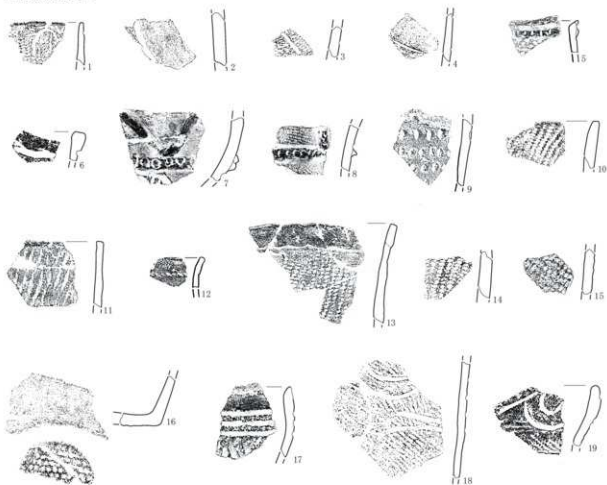
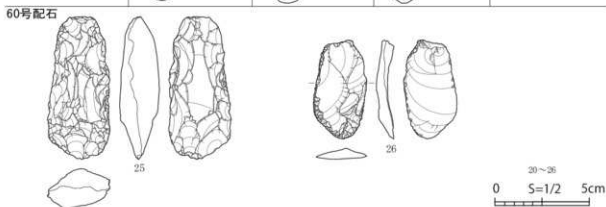
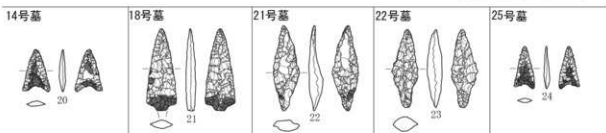


図88 土器7(50~60・1002号配石)

石棺墓A群構築土



1~19
0 S=1/3 10cm



20~26
0 S=1/2 5cm

図89 土器8(石棺墓A群構築土)・剥片石器

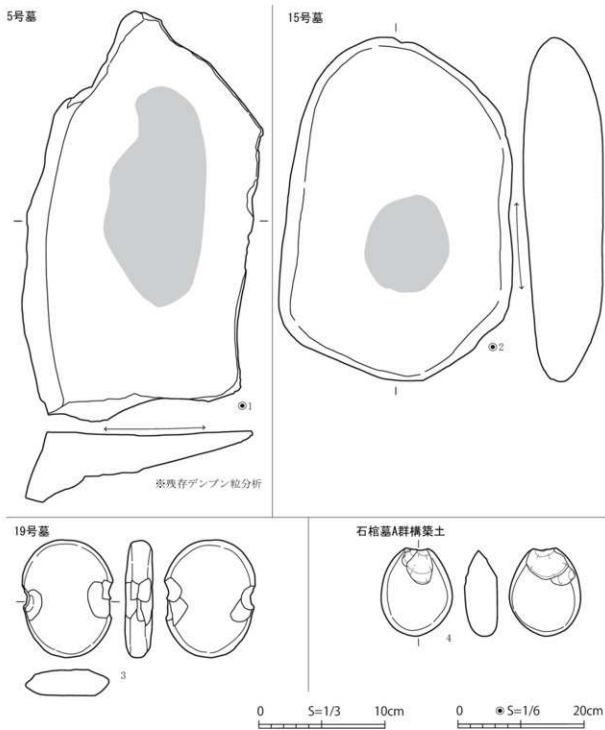


図90 礫石器1 (石棺墓)

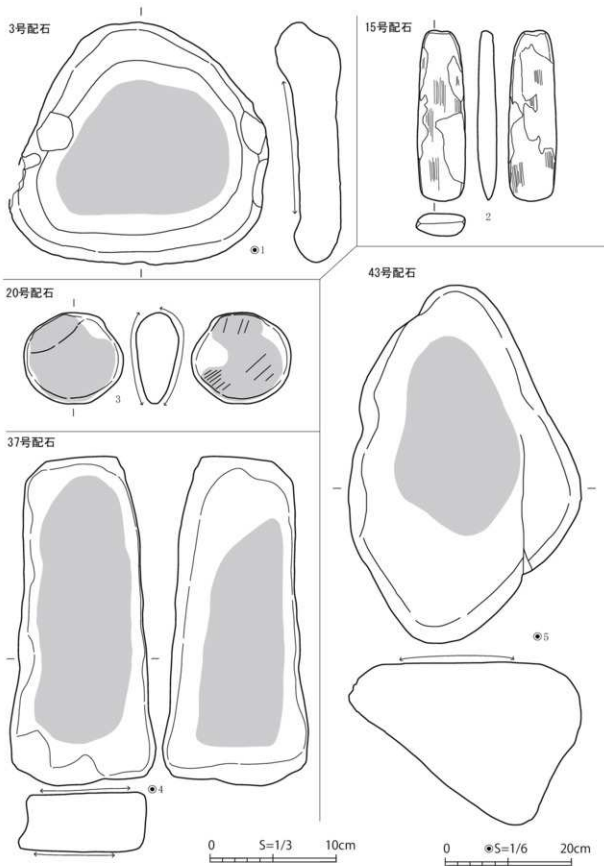


図91 礫石器2(3~43号配石)

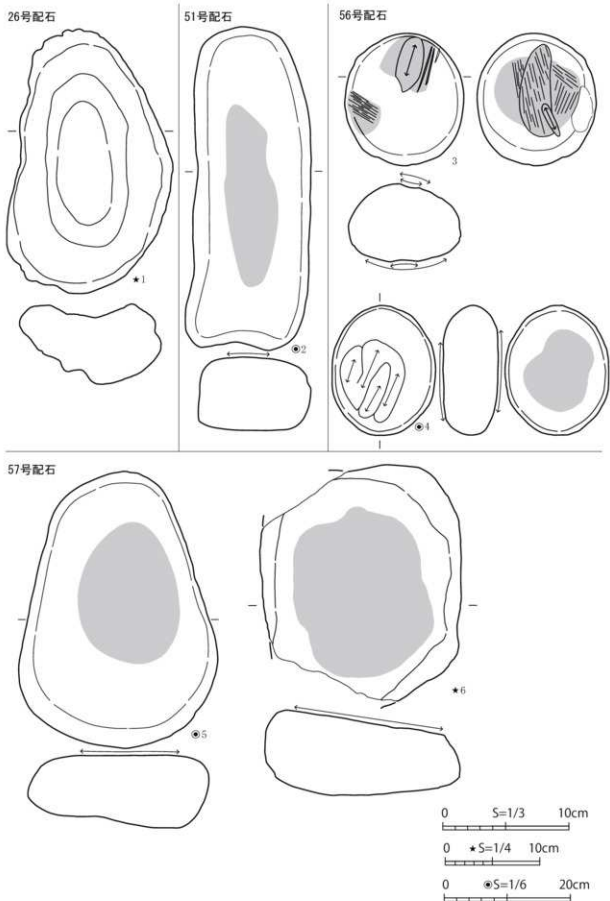


图92 碟石器3(26~57号配石)

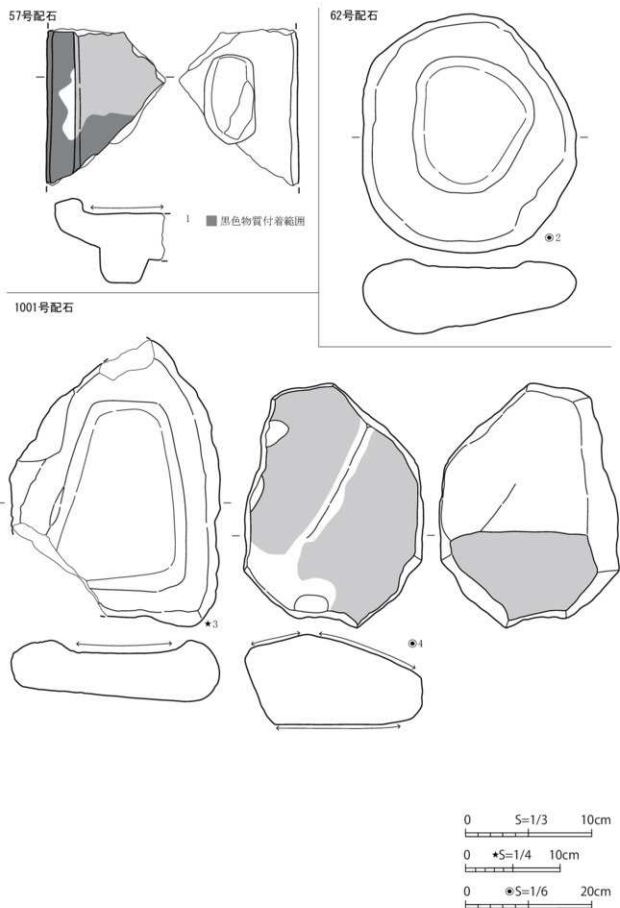
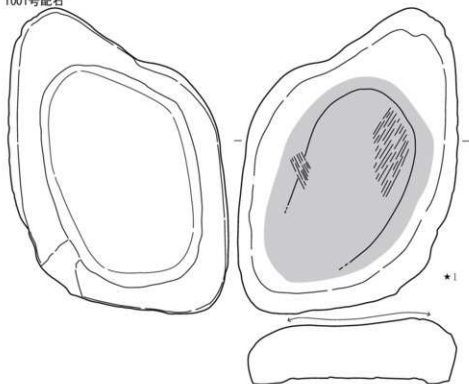
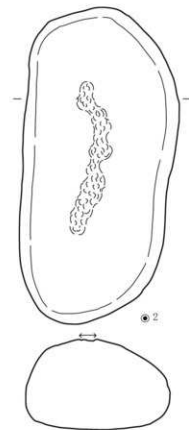


図93 礫石器4(57~1001号配石)

1001号配石



1004号配石



1005号配石

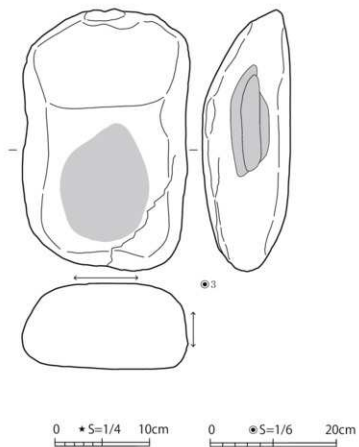


图94 砾石器5 (1001~1005号配石)

1007号配石

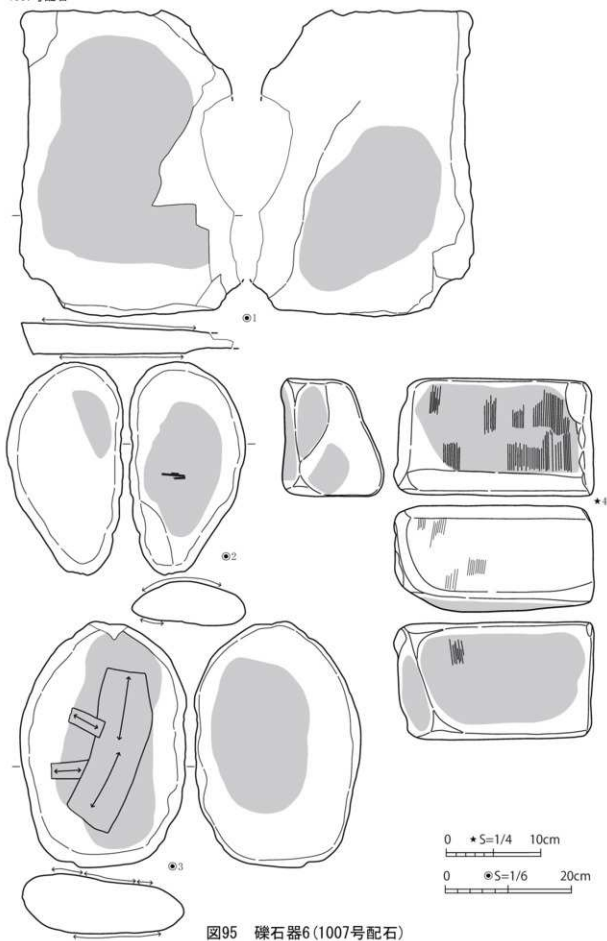


図95 礫石器6(1007号配石)

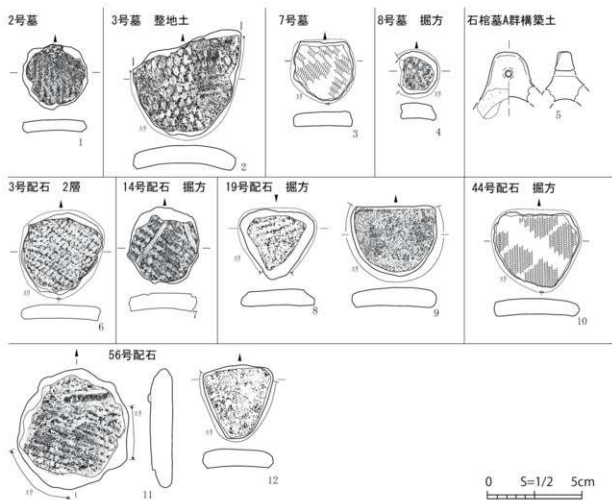


図96 土製品

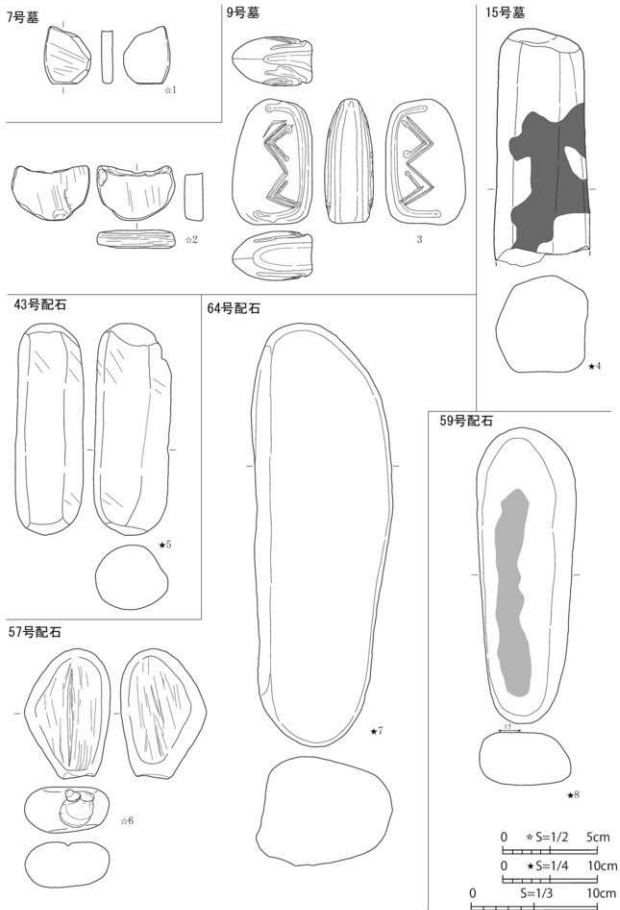
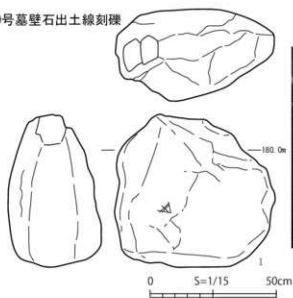


図97 石製品1(石棺墓・陪石遺構)

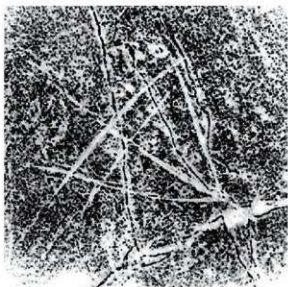
9号墓壁石出土線刻碑



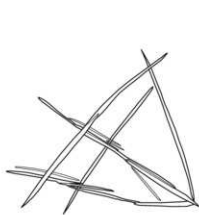
9号墓壁石線刻碑出土状況（白線内）



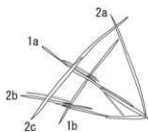
写真ほぼ原寸大



拓本は原寸大



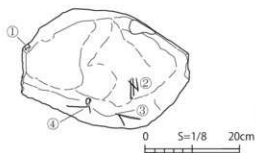
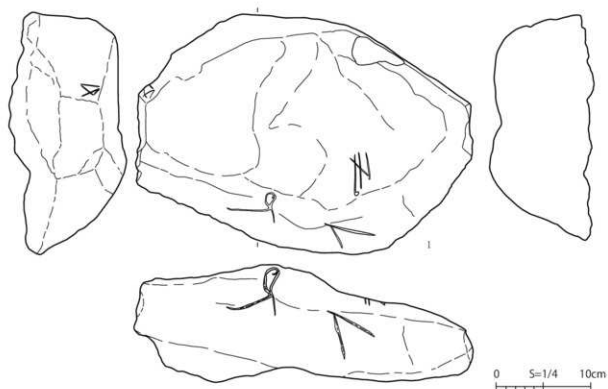
実測図は等倍



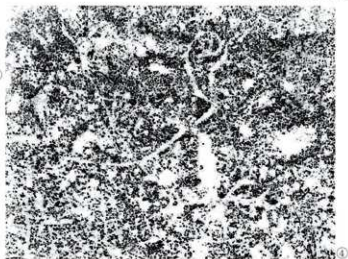
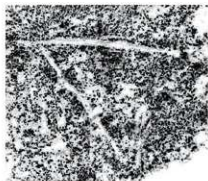
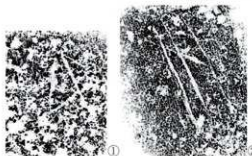
【線刻部の観察】

- ・図形は「×(1a・1b)」と「△(2a～2c)」を組み合わせた記号状。
- ・△の頂点(2a・2bの交点)に×の1点(1a)が接する。
- ・1b・2a・2bは長い直線上であるが、1a・2bは細かい短線をつなげている。
- ・1a・1bは相対的に刻線が浅いが、1aの右半(2a・2b交点側)は特に深く刻まれている。
- ・刻線の交点による新旧関係(書き順)は、2cがもっとも新しく、1bはもっとも古い。

図98 石製品2(9号墓壁石の線刻碑)



9号墓整地上出土線刻礫



(拓本はいずれも3分の2の大きさ)

図99 石製品3(9号墓整地土の線刻礫)

土器観察表

図番号	出土位置	エリア	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (g)	文様等の属性	型式	備考
石棺墓											
82-1	1号墓		底石下部	深鉢	胴部			(2.6)	13R縹回?	中後以降	陶珠残存不良
82-2	1号墓		蓋土	深鉢	口縁部			(3.4)	15R縹回→沈線	大木10	
82-3	1号墓		棺内堆積土	深鉢	胴部			(2.7)	6沈線区高文→斜縄文(燃り不明)	大木10	外面タール状炭化物付着
82-4	1号墓		棺内堆積土	深鉢	胴部			(2.3)	7L縹回	大木10	
82-5	2号墓		磐石裏込土	深鉢	胴部			(3.5)	8L縹回	大木10	P-1
82-6	2号墓		棺内堆積土	深鉢	口縁部			(3.4)	10折反し状口縁, R縹回	大木10～牛ヶ沢	
82-7	2号墓		棺内堆積土	深鉢	口縁部			(1.8)	4R縹回, 口縁面取り	牛ヶ沢～赤沢	
82-8	2号墓		棺内堆積土	深鉢	底部			(2.1)	23R縹回, 底面刺代直	大木10～牛ヶ沢	
82-9	3号墓		整地層	深鉢	胴部			(2.0)	114R(片染結縛付)縹回	中期初頭	P-1
82-10	3号墓		棺内堆積土上層	深鉢	口縁部			(2.7)	13横位ナブ	大木10	
82-11	3号墓	VMP-83	棺内堆積土	深鉢	胴部			(4.5)	16R半輪1縹回回→沈線区高文	大木10	外面タール状炭化物付着
82-12	3号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			(4.1)	15R縹回	大木10～牛ヶ沢	外面スス状炭化物付着
82-13	3号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			(3.8)	12R縹回→沈線	大木10	
82-14	4号墓		棺内堆積土下層	深鉢	胴部			(3.6)	13R縹回→沈線	大木10	
82-15	4号墓		棺内堆積土	深鉢	口縁部			(2.7)	8R縹回→区高沈線文→区外磨り消し	大木10	
82-16	4号墓西部		蓋土	深鉢	口縁部			(2.7)	7口縁舟走沈線	釜沢	
82-17	4号墓西部		蓋土	深鉢	胴部			(2.7)	9L縹回→沈線	大木10	
82-18	4号墓東		Ⅲa層色土	深鉢	胴部			(3.6)	21L縹回→横位2条の太沈線	釜沢	外面スス状炭化物付着
82-19	4号墓東		Ⅲa層色土	深鉢	胴部			(2.6)	9R半輪5縹回	牛ヶ沢～赤沢	
82-20	4号墓		Ⅲa層	深鉢	口縁部			(4.1)	2(銅一對?)口縁突起, 口縁舟走帯貼付→陸帯脇沈線	釜沢	
82-21	4号墓東		構築土	深鉢	底部			(3.2)	44個横位ナブ, 底面ヘラ?ナブ	大木10～牛ヶ沢	
82-22	5号墓		棺内堆積土上層	深鉢	口縁部			(4.7)	22口縁舟走帯(断面三角形:ヒレ状?)→L縹回	大木10	外面タール状炭化物付着
82-23	5号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			(3.3)	6L縹回→2本組み沈線(波形)	釜沢	
82-24	6号墓		底面	深鉢	胴部			(2.6)	5沈線, 斜向刺突列	大木10	
82-25	6号墓		構築土	深鉢	胴部			(2.7)	7R縹回→斜向刺突列→区高内磨り消し	大木10	外面タール状炭化物付着
82-26	6号墓		棺内堆積土上層	深鉢	口縁部			(3.6)	15R縹回	大木10	外面スス状炭化物付着
82-27	6号墓		棺内堆積土上層	深鉢	口縁部			(2.6)	9L縹回, 口縁無文	大木10	外面スス状炭化物付着
82-28	6号墓		棺内堆積土上層	浅形	胴部			(1.7)	3沈線	大木10～赤沢	82-29と同一
82-29	6号墓		棺内堆積土上層	浅形	胴部			(2.0)	4沈線	大木10～赤沢	82-28と同一
82-30	6号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			(2.6)	13L縹回→沈線	大木10	
82-31	6号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			(3.5)	6L縹回→2本組み沈線(逆U字形又は楕円形文)	釜沢	
82-32	6号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			(3.6)	26多R縹回	大木10	
83-1	7号墓		棺内堆積土	深鉢	口縁部			(3.2)	12口縁無文(接合直, 横ミガキ直あり)	大木10	
83-2	7号墓		棺内堆積土	深鉢	胴部			(4.6)	13R縹回→2本組沈線(縦位、弧状)	釜沢	外面スス状炭化物付着
83-3	7号墓		棺内堆積土	深鉢	胴部			(3.5)	16縹回	中後以降	
83-4	7号墓		棺内堆積土	深鉢	胴部			(5.9)	12R縹回	中後以降	外面スス状炭化物付着
83-5	7号墓		棺内堆積土	深鉢	胴部			(4.3)	19多R縹回	中後以降	内面タール状炭化物付着
83-6	7号墓		棺内堆積土	深鉢	底部			(2.3)	28底面刺代直	中後以降	
83-7	8号墓		蓋土	深鉢	口縁部			(4.0)	25波状口縁, R縹回→竹筒刺突列→沈線区高文	大木10	
83-8	8号墓	VMS-84	蓋土	深鉢	胴部			(2.6)	8縦位陸帯→陸帯上刺突	牛ヶ沢	
83-9	8号墓		蓋土	深鉢	胴部			(2.0)	7L縹回(刺突)・縹回	牛ヶ沢	外面スス状炭化物付着
83-10	8号墓		蓋土	深鉢	胴部			(3.4)	13R縹回, 縦位陸帯貼付→陸帯脇沈線	牛ヶ沢	
83-11	8号墓		蓋土	深鉢	胴部			(3.7)	10R縹回→胴部磨り消し→沈線	中後以降	
83-12	8号墓	VMS-83	棺内堆積土	深鉢	胴部			(3.5)	17横位陸帯貼付→R縹回→沈線区高文→区高外磨り消し・ミガキ	牛ヶ沢	
83-13	8号墓		棺内堆積土	深鉢	胴部			(4.4)	29L縹回→沈線	大木10	
83-14	9号墓	VMS-81	整地土	深鉢	胴部			(4.4)	120L縹回	大木10～牛ヶ沢	外面タール状炭化物付着
83-15	9号墓		整地土	深鉢	口縁部			(2.1)	4横ナブ→横位・斜位沈線	牛ヶ沢	
83-16	9号墓		棺内底面	浅形	胴部			(0.4)	271L縹回	大木10～牛ヶ沢	
83-17	9号墓	VMS-82	1層	深鉢	口縁部			(4.0)	16R縹回	大木10～牛ヶ沢	
83-18	9号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			(4.0)	10角斜向刺突列	中後以降	外面タール状炭化物付着
83-19	9号墓		棺内堆積土	深鉢	胴部			(3.3)	16横位陸帯貼付→陸帯上斜向刺突列	大木10～牛ヶ沢	
83-20	9号墓		棺内堆積土	深鉢	胴部			(4.2)	15横位陸帯貼付→陸帯脇沈線→陸帯ヘラ磨み・R縹回	牛ヶ沢	
83-21	9号墓		構築土	盆?	口縁部			(4.0)	13無文	牛ヶ沢	
83-22	9号墓		構築土	深鉢	胴部			(4.5)	23R半輪1縹回	大木10～牛ヶ沢	
83-23	9号墓		検出面	深鉢	胴部			(1.1)	1576単位?波状口縁, 口縁舟走太沈線(2条), 胴部R縹回→胴部太沈線区高(3条)	釜沢	83-24と同一
83-24	9号墓		検出面	深鉢	胴部			(0.3)	205R縹回→渦巻等太沈線輪高文	釜沢	83-23と同一, 外面スス状炭化物付着
83-25	12号墓		磐石裏込土	深鉢	胴部			(3.0)	10L縹回	大木10	
83-26	12号墓		棺内堆積土下層	深鉢	胴部			(2.8)	23L縹回→2本組沈線	大木10	
83-27	12号墓		棺内堆積土上層	深鉢	口縁部			(2.7)	5R縹回	大木10	
83-28	12号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			(4.2)	13R縹回→2本組沈線	大木10	
83-29	12号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			(3.5)	13R縹回・斜回	大木10	
84-1	13号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			(2.4)	10R縹回	大木10	

図番号	出土位置	グランド	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	文様等の属性	型式	備考
84-2	13号墓	VM0-89	棺内堆積土	深鉢	口縁部			33.0	11	丸縁面文→区画外L横回	最花～太木10	
84-3	13号墓	VM0-83	棺内堆積土	深鉢	口縁部			22.9	18	L横回?	太木10	
84-4	13号墓	VM0-83	棺内堆積土	深鉢	胴部			22.3	13	R縦回→沈線	太木10	
84-5	13号墓		埴土	深鉢	胴部			23.0	18	R車軸1横回	太木10	
84-6	14号墓		埴土	深鉢	胴部		8.0	26.4	9	R縦回、底面副代痕	太木10	
84-7	14号墓		埴土	深鉢	口縁部			24.0	9	0多L縦回	太木10→P-1	
84-8	14号墓		埴土	深鉢	胴部			11.7	3	区画内文→R縦回→区画外磨り消し・ミガキ	太木10	
84-9	14号墓		埴土	深鉢	底部			28.8	25	0多L縦回	太木10	
84-10	14号墓		棺内堆積土上層	深鉢	口縁部			24.0	4	口縁非走又は横区画縁帯→縁帯上刺突・R縦回	太木10→牛ヶ沢	外面スス状炭化物付着
84-11	14号墓		棺内堆積土上層	深鉢	口縁部			22.4	9	L車軸1横回	太木10	
84-12	14号墓		棺内堆積土上層	深鉢	口縁部			23.3	13	R縦回	中後以降	
84-13	14号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			24.6	8	R縦回→沈線	太木10→牛ヶ沢	外面タール状炭化物付着
84-14	14号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			21.3	16	斜向刺突	太木10	
84-15	14号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			22.2	9	L側圧	太木10	
84-16	15号墓		埴土	深鉢	口縁部			27.0	0多L縦回		太木10	
84-17	15号墓		埴土	深鉢	胴部			25.0	25	R縦回	中後以降	
84-18	15号墓	VM-84	埴土	深鉢	胴部			23.0	11	L車軸1横回	太木10	
84-19	15号墓	VM-83	棺内底面	深鉢	口縁部			23.4	14	R横回	太木10	外面スス状炭化物付着
84-20	15号墓	VM-83	棺内堆積土上層	深鉢	口縁部			22.0	4	口縁非走縁帯→横ナデ	太木10	
84-21	15号墓	VM-83	棺内堆積土上層	深鉢	口縁部			23.1	97	丸縁面文→R縦回	中後以降	外面スス状炭化物付着
84-22	15号墓	VM-83	底土	深鉢	胴部			23.0	14	R縦回→沈線	太木10	外面タール状炭化物付着
84-23	15号墓		底土	深鉢	口縁部			24.0	14	L斜回	太木10	外面スス状炭化物付着
84-24	15号墓		盛土	深鉢	胴部→底部		6.0	197	R横回、底面副代痕、底部側面横ミガキ	太木10	P-2504	
84-25	15号墓	VM-83	底土	深鉢	底部		24.0	58	R横回、底面副代痕	中後以降		
84-26	15号墓		埴土	深鉢	口縁部			24.3	32	波状口縁、沈線面文、短沈線	波沢	
84-27	15号墓	VM-83	埴土	深鉢	口縁部			22.4	6	縁部刺突列	牛ヶ沢	
84-28	16号墓		棺内堆積土下層	深鉢	胴部			22.6	6	L縦回	中後以降	
84-29	16号墓		埴土	深鉢	口縁部			22.6	9	R縦回→斜向刺突例→口縁横ミガキ	太木10	外面スス状炭化物付着
85-1	17号墓		2層	深鉢	口縁部			22.6	5	R斜回	太木10	
85-2	17号墓		埴土	深鉢	口縁部			22.3	9	R縦回	太木10	外面スス状炭化物付着
85-3	17号墓	VMQ-91		深鉢	胴部			25.3	25	R(L&R結合)縦回	太木10	
85-4	19号墓		S-1裏込土	深鉢	胴部			22.5	7	R車軸1横回→S字?太沈線(半管形断面)	榎林?	
85-5	19号墓		3層	深鉢	口縁部			22.4	7	面取り状口縁→R縦回	牛ヶ沢	外面タール状炭化物付着
85-6	19号墓		3層	深鉢	胴部			22.4	12	R車軸1横回→横区画太沈線	牛ヶ沢→波沢	
85-7	19号墓		3層	深鉢	胴部			22.5	7	L車軸1横回	太木10	
85-8	19号墓		埴土	深鉢	口縁部			23.4	11	R横回→R横側位圧	牛ヶ沢	外面スス状炭化物付着
85-9	20号墓	VMQ-90	1層	深鉢	口縁部			23.1	11	L横回→3条縦位垂下沈線	最花	
85-10	20号墓		1層	深鉢	胴部			23.3	13	R横回	太木10→牛ヶ沢	外面スス状炭化物付着
85-11	20号墓		埴土	深鉢	胴部			21.9	3	R斜・縦回→沈線	太木10→牛ヶ沢	
85-12	21号墓		埴土	深鉢	胴部			23.6	23	R車軸1横回→沈線区画文→区画内磨り消し	太木10	
85-13	22号墓		埴土	深鉢	胴部			23.0	10	R横回→逆U字形又は楕円形沈線文	最花	外面スス状炭化物付着
85-14	22号墓		埴土	深鉢	胴部			22.7	6	R横回→沈線・円形刺突	最花	外面スス状炭化物付着
85-15	25号墓		1層	深鉢	胴部			22.2	7	R縦回?→3本組縦位沈線	最花	P-8
85-16	25号墓		1層	深鉢	胴部			23.1	21	R横回	中後以降	P-9、外面スス状炭化物付着
85-17	25号墓	VMV-97	埴土上層	深鉢	胴部			24.5	46	R縦回→縦位沈線	最花～太木10	外面スス状炭化物付着
85-18	25号墓	VMV-97	埴土上層	深鉢	胴部			23.0	2	R縦回→2本組沈線(逆U字形又は楕円形)	最花	P-2
85-19	26号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			23.4	11	R横回→縦位沈線→竹管刺突	最花	
85-20	26号墓		棺内堆積土上層	深鉢	胴部			22.0	10	R横回→沈線	最花	外面タール状炭化物付着
85-21	26号墓		棺内堆積土	深鉢	胴部			24.5	23	R横回→縦位沈線	最花	内面タール状炭化物付着
配石遺構												
86-1	3号配石		埴土	意形?	口縁部			23.2	9	縦ナデ、内外赤色顔料付着	太木10	
86-2	3号配石		埴土	深鉢	底部		7.4	22.8	186	底面副代痕	太木10	
86-3	3号配石		埴土	深鉢	口縁部			23.2	12	口端小突起、内面隆起帯	太木10	
86-4	9号配石	VM-83	埴土下層	深鉢	底部		6.0	21.0	70	R斜回	最花～太木10	内面赤色顔料付着
86-5	9号配石		埴土	深鉢	胴部			22.6	11	L側圧→横ミガキ	牛ヶ沢	
86-6	9号配石		埴土	深鉢	胴部			22.9	13	R車軸1横回	太木10→牛ヶ沢	外面スス状炭化物付着
86-7	11号配石	VM-84	瓶方	深鉢	口端突起			23.0	11	山形口端突起、口縁非走縁帯(バンド状)	牛ヶ沢	
86-8	11号配石		瓶方	深鉢	口縁部			24.8	24	波状口縁、口縁非走縁帯(玉縁状)、太沈線、刺突、外面ミガキ	波沢	外面スス状炭化物付着
86-9	11号配石	VM-84	瓶方	深鉢	胴部			22.4	12	R縦回→太沈線(溝巻・円形・長楕円形文)	波沢	
86-10	11号配石	VM-84	瓶方	深鉢	口縁部			23.5	16	折返し状口縁、R車軸1横回	最花～太木10	外面タール状炭化物付着
86-11	11号配石		瓶方	深鉢	口縁部			22.0	2	R縦回	太木10	
86-12	11号配石		瓶方	深鉢	胴部			22.5	37	R車軸5横回	牛ヶ沢→波沢	
86-13	11号配石	VM-84	瓶方	深鉢	底部			23.9	81	R斜回、底面指頭圧痕	中後以降	

図番号	出土位置	グロット	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	文様等の属性	型式	備考
86-14	11号配石	VIII-84	腰方2層	切衝 刷部	口縁～ 刷部	(11.8)	(9.6)	7	73	無文(順上平横ミガキ、下半縦ミガキ)、頸部刺突一切断	雲沢	内面接合痕残存
86-15	12号配石		腰方	深鉢	口縁部		(3.9)	15	15	口縁併走隆帯(剥落)→沈線→L状凹	雲沢	内面接合痕残存
86-16	12号配石		腰方	深鉢	口縁部		(3.9)	8	8	R半輪5筋凹	雲沢	大石10→キョウ
86-17	12号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.8)	5	5	R半輪5筋凹	雲沢	大石10→キョウ
86-18	12号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.4)	16	16	R状凹→大沈線(弧状文様)	雲沢	
86-19	12号配石		一括	深鉢	口縁部		(3.9)	6	6	R半輪5筋凹	キョウ沢→雲沢	
86-20	14号配石		腰方	深鉢	刷部		(6.6)	32	32	L状凹→ヒレ状貼付→沈線	大木10	外面スス状炭化物付着
86-21	14号配石		腰方	深鉢	刷部		(4.1)	14	14	R状凹→沈線区画文→区画外磨り消し	大木10	
86-22	14号配石		盛土	深鉢	刷部		(3.5)	12	12	R状凹→沈線	大木10	
86-23	14号配石	VIII-82	堆積土	深鉢	刷部		(4.0)	66	66	R状凹→ヒレ状貼付→沈線	大木10	外面タール状炭化物付着
86-24	15号配石	VIII-83	盛土	深鉢	刷部		(5.5)	33	33	R状凹→沈線	大木10	
86-25	15号配石		堆積土下層	深鉢	口縁部		(3.8)	5	5	縦位横凹	大木10	
87-1	16号配石	VIII-83	腰方	深鉢	口縁 突起		(4.3)	27	27	埴り橋状突起(内外ヒレ合わせ状)→ 沈線	大木10	外面タール状炭化物付着
87-2	16号配石	VIII-85	腰方	深鉢	刷部		(3.3)	8	8	R半輪1筋凹	大木10	
87-3	16号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.4)	16	16	0多L縦凹	大木10	
87-4	16号配石	VIII-85	腰方	深鉢	底部	(3.2)	(3.0)	58	58	底部側面L縦凹、底部側代	大木10	
87-5	18号配石	VIII-81	盛土	深鉢	口縁部		(4.2)	13	13	R半輪5筋凹→口縁横ナデ	キョウ沢→雲沢	
87-6	18号配石	VIII-81	盛土	深鉢	口縁部		(3.3)	7	7	L半輪1筋凹	キョウ沢	
87-7	19号配石		腰方	深鉢	口縁部		(3.9)	9	9	L縦凹	大木10	
87-8	19号配石		腰方	深鉢	刷部		(2.8)	13	13	L半輪5筋凹	キョウ沢→雲沢	
87-9	20号配石		腰方	深鉢	口縁部		(3.7)	6	6	口縁横ミガキ	キョウ沢	
87-10	20号配石		腰方	深鉢	口縁部		(3.0)	3	3	同位口縁(口縁併走隆帯)	横林	
87-11	20号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.9)	17	17	R状横、斜凹	大石10→キョウ	外面タール状炭化物付着
87-12	22号配石		腰方	深鉢	口縁突起		(2.6)	7	7	山形口縁突起、ボタン状突起→貫通孔	大石10→キョウ	貫通孔内スス状炭化物付着
87-13	22号配石		腰方	深鉢	刷部		(4.3)	13	13	無文(縦方向ナデ)	巖花→大木10	
87-14	22号配石		腰方	深鉢	頸部～ 刷部		(6.3)	24	24	隆帯(横位区画→縦位区画)貼付→ボ タン状突起貼付→隆帯上・側面・突 起上刺突	キョウ沢	外面スス状炭化物付着
87-15	22号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.3)	8	8	R半輪5筋凹	大石10→キョウ	
87-16	22号配石		腰方	深鉢	頸部		(1.4)	4	4	横位隆帯(断面三角形)→隆帯沈線	キョウ沢	
87-17	22号配石		腰方	深鉢	口縁部		(2.9)	6	6	無文	巖花→大木10	
87-18	24号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.0)	7	7	R状凹	大石10→キョウ	内スス状炭化物付着
87-19	24号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.2)	12	12	L縦凹	大石10→キョウ	外面スス状炭化物付着
87-20	26号配石		腰方	深鉢	刷部		(6.3)	54	54	L縦凹	大石10→キョウ	
87-21	26号配石	VIII-83	2層	深鉢	底部	6.5	(3.1)	91	91	大沈線	キョウ沢→雲沢	
87-22	26号配石	VIII-83	2層	深鉢	刷部		(3.8)	22	22	L縦凹、沈線	大木10	外面タール状炭化物付着
87-23	26号配石	VIII-83	1層	深鉢	刷部		(2.1)	4	4	斜向刺突	キョウ沢	
87-24	26号配石	VIII-83	1層	深鉢	刷部		(2.6)	7	7	(垂下)隆帯貼付	キョウ沢	
87-25	26号配石	VIII-84	1層	深鉢	刷部		(2.1)	5	5	縦位隆帯貼付	キョウ沢	
87-26	26号配石	VIII-83	1層	深鉢	刷部		(6.8)	10	10	R半輪5筋凹	キョウ沢→雲沢	
87-27	26号配石	VIII-83	堆積土	盆形?	口縁 突起		(4.0)	12	12	横走、斜行沈線文→横ミガキ	雲沢	
87-28	32号配石		腰方	深鉢	口縁突起		(4.6)	15	15	内外面ヒレ状貼付、隆帯、ボタン状 貼付→円形刺突	キョウ沢	異系統土層(一門前?)
87-29	35号配石		腰方	深鉢	口縁突起		(2.0)	6	6	山形突起、口縁併走隆帯(折返し状)	キョウ沢	
87-30	35号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.0)	11	11	斜凹→沈線区画文→区画外ナデ消し	大木10	
87-31	35号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.7)	6	6	R状凹→細沈線	大木10	
87-32	35号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.5)	10	10	L縦凹	大木10	外面スス状炭化物付着
87-33	35号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.5)	17	17	0多L縦凹	大石10→キョウ	
87-34	37号配石		腰方	深鉢	刷部		(3.3)	9	9	R状凹	大石10→キョウ	
87-35	37号配石		堆積土	盆形	頸部～ 刷部		(4.0)	14	14	R状凹→沈線(逆U字形又は横凹 形)・竹管刺突→頸部縦ミガキ	巖花	
87-36	37号配石		検出面	深鉢	刷部		(2.8)	10	10	L半輪1筋凹→沈線	大木10	外面スス状炭化物付着
87-37	37号配石		検出面	深鉢	刷部		(2.6)	11	11	区画沈線文→R状凹	大木10	
87-38	37号配石		検出面	深鉢	刷部		(3.4)	14	14	R状凹→沈線	大木10	外面タール状炭化物付着
87-39	37号配石		検出面	深鉢	刷部		(2.3)	10	10	R状凹→沈線	大木10	
87-40	39号配石		腰方	深鉢	刷部		(4.8)	19	19	R状凹?→沈線	雲沢	
88-1	50号配石		腰方	深鉢	口縁部		(2.7)	12	12	無文(折返し状口縁の可能性有)	巖花→大木10	
88-2	52号配石		5層	深鉢	口縁部		(2.6)	7	7	口縁小突起・面取り、隆帯貼付	キョウ沢	外面タール状炭化物付着
88-3	52号配石		5層	深鉢	刷部		(3.4)	11	11	R半輪5筋凹	大石10→キョウ	外面スス状炭化物付着
88-4	52号配石		3層	深鉢	口縁部		(1.8)	5	5	山形口縁突起→突起頂部刻み(縦割 正)、環状?貼付	キョウ沢	外面タール状炭化物付着
88-5	52号配石		3層	深鉢	刷部		(5.0)	21	21	L縦凹、斜凹	中後以降	
88-6	52号配石		2層	深鉢	刷部		(2.0)	2	2	横位隆帯(断面三角形)	キョウ沢	
88-7	56号配石		堆積土	深鉢	刷部 ～ 底部	(11.8)	(11.6)	560	560	R状凹(縦位の雲石帯を形成)→底部 側面約4cm幅で磨り消し、底面ミガ キ	大石10→キョウ	内外面スス状炭化物付着
88-8	56号配石	VIII-81	一括	深鉢	口縁部		(3.7)	12	12	0多L縦凹	大石10→キョウ	外面タール状炭化物付着

図番号	出土位置	グランド	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	文様等の属性	型式	備考
88-9	(56号配石)	VM8-81	直上層	深鉢	口縁部 ～胴部	(8.3)		(31.1)	1062	大4小4の交互8単位波状口縁。隆帯(2条)が横位(区画・大突起)で並頭状となる口縁併走→縦位隆帯)貼付→口縁部4単位・胴部2段(4単位?ボタン状貼付→磨消面文)貼付→口縁部裏面状・胴部裏面と帯状の区画沈線→区画外磨り消し)。隆帯上取周	牛ヶ沢	外面スス状炭化物付着、胎土分析試料(No. 23)
88-10	57号配石		2層	深鉢	胴部			(12.5)	433	丸横回	大木10～キョウ	P-1
88-11	57号配石		2層	深鉢	胴部～ 底部		6.2	(11.9)	432	丸横回。底面磨目縦文	大木10	P-2。底部側面・底面に 挿刺孔各1有り(底面に未 貫通)。外面スス状炭化 物付着
88-12	57号配石		1層	深鉢	口縁部			(3.6)	10	先割れ口端小突起。横凹形貼付→ 側庄	牛ヶ沢	外面スス状炭化物付着
88-13	57号配石		1層	深鉢	胴部			(4.6)	18	隆帯貼付→区画沈線文→丸縦回光境	大木10～キョウ	内面タール状炭化物付着
88-14	57号配石		1層	深鉢	胴部			(4.1)	20	断面三角隆帯(横位→縦位連結・斜 位)貼付→角縁斜向刺突列	牛ヶ沢	外面スス状炭化物付着
88-15	57号配石		1層	深鉢 又は 意形	胴部			(2.2)	11	横位沈線→横ミガキ	蜜沢	
88-16	60号配石		6層	深鉢	胴部			(2.4)	4	単軸1筋7横回→沈線	大木10～蜜沢	
88-17	60号配石		6層	深鉢	胴部			(3.9)	14	0多似縦回	中野中島以路	
88-18	60号配石		6層	深鉢	胴部			(2.1)	8	R単軸1筋縦回	中野中島以路	P-3。外面スス状炭化物付着
88-19	60号配石		5層	深鉢	底部		(4.2)	(2.2)	42	底面網代直	大木10～キョウ	
88-20	60号配石		5層	深鉢	胴部			(3.8)	30	丸横回→沈線	大木10	
88-21	60号配石		5層	深鉢	胴部			(4.4)	28	R単軸1筋縦回	牛ヶ沢～蜜沢	
88-22	60号配石		5層	深鉢	胴部			(3.6)	5	丸縦回→沈線(区画)文	牛ヶ沢	
88-23	1002号配石			検出面	広口 釜 口頸部			(3.4)	11	須部竹等斜向刺突列→胴部沈線文 →口頸部横ミガキ	蜜沢	
88-24	1002号配石			検出面	広口釜 980～985			(4.9)	26	丸横回→横位沈線→斜向刺突列	榎林～最花	
石箱基A群構築土												
89-1	11-15-21号配石		縦方	深鉢	口縁部			(3.2)	10	L縦回→区画沈線文→区画外磨り消 し→外面赤彩	大木10～キョウ	
89-2	11-15-21号配石		縦方	深鉢	胴部			(4.1)	24	L縦回→区画沈線文→区画外磨り消 し・ミガキ	大木10	
89-3	11-15-21号配石		縦方	深鉢	胴部			(2.3)	7	L単軸1筋縦回→沈線	大木10	
89-4	14-15号配石		1層	深鉢	胴部			(3.8)	10	L縦回→区画沈線文→区画外磨り消 し	大木10	
89-5	7-15号墓		トレンチ	深鉢	口縁部			(2.4)	7	口縁併走隆帯→丸縦回・隆帯上刺突 列	牛ヶ沢	
89-6	石箱基構築土	VM8-83	Ⅲ層	深鉢	口縁部			(2.3)	7	波状口縁(先割れ口端突起?)。口縁 併走隆帯(折返し状)→口端丸回・隆 帯脇太沈線	蜜沢	
89-7	15号墓付石		南2層	深鉢	胴部			(4.9)	47	横位隆帯→隆帯脇沈線・V字又は波 状隆帯→竹管刺突列	牛ヶ沢	
89-8	15号墓	VM8-83	南2層	深鉢	口頸部			(3.6)	18	断面三角隆帯(横位→隆帯脇沈線→ 縦位)貼付→隆帯側面へ斜刺突列	牛ヶ沢	
89-9	5号墓付石	VM8-82	南2層	深鉢	胴部			(3.7)	19	爪形斜向刺突列	大木10～キョウ	
89-10	11-15-21号配石		縦方	深鉢	口縁部			(3.6)	15	L縦回	大木10～キョウ	外面タール状炭化物付着
89-11	9号墓	VM8-82	南2層	深鉢	口縁部			(3.2)	22	R単軸1筋縦回	大木10～キョウ	
89-12	18号墓-12号配石		構築土	深鉢	口縁部			(2.3)	5	L横位側庄	牛ヶ沢	
89-13	7-15号墓	VM8-84	構築土	深鉢	口縁 ～ 胴部			(7.8)	50	折返し状口縁(連続指頭正直有り)。 胴部丸縦回	牛ヶ沢	
89-14	14-15号配石		2層	深鉢	胴部			(3.6)	15	L縦回	大木10～キョウ	
89-15	13号配石付石	VM8-83		深鉢	胴部			(3.9)	11	L縦回	大木10～キョウ	外面スス状炭化物付着
89-16	14-15号配石		2層	意形	980～985			(3.1)	55	胴部下位無文。底面網代直	牛ヶ沢	
89-17	12号配石付石		塚積土	深鉢	980～985			(5.5)	24	L縦回→3本組太沈線(横走→縦位)	榎林	外面タール状炭化物付着
89-18	6-60号配石		1層	深鉢	胴部			(9.1)	56	L縦回→沈線(同心円・連結弧文)	榎林	P-1
89-19	石箱基構築土	VM8-84	Ⅲ層	深鉢	胴部			(4.7)	30	L縦回→太沈線(横位→入り組ミ 巻文)	蜜沢	外面スス状炭化物付着

剥片石器観察表

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	器種細分	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
89-20	14号墓	-	堆積土	石鏡	無凹	瑛質頁岩	19.0	14.2	3.0	6.7	黒色付着物
89-21	18号墓	-	棺内堆積土下層②	石鏡	有凸	瑛質頁岩	43.1	15.6	5.1	3.0	黒色付着物
89-22	21号墓	-	堆積土	石鏡	無尖	瑛質頁岩	44.9	13.7	7.0	2.9	黒色付着物 S-1
89-23	22号墓	-	棺内堆積土⑤	石鏡	有凸	瑛質頁岩	41.1	13.5	7.7	3.3	
89-24	25号墓	-	棺内堆積土下層②	石鏡	無凹	瑛質頁岩	19.8	10.7	2.9	0.7	黒色付着物 S-1
89-25	60号配石	-	第6層	石鏡	有	瑛質頁岩	75.3	32.4	20.5	49.0	S-3
89-26	60号配石	-	第6層	スクレイパー		瑛質頁岩	51.3	27.0	7.0	9.6	S-2

礫石器観察表

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	器種細分	石材	形状	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
90-1	5号墓	-	構築土S-24	台石	-	火山岩	板状	656	380	116	25,500	磨1(A)、顕著 密着付デンプン粒分析
90-2	15号墓	-	脇石S-11	台石	-	花園閃緑岩	扁平	548	368	128	40,500	磨1(A)、顕著
90-3	19号墓	-	3層	石種	目類	凝灰岩	C1	95	72	22	189	
90-4	6号墓A9埋土	VIM-84	Ⅲ層	打製石器	その他	凝灰岩	C1	71	57	27	122	短辺の一端に表面加工
91-1	3号配石	VIM-83	S-21	石皿	-	緑色凝灰岩	扁平	382	412	105	18,000	磨1(A)、自然の丸石を伴って出土
91-2	16号配石	VIM-81	1層	磨製石器	I類	片麻岩	-	138	39	18	168	磨き残しあり、16号墓基石上堆積土 S-2502
91-3	20号配石	VIM-82	Ⅱ層	磨石	I類	流紋岩	C1	73	80	34	218	磨2(A)B
91-4	37号配石	VIM-85	S-6	台石	-	緑色凝灰岩	扁平	522	231	95	24,000	磨2(A)A、ともに顕著
91-5	43号配石	VIM-84	S-3	台石	-	凝灰岩	塊状	575	375	265	64,000	磨1(A)、顕著
92-1	26号配石	VIM-83	1層S-1	石皿	-	緑色凝灰岩	扁平	279	178	86	4,000	使用痕無し、未製品か、敲打による凹み
92-2	51号配石	VIM-80	立石S-1	台石	-	凝灰岩	塊状	512	199	117	20,000	磨1(A)、顕著
92-3	36号配石	VIM-81	構築土	砥石	-	凝灰岩	B1	106	96	67	820	磨2(表裏ともに)A+B+漢状砥面
92-4	36号配石	VIM-81	構築土	台石	-	凝灰岩	厚石	207	164	88	3,960	磨2(漢状砥面+A)
92-5	57号配石	VIM-82	-	台石	-	緑色凝灰岩	扁平	440	315	129	24,000	磨1(A)
92-6	57号配石	VIM-82	S-104	台石	-	緑色凝灰岩	扁平	(250)	214	98	7,000	磨1(A)、顕著
93-1	37号配石	-	1層	石皿	-	凝灰岩	-	126	97	72	584	磨1(A)、顕著。有膠、黒色物質付着
93-2	62号配石	VIM-83	S-1	石皿	-	緑色凝灰岩	扁平	378	338	124	18,300	使用痕無し、未製品か、敲打による凹み
93-3	1001号配石-2	VIM-91	Ⅱ層	台石	-	凝灰岩	-	307	227	64	4,000	磨1(A)、微凹
93-4	1001号配石-1	VIM-91	S-2	石皿	-	火山岩	厚石	387	285	146	20,500	磨2(A)、顕著
94-1	1001号配石-1	VIM-91	Ⅲ層S-1	石皿	-	緑色凝灰岩	-	323	233	70	7,000	片面有縁、産例に磨1(B)2面、磨面凹面
94-2	1001号配石	VIM-91	S-11	台石	-	緑色凝灰岩	厚石	608	256	144	33,000	凹(C)2
94-3	1005号配石	VIM-91	S-19	台石	-	溶結凝灰岩	厚石	420	264	141	23,500	磨2(A-漢状砥面?)
95-1	1007号配石	VIM-96	S-26	台石	-	相馬火山岩	板状	485	(350)	53	14,000	磨2(A)A
95-2	1007号配石	VIM-96	S-9	台石	-	緑色凝灰岩	扁平	338	184	74	6,000	磨2(A)B、弱い
95-3	1007号配石	VIM-96	S-10	台石	-	緑色凝灰岩	扁平	390	265	95	13,000	磨2(幅広い縁-A)
95-4	1007号配石	VIM-96	S-22	台石	-	凝灰岩	塊状	125	212	110	4,300	磨(AB-B-AB-A)、うち1面で磨6が極めて顕著

土製品観察表

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	部位	形状等	文様	時期	備考
96-1	2号墓	-	棺内堆積土上層①	④	A-d	3.5	3.5	0.5	6.8	胴部	丸胴回転		大木10?	
96-2	3号墓 南北ベルト	-	整地層	④	C-a	5.6	5.7	0.9	34.3	胴部	弁状の先端部	多軸結合体縦回転/ミガキ	円筒下層②	砥推
96-3	7号墓	-	棺内堆積土下層②	④	B-d	3.1	3.1	0.7		胴部	半円形	丸横回転	最上へ? 表面戻付着	
96-4	8号墓	-	Ⅱ層	④	B-d	2.3	(2.1)	0.7	(3.2)	胴部	半円形	丸横回転	中期中葉以降	
96-5	6号墓A9埋土	VIM-82	構築土一括	⑤	B	(3.6)	(3.1)	(2.4)	10.7		錐形土製品?	無文		
96-6	3号配石	-	2層	④	B-e	4.3	4.2	0.8	16.3	三角部	L縦回転		大木10?	表面戻付着
96-7	14号配石	-	Ⅱ層	④	A-e	4.1	3.7	0.7	15.9	胴部	円形	L縦回転→沈線	大木10?	表裏両面戻付着
96-8	19号配石	-	Ⅱ層	④	B-d	3.8	3.9	0.8	10.7	胴部	六角形	L縦→斜回転	円筒上層④~⑥?	表面戻付着
96-9	19号配石	-	Ⅱ層	④	B-d	3.7	4.5	0.9	17.8	口縁部	半円形	無文	最上?	表面戻付着
96-10	44号配石	-	Ⅱ層	④	B-d	3.9	4.5	0.8		三角部	丸胴回転		大木10以降	
96-11	56号配石	VIM-82	構築土	④	A-T	6.5	5.9	1.0	41.6	胴部	五角形	丸横回転(端部結節)→粘土層貼付	円筒上層d	
96-12	56号配石	VIM-81	構築土	④	B-b	4.0	3.7	0.9	12.9	胴部	三角形	摩破	中期後葉	

石製品観察表

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	分類	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	加工状態	特徴	備考
97-1	7号墓	-	棺内堆積土上層④	②	A-b	凝灰岩	3.0	2.5	0.6	5.4	研磨	×	
97-2	9号墓	VIM-81	整地土	②	A-c	凝灰岩	3.5	4.1	1.0	12.4	削磨・研磨	×	半円状、上辺斜縁研磨
97-3	9号墓	VIM-81	整地土	⑤	C-a1	凝灰岩	10.0	6.4	2.9	625.2	敲打・研磨	×	表・裏面に盲孔と溝線。底面凹線に研磨の痕あり
97-4	15号墓	VIM-78	横断面	④	A-b	流紋岩	(25.2)	10.2	10.2	4220.0	-	○	SR5515 S-1
97-5	43号配石	VIM-84	Ⅱ層	④	A-e2	流紋岩	22.1	7.9	6.7	1824.4	研磨	×	全体に弱く磨痕
97-6	57号配石	VIM-82	堆積土	③	A-b	凝灰岩	6.9	4.6	2.4	94.2	研磨	×	表裏両面に丸縁
97-8	64号配石	VIM-84	S8号墓盛土上	④	A-b1	砂岩	44.7	15.1	11.5	12540.0	-	×	S-2507
97-8	59号配石	VIM-84	検出面	④	A-a1	凝灰岩	21.3	10.6	5.8	2740.0	敲打	×	中央部分に帯状の敲打範囲
98-1	9号墓	VIM-81	壁石S-21	④	A-a1	凝灰岩	64.0	62.0	36.0	19300.0	-	×	
99-1	9号墓	VIM-81	整地土	③	C	凝灰岩	(35.9)	25.8	(12.5)	9360.0	研磨	×	直線と曲線による幾何図形

青森県埋蔵文化財調査報告書 第 575 集

水上(2)遺跡Ⅲ

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

【第 4 分冊 石棺墓・配石遺構編】

発行年月日 2017 年 3 月 24 日
発 行 青森県教育委員会
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市新城字天田内 152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印 刷 ワタナベサービス株式会社
〒030-0803 青森県青森市安方 2 丁目 17-3
TEL 017-777-1388 FAX 017-735-5982
